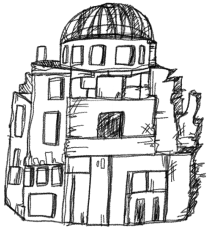




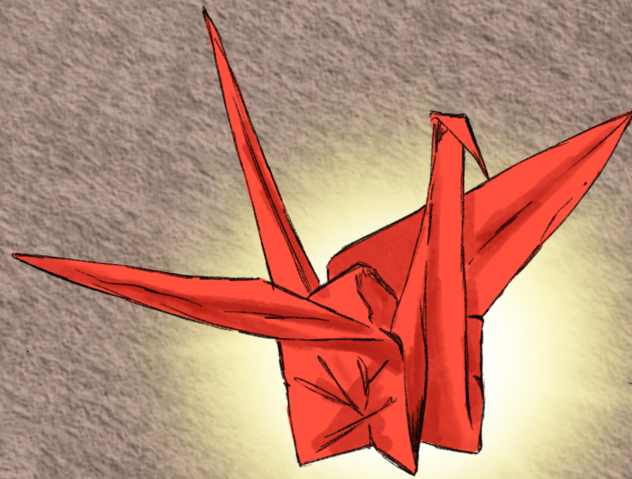
Faculty of Humanities  
SRINAKHARINWIROT UNIVERSITY

หนังสือเล่มนี้เป็นส่วนหนึ่งของโครงการพัฒนาศักยภาพ  
ด้านการแปลภาษาตะวันออก  
คณะมนุษยศาสตร์ มหาวิทยาลัยศรีนครินทรวิโรฒ

— 被爆者の証言 —  
悲しみの記憶



# หวนคืนสู่ความทรงจำอันแสนเศร้า เรื่องเล่าของผู้รอดชีวิต จากระเบิดปรมาณู



หวนคืนสู่ความทรงจำอันแสนเศร้า  
— เรื่องเล่าของผู้รอดชีวิตจากระเบิดปรมาณู —  
悲しみの記憶 — 被爆者の証言 —

หนังสือเล่มนี้เป็นหนังสือรวมบทความภาษาญี่ปุ่นและไทย  
โดยได้รับอนุญาตให้ใช้ต้นฉบับจากหนังสือสองเล่ม ได้แก่  
被爆者からあなたにいま伝えたいこと  
และ 私も証言する — ヒロシマ・ナガサキのこと —  
เพื่อเผยแพร่เรื่องราวประสบการณ์ของผู้ประสบภัยจากภัยมันตรังสี

この本は、今から78年前、広島、長崎で被爆した  
方々の平和を強く願った証言集です。このたび、  
「被爆者からあなたに—いま伝えたいと」と  
「わたしが表現する—ヒロシマ・ナガサキのこと—」  
という2冊をご提供いただきました。  
私たちはその思いを少しでも広めたくタイ語に翻訳しました。



## 本書について ความเป็นมาของหนังสือเล่มนี้

今回、多くの方々のサポートを得て、翻訳プロジェクトを完遂し、出版できることになりましたことをたいへんうれしく思います。このプロジェクトに関わってくれたすべての人の、被爆者を二度と生み出さないという非核への思いが読んでくださった皆様に伝わることを祈って、出版の辞としたいと思います。

わたしがこの翻訳プロジェクトをきっかけは、以前、東北大震災の原子力発電所の事故で被災された方々の体験談を読んだことでした。その体験談は2018年にタイ語に翻訳し、本学より出版しましたが、その被災者の方々の中に、二度も原子力に被災された方々いるとお聞きしました。その方たちが後世のために記された被爆体験集をタイ語に翻訳して多く人に伝えたいと学生とともに考えました。人文学部日本語専攻の38名の学生、日本の東京外国語大学と神田外語大学の5名の留学生の平和を願う強い気持ちがなければ、このプロジェクトはできませんでした。

そして、この翻訳プロジェクトを代表して、オンラインセミナーで自らの被爆体験をお話くださった日本原水爆被害者団体協議会、児玉三智子様、児玉三智子様とわたしたちをつなげてくださり、原本の「被爆者からあなたに」をご紹介くださった千葉県被爆者団体、友愛会の須田裕見子様、そして、原水爆を考える原町市民の会、山崎健一様の惜しみないご協力に深く御礼を申し上げます。最後に、日本側コーディネーターをしてくれた同僚、松井育美にも深謝してやみません。

2023年5月、バンコクにて パットオン・ピパタナクル

โครงการพัฒนาศักยภาพด้านการแปล หลักสูตรศิลปศาสตรบัณฑิต สาขาภาษาตะวันออก ได้จัดอย่างต่อเนื่องทุกปี ในปีการศึกษา 2565 นี้ สาขาวิชาภาษาญี่ปุ่นได้รับความอนุเคราะห์สนับสนุนจากภาษาญี่ปุ่น โดยมีผู้เรียบเรียงคือ “The Japan Confederation of A- and H-Bomb Sufferers Organizations” (HIDANKYO) และ “Gensuibaku o Kangaeru Haramachi Shimin no Kai” ซึ่งหนังสือทั้งสองเล่มได้บันทึกประสบการณ์ของผู้ได้รับผลกระทบจากเหตุการณ์ระเบิดปรมาณูที่ Hiroshima และ Nagasaki ในค.ศ.1945 ในนามของบรรณาธิการ ดิฉันขอขอบคุณผู้ให้ความร่วมมือทุกท่าน คุณโคดะมะ มิจิโกะ หนึ่งในผู้มีส่วนประสบการณ์ซึ่งกรุณาบรรยายพิเศษออนไลน์ คุณซุตะ ยูมิโกะ ผู้แทนจากเหยื่อกัมมันตรังสีจังหวัดชิบะ ที่แนะนำหนังสือเล่มนี้มา ขอขอบคุณคุณยามาซากิ เคนอิจิ ผู้ให้ข้อมูลและมอบบทสัมภาษณ์เหยื่อกัมมันตรังสีจังหวัดฟุกุชิมะมา และขอบคุณอาจารย์มะทซุอิ อิกุมิ บรรณาธิการภาษาญี่ปุ่นและประสานงาน จนการจัดทำหนังสือเล่มนี้เสร็จสิ้นลงอย่างราบรื่น

ดิฉันและนิติตได้เคยแปลและจัดทำหนังสือเรื่อง “บันทึกความทรงจำ FUKUSHIMA 3.11” เมื่อค.ศ.2018 ซึ่งเป็นบทความประสบการณ์ของแผ่นดินไหวและสึนามิ ในจำนวนผู้ได้รับผลกระทบนี้ มีส่วนหนึ่งที่เคยลี้ภัยจากระเบิดปรมาณูมาแล้ว ยังได้รับความเดือดร้อนจากโรงไฟฟ้าพลังงานนิวเคลียร์ ซึ่งยังเป็นปัญหายืดเยื้อจนถึงปัจจุบัน ภัยของกัมมันตภาพรังสีเป็นสิ่งที่เราควรเรียนรู้ ประวัติศาสตร์อันน่าเศร้าจากสงครามโลกครั้งที่สองควรต้องมีการถ่ายทอดต่อ

โครงการนี้ นิติตสาขาวิชาภาษาญี่ปุ่นและนักศึกษาแลกเปลี่ยนชาวญี่ปุ่นจาก Tokyo University of Foreign Studies และ Kanda University of International Studies รวม 43 คน ได้ตั้งใจเรียนรู้ ค้นคว้าเพื่อหาคำศัพท์และสำนวนที่เป็นภาษาเฉพาะทาง แปลและเรียบเรียงให้เข้าใจง่ายอย่างเต็มความสามารถ เราหวังเป็นอย่างยิ่งว่าจะถ่ายทอดเรื่องราวของผู้ประสบภัยจากกัมมันตภาพรังสีเป็นภาษาไทยให้คนทั่วไปได้รับรู้ และเชื่อว่าหนังสือเล่มนี้จะสะท้อนความปรารถนาของพวกเขา ที่ไม่ต้องการให้เกิดเหตุการณ์อย่างเดียวกันอีกต่อไป

ภัทธร พิพัฒน์กุล (พฤษภาคม พ.ศ.2566)

この翻訳のことを聞いたのは2022年夏の東京でした。「広島、長崎の原爆や福島の原子力発電事故の被爆体験を読んで、日本語を理解しているタイ人として、このことをタイの人たちに知らせたい、知らせる役目があると思う」と話すパットオンのその思いに、とても感動しました。それと同時に、わたしもぜひ参加させてもらいたいと思いました。

偶然、旧知の知り合いが被爆2世として被爆者団体で活動していることを知り、そこから日本で最も大きな被爆者団体である日本原水爆被爆者団体協議会、事務局次長の児玉三智子さんにつないでもらいました。プロジェクトのキックオフとなるオンラインセミナーで児玉三智子さんは、「原水爆兵器」や「被爆」から遠くにいただろうタイ人日本語専攻の学生たちや、タイ語を学ぶ日本人留学生たちを一層大きく動かしてくださいました。今回のプロジェクトを経て、わたし自身も原水爆兵器や被爆者のことを、日本人として学んだつもりではありましたが、やや歴史のことと誤ってしまっていたと本当に反省しました。それらは、遠く過ぎ去ったことではなく、今もずっと続いている悲劇で、わたしたちはそれらを繰り返さないためにも真摯に捉え向き合っただけゆえにゆべきなのです。

このプロジェクトに誘ってくれたパットオン、セミナーへの出演を2つ返事で承諾していただき自らの被爆体験をわたしたちに語ってくださった日本原水爆被爆者団体協議会、事務局次長の児玉三智子様、児玉三智子様を紹介していただき、翻訳することとなった被団協の岩波ブックレットも手渡していただいた千葉県被爆者団体、友愛会事務局の須田裕見子様にとっても感謝しています。そして、証言集の使用をご快諾いただきました福島県の被爆者団体、はらまち九条の会、山崎健一様に深謝しております。

学生たちの熱い思いがひとりでも多くのタイの人たちに届きますよう心よりお祈りしています。

2023年5月、千葉にて 松井育美

ดิฉันได้ทราบเรื่องโครงการนี้เมื่อประมาณฤดูร้อน ค.ศ.2022 ที่โตเกียว อาจารย์ภัทรอรพุดว่า “เมื่อได้อ่านประสบการณ์เหยื่อจากระเบิดปรมาณูที่อิโรชิมาะ, นางาซากิ และสารกัมมันตรังสีที่ฟูกูชิมะแล้ว ในฐานะคนไทยผู้เข้าใจภาษาญี่ปุ่นแล้ว คิดว่าอยากถ่ายทอดเรื่องเหล่านี้ให้คนไทยอ่านด้วย นั่นเป็นหน้าที่ของเรา” ดิฉันรู้สึกประทับใจและอยากเข้าร่วมโครงการด้วย

ดิฉันได้มีโอกาสรู้จักกับเหยื่อรังสีรุ่นที่สองที่ทำกิจกรรมในองค์กรผู้ประสบภัยจากปรมาณู ทำให้ได้รู้จักกับคุณโคตะมะ มิชิโกะ และเชิญเขามาบรรยายให้นิสิตสาขาวิชาภาษาญี่ปุ่นฟัง การบรรยายครั้งนั้นทำให้นิสิตได้เรียนรู้ว่าอาวุธนิวเคลียร์หรือสารกัมมันตรังสีนั้น ไม่ใช่สิ่งไกลตัวเลย ดิฉันเองได้ตระหนักว่าเราได้ปล่อยให้เหตุการณ์เหล่านั้นกลายเป็นเพียงประวัติศาสตร์ไปแล้วหรือเปล่า ผู้ได้รับผลกระทบยังมีความเดือดร้อน และเรายังต้องพยายามอย่างเต็มที่ที่จะไม่ให้เกิดความทรงจำอันเลวร้ายนั้นขึ้นอีก ไม่ว่าจะกับใครก็ตาม

ขอขอบคุณอาจารย์ภัทรอร ที่ชวนดิฉันเข้าร่วมโครงการนี้ ขอขอบคุณคุณซุตะ ยูมิโกะ ผู้แทนจากเหยื่อสารกัมมันตรังสีจังหวัดชิบะ ผู้แนะนำและมอบหนังสือต้นฉบับมา ขอขอบคุณคุณโคตะมะ มิชิโกะ จาก HIDANKYO ที่กรุณาบรรยายพิเศษ ขอขอบคุณคุณยามาซากิ เคนอิจิ ผู้ลงพื้นที่สัมภาษณ์เหยื่อสารกัมมันตรังสีในจังหวัดฟูกูชิมะที่อนุญาตให้ใช้ลิขสิทธิ์หนังสือรวมประสบการณ์นี้ ดิฉันหวังสุดหัวใจว่า ความมุ่งมั่นของนิสิตนักศึกษาทุกคนจะถ่ายทอดสู่ผู้อ่านชาวไทย ให้รับรู้เรื่องราวของชาวญี่ปุ่นกลุ่มหนึ่งได้ผ่านหนังสือเล่มนี้

อicumิ มะทซุอิ

(พฤษภาคม 2023 ณ จังหวัดชิบะ ประเทศญี่ปุ่น)

・ 広島、原爆ドーム อนุสรณ์สันติภาพอิโรชิมาะ



・ 長崎、平和記念像 รูปปั้นสันติภาพนางาซากิ



「死の川」 แม่น้ำแห่งความตาย



「黒い雨」 ฝนดำ



上の作品 2 点は、神奈川県原爆被災者の会の許可を得て、掲載しました。  
ภาพเขียนผลงานของเหยื่อจากระเบิดปรมาณู ได้รับการอนุญาตให้นำมาใช้จาก Kanagawaken Genbakuhisaisha no kai

# 目次 สารบัญ

頁 หน้า (ภาษาไทย)

本書について ความเป็นมาของหนังสือเล่มนี้.....	1
日本原水爆被害者団体協議会 編『被爆者からあなたに、いま伝えたいこと』 原爆は人間に何をもたらしたか ระเบิดปรมาณูทำอะไรไว้กับมนุษยชาติ .....	5 (66)
原水爆を考える原町市民の会 編『私も証言する—ヒロシマ・ナガサキのこと』	
Aさんの証言 คำบอกเล่าของคุณ A.....	13 (76)
花房三郎さんの証言 คำบอกเล่าของคุณฮิเดะสะบุโร ฮานะฟูสะ .....	16 (80)
飯土井鶴吉さんの証言 คำบอกเล่าของคุณอิอิโตะ สึรุคิจิ .....	19 (85)
桑原馨さんの証言 คำบอกเล่าของคุณคุวาระ เคย์ .....	22 (89)
高山甫さんの証言 คำบอกเล่าของคุณทาคายามะ ฮะจิเมะ .....	27 (94)
中川善久さんの証言 คำบอกเล่าของคุณโยชิฮิสะ นาคากาวะ .....	29 (96)
遠藤昌弘さんの証言 คำบอกเล่าของคุณเอนโด มาซาฮิโระ .....	32 (101)
岡実さんの証言 คำบอกเล่าของคุณโอกะ มิโนรุ.....	35 (104)
Bさんの証言 คำบอกเล่าของคุณ B.....	37 (108)
Cさんの証言 คำบอกเล่าของคุณ C.....	39 (111)
Dさんの証言 คำบอกเล่าของคุณ D.....	40 (112)
Eさんの証言 คำบอกเล่าของคุณ E.....	41 (114)
Fさんの証言 คำบอกเล่าของคุณ F.....	42 (115)
Gさんの証言 คำบอกเล่าของคุณ G.....	45 (119)
Hさんの証言 คำบอกเล่าของคุณ H.....	46 (121)
八牧将勝さんの証言 คำบอกเล่าของคุณยามากิ มาซะคัตสึ.....	49 (124)
渡辺豊さんの証言 คำบอกเล่าของคุณวาทานาเบะ ยูทาเกะ .....	51 (128)
Iさんの証言 คำบอกเล่าของคุณ I.....	54 (131)
Jさんの証言 คำบอกเล่าของคุณ J.....	57 (134)
Kさんの証言 คำบอกเล่าของคุณ K .....	58 (135)
清野肅郎さんの証言 คำบอกเล่าของคุณคิโยโนะ คาเนะโร.....	60 (138)
被爆体験者の聞き書きを終えて บทส่งท้ายหลังจากฟังเรื่องเล่าของผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณู.....	62 (141)
プロジェクトメンバー คณะผู้จัดทำ.....	145

## はじめに

核兵器禁止条約が2021年1月22日に発行しました。広島・長崎への原爆の投下から76年目にして初めて、核兵器はいかなる意味でも「違法」だとする国際法が実現しました。

原爆被害者が1956年に全国組織、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）を結成してから65年目。自らの体験にもとづいて、世界の誰をも被爆者にしてはならないと願い、人間と核兵器は共存できない、生きているうちに核兵器廃絶への道筋をつけたい、と訴えてきた被爆者にとって、それは長い長い道のりでした。

被爆者の脳裏には、原爆に命をうばわれた家族・友人・多くの死者たちや、この日を見届けずに亡くなっていった被爆者運動の先達の姿が浮かびました。

被爆者は、日本被団協の結成から今日までさまざまな困難にもめげず、粘り強くつづけてきた努力が世界の人々に届き、禁止条約発効の日を迎えたことを誇りに思います。条約の発効を前に、日本被団協の田中照巳代表委員は、「核兵器廃絶までの道の半分までやってきました」と述べるとともに、「残りの半分もまた、厳しい道のりになります」とつづけました。

核兵器禁止条約を真に核兵器の終わりのはじまりとするためには、残された課題も少なくありません。今なお核兵器は1万3400発も存在しています。核兵器保有国をはじめ、核兵器の「抑止力」に依存する国々、何よりも「唯一の戦争被爆国」と自称するわたしたちの国が条約に背を向けています。

このブックレットでは、被爆者が「自らを救うとともに、私たちの体験をとおして人類の危機を救おう」（日本被団協「結成大会宣言」）と原爆の惨禍から立ち上がり、何よりも“ふたたび被爆者をつくらない”ことを願いながら、65年間歩んできた道をふり返りました。人類史上初めての「原爆地獄」を体験し、からだ、くらし、こころにわたる苦しみを抱えながら生きてきた被爆者は、世界のすべての国に核兵器の廃絶を求めてきました。「原爆地獄」の苦しみはもちろん、「被爆者としての人生」を、二度と誰にも味わわせたくないからです。

「原爆」と対峙しながら被爆者運動が築きあげてきたものは何か。被爆者が、なぜ「核兵器廃絶」と「原爆被害に対する国家補償」を求め続け、今なおそれを求めているのか。

被爆者運動のあゆみをたどりながら、どうしたら核の時代を終わらせることができるかを、ともに考えていただければ幸いです。



## I 原爆は人間に何をもちたか

### 1 人類史上初めての核兵器被害

#### 未曾有の体験

1945年8月6日午前8時15分、広島市の上空約600mで、3日後の9日午前11時2分、長崎市の上空約500mで、アメリカ軍が投下した原子爆弾が炸裂しました。爆発で生まれた火球は摂氏数百万度に達し地表でも3000℃から5000℃となり、強い熱線は爆心地から2km余りの地点でも火災を引き起こし、多くの死傷者を出しました。また、爆発の直後に起きた爆風によって、爆心地から1.5km以内の木造家屋は一瞬にして倒壊しました。

このように原爆は、それまでの兵器とは比較にならないほどの強い熱線を発し、爆風を起こしましたが、決定的な違いは、人間の細胞を破壊し、遺伝子を傷つける「放射線」を出したことです。広島と長崎の原爆は、それぞれウラニウム、プルトニウムという原子が核分裂する際に放出するエネルギーを利用したものです。その恐ろしさは、被爆時の被害の壊滅的な大きさだけでなく、その影響が長くつづくことにあります。

一時は助かったと思った人たちも、あとから家族の捜索や救援、死体処理のため市内に入った人たちも、急性放射線障害のため次々に命をうばわれ、その年の末までに、広島では14万人余、長崎では7万人余の人々が亡くなりました。かろうじて生き残った人々も、原爆による死への不安のなかで生きていくことを余儀なくされました。

あの日、原爆にあったほとんどの人たちは、何が起きたのか、まったくわかりませんでした。「自分の家が直撃弾でやられた」、「近くのガスタンクが爆撃されたと思った」という証言は少なくありません。外に出て初めて、<地獄>としか言いようのない光景に遭遇したのです。

「赤く焼けただれてふくれあがった屍の山。眼球や内臓のとび出した死体。黒焦げの満員電車。倒れた家の下敷きになり、生きながら焼かれた人々。髪を逆立て、ずるむけの皮膚をぶら下げた幽霊のような行列。人の世の出来事とは到底いえない無残な光景でした。」（「原爆被害者の基本要請」）。

原子爆弾は人類史上未曾有の被害をもたらししました。それは無差別大量殺戮で一般市民の戦意喪失をねらった、「戦略爆撃」の残虐性が行きついたところでした。二つの街を一瞬のうちに壊滅させた原爆は、物理的な被害をもたらしただけでなく、生活の基盤を根こそぎ破壊し、人間そのものを否定したのです。核時代が現実のものとなりました。原爆で下半身を押しつぶされた渡辺千恵子さんは、自らのことを「おこりうる人類絶滅の第一撃を体験させられた人間」と述べました（1978年、NGO国際会議・ジュネーブ）。

#### 原爆被害者の隠蔽と被爆者遺棄の12年

原爆のもたらした未知数の被害に対して、日本政府やアメリカは何をしてきたのでしょうか。被害者にとって最も援護が必要だった時期、米占領軍は原爆被害を隠しました（1945年9月2日～52年4月28日まで日本はアメリカをはじめとする連合軍に占領されていました）。1945年8月9日、連合軍捕虜調査のため来日した赤十字国際委員会駐日主席代表のマルセル・ジュノー博士（スイス人医師）は、広島を聞いて直ちに医薬品などの救援を連合軍総司令部（GHQ）へ要請、15トンの医薬品が広島に送られました。しかし、その後の支援は禁じられました。8月30日にマッカーサー連合軍総司令部最高司令官が厚木に到着。9月6日、米国原爆調査団長、原爆を開発したマンハッタン計画副責任者のトーマス・ファール准将は、東京で海外特派員に、「広島・長崎では、死ぬべきものは死んでしまい、9月上旬現在において、原爆放射能のために苦しん



でいる者は皆無だ」と述べました（高橋博子『封印されたヒロシマ・ナガサキ—米核実験と民間防衛計画』凱風社、2008年）。GHQは9日、東京五紙に新聞事前検閲を開始し、19日にはプレスコード（日本に与える新聞遵則）を指令。以後、原爆報道は影をひそめることになりました。

日本政府もまた、戦時災害保護法による救急救護所を被爆二カ月後の45年10月に閉鎖。翌46年の9月には法律が失効しました。被害者も孤児も見捨てられ、待ち受けていたのは病や貧困でした。医者も原爆症のことを知らず、被害者は治療もないまま苦しみつづけたのでした。

大統領令により全米科学アカデミーに組織された原爆傷害調査委員会（ABCC）が1947年3月、広島赤十字病院に事務所を設置。4月から血液の調査を始め、長崎でも7月から調査が始まりました。しかし、ABCCは将来の核戦争を想定した調査・研究機関で、治療はしませんでした。そのため、「自分たちはモルモットではない」と協力を拒否する被害者も少なくありませんでした。調査資料は、米国にもち去られました。

「空白の10年間」と言われるように、この時期、アメリカと日本政府は、原爆被害を究明しないだけでなく、隠蔽してきたのです。1956年に日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）が結成され、翌57年に原爆医療法が制定されたのは、被爆から12年目のことでした。

### 被団協の調査研究—被害者自身による被害の究明

原爆被害者の被爆後の人生は、原爆がもたらす苦しみとたたかいながら、自らその被害の実相を探るところから始まりました。

日本政府は1965年以降、被爆者実態調査を実施してきているものの、被爆した人たちが抱える苦しみや原爆被害の全体像を解明しようとはしてきませんでした。被爆国として「原爆被害白書」などを作成して世界の国々にその実相を伝える努力さえしてこなかったのです。

広島・長崎をはじめ全国各塗装府県に住む被爆者は、それぞれの地で被爆者の会をつくり、その全国組織として1956年に結成した日本被団協をよりどころにして、多彩な活動をつづけてきました。筆舌に尽くしがたい体験をことばにして証言し、書き残し、また、「NGO被爆問題シンポジウム」に向けた被爆者調査（77年）や「原爆被害者調査」（85年）をはじめとする大小さまざまな調査を実施しました。原爆は人間に何をなしたのか、何をなしつづけてきたのか、時空を超えて人間ぞんごいの全局面に被害をもたらしてきた原爆被害の全体像は、被害者が自ら究明してきたものと言えます。被団協はさらに、原爆被害がなぜもたらされたのか、その責任のありかを究明するとともに、ふたたび自分たちのような被爆者が生み出されないための道筋を明らかにしてきたのです。

## 2 人間として死ぬことも、生きることも許さない—原爆の反人間性

日本被団協が1985年秋から86年春にかけて実施した「原爆被害者調査」には1万3168人の原爆生存者と、220人余の非被爆遺族の協力が得られ、その中で報告された原爆死没者数は1万2000人余にのぼりました。

この調査結果をはじめとして、各種調査に寄せられた証言をもとに、原爆が人間に何をもたらしたのか、その特徴を示してみましよう（証言末尾の（ ）内は、被爆地、被爆状況、性別、被爆時年齢、調査時の居住地を示す。調査名のないものは、85年原爆被害者調査から）。

### 原爆被害の実相①—「あの日」の<地獄>

無差別な死 「あの日」（1945年8月6日広島、9日長崎）の死者の65%、三分の二は、9歳以下の子ども（18%）、10～59歳の女性（39%）と60歳以上の男女（8%）でした。原爆はこのような非戦闘員を無差別に殺しつくす「絶滅兵器」にほかなりません。

死のむごさ 「あの日」の死者の大半（60%以上）は、「戸外での爆死」か「建物の中での圧焼死」でした。逃げるいとまもなく倒壊家屋の下敷きとなり、生きたまま火に焼かれました。周囲の人は「助けて」という声に答えることができませんでした。とても人間の死と呼ぶことはできない死の形のむごさ、苦しみの姿。それらは、生き残った被爆者の心から消え去ることはありません。

- 火葬場もなく小学校の校庭で材木を重ね、まるで魚でも焼くように人間が火葬されるさまは、今思っても身の毛がよだつ感がする。  
（長崎、直爆 3km、男、18 歳、埼玉）
- 仮住まいの防空壕の近くで、毎日毎日運びこまれる死体が山のように積みあげられ、油をかけて燃された。人間ではなく何かの物体のように……  
（広島、直爆 2km、女、29 歳、大阪）
- 小学校 2 年生の時です。一瞬の出来事から人生の表から裏へと急変し、目に写るものは生き地獄としかいえないあの日のことは、思ひ出すのもつらいです。……ぼろぼろの格好で死んでいく人たちを黙って見るほど、すべてが狂い、地獄だったのです。「人間であれば、人間らしい死に方をさせてあげたかった。」  
（長崎、直爆 2km、女、8 歳、石川）

確かめようもない死 家族に看取られながら死ぬことができた死者は全体のわずか 4%に過ぎず、42%は行方不明のまま、遺体や遺骨によってさえ、その死は確認されていません。原爆は「確認するすべのない死」を強いたのです。そのため、遺族は肉親の死を受け止めようもなく、その最期の時をさまざまに想像し苦しんでいます。

- 平塚町の自宅で朝、母は動員に出る私を元気な姿で送ってくれ、死んだなど信じられませんでした。いまだに遺骨もありません。いつ、母が帰ってくるか（と）待っていました。風の音がすると母ではないかと外に出てみたり、長い間、母を戸籍から抹消しないでいました。（広島、直爆 2 km、女、年齢不明、広島）
- 女学校一年生だった姉は、学徒動員で先生に引率され、建物の疎開作業の後片付けにクラス全員で出かけていました。爆心地から 800 メートルの地点でした。…（あくる日から一週間、母とともに市内を捜し回ったものの）その姉を探し出してやれなかった父は、生涯自分を責めて責め続けて逝きました。…原爆で倍にも腫れ上がり、赤銅色の顔になっている女学生の一团を見かけては、「正子か、正子か」って声を掛けているんです。ところが答えてもらえずに、その中から自分の娘の顔を見出すことはできなかつたのです。（広島、胎内、女、千葉。講演から）

広島では、空襲による延焼を防ぐために壊された建物の片づけに動員された 6000 人以上の生徒が亡くなりました。その多くが行方不明です。

助けられなかった 原爆は都市の機能のすべてを一瞬に破壊しました。組織的な防災・救助活動は不可能でした。その極限状況のもとでは、親は子を、子は親を、夫は妻を、妻は夫を火の中に残して逃げるよりほかはありませんでした。肉親だけでなく、助けを求める人、水を求める人たちの声にも応えられませんでした。

「その時私は、もう人間ではなくなっていた」という思いを今に残し、「あの日」の体験が「心の傷」となって苦しむ被爆者は 4 人に 1 人にのぼります。原爆が生み出したこの世の「地獄」、人間の感受性の限界を超える「極限」状況で、人々はむごさも恐ろしさも悲しさも感じなくなり、その体験は終生消えない傷として、人々の心に深く刻み込まれました。

- まるでポロをぶら下げている様な皮膚のめくれた人達にも、何度も出会いながら、ただがむしやりに走りつづけ、やっと……我が家にたどりつくまで、鳴き声叫び声の他、人の話（し）声を一言も聞かなかったこと、出会った人が皆無表情だったことを思い出します。後で考えると、あれは人の世ではなかった、あの世の地獄を目のあたりにしたように思います。だのに何を見ても、何を聞いても感じない。神経も麻痺してしまっていたと思います。異常な状態の中で人間は人間でなくなるという事を知りました。本当に怖いです。（広島、直爆 3km、女、15歳、兵庫）
- あの時の話にふれると、落ちつかなくなるし、胸がしめつけられて息苦しくなる。無理に話そうとすると、精神状態が変になりそうで、とても話せない。弟の死に様が目には焼きついている。あの時、呼んでも答えがなかったので逃げたが、ただ気を失っていただけではなかったか。そのことを思うと、五臓六腑がヒラヒラと動く。  
（長崎、直爆 2km、男、12歳、宮城）
- 助けられた瞬間から、私は息子と自分だけが生きる事しか頭になかったのです。逃げる途中でした。私の足をつかんだ子ども、片目が飛び出し顔の真ん中にぺたっとはりつき、その一つ目玉が下から私を睨みつけています。「一つ目小僧だ！」私はその子を蹴飛ばしました。夢中でした。こわかったのです。一つ目小僧が追ってくる。ただ、逃げました。……  
私は、隣のご夫妻に助けられましたが、だれも助けませんでした。「鬼の目にも涙」と言いますが、私は、鬼ですらありませんでした。  
（広島、直爆 1.7km、女、23歳、東京。証言活動のしおり）

## 原爆被害の実相②--それからの死/「被爆者」としての人生

急性原爆症「あの日」以降も被爆者は次々と亡くなっていき、8月末までには、「原爆症」による死が「やけど」による死を上回り、死因の60%を占めるに至りました。原爆の放射線による急性症状は、発熱、下痢、嘔吐、出血（紫斑）、口内炎、脱毛、頭痛、腹痛、意識障害などです。この間、人々は自分の周りの人が次々に死んでいくのを見つめながら、今度は自分の番ではないか、という<死の恐怖>に襲われ、その恐怖に苛まれながら死んでいきました。

苦しみぬいたあげくの死 遺族調査で報告された1946年以降の死没者7030人のうち、90%以上は苦しみに苦しみぬいたあげく、<遅れた原爆死>をとげていきました。多くの死者たちは、「被爆を境に病気がちになり」、「病気とのたたかいの日々」を送らされ、「原爆症の不安・恐怖におびえ」ながら亡くなっていきました。

死にいたるまでの苦しみは、さらに、「肉親の死に生きる支えを失って」、「思うように働けない」、「被爆後、生活がくるしくなって」、「あの日の体験に苦しめられて」、「子どものことを心配して」など、人間生活のあらゆる局面にわたりました。

遅れた原爆死 「病気」はどの時期においても死因のほぼ9割を占めており、そのうち「癌」による死は被爆後10年以降から急に比重を増し、その後も増えつづけています。とりわけ被爆時20～30代であった人に多く発生しており、それは遺族に「早すぎた死」としてとらえられ、また「死の恐怖」をともなう「原爆症の不安」の根拠ともなっています。

1946年以降の被爆者の死について、遺族が原爆と「無関係」と見なしている死は一割以下に過ぎません。半数の死者については原爆と関係があると受けとめ、残りの4割は測りかねています。つまり、9割の死について、遺族は、それが原爆と関係があるのではないか、すなわち<遅れた原爆死>であるという疑いを否定することができないのです。

- その年の10月1日、学校が再開されました。同学年320人のうち、集まったのは二十数人。大半が同じクラスの仲間でした。しかし、それが原爆の後遺症でポツリポツリと死んでゆくのです。1か月あるいは2か月おきに、級友が1人ずつ死んでいき、いつも教室のどこの机にも花が

飾ってある状態を想像してください。この次は自分ではないか。自分はいつまで生きられるだろうかと、不安で不安でどうしようもない、という状態がずっと続きました。ある人はまったく気力を失っていました。

(広島、入市、男、13歳、新潟。証言活動のしおり)

- やっと原爆の中から生き延びて苦しい生活に耐えて生きてきたのに、白血病と診断され、その悲しみは何事にも代えがたいものでした。18歳まで生きてきたのに苦しんで死んでいった弟(直爆1.2km、4歳。1960年死亡)は、今も忘れることができません。  
(長崎、直爆、1.5km、女、8歳、長崎)
- 妹(24歳)は当時結婚しており、原爆投下後に入市して被爆した。被爆直後は何でもなかったが、昭和32年9月に36歳で、白血病で苦しんで死んだ。妹が白血病で死んだことについて、直接被爆して大火傷を負った自分でなくて入市被爆の妹が突然死んだことで、かえって原爆の恐ろしさをはだで感じた。(広島、直爆2km、女、31歳、広島)

### 不安と苦しみに満ちた人生

「なんのために生まれてきたのかわからない」「生きることが苦しみの中にあります」。死者が亡くなるまでになめた苦しみは、そのまま、生存被爆者の「生きる苦しみ」にほかなりません。「被爆したために、とくにつらいことはなかった」という人は、全体の18%に過ぎませんでした。

不安を抱えた生 被爆者にとっての苦しみの最大のものは、「具合が悪いと、被爆のせいでは……と気になる」(62%)、「いつ発病するかわからないので不安」(52%)など、健康にかかわる不安です。その他には、生活の不安、子や孫の健康・将来にかかわる不安があり、被爆者の4分の3がこのような不安に苛まれています。

被爆者であるための「不安」は、急性症状のあった被爆者の場合は87%に見られます。急性症状のなかった被爆者の場合も、その大きさに差はありますが、半数を超える人に「不安」が認められます。この人たちもまた、放射線を浴びた可能性を否定することができないからです。

被爆者の「不安」には、客観的な根拠があることがわかります。つまり「不安」そのものが原爆のもたらした被害なのです。

「遅れてくる原爆死」の恐怖 自分の目撃した原爆死没者の死が<遅れた原爆死>であったのではないかという疑いから、生存者は「遅れてくる原爆死」の不安に驚かされました。癌が原爆症の象徴となり、それは「死の恐怖」をとまないます。「原爆被害者調査」が行われた時は原爆投下から40年が経っていましたが、被爆者は「死の恐怖」におののきながら生きており、それは、現在もなおつづいています。

人生の節目で遭遇する原爆 被爆者は、本来なら喜ばしいはずの人生の節目(就職・結婚・出産)や家庭生活・子育てのなかで、原爆に直面せざるを得ませんでした。忘れようとしても逃げられない苦しみです。また、原爆ゆえの差別や偏見にもさらされてきました。被爆者であるということで就職ができなかったり、結婚が破綻したり、結婚しても尾どもを産もうとすると、被爆者には子どもを産ませられないと言われるなど。このため、被爆者であることを隠してきた人や、親から被爆したことを口外しないようにと言われた被爆者の子どもも少なくありません。

- 家族一人ずつ死亡の度にガンでした。死ぬまで不安です。  
(長崎、直爆1.2km、女、16歳、山口。1984年被爆者要求調査)
- 白血球の変動が多く、自分の健康に自信がなくなった、精神的に不安症になる。いつどのような病気になるやら、心の病気になっている。  
(広島、入市、男、34歳、和歌山、要求調査)

- 私がビッコをひくため、まねされたり、どこから見てもわかると言われた。一度でいいからヒールが細くて高いくつをはいて、人並みに歩いてみたい。  
(長崎、直爆 2.2km、女、3歳、長崎。要求調査)
- 被爆者の名前のない人生を返してもらいたいものです。  
(長崎、直爆 2.1km、男、9歳、大阪。要求調査)
- 結婚の時、主人に、「原爆にあったことは、ヒミツ」にしておくよう言われ、ショックであった。今でも廻り(主人の一族)は、知らない。  
(長崎、直爆 3.5km、女、7歳、神奈川。被爆 70 年調査)

生きる意欲の喪失 このようなつらい人生を強いられた被爆者のなかには、ついに生きようとする意志を打ち砕かれた人も少なくありません。「こんな苦しみをうけるくらいなら、死んだほうがましだ」とか、「いっそあの時死んでいた方がよかった」といった「生きる意欲の喪失」体験をもっている人は、生存者の 25%、4人に1人にもものぼっていました。

「生きる意味」を失うとは、「被爆者として生きる」ことには人間として耐えられないほどのつらさがある、ということです。原爆の反人間性がここにも現れています。調査で報告された死没者 1万 2700 人のなかには、47 人の自殺者が含まれていました。「病気とのたたかい」の日々が長くつづき(38%)、それが「死の恐怖」をとめない(11%)、「生涯治る見込みがない」という絶望に陥って(29%)、あるいは「被爆によって、夢や目標がたちきられ」たり(33%)、「あの日の体験にこころをさいなまれ」る(21%)など、「つらかったこと」がいくつも重なって、自ら命を絶っていったのです。

- (兄は)ヤケドは全身の半分で医師に見放されていたのが、思いがけなく生を取りとめていた。何時も恐怖におびえて生きて居り、お天気の悪い日はことさらヤケドが痛み苦しんでいた。結婚の話のあるごと身体の事があって苦しんでいた。このヤケドの身の苦しさに思い余り生きる希望を無くし自殺してしまった。  
(兄は広島で直撃 1km、57 年 9 月、30 歳で自死)
- 父(41 歳)、母(35 歳)、兄(12 歳)、妹(2 歳)を殺され、遺体もなく、最後どんな様子で死んだのかもわからない!!一瞬に瓦礫と化し、道幅には苦しんで転がって人、人、人。地獄を見て来た。あれから 64 年忘れられない悲しみ苦しみをひきずっている。心の痛みにつける薬はない。私もあの時「両親と一緒に死んでいた方がよかった」と今でも思う。  
(広島、直爆 1.3km、女、9 歳、山口。2010 年被爆者からのメッセージ)

#### いつまでつづく痛み・子や孫への不安

被爆者は自分自身の健康とともに、小や孫の将来にかかわる不安を抱きながら生きてきました。障がいや病のある子どもを前に、親なき後どう生活していくのか心にかけている人もいます。被爆者は、早くから被爆者の子どもに関する調査や白書をまとめ、そのなかで、被爆者と同じような健康手帳の発行や医療の支援を求めてきたのです。「まだまだ偏見があり、孫の結婚のことを考えて、被爆者であることは決して言わないことにしています」という被爆者もいます。

- これから、まだ生きていく間に、子ども、孫に、もちろん私にもですが、健康に異常がでてくるのが不安です。生きている限り痛みから逃れられないのでしょうか。辛いです。戦争は地獄です。生きている限り忘れられない怖いことです。  
(長崎、直爆、3.6km、女、7歳、福岡。被爆 70 年調査)

### 3 原爆は人間と共存できない—絶対悪の兵器

#### 絶対悪の兵器

さまざまな調査や証言をもとに、日本被団協は1984年に「原爆被害者の基本要件」を策定しました。その前文には、原爆がもたらしたものについて、次のように記されています。

原爆は、今にいたるまで、被爆者のからだ、くらし、こころにわたる被害を及ぼし続けています。

原爆は、人間として死ぬことも、人間らしく生きることが許しません。核兵器はもともと、「絶滅」だけを目的とした狂気の兵器です。人間として認めることのできない絶対悪の兵器なのです。

「人間」の視点から、核兵器が人間の存在とは相いれない、反人間的な兵器であること、いかなる名目であれ正当化することのできない絶対悪の兵器であることをはっきりと宣言したのです。

- 母を助け出そうとしてちょうど通りかかった近所の人に援助を頼んだが、すげなく断られた。今でも心にわだかまりは残っているが、人間というものは非情なものである。いや人間をそのような極限まで追い込んだ原爆の非人間性こそ問題にすべきである。

(広島、直爆1.5km、男、16歳、石川)

- 親を返せ。人間を返せ、家屋家財を返せ、それ以前の幸せな生活を返せ。

(広島、人市、男、16歳、長野)

#### 原爆に抗って生きる

日本被団協が行なった1985年の「原爆被害者調査」は、「あの日」「それからの死」「被爆者としての人生」を通じて、被爆者のからだ、くらし、こころのすべてにわたる原爆被害が、現在までつづいていることを明らかにしてきました。

被爆者にとって「生きる支え」となるものは、「家族に囲まれて、安定した生活をきずくこと」であり、ごく普通の平和な生の安定を求めて生きることでした。

しかし、そうした当たり前のくらしを打ち砕かれた被害が重く大きい人ほど、「原爆で亡くなった人の霊を慰める」「被爆者の仲間のために役立つ」、さらには「被爆の証人として語り継ぐ」「援護法の制定まで生きる」「核兵器をこの世からなくすために生きる」といった<反原爆>のたたかいを「生きる支え」として、その後の人生を生き抜いてきたことも、調査で明らかになりました。

人間と核兵器は共存することができません。被爆者にとって「生きる」道はただ一つ。それは「生きようとする意志」を打ち砕こうとする力と「たたかう」ことであり「抵抗」することでした。人間が核兵器を否定し廃絶しなければ、核兵器が人間を否定することになります。被爆者は、「まどうて（つぐなって）くれ」と怒りの声を上げました。「もとのからだにもどしてくれ」「私の人生を弁償してくれ」と、心の奥の叫びを言葉に死、立ち上がったのです。



被爆者の体験に根差した何よりの願いは、「原爆は二度と許せない」「子や孫はもちろん、世界の誰にも自分のような苦しみはさせたくない」というものです。日本被団協はそうした被爆者の願いを結集して、今日まで運動をつづけてきました。

1. 〈Aさんの証言〉

(当時 34 歳、男、相馬市在住)

踏切で止められたことが運命の別れ道となる  
福島県で第一号の原爆症認定患者に

私は大正元年、この相馬市に生まれましたので現在七十歳です。昭和十六年、二十九歳で第一補充兵として徴兵され、朝鮮に四年間いて一旦相馬に帰って、昭和二十年三月再召集されました。

その原爆が投下された時、私は広島の本営の通信隊に衛生兵長として軍務についていました。私たちの部隊は広島市の東部の尾長町という、山の方に分散して駐屯しておりました。

八月六日の朝七時半ごろ、私は強制疎開の家屋取壊し作業命令を受けて、広島市内に向ってトラックに乗って部隊を出発しました。全部で五台のトラックに分乗し、私は四台目の荷台に立ったまま乗っていました。八時十分ごろ、広島駅の東、愛宕町という所の踏切に差しかけた時、貨物列車が通過するので私たちのトラックはそこで止まり待っていました。その時空襲警報が解除になって警戒警報になっていたのですが、広島上空には B29 が一機、トンボぐらいの大きさに見え西の方へ飛んでいきました。「B29 め、逃げていったか」なんて思っていたその時です。突然、ピカッとマグネシウムをたいたように一大閃光を認めた瞬間、暗くなって、砂ぼこりやら木片が飛ぶ光景が目映ったとたん、すごい爆風で全員トラックの上から路上に吹き飛ばされ、私は一時意識不明となり、しばらくして我に返った時は、そのトラックの下で一体の半分が土砂に埋まっていることがわかりました。それに被爆した人々がケガをしたり、火傷をしたまま避難していく姿(初めはそれらの人々の足だけしか見えませんでした)が見えました。トラックの運転手はガラスで血だらけになっていました。

あとで考えてみると、貨物列車通過待合せで私たちのトラックが踏切で止められたことが運命の別れ道というか、生死の境だったんですね。私たちより前に行った三台のトラックは、市の中央部の紙屋町に進んでしまいその後の消息はわかりません。私も踏切でもし止められなかったら……。一台のトラックには三十人ぐらいの兵隊が乗っていたのですが。

それからが大変でした。街のあちこちから火の手があがり、「兵隊さん助けてくれ。」という悲鳴が火の中から聞えました。私自身は顔の左側にやけどをし、足は打撲傷でびっこをひきながらもなんとか自分で歩けました。私たちは松本中学校(現在松本商業高校か?)に向い、私は衛生兵ですからそこで救護活動をすることにしました。そこに向う途中、私たちは本当に悲惨な町の様子を体験しました。下水にのめったままの死体、あっちにもこっちにも死体が累々と横たわっていたり、けがや火傷をした人が、助けを求めて私の足にからみついてきたり、この世の地獄でした。

松本中学校でも治療救護活動中、いろいろな体験に出あいました。校庭や校舎内に毛布などを置いて、避難してきた負傷者をそこに寝かせました。治療といっても、火傷をした人々に天ぷら油でふいてやるぐらいでした。ある娘さんの目に大きな三角のガラス片が突き刺っていて、なかなか抜けません。そこでピンセットにガーゼをまいてすべらないようにして、娘さんの胸に足をかけてようやく抜き取ることもしました。「目は見えるようになるでしょうか。」と、その娘さんが聞きますが、私はなんとも答えようがありませんでした。また、忘れられないのは、頭がぎくろのように割れている子供を抱いた母親が、「子供を助けて」と言ってきたことです。すでにその子供は死んでいるのに、母親はもう気がおかしくなっているんですね。この世の地獄でした。また、手がぶらぶらになっている人の腕を鋏で切ってやったのもあります。どうしようもありませんでした。

そのうち、私自身の顔も火傷ではれてきて、上官は「もう止めて手当てをしろ」というので、軟膏を塗ったり、火傷をしている左の顔面に化膿止めの注射をしてもらったり治療を受けました。ヒリヒリと痛みましたが、一般の人よりもましな治療をもらったわけです。

しばらくして私は、尾長町の山の部隊に帰隊しました。山の上だったのでそこから二日二晩燃える町が見えました。私たちの山には「助けてくれ」とたくさんの人々が押しかけて来ました。でも途中で山道に倒れたまま死んでウジが目や鼻にわいている人々もいました。四、五日経っても引き取る人もなく、兵隊の死体収容隊が引き取って行きました。

さらに原爆投下後の一週間か十日過ぎて、一度だけ中心部に救護班として行きました。広島あの美しかった川、広島には七つの川が流れ、水の都とも言われていたのですが、その川に死骸が無数に浮いていて、まるで死体の筏(いかだ)流しのようでした。全く悲惨なものです。

その後、私たちの部隊は正式な解散もなく、上官たちはパラパラと一人、また一人と、いつのまにか黙って帰省していきました。まるで龍頭蛇尾といった感じです。それも、上官たちは自分のリュックサックに軍の物資をつめこんで。砂糖とかカンヅメなど食糧も……。それで私腹をこやした人もいるそうですが、何回も戻ってきて持って行ったり、ひどいもんす。広島の人や関西付近の人はそんなことをしていましたが、私たち東北地方の出身者はすぐには帰れませんし、馬鹿正直に残務整理で残っていたわけです。私たちの部隊の食糧を盗みに来る人も多く、鉄条網を張って防いだりもしました。

そうこうして、私が相馬のこの生家に復員できたのは昭和二十年九月七日でした。広島から呉に行き、漁船で徳山へ、そこから無蓋<sup>むがい</sup>の貨物列車で大阪へ。蒸気機関車ですからトンネルの中では頭から毛布をかぶって煙を防ぎました。さらに中央線経由で、「ここが木曾の福島か」なんて考えてきました。相馬の生家では、私の二人の弟もすでに戦死していて、家督の私も広島で死んだものと思っていたそうです。ともかく被爆はしたものの命あって無事に帰ることができました。

その後半年経っても一年経っても、どうも体の調子がおかしい。商売をしていましたが、配達を一度するともう体は汗でビショビショ。すぐ疲れるし、血が止まらないこともあったり。胃腸の具合も悪く、七、八年は指圧や医者にかかり通してでした。顔の火傷は第一度でケロイドに残ることはありませんでしたが、鉄かぶとのあごひもの跡がいつまでも白く残っていました。ちょうど海水浴で日焼けしなかった部分のように白く。床屋さんに行くたびに変に思われたりして。とにかく、体が思うようにゆかず、あちこちの医者に診てもらいましたが、栄養不足、ビタミン不足じゃないかなどと言われるだけで、原因がつかめないでいました。

昭和三十二年に気管支ぜん息になり、相馬市内の青山医院で診てもらい、そこで私は青山先生に初めて被爆のことを話したわけです。すると先生はすぐに耳から採血して白血球を調べてくれて四、二〇〇と少ないことがわかり、それまでの病気が「原爆症」であると診断してくれました。そのころは原爆症のことなど医者でもわかりませんでした。まして、こんな地方ではなおさらです。すぐに仙台の東北大学病院で検査すると、白血球は三、四〇〇でした。さらに県内の病院の方が良いというので、福島医大病院に入院し、福島県で第一号の原爆症認定患者になりました。入院してすぐに、ちょうど24号台風で家が浸水したというので勝手に自分で退院し、その後は自宅で療養に励みました。造血剤をうってもらい、レバーを食べたり、温泉療法をしたりして、白血球も四、五〇〇に増え傷病恩給は停止になりました。五十年には白血球は六、〇〇〇、五十二年には四、八〇〇、五十七年十一月には五、五〇〇です。その間、商売の方もやらなければいけないので大変苦労しました。原爆症と診断された青山先生は命の恩人だと思っていますが、精神的には非常に苦痛でした。悲観してノイローゼになりました。広島の原爆症で何人が死んだ、などというニュースを聞いたたびに、次は私ではないかと、死への恐怖に陥ったり、直す薬はないというので大変心細くなったり。昼は仕事に熱中してまぎれますが、夜になって考え始めるともう眠れなくなりました。

今もぜん息で薬は離せません。一般患者でなく特別患者なので手当を受けていますが充分ではありません。右足は今でも細く、体は疲れやすいし、かぜもひきやすい。病気に対し抵抗力がないのです。白血球が普通の人のお半しかないので当然体は弱くなります。原爆医療法が適用になる前は治療費はみな自費でした。被爆者の指定病院は相馬公立病院、鹿島厚生病院、福島医大病



院、東北大付属病院などですが、時間的に経済的にも大変です。その他の病院にかかっても一時立替えて後で請求すれば治療代はいただけます。保健所に請求し証明を書いてもらうのですが、手続きがめんどろうですね。もう少し、私たちを優遇してくれても良いのに、と被爆者の集まりでも話しができます。いろいろ手当は改善されていますが、私は広島での被爆地点が二・一キロなので健康手当というのが却下されています。二キロ以内だと手当の支給額もかなり違ってくるのです。戦時には私は、広島や朝鮮にだけいたのでそこは戦地ではないので恩給はありません。

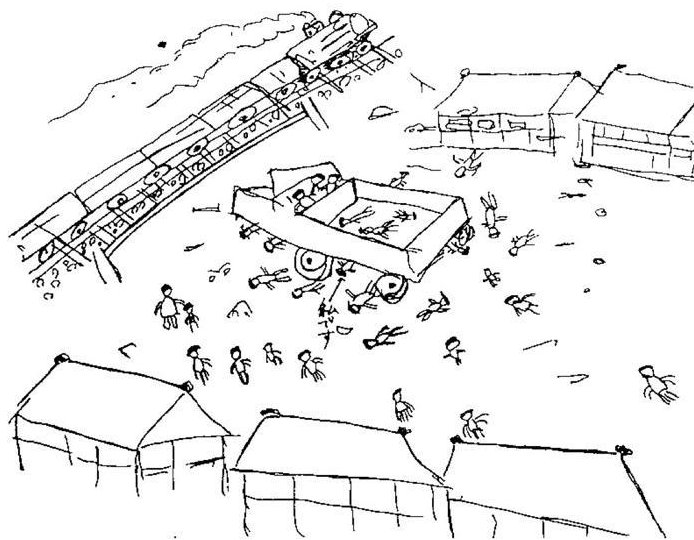
私も戦争犠牲者です。弟二人も戦死しています。核戦争は絶対やってもらっては困ります。戦争は兵隊だけでなく、一般市民までまきこむし、本当に悲惨だし残酷です。この目で見、体験していますし、今の平和を守っていかなければいけないし、戦争には絶対反対です。平和運動のため、資料として残すため、次の世代に伝えるために、私たちの経験を記録として残すことは大賛成です。でも被爆者の中には、世間に被爆者と知られることを警戒する人も多いです。特に未婚の娘さんがいる人はそうですね。そのことは理解して下さい。

以前までは、原爆写真展なんか見に行きませんでした。いろいろ思い出して、寒気がしたり身震いします。でも昨年、相馬市の公民館で『にんげんをかえせ』や『予言』の映写会には初めて行ってみました。勿論、私たちが体験したものは、あれどころではありませんが。私の戦友で同じ相馬市出身の〇〇さんはひどい死に方をしましたよ。やはり広島で一緒に被爆して、復員しても体がおかしく、何もする気になれず、みんなから怠け者、くさし者、やっかいオシツァマと見られ、医者に診てもらうこともできず、病名や原因も不明のまま、二、三年後に亡くなりました。亡くなってから、被爆して原爆症ということがわかったようですが、彼の場合など、全くかわいそうでした。私も酒もタバコも一切やめて摂生しています。戦争は本当に嫌です。子どもなんかもかわいそうです。

(一九八三、一、六談)

#### Aさんが描いた被爆直後の状況

『8時10分ごろ、私の乗ったトラックは広島駅の東、愛宕町の踏切で貨物列車の通過のため待っている時、原爆が投下されました。私は路上に吹きとばされ、そのトラックの下で体の半分が土砂に埋まっていた』



## 2. 〈花房三郎さんの証言〉

(当時 29 歳、男、双葉郡浪江町大字苅宿在住)

雷雲のように美しくさえ見えたきのご雲  
被爆して子供や孫への影響を心配

私は広島での被爆体験を是非自分でまとめたいと思っていました。一度前に書き始めたんですが、文章が苦手でそのままになってしまいました。あの様にひどい原爆を再び繰り返さないためにも、この体験を伝えたいと思っています。名前を公表してもいいですよ。

私は大正四年十一月生れで現在六十七歳です。二回召集され、一回目は会津若松の東部 24 部隊、本当は若松は 29 連隊ですが、私は教育召集で三ヶ月間だけでした。二回目が昭和二十年の三月で東京の世田谷区上馬に召集され、有名な三月十日の東京大空襲の時は世田谷にいたので助かりました。大空襲では台東区の方がやられて本当にひどかったようですが、私自身は実はあまり覚えていません。

四月十二日ごろ広島へ出発し、三日目ぐらいに着きました。広島市の東の方、比治山の麓の皆実町というところに私たちの部隊がありました。西部一三三七七部隊という大本営直轄の通信隊で全部で千人ぐらいいたんじゃないですか。私はその衛生兵で、相馬市の A さんも同じところにいました。

だんだん広島空襲が激しくなりましたが、でもなぜか広島は無傷で、どうして広島だけ空襲がないのか変に思っていました。そこで、七月ごろに部隊は、広島市の東北の尾長町に移りました。尾長町の山あいには朝鮮人部落のあったところで、そこを接収して本隊をそこに置いたわけです。こんなことを言って日韓友好の精神に反してまずいかも知れませんが、朝鮮人が住んでいた家はオンドル式の建物で、紙くずなんか散らかしっぱなしで、ずい分汚れていました。でも私は本隊が移ったあとも、ほかの五十人ぐらいとともに皆実町に残っておりました。

八月五日、原爆の投下の前日ですが、昼間に米軍機が一機飛来してきてビラをまいて行きました。すぐ軍が集めていきましたので、内容は分りませんでした。「市民は皆避難せよ」と印刷されていたとのことでした。五日の夜は一晩中、空襲警報が出ていて、<sup>くわ</sup>真が爆撃されていて臨戦態勢に入っていました。私は衛生兵でしたから医務室の宿直を香川県出身の香川軍曹とともに務めていました。

八月六日、原爆投下の日ですが、朝からジリジリと太陽が照りつける本当に暑い日でした。前夜からの空襲警報が警戒警報にかわり、やがて、それも解除になっていました。八時十分ごろ、私は広島駅の近くの猿猴橋<sup>さるまけ</sup>というところにあった部隊長官舎の当番兵が腹痛を起こしたため、その救援に香川軍曹と共に比治山から猿猴橋<sup>さるまけ</sup>に向かって歩いていました。B29 は飛行音だけ聞きました。他の戦友の中には B29 が投下した「赤い風船」、つまり原子爆弾を目撃した人もいましたが。ともかく、道路を歩いている時、原爆が投下され、爆発とともに私も香川軍曹も爆風で吹き飛ばされ、そのまま人事不省になりました。爆発の瞬間の光は覚えています。なんと言ったらいいいのか、マグネシウムをたいたような、真っ昼間なのにさらにそれ以上の強い光で ジツときたようなすごい光線でした。意識が回復したのはすぐで、おそらく五分か十分後ぐらいじゃないですか。あたりはまっ暗で何んにも見えませんでした。私は背中に打撲傷を負い火傷も皮膚の表われているところだけで軽いものでした。ケロイドに残るようなものではありませんでした。香川軍曹も頭を打っていましたが歩ける程度でした。被爆地点は爆心地から二、〇〇〇メートル以内だったわりには、大変軽く済んだと思います。ともかく比治山の部隊に帰ろうということになりました。ところが広島市内は本当に阿鼻叫喚<sup>あびきょうわん</sup>、阿鼻地獄<sup>あびじじごく</sup>という状態で、道路には、だらりと皮膚をたらした人、死体の山などひどいものでした。「兵隊さん熱いよう、助けて」という叫び声が今でも耳に残って離れません。

皆実町の部隊に帰って見ると兵舎にはまだ火は出ていませんでした。破壊はされていましたが。兵舎へは一般の市民の方も助けを求めて来ていましたが、自分たちの仲間の兵隊の救護で精一杯で、とても手は回りませんでした。そのうちに原爆のきのこ雲が大きくむくむくと空一杯に広がっていました。それは美しく、雷雲に夕日が輝いているようでもありました。あんなにきれいな雲は正直言って見たことないですね。夜になって、当番兵を救護するために火の中をくぐって街に出ました。猿猴橋周辺には多数の死体が山のように重なっていました。両岸がみんな火の海なので橋の上に逃げて来て、さらに川に飛びこんだ人も多かったんです。川の中で死んでいる人も多かった。ひどいもんで、男も女もありませんでした。軽傷者は二葉山の下の方の東練兵場に避難させました。この救護活動の中で、四十歳ぐらいの母親と十七、八歳ぐらいの娘がひどい火傷をしていて、「兵隊さん助けて下さい」と私の足にすがりついて叫んでいたことが忘れられません。香川軍曹と私とで、その娘さんをおぶって、避難者を運ぶトラックのところまでつれていきました。私たちは衛生兵で多少の薬や包帯は持っていたので、運ぶ前にきちんと応急処置をしてやりました。この親子はおそらく助かったと思います。その晩はたぶん夕食も取らず、ゴロ寝したと思います。

次の日七日には尾長町の部隊に帰りました。そこに避難していた多くの部隊の兵隊を日赤病院に運ぶ仕事につきました。病院といっても、コンクリートの建物が残っているという状態で、窓も戸も爆風で吹き飛ばされてありません。傷ついた人々は多数のため、床の上、廊下の上に収容され、薬なんかないので形ばかりの手当てを受けておりました。負傷者たちの叫び声というか、うなり声というか、あの時の様子は今でも忘れられません。もうなんて言ったらよいのか、本当に地獄でした。

尾長町の部隊で二日目頃に、ひどいけがをした女学生をお母さんがおぶってきました。軍医の命令で私が手当てをすることになりました。ところが大腿部がえぐられて骨が見えるような大きなけがで、しかも傷口にはウジがわいていました。私はウジをピンセットで取りのぞき、オキシドールでふいてやりました。傷口にウジがわくのですから驚きます。手当ての痛みもなく意識不明のまま、もう出血多量で翌日亡くなりました。今なら輸血をしたりいい薬もあって助かるでしょうが。本当に気の毒でした。お母さんの話ですと、その女学生は勤労動員先で被爆し、負傷したまま四キロメートルも歩いて家に帰ってきたということです。むごい話です。広島を中心街にはよく路面電車が横倒しになっているのを見かけましたが、その運転手や車掌は女学生がやっているのが多く、彼女たちもずいぶん犠牲になったことなのでしょう。女学生たちは皆、「勤労報国隊」と染めぬいた真中に日の丸の手拭いではち巻きをしてりりしいで立ちでした。

病院には部隊の将校の奥さんたちも収容されていましたが、顔や体はメチャメチャで誰なのか区別がつかいません。なにで区別するかというと、声でようやく誰々さんとわかりました。

九月一日に私に復員命令が出て除隊となりました。北陸線まわりで、<sup>むが</sup>無蓋の貨物車に乗ったりして、会津若松を通り、磐越東線で平をまわり、九月三日に浪江町に帰ることができました。

私の家は農家ですが、一年ぐらいは体がだるくブラブラして仕事もしないで、湯に行っただけを休めたりしました。健康状態はその後良くなり、三十七年ごろ肝炎になって平の労災病院に三カ月ほど入院しなければなりません。またここ十年間ぐらいはずっと臭覚がなくなりましたし、耳鳴りがして直りません。かぜもひきやすいし、常に疲れを感じることも多いです。原爆手帳は交付されていて、ずっと年二回、六月と十二月に検診に大野病院に行きます。今日も行ってきて十二月の検診の結果がわかりましたが、今回も肝機能障害で要精密検査ということでした。毎回、私も白血球は少ないですね。五六年が四、二〇〇、五七年が四、五〇〇というぐあいです。昨年十二月のGOTも84、GPTも50と異常があります。

こんなふうに被爆して体に異状があるので、家族のことで子供に何んらかの影響があるのではないかと本当に不安でした。子供は六人おり、そのうち被爆後に生れたのが三人です。幸い健康に

育ちましたが、結婚のことで大変心配し、結婚後は孫はどうだろうかとまた心配しました。特に二番目の孫が生まれた時、孫の顔にあざができていたということで、この時は全くガックリしました。もうどうしてよいのか、本当にショックでした。でもそれが出産の時のもので、育つうちに自然に消えたのでホッとしました。家族もみんな、私が被爆者であることを知っていますし、体の弱い孫はいないので一応安心しています。

先ほどもちょっとお話にでしたが、広島と同じ部隊にいた相馬市のAさんのことですが、Aさんは私以上にひどい被爆を受けたにもかかわらず私なんかを励ましてくれたり、その精神力の強さには驚かされました。Aさんは相馬に帰ってからも仕事に励んで一財産つくったんですから本当に大したもんです。敬服しています。相当なご苦労があったと思います。

今から六年前の三月、意を決して女房と一緒に、あれ以来初めて広島に行ってきました。あの当時とは全く違った姿に復興しておりました。広島原爆記念館にも行ってきました。被爆した女性を人形で再現しておりましたが、当時のあの悲惨さとはほど遠いものでした。あの二葉山の麓から広島市内にかけて、毎晩のように、ずっと死体を焼く火が続いていて、本当に一生忘れることができません。当時の写真でもあったら発表したいぐらいです。忘れることができません。当時の写真でもあったら発表したいぐらいです。

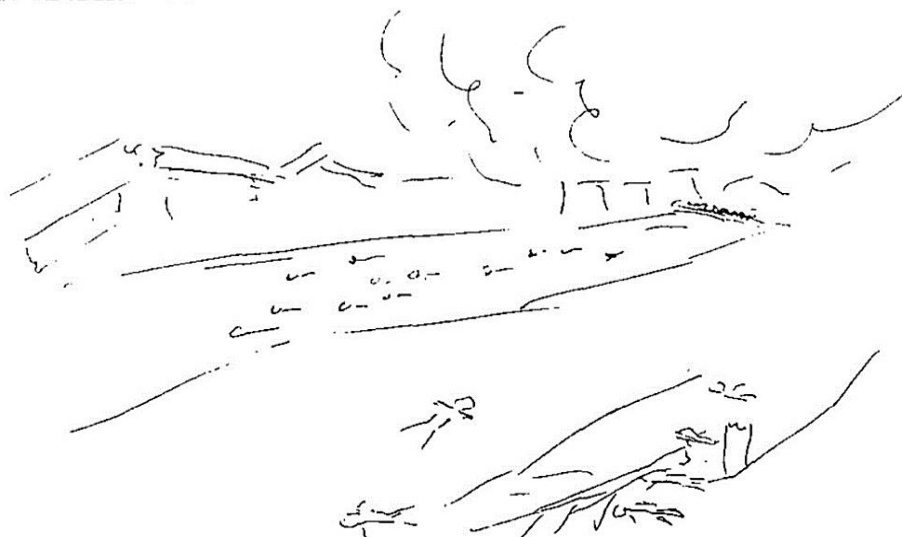
今、思うことは戦争なんか絶対繰り返してほしくない。まして核戦争などこれだけは避けてほしい。広島は一発の原爆でこういう状態で、さらに現在の原水爆はこれの何百、何千倍の威力があるというのですから、もう大変ですね。日本の自衛隊は本気で戦争をする気があるのか疑問に思っています。自衛隊の軍備なんか、どうも飾りもののような気がします。そして軍備を今増強するようですが、私はこれにも疑問を持っていて、まわりの国を刺激するだけで危険だと思います。軍備にかけるお金を平和的な外交につかえば良い、戦争を防ぐ方につかえば良いと思います。それに軍備は高いお金を出してアメリカから無理に買わせられているように思えます。そんなのはおかしいですね。

私は酒もタバコもやりません。体にあわないのです。旅行が趣味であちこちに出かけています。

「にんげんをかえせ」『予言』の映画は、去年浪江でやった時に見に行きました。

(一九八三、一、一三談)

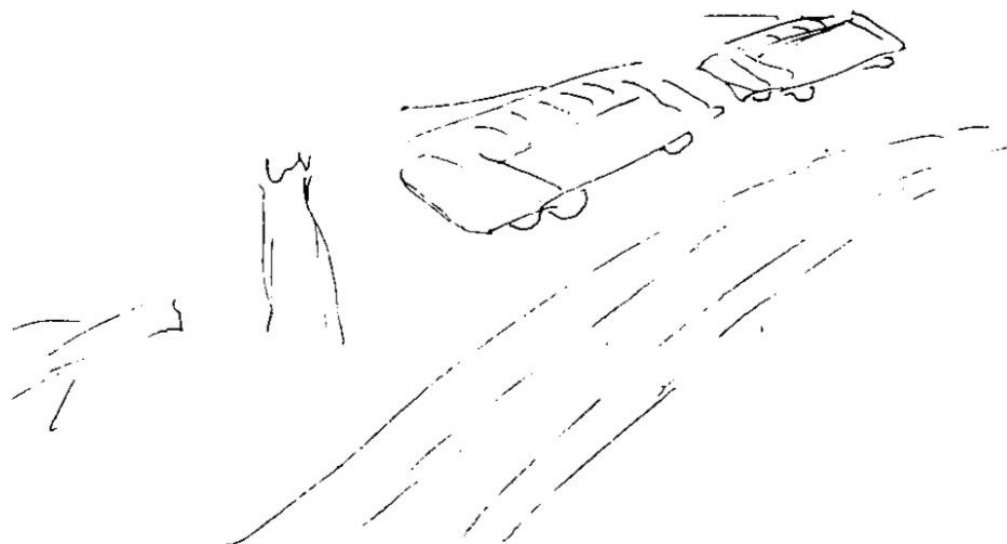
花房さんが描いた広島町の



比治山

## 私の被爆現場

爆心地は同時に火災となり他は延焼である。大きな学校兵舎等は倒壊し、汽車が激突した様に重った場面も見られた。



この光景は2日位たってからと思う。横倒しになった電車は焼けただれて鉄骨のみが残っていた。勤労報国隊と真中に日の丸の手拭ではち巻きして運転していた運転手、車掌の女学生も運命を共にした。

### 3. 〈飯土井鶴吉さんの証言〉 (当時 32 歳、男、相馬郡新地町駒ヶ嶺今神在住)

胸についた「黄色い血」、それが戦友の脳だったとは  
被爆者への誤解をとき、体験を教訓として生かす必要がある

私は明治四十四年に富岡町に生れ、今年七十一歳になります。

私は二回召集されていますが、一回目は沖縄に行き、二回目の召集である広島原爆投下の惨状をつぶさに見、またこの体で体験しました。

その二回目の召集は昭和十八年、仙台の東部二七部隊に入隊し即日転属で広島の暁部隊第一六七〇部隊に配属となりました。この部隊は船舶通信隊で、原爆投下の時は三十二歳、陸軍一等兵でした。六月ごろ部隊内で相撲大会があつて私は優勝決定戦で膝をけがしてしまつたのです。広島第一陸軍病院に入院させられ、私としてはすぐにでも退院したかったのですが、上官からは「入院も勤務のうちだ」などと言われ、退院してもわざわざ出雲の玉造温泉たまつくりに療養にやられて大変恵まれていました。そして広島の原隊に帰つたのが七月二十日ごろ、原爆が落とされる十五日前でした。

八月六日、その日は朝から連続して空襲警報が発令されていて午前七時ごろには解除されて警戒警報になっていたと思います。午前八時十分ごろも警戒警報で、私は部隊の兵舎の三階で秋田県出身の戦友と話しをしている時でした。警報が出ていて気になっていたのですが、ラジオで「友軍機の誤りであつたので警報を解除する。」という放送があり、私も戦友たちもホッとしているその瞬間、放送の一分後ぐらいだつたと思います。突然、「あれっ」と思うような光、紫っぽいような、何か重苦しいような、ひょうとしたような光を感じた直後、木造の兵舎が裂けて、私は一階まで投げ出されたのです。兵舎は広島の東の比治山ひじりの麓にあり、爆心地から千八百メートルで近いところ

でしたから、光線も爆風もほとんど同時だったんですね。投げ出されたというか、一階まで落ちこちて腹がつかえたような苦しさのまま私は意識がなかったんですね。三十分後ぐらいかなあ、気がつくとも私はまっ二つに裂けた兵舎の中の一尺五寸ぐらいの溝の中にすっぽり入っていて、背中には落ちてきた屋根板の釘が刺さっていました。その切傷は後で数えてみると百四カ所もありました。そして、私の被爆の傷は結局その切傷だけで済んだのです。もちろん、体のあちこちは打ち身のため大変痛みましたけれど、ところが、爆発の瞬間に私と話していた秋田の戦友は、同じように投げ出され、私のそばで即死していました。それも頭がぱかっと骨とともにをはがれた無惨な状態で亡くなっていました。私は破壊された兵舎から抜け出しました。その姿を見た大隈一等兵は、「鬼のように立っていた」と私のことを表現していました。さらに彼は私に、「お前、胸に黄色い血がついているぞ」というのです。見てみると、なるほど胸に魚のはらわたのようなものがべったりついているのです。私は近くにあったかぼちの葉でそれをふいたのですが、しばらくしてそれが、先ほどから話していて即死した戦友の脳みそだったのです。投げ出されてどうしてそんなふうになったのか、戦友のことを思うと言葉もありません。

私は火傷はしませんでした。窓ぎわにいた兵士の中には、いちじくの実の皮をむいたようなひどい火傷の人もいました。首が吹き飛んで首なしの死体だった方もおりました。トイレに入っていてトイレごとそくっと吹き飛ばされて助かった人もいました。今でも敬服している立派な人もいます。その人は私たちの隊長で札幌出身の一条秀夫陸軍中佐のことです。被爆して下あごが吹き飛ばされてないのですが、私たちの目の前に出てくる時はきちんと軍服に正装して出てきたのです。あれほどの大変な傷を負いながら、全くその強い精神力には驚かされ敬服させられました。戦後の戦友会で元気な一条氏にお会いして懐かしかったのですが……。なんしろ、私たちの部隊六百人が一瞬にして百人足らずしか生き残らず、あとの方は即日死亡したのですから、原爆の破壊力は本当にすごいと思います。翌日でしたか、広島のマわりの緑の山々が真っ赤になっているのを見て、しみじみ、これでは人間なんて生き残れないなあ、と感じましたよ。一瞬のうちにあんなふうにしてしまうのですから。

広島に投下された爆弾が原子爆弾だということはずっと後になってわかるのですが、「新型爆弾である」ということは、当日のお昼ごろにわかりました。それは、実は私たちの部隊が通信隊ですから、華僑の日本向け放送を受信してわかったのです、発覚すれば軍法会議ものでしょうが。短波で俗に「五号機」と呼ばれた受信機で受信したのですが、「何十年も草木は生えないだろう」なんていうことも放送していたようです。

六日の夜は、元気な人が作った夕食を取ることもできました。兵舎の近くの屋外で毛布にくるまって寝ました。ところが夜中に足がかゆくて仕方がない。がまんできずに毛布をめくり、足のズボンまくってみるとのみが膝までべったりついていて驚きました。原爆でもこののみは死ななかったのか、などと考えました。

翌七日、広島仁保国民学校というところに私たちの部隊は移動というか、避難しました。校舎内に入ると、また爆弾でひどい目にあうような気がして、桑畑に蚊帳を二重につけて夜は寝ました。救援や死体収容のため広島市内に出ることになりました。私は背中の傷が痛み血がにじんでいました。死体の収容中、それはさまざまな人々の姿に出あいました。死体も累々と横たわっていました。特に忘れられないのは、防空壕に十一人も頭を突っ込んで死んでいましたが、どういうわけか体が抜けないので、足をかけて力一杯引っぱって処理しました。みんな熱いので我先きに防空壕にとびこんだんでしょう。また、下半身が細く糸のように何本にも裂けて死んでいる女の人もいました。それにどういうわけか女の人は、あお向けになって死んでいました。夏で薄着で、それも焼けて死んでいます。私は女の人の下半身に木の葉をかけてやって、まあ隠してやったわけですが、それで上官にほめられたようなこともありました。とにかく男も女もありません。それどころ

ではありませんでした。広島町は美しい町でしたし、人々も美しかった、川も美しかった。食べ物も豊富で良かったですね。ところがその美しかった比治川なんか、もう死体が無数に浮いているんです。死体を鷺口で岸に引き寄せ、水を飲んでふくれた腹を足で踏んで水を出します。そんなふうにして死体を一カ所に集め焼却するわけです。数を数えますが、数えた印に頭に傷をつけたりして、仏様ですから手をあわせ拝みながら。瀬戸内海の海中に保管しておいた揮発油をかけて死体を焼いたりしました。莫いなんかもものすごく話のほかです。あんまり死体が多く自分を囲むように横たわっているので、自分も死んでいるんじゃないかと錯覚をおこしたこともあります。そこで、自分で自分の腕をつねってみて痛いので「生きてるんだ」と自覚したり。死体を処理している間、私は腰に軍刀を持って歩いていたんですが、それを見た井上上等兵という方が、私を上官と思って敬礼をしたのです。私は思わず握手をしたところ、全身火傷をしていて、体が冷たい。そしてそのまま亡くなりました。私はこの人を他の死体とは別に火葬し、丁寧に葬りました。四国出身の方だったので後で家族には遺骨を送り届けたりしました。そんなこんなで五日間、いや八日間ぐらい、そんな死体収容の作業を行ないました。その間ずっと十一日間、広島町は燃え続けていました。誰も消そうとしない、いや消火しようにもその手だてはありませんでした。

原爆投下の三日後ぐらいに、私は西部二部隊に行って大変感動しました。そこには八月六日当日の朝に入隊するはずの補充兵、みんな二十五歳から三十歳ぐらいの若者ばかりが、全員同じ方向に整列したままの状態であれ亡くなっていたのです。おそらく入隊の準備の点検が始まったばかりのころだったと思います。奉公袋を握ったままの状態。営門前には彼らを励ましに来ていた広島市民たちもそのまま死体となっておりました。あの原爆炸裂の瞬間でも乱れることなく、緊張を持続し整列の姿のままで倒れている。こんな立派な軍人たちのいる日本は戦争に負けるはずは決してない、とその時、自分で大変感動したことも忘れられないことでした。それと同時に、人間は訓練や教育によって、こんなにも強い精神力を作ることができるのだ、とも考えました。今のだらしのない若者だって、教育によって直すことがいくらでもできるんですね。

さらに八月十一日ごろには、前に私がお世話になった第一陸軍病院へも行ってみました。そこももう全滅でした。

八月十五日の終戦の時、私たちの部隊に市民たちが襲いかかって来た事件もありました。それは、なぜ戦争を続行しないのか、広島町をこんなにも破壊され軍人として悲しくないのか、くやしくないのか、という抗議の襲撃だったのです。部隊の兵の中にも、戦争を続けないなら、部隊長を切るぞ、という兵もいたほどです。それほど、広島市民にとってたった一発の爆弾で町を全滅させられたくやしき、痛みは大きかったのだと思います。冷静に考えれば戦争続行などとても無理、竹槍なんかで応戦できる相手ではなかったわけですが。

私たちがいた仁保国民学校でも、いろんな思い出がありますね。スピンドル油で天ぷらをあげたり。もちろん食べているうちから下痢してしまいます。のみ、南京虫、蚊に悩まされたり。近くの婦人たちに私は、大根とさつまいもで飴を作る方法を教え、「先生」などと呼ばれて感謝されたり。朝鮮人の方々も慰問に来てくれて、洗濯なんかもしてもらいました。その朝鮮人の一人が、私が福島に帰る時やってきて、封筒に炒った大豆を入れて、それを百二十袋もくれてよこしました。そして、「私は朝鮮人だが今まで国に一元を寄贈して、東条英機からの感謝状も百枚以上持っている。だのになぜ日本は負けたのだ。本当にくやしい」と言うのです。そんな朝鮮人の方もいたわけです。あとでそのいただいた大豆は、帰省の列車の中で分けてやったりして大変喜ばれました。食糧なんて本当になかった時でしたから。

それから私たちの部隊が自然に解散してしまい、私が帰省できたのは、九月二日でした。臨時の貨物列車で帰ってきました。

戦争はいけません。大きな犠牲者が出ますし、もうたくさんです。日本が敗けた時にはくやしいし、みんな善良だったから戦争を続けよう、仕返しをしようなどと言っていましたが。原水爆などの核兵器を戦争に使うことなど、絶対にいけません。核兵器などは人類の進歩でなく、むしろ退歩ですよ。日本の国だけでなく世界中の人々が一緒になって、核兵器をつかわないように、なくすよう運動しなければいけないと思います。現在の自衛隊も本来の発足した当時の初心に戻るべきだと思います。本来の自衛隊は日本の国の「自衛」、純粹に侵略してくる軍隊を防ぐためのものだったはずですが。でも現在の自衛隊はむしろ外国に向けての軍隊に変わってしまい、目的が違って、私は大いに疑問を持っています。

私たちの生き残った部隊の戦友たちで「<sup>きょうぼくかい</sup>暁睦会」という戦友会をつくっています。三十年ぶりで広島に全国各地から集まったことがあります。部隊があったところに行ってみると、今は電々公社が建っていました。ところがわきの方に藤づるがからまっているところがあり、そこをよく見ると私たちの使った防空壕がそのまま残っているではありませんか。懐かしさと驚きで一杯でした。そこで荒木広島市長と会って相馬焼を贈った時に訪ねてみると、「あの防空壕は市で保存しておいた」と言うことでした。まあ、戦友会は毎年一回、家族同伴で六十人ぐらいが集まります。各地で成功されている方も大勢いて、私なども交流は深いですよ。それに今年はこの新地の私のところで開こうということになっています。

私は被爆者に認定され原爆手帳を交付されています。体に異状のないことはない。投下後の広島をあれほど歩いて、体に後遺症が何かあるはずですが。でも、私の場合は精神力で克服しているように思います。以前から薬草について研究して健康には人一倍研究を重ねていますし、また私自身、摂生しています。子供も八人いて、下の方三人は戦後に生まれましたが、みな健康です。孫も十二人おります。

このように原子爆弾の体験談をまとめることは、大切な良いことだと思います。今まとめておかないとできませんね。できるだけ協力はしたいと思います。私の場合はどうぞ名前を公表してもなんらかまいませんよ。被爆者ということが知られて、それで不幸になるようでは世の中が悪いのです。このように体験などを発表して、被爆者に対する誤解や偏見をとかなければいけないと思います。逆に悲惨な体験を繰り返さないように、体験を教訓として後生に生かすようにすべきです。今日は本当にご苦労様でした。

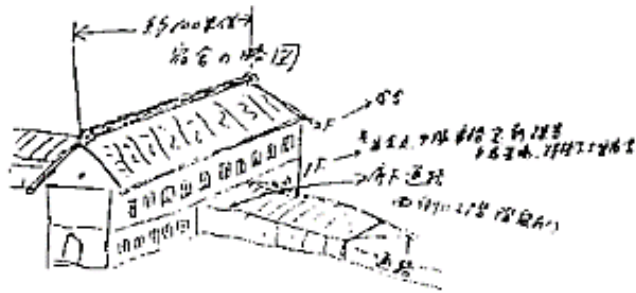
(一九八三、一、一〇談)

#### 4. 〈桑原馨さんの証言〉 (当時 32 歳、男、原町市三島町在住)

建物のかげにいて助かった私  
歌いながら死んでいった女学生のこと

私はその時、広島の子品船舶練習部教導連隊におりました。6個中隊で編成されていましたが、私はそのうちの第4中隊(探雷中隊)に所属していました。超音波を出して魚雷を探知したり、上陸地点の地形を読みとるやつです。今でこそ魚群探知機などに使われていて珍らしくもありませんが、当時としてはそれこそ最新の秘密兵器といわれるものもありました。そこで私は、いろんな部隊から派遣されていた将校学生(見習士官や士官)の指導にあっていた教官でした。教室でこそ生徒に対する教官でしたが、教室を一步出れば私は階級は兵長で、生徒の方が上官でしたよ。





宇品船艇練習部の宿舎  
(榮原さん自身が描いたもの)

部隊では毎朝八時から朝礼をやって、そこで訓示をいただいたものです。あの日、八月六日もそうでした。将校や学生達はすべて外の広場に集合しておりました。私は本当に運がよかったですよ。その時分は現役の勤めも終えていたので、もうこういう生活には慣れっこになっていたし、教官でしかも機材類を見張る役目があったものですから、朝礼をさぼって屋内にいたのです。便所に入って出るところだったなあ。八月の空ですよ。しかも朝ですから外は相当に明るかったんですよ。夜になにか光線がピカッと光ったというなら話はわかります。それが明るい朝に、それこそピカッと光ったんです。もうそれだけでどんなに強烈な光だったかがわかるでしょう。しばらくして、今度はドーンという地ひびきが続きました。原爆のことをピカドンといっていましたけど本当なんです。ピカッ・ドーンでした。それで窓という窓ガラスは全部一ぺんに、窓わくごと吹きとんでしまいました。木という木も爆風であおられ枝などちぎれそうでした。ドーンという大音響と爆風はいっしょだったと思います。台風の時の風などというものではありません。ものすごい強風でした。私のいたところは爆心地点から約四キロメートルぐらい離れていたのに建物だけはかろうじて残りましたが、とにかくメチャクチャですよ。私はさっき言いましたように屋内で建物の陰にいたので、光にもあたらず幸い無傷でした。外の広場にいた兵隊たちは光線を全身一杯にあびたので相当被爆したと思います。

それまでどういうわけか広島はほとんど空襲をうけていませんでした。いつも南東の方向からアメリカの飛行機が広島上空に来るのですが、なぜか攻撃はされていませんでした。近くの呉港が目標で広島は目標でないのかなあ、と思っていました。でも南東から入ってきて、いつも西南の方向に必ず帰っていきました。不思議なくらい同じコースでした。原爆を投下したB29を私は見ましたよ。広島上空から西の方向へ、五、六キロ先を飛んでいくのを。それから当日の午後にB29が一機やってきたのを記憶しています。偵察だったんでしょうか。

それで、当日は午前中、部隊の跡片づけをやって、午後から兵隊たちは広島町に救援に出かけました。午後には街に火があがって、とにかく火災の煙やらなにやらでどんより曇っていました。爆心地の雲間の暗闇の中から、雷鳴だけがゴロゴロと鳴っていたのが妙に記憶に残っています。街に行った兵隊は、その日は余りの惨状で手がつけられず、戻ってきました。三日間ぐらい休んだでしょうか。その間ずっと街は燃え続けていました。それから兵隊は一週間から十日間ぐらい救援活動に出かけました。私もその間、三日間ぐらい街に入りました。放射能だなんて知らなかったものですから街に入った兵隊はそこでもまた多量の放射能をあびたのでしょう。下痢をするものが出ました。そりゃ、ひどいものだったですよ。その後に部隊を解散して兵隊はちりぢりに別れましたが、ひどい下痢をした人は助からなかったと聞いているものですから、あの時の若い兵隊たちはどうなったかなあと思いつき時があります。勿論、その後の消息は全然わかりません。

被爆者の収容所のことを話しましょう。宇品の私たちの部隊には大きな講堂がありました。その日からそこが臨時の収容所になったのです。はっきりしませんが、たぶん第四収容所だったと思います。収容所といっても何の設備もあるわけなし、また治療をほどこせるわけでもないのです。

ただ普通の講堂でしたから。一応は一、〇〇〇人収容となっていました。そこに大勢の人が逃げてきました。傷を負ったり火傷の人ばかりですが、余りに重度の火傷の人ですと、外から見ると一見何んでもないのですが、一たん何かに触れると皮膚の皮がペローとむけて肉がむき出しになるのです。部隊では一応、収容する人たちに住所や名前を聞いて名簿に記入したのですが、やっとの思いで名前や住所を答える人もおれば、口を開く元気さえない人、「もう、そんなことどうでもいいんです。」と小さな声で言っただけでそのまま講堂に歩いていった人たちもありました。ですから、作られた名簿なんかも全く不完全なものでした。収容された人びとですが、不思議なほど、皆同じ格好をとりました。もう疲れ切っていて横になりたいのですが、横になれば火傷した身体がいたくてたまらないのでしょうか。こんなふうに膝頭を抱きかかえるようにして、足のかかとの部分とおしりだけが床につくようにして座っていました。横にゴロリとなった人たちは、もう生きることを断念した人で、実際、横になった人たちは間もなく亡くなりました。

私たちはその講堂を順番で見まわりました。私が当番にあたった時のこととお話しますと、一応おにぎり配給されたのですが、誰も口にしませんでした。とても食べるどころではなかったのです。私が近づくと、皆一様に小さな、力のない声で訴えるのです。「ヘイタイサン、ミズ、クダサイ」「オネガイデス、ミズヲ……」と。私だってどんなにか水をあげたかったかわかりません。でも軍の命令で水をやれなかったのです。水をやると必ず命とりになると考えられていたのです。本当にやりたくとも、それが命取りになるのではやれなかった。ただ見ていて言葉を少しかけてやるしかありません。そうした中で、一人の女学生のことを今でもよく覚えています。その娘さんも私が近づくと、「お願いです、兵隊さん。一杯でいいですから水を下さい」と言うんです。私は「私も汲んできてあげたいが、飲んだら死んでしまうんだよ。もう少しだけ辛抱しなさい」と言い聞かせたのです。実際のところは、もう少ししたところで、どうしようもこうしようもなかったのですがね。そして、その娘さんはさらにこう言ったのです。「兵隊さん、お願いですから水をください。一杯でいいのですから。今はこんなで特別に何も持ち合わせていないのですが、時計があります。この時計、兵隊さんにあげますから、水を…。お願いします」と。私も若かったから、特に女学生の娘さんに心を動かされたのでしょうか。あの戦時中の何も無い時代ですよ、その時に腕時計とたった一杯の水でいいから取りかえてくれと訴えるのですよ。本当にいたたまれなかった。今思い出しても、あの娘さん、どんなにかノドが……。時計なんかじゃない、私だってどんなにか水をあげたかったことでしょう。それでもやっぱり、「水を飲んだら死んでしまうのだよ。もう少しだけ辛抱ね」と言い含めてやるだけでした。やがてその娘さんは、ゴロツと横になって亡くなる時に歌をうたいだしたのです。何の歌だったか、流行歌のような歌をうたいながら死んでいったのです。そのことをよく覚えています。

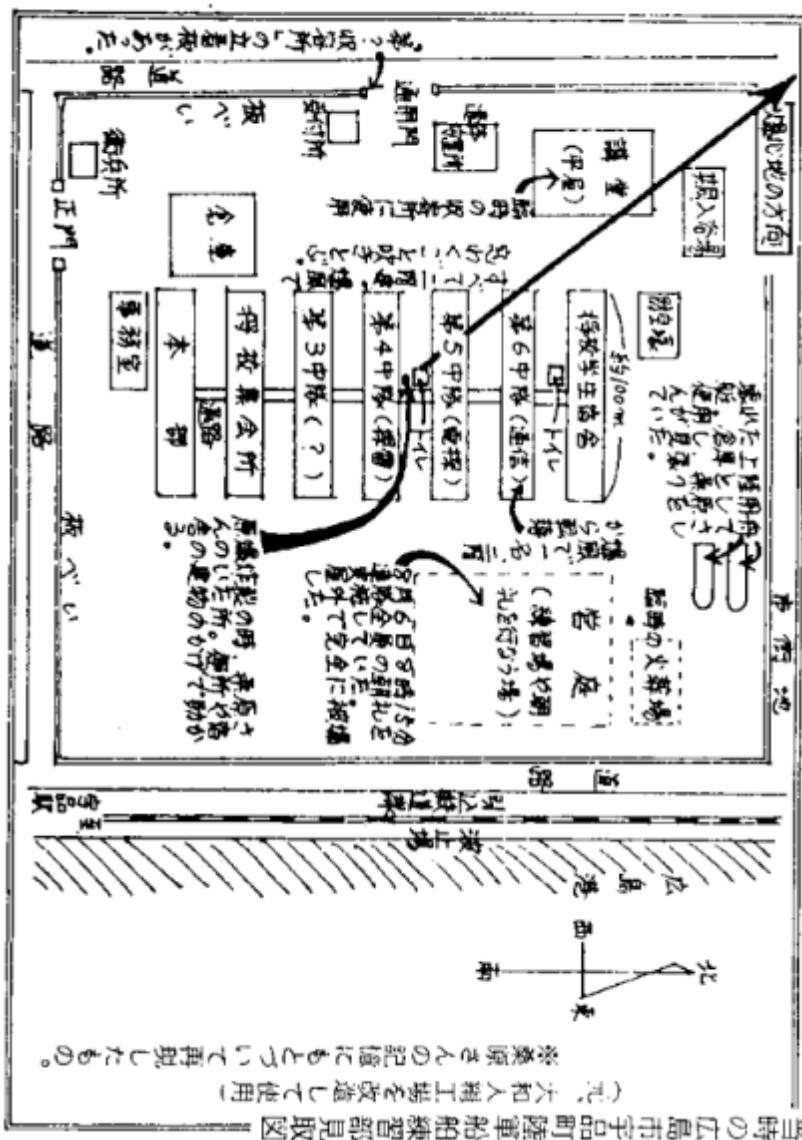
次に亡くなった人たちのことですが、真夏のことでですからすぐ腐って臭くなってしまいます。それで火葬をしてしまわなければなりません。投下されたその日に逃げてきた人達は全員死んでしまったように記憶しています。火葬といっても、まず亡くなった人を講堂の外へ運んで、庭の所に並べておくのです。それで兵隊たちが街の焼け跡から焼け残ったり、くずれた材木を集めてきては、その上に積んで午後になると火をつけるのです。翌日もまた同じです。並べては材木を積んで午後二、三時ごろに火をつける。そのまた翌日も…。一日に三〇人から四〇人くらい並べては火葬にしました。

ところで私は、先にお話したように、兵器機材を見張る役になっていたのですが、その機材をしまっておいた上陸用舟艇（マレー半島のジョホールバルで銃弾で蜂の巣のように穴だらけになっていたもの）のすぐ前で死体が焼かれたのです。火がつけられると、見えるし、なんとも言いあらわしがたい臭いは夜になっても抜けません。馬の爪を焼く時のような非常に不快な臭いです。

私自身、そのままでは気が狂いそうにまでなっていました。そこでお願いして別の部署にまわしてもらい、やっと息がつけるようになりました。

また、ここに収容されていると聞いて、身内の人でしょう、ずい分大勢の人が捜しにきました。まず講堂に行って目的の人を捜しはじめるのですが、着ていた服もボロボロですし、顔も身体も火傷で、誰が誰であるか見分けるのも大変でした。それでも捜していないとなると、すぐに死体が並べられている庭にやってくるのですが、ここでもほとんど見つからなかったようです。そうですね。私が知っている限りでは、こんなふうにして身内の者を捜しあてたという人は、たった一人しかいなかったようです。ですから、あとの人は誰であるのかも分からないままに焼かれてしまったのです。

4. 建物のかげにいて助かった私



当時の広島宇品町陸軍船舶練習部見取図（元、大和人絹工場を改造して使用）

※桑原さんの記憶にもとづいて再現したもの

八月十五日のポツダム宣言受諾は、外国放送を傍受していたので知っていました。私たちは、いつでも武器を引きせる準備をして、そこに残って占領軍が来るのを待ちました。その倉庫には武器でも、たとえば文房具でも山積みされて、なんでも保管されていて実に豊富に残っていましたから。軍人として戦争に敗れた場合、まずやることはその引き渡しだったのです。ところが、いつまでたっても占領軍は来ないのです。一度やってきましたが、武器の受領ではなく、収容された被爆者の見舞い、実は調査でした。八月の末になると、各部隊から派遣されていた兵隊たちは解散となり、それぞれ帰っていきました。原隊復帰後の解散ではなかったのです。それでも私たちは、そこに残されておりまして。そうこうするうちに一人いなくなり、二人いなくなりました。上官も「ここに残っている」、と言ったきり、帰郷してしまったものやら、もう戻ってこないありさまです。九月も半ばになると、宇品の船舶練習部隊教導連隊には、私も含めてたった四人になってしまっていました。そのまま残っても何の見通しもないものですから、とうとう私も新潟出身の同僚と二人で、「あとは頼んだぞ」と言って帰ってきた次第です。宇品から広島駅まで歩きました。広島駅は大変な混雑でしたが、ようやく列車に乗り込み東京駅へ。東京駅から上野駅まで一面の焼け野原をみながら歩きました。上野駅でも列車を三回位見送るほどの混みようで常磐線はひどかったですね。確か十月九日だったと思いますが、女房の実家のある福島になんとか着くことができました。

私は原爆の放射能のことで、この頃になっても時おり悔やまれることがあります。女房のことで。昭和二十九年、二番目の子供が小学校一年生で、三番目が幼稚園児の時に、女房を甲状腺ガンで亡くしました。もともと甲状腺腫といってコブがあったのですが、それを手術して取っていたのです。それが私が帰ってきたときに再発してガンになり、結局は死なせてしまったのです。レントゲン照射などもしたのですが。実は私が広島から帰ってくる時に肩に担いで持ってきた毛布、今にして思えば放射能をたっぷりと含んだ毛布を女房にかけてやっていたのです。そのせいいかどうかは、勿論わかりません。でも、この頃は放射能とガンの関係がどうのこうのといわれるでしょう。やっぱり、あの毛布じゃないかなあ、少なくとももう少し生きられたものを、あの毛布で……と思われるてきてしまうのです。

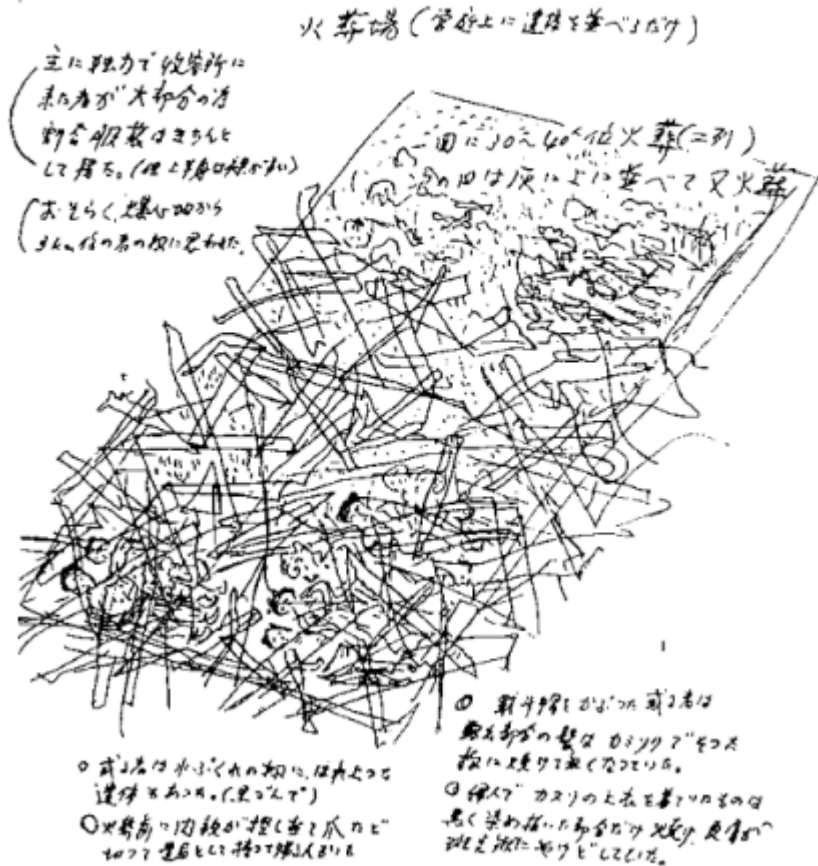
私自身の放射能障害は運がよく、始めは異常なしと言ってよいでしょう。でも、原爆手帳を交付されて年二回検査をしています。三十四年経った昭和五十四年、そう三年前に、血液中の GOT と GPT が突然増えて肝臓機能障害と診断されました。私自身で体に気をつけて摂生しましたし、今年五十七年六月の検査ではほぼ正常に戻ってきたようですが、まだ GOT、GPT の値は少し高いようです。これはやはり原爆の放射能の影響だと思っています。

このような原爆についての話はあまり話したくありません。実相を伝えておきたいという気持ちはありますが、いくら伝えても結局は伝え切れないと思います。あなた方（原水爆を考える原町市民の会）が記録に残してくれることには大いに協力しますし、ありがたいと思います。でも現在の反核運動やあなた方の目的、目標についてと、私個人の考え方は違いますね。『にんげんをかえせ』の感想文集も少し読ませていただきましたが、言葉をもて遊んでいるだけという気がします。平和、平和と叫んでいても平和は守れません。

(一九八二、九、二三談)

4. 建物のかけにいて助かった私

桑原馨さんが描いた、原爆犠牲者の火葬場の状況



5. <高山 甫さんの証言>

(当時 36 歳、男、原町市鶴谷在住)

爆風で二十メートルも吹き飛ばされる。

私も原町の桑原さんや鹿島の中川さんと同じ、広島市の宇品船舶練習部で原爆投下にあいました。練習部の通信隊員、階級は上等兵でした。八月六日、投下された時、私たちは営庭（兵営内の広場。朝礼などの集会や訓練に使用）にいました。朝礼が終って何か作業をするためにそこに残っていたのです。突然ひどいというか、ものすごい爆風でみな倒れました。というより吹き飛ばされたのです。私も二十メートル以上も飛ばされました。幸い体には別に傷を負うこともなく、ただ投げられた状態ですから、体の節々が痛かったですね。原爆の光線、ピカは私の記憶にはありません。しばらくして私は痛い足腰をがまんして地面をはい、近くの防空壕に入りました。私は外にいて投げ飛ばされたぐらいですみましたが、建物の中にいた人はひどかったんじゃないですか。建物の中はメチャメチャでしたから。

それから私たちに広島市内の焼け跡片づけという作業命令が出され、八月九日ごろから六日間だったと思いますが、町にでかけました。広島市は一週間ぐらい火の海となって燃え続けていたようです。その火の海の中に無理して行きました。跡片づけといっても死体を片付けることでした。死人の山の中に入って、丸太棒の担架で死体を運びます。二、三回死体を運ぶともうベタベタ

になって担架は使えない状態になります。ひどいもんです。死体には直接さわらないようにしましたし、軍手も配られていました。

けがをしている人もたくさんいました。日頃いぼっている将校連中もけがをして、「助けてくれ」、と大騒ぎしていたが、知らんぷりをしていました。

私の軍隊歴は、徴兵で初め満州に行き二年七、八ヵ月いました。その後一旦、この原町の家に戻り、百日も家にいることもできず、昭和十九年春から広島の子品に行きました。当時、電通隊は特殊な部隊で、前橋とこの広島の二ヵ所しかなかったと思います。ところが、十九年の七月ごろ、この部隊の宿舎の廊下で、運悪く連隊長とぶつかってしまい厳しく怒られ、三日間の謹慎後、昇級できない処罰を受けました。別に私が悪いわけではないのに。だから私の階級は上等兵で止まったままです。広島の子品には昭和二十年九月十四日の徴兵解除までいました。広島は原爆ですっかりやられてしまいました。それまで広島はどうして空襲でやられないのか、私も不思議に思ってたくらいです。今考えてみると、最後に原子爆弾で爆撃するために残しておいたのではないかと、思えるくらいです。

九月十四日解散になって、二十日過ぎに原町へ帰ることになりました。伊達出身の人と、鹿島出身の人と三人で広島を離れました。ところが鹿島出身の中川さんはその時盲腸手術をして二十日間ほどたっていたのですが、傷口が化膿<sup>はんこう</sup>していて、とても一人で歩いたり帰れる状態ではなく、二人で助けながら帰りました。衣類や飯盒などの荷物を丸太棒にくくりつけて運び、おんぶして歩いたり、汽車の中では、その丸太棒の上に寝かせたりして看病しながら来ました。食物も生の米を配給されていて、途中で飯盒で炊いたりしましたかね。乾パンなんかもありました。広島駅から東京駅まで、ずい分汽車は混んでいました。さらに上野からの常磐線はそれ以上の大変な混雑で、しかも病人をかかえていたので本当に苦しかった。でも、なんとか鹿島の中川さん宅に無事届けることができ、家の人からも大変感謝されました。大仕事でしたから喜ばれ、一晩中川さん宅に泊って翌日私も原町の家に戻りました。広島から丸二日間ほどで帰宅できたと思います。

ところで、私の体への放射能の影響ですが、幸いにも健康で過ごしてこれました。子供も五人、孫も十人以上生れ、全く健康です。原爆手帳も交付されて年二回、市立病院で検査は受けています。でも放射能のせいかどうかははっきりしませんが、今年の六月ごろから、足が大変痛み、特に左の膝かぶがひどく、仕事にならない状態です。七十二歳で歳も歳なのかも知れませんが。でも若い人でも被爆者でよく関節症が多いという話を聞くと、私も原爆のせいだと思ってしまいます。

戦争についてですが、考えただけでもゾッとして、嫌気がさしてくる。あれだけ広島も日本もひどくやられたのだから、私もアメリカに仕返しをしたいくらいだけど……まあ、そんなことは無理だけれど。はっきり私もいいますが、あんな戦争を二度として欲しくないと思います。

(一九八二、十、十四談)



写真の出典：一般社団法人東友会 ([https://t-hibaku.jp/seido/01\\_techo.html](https://t-hibaku.jp/seido/01_techo.html))

## 6. 〈中川善久さんの証言〉

(当時 34 歳、男、相馬郡鹿島町烏崎在住)

「オレたちは地獄の鬼」と言いあって死体を焼却  
麻酔もなしに盲腸の手術をうける。

私は大正元年八月十五日鹿島町に生れ、広島で被爆した時は三十四歳、現在は七十一歳になりました。もともと半農半漁の生活でしたが、昭和十八年に仙台に召集され、すぐにその五月から広島の宇品の通信補充連隊の通信兵として配属されました。この体験談集に載るそうですが、原町市の桑原さんや高山さんと同じところにいたわけです。昭和十八年で戦局も拡大し兵隊も不足していたので、通信兵の早期養成が必要となって、私なんかも通信兵として毎日モールス信号の練習に明け暮れていました。トンツーとかピーピーとか、無線なんてとても覚えられないと思いながら、それでもなんとか通信できるようになっていました。

その日八月六日も宇品船舶練習部の西側にあった講堂で、モールス信号の演習に励んでいました。現在の学校と同じように、教官が前にいて、それぞれの生徒と電線で通じていました。そこにはだいたい一〇〇人ぐらいの生徒、つまり通信兵がいました。私もその一人で、上半身は裸でモールス信号に熱中していました。

原爆が投下され爆発したのは一瞬のことでした。ピカーと、それはもう、ものすごい光がして、それと同時に爆風がやってきて、教官が「焼夷弾が落ちたから頭を机の下へ」と言ったようでした。私はそんな余裕もなく、ただ頭を手でかかえて机の上に伏せただけで、あっという間に、爆風が私たちの頭上をゴーと吹きぬけ、前の兵舎にぶつかって、その屋根をずらしてしまいました。真夏で暑かったので、講堂のガラス窓は全部はずしてあったので、爆風がただ吹きぬけただけでした。もしも窓がそのままだったら、ガラスが破れて相当なけがをしていたことでしょう。だから、私はその時はけがもありませんでした。爆心地から四キロメートルも離れていたから、光線の被害もなかったのでしょう。

投下から一時間ぐらいたって、広島の町は一面に火事になり、急いで消防隊が編成され、私もトラックで町へ出かけました。ところが道路はひっくりかえった車とか電車とか倒れた建物でふさがっていて前に進めません。仕方なく部隊に引き返してみると、すでに部隊には被爆して負傷した人々、一般市民が続々と避難していったばいでした。部隊がもう臨時の病院になってしまったわけです。でも電気も通じず、水道の水も出ませんから、本当に困りました。薬があるわけなし、看護婦さんも医者もないのですから、直る人も直らないまま、そこで多くの人が死にました。それはもうひどいもんでした。

翌八月七日、私たちは広島の町に救援のため出動しました。私の役は残っている古井戸からバケツで水をくみ、負傷者に水を飲ませて歩くことでした。町中いたるところに、歩けない人、路上に座ったままの人、寝ている人、炎天下のもとで太陽にジリジリと照らされたまま、負傷者はそれはもうひどい状況でした。私はアルマイトの湯のみに、一人一杯だけということで水を飲ませて歩きました。一杯だけでなくもう一杯という人もいますし、「どうか水をください」と手をあわせて拝みながら欲しがっている人もいました。あの炎天下の暑さですから、のどがとにかくかわくのでしょう。みんなもう水だけ飲みたいのです。私は兵隊用の「乾麵包」(かんめんぼう)という非常食、乾パンのようなものですが、負傷者に与えようとしたのですが、水だけ飲んで、だれ一人それを食べた人はいませんでした。「けがをしている人に水を飲ませると死ぬ」などということも少しも気にせず、私は一日中水を飲ませて歩きました。

ひどいけがをしている人も多く、木片が顔や体に突き刺さったままの人、耳がなくなった人、目の見えなくなった人、やけどで足の皮膚がべろっとむけて靴のところに垂れ下った人、それはもう言葉で表現できるような状態ではありません。「こんなひどい目にあわせて、仇はきつとうつぞ」

と叫んでいる軍人もいました。他の部隊の門の歩哨などは、コロ裸でみんな死んでいました。また、おもしろいと言っては悪いんですが、帽子をかぶっていた所だけ髪の毛が残っていて、あとの襟あしとか外に出ていた部分は原爆の光線で焼けてしまってちょうど子供のおかっぱ頭のような兵隊もたくさんいました。

翌八日ごろからは負傷者の救護と、それに死体の収容に取りかかりました。四人一組になって担架で死体を集めてくるわけです。五十人ぐらいをひと山にして、それに火をつけて火葬にするわけです。私も驚きましたが、人間というのはよく燃えるものなんですね。別に燃えやすい木などと一緒になくても、死んだ人の体の油で

どんどん燃えていきます。きれいな骨になるように長い棒を持ってきて、燃えている死体の山をかきまわしながら焼くわけです。ゴミを燃やすのと全く同じです。それはもう、今考えると本当に残酷な悲惨な光景です。焼却している私たち兵隊どうして、「オレたちは地獄の鬼だな」などと言いあいながら、そんな残酷な仕事を続けました。そんなふうにして焼くしか方法はなかったんです。骨にしないで放っておけば、すぐに腐ってしまい大変なことになりますから。そして一週間ぐらいそんないやな仕事を続けました。夜は死体のそばに毛布一枚にくるまって野宿しました。そんな火葬の作業をして、化け物がでるのかな、幽霊がでるのかな、などと兵隊どうして不安がりました。しかし火の玉一つ見るわけではなく、最後は「人間が死んだって魂なんかあるのか」とお互いに疑ったりしました。とにかく、どれほど多くの死体を焼いたかわかりません。骨にした上に土をかけて棒を一本立てておいただけです。だから、やがて広島町が復興する時、そうして葬られた人骨がどんなに出てきたか、今だってきっとたくさんの人骨がまだ広島町の下に埋もれているに違いありません。

また、負傷者をトラックでいろんな病院に運びましたが、そこでもいろいろな場面にであいました。親子だと思ってトラックに乗せて病院に送ったら、実は他人どうしであったとか、反対に同じ家族なのにバラバラの病院に送ってしまったたり。広島町の似島にもずい分多くの人を船で送りました。親は重傷で口もきけないのに、子供は案外なんともなかったのが多かったですね。なかには子供が四、五人でいるので、トラックに乗せて避難させようとしたら、頑としてそこを離れようしないんです。「母ちゃんがここにいなさいと言ったので、母ちゃんが来るまでここで待っているんだ」と言っていました。あの子供たち、あれからどうしたのかな、かわいそうと後でみんな話していました。いや、今だって心に残っています。原爆で孤児になった人もずい分多いはずです。子供たちがみじめでしたね。

それにこれは珍しい話だと思うんですが、広島に原爆が投下される十日ぐらい前に、アメリカの飛行機が宣伝ビラをまきました。そのビラというのが、表は当時の十円札、今でいうと一万円ぐらいの価値があると思いますが、とにかくそっくり印刷された十円札でした。その裏には「むこう十日以内に広島を爆撃するので市民は早く避難しなさい」ということが印刷されていました。飛行機から、ものすごい数をまいたので、まるで花吹雪のようにキラキラと輝いて本当に美しかったですね。私もひろって読んでみました。実によくできている十円札だと感心しました。その宣伝ビラのせいで、私たちの部隊でも避難訓練を一週間ぐらい続けたし、空襲の火災に備えて建物の強制破壊までしていました。原爆が投下されるまで広島は一度も空襲をうけていませんでしたから、「広島は夢の国だ」とみんな言っていました。むしろ、ほかの町から広島に移ってきた人もいたそうです。だから、広島町は油断していたんですね。



出典：日本赤十字社HP「被爆後の街並」(広島)



話をもとにもどして、死体の収容を続けていて、八月二十日ごろ、私は夕方から腹が痛みだし盲腸炎になったのです。翌朝、野戦病院で手術をしました。ところがです。もう麻酔なんかなかったんですね。生身のまま、身動きや暴れられないように手足を押えつけられたまま盲腸の手術を受けました。もうその時の痛みと言ったらありません。言葉なんかではとても表現できない痛み、苦しさです。それでも自分は兵隊だという気持ちもあったのでなんとかがまんしましたが、とにかく、思い出すのもいやですね。手術後も化膿止めの薬なんかありませんから、傷口にガーゼをつめ込んで肉が自然に盛り上げてくるのを待つのです。ところが、その野戦病院には他の被爆した負傷者も一緒にいるわけですから、私には手がまわらず、五日間もなげておかれ、ガーゼもそのまま交換されず放っておかれて傷口から水のようなものが流れてきたりして、自分で「もうだめかな、死ぬのかな」と思ったほどです。でもなんとか命びろいをして助かりました。そこに約一ヶ月ぐらい入院していたので、いろんな被爆した負傷者の様子もみえています。夜など苦しんでいる負傷者に医者が注射をしていきます。静かにおさまったのかと思っていると、次の朝にはその人が死んでいたり。今でいう安楽死ではないかと思えます。またアメリカの視察団も何度もやってきました。また、入院している間、私は髪の毛がどんどん抜けてきたりしました。銀髪が異常にたくさん発生したりしてすごかったことも覚えています。傷口にわいたうじをとってやったり、とにかく口ではとても表現できない、今ではとても考えられないことばかりでした。

九月の中旬になって、私たちの部隊も解散になりました。でも私は手術の傷口が完全にふさがっていないので、一人ではとても帰れない。その時、私をこの実家まで一緒に送ってくれたのが原町の高山さんでした。私にとって命の恩人です。広島から上野までは福島市の伊達出身の人も一緒にしました。でもその伊達出身の方は三年ほど前に胃ガンで亡くなりました。高山さんもその時の様子を話しているようですが、本当にお世話になりました。広島から上野まで貨物列車で、それから常磐線のいわき太田に高山さんは一旦荷物をおろし、それから鹿島駅に私をおろしてくれました。とにかく汽車が揺れるたびに傷口にひびいて苦しかった。ずっと手で傷口をおさえていました。鹿島駅から島崎のこの家まで一里半ぐらいありますが、現在のように車もなんにもありませんから、痛む傷口をおさえながらテクテクと歩いてようやくたどりつくことができました。高山さんとは今日も用事があって会ってきましたが、ひざが痛いと言っていました。私が助かったのも、原爆手帳を交付してもらえるようになったのも高山さんのおかげです。被爆の証人になってもらいましたし。

それからは、一度死んだ体だから生きて命があったのがめづりものと考えて、こわいものなんか何もなくなりました。漁師で船に乗りますが、人間死線を超えると本当に強くなるもんです。でも一番心配だったのは、自分の子孫に放射能の悪い影響があるんじゃないか、ということでした。比較的、原爆症は軽かったと言っても、この体には後遺症が残っていることは確実です。これこれとおり、両足のむくみは三十八年間直りません。指で押してもへこんだままで弾力性がないのです。痛みもかゆみもありませんが、仕事をしていないと特にははれがひどくなります。朝起きると、今でさえ顔もはれぼったい。原町市立病院で診てもらっても直せないのです。ことさら、私は自分が原爆病、被爆者だなんて人に大きな声で言うのもいやですし、福島医大病院などで精密検査を受けなさいと言われても、あまり気が進みません。とにかく、原爆や放射能なんて、本当におそろしいものだと思います。一生体に残っているのですから。

今後はもう絶対に戦争なんてやるべきではないと思います。戦争でみじめな目にあつた人はみんなそう思っているはずです。原爆なんかも、もつてのほかです。本当に恐ろしいものです。なかには、戦争が始まれば景気が良くなるなんて考えて軍備を増やそうとしたり、戦争をしようとしている人々もいるようですがとんでもない話です。日本がこうして終戦後、生活が安定し良くなったのも、軍備にお金をつかわずに、平和産業など経済にお金をつかったからでしょう。まあ、最低限の自衛隊ぐらいは必要かも知れませんが。今度本格的な戦争になれば、まずアメリカよりも日本が先にやられるし、人っ子一人いなくなることでしょう。

それにしても、あの当時の日本の軍国主義の教育はうまくやったものだと思います。日本は神の国だと教え、絶対この戦争には負けないと教えこみ、本当にその気でいたのですから。連合艦隊の敗北も全く知りませんでした。いや知らされていませんでした。日本が不利な戦況にあることは分かっていましたが、何かそのうち奇蹟が起きて沖繩戦あたりできっと盛り返すと信じていたんですから。だから八月十五日の天皇の終戦の玉音放送の時だって、みんな日本が敗けたなんて信じられなかった。そんな馬鹿なことはないと言って将校なんか軍刀を抜いて振りまわし腹いせに電燈なんかに切りつけたりしていました。また「軍人勅諭」を大声で叫んで最後までがんばるんだという軍人もいました。航空隊の中には、「日本は負けない、戦争は続けるんだ」というビラをまいている人もいました。正直なところ、私なんかのふつうの兵隊は終戦で家に帰れるんだと言って喜んでいましたよ。敗けたとわかって千人針なんかもみんな投げましたね。日本が神の国だなんて嘘だったんだ。神に裏切られたような気持ちでした。それだけ徹底した神の国という、あるいは軍国主義の教育をされていたんですね。教育の力というのはすごいもんです。

こういう原爆とか戦争の体験を本にして残すということは、子孫のために大切なことだと思います。私なんかも何にも記録に残しておかなかったわけです。長崎で被爆した原町のTさんも二、三年前亡くなりましたし、同じ被爆者の飯館のYさんももう亡くなったようですから、今やっておかないとなかなか伝えることができませんね。今日はどうもありがとうございました。よろしくお祈りします。

(一九八三、五、一九談)

## 7. 〈遠藤昌弘さんの証言〉

(当時 20 歳、男、相馬郡小高町在住)

「黒い雨」にうたれて茫然と

私は大正十四年十一月、福島市生れです。父は警察官をしていたことから小高町に移り、私も小高小学校を卒業しました。その後、大阪のおじのところにお世話になって関西工業学校に入りました。

私は当時日本最後の兵隊検査を受けて第二乙種合格となっていて、いつ赤紙が来てもいいように禁足状態で待機していました。昭和十九年の十一月の末、「体力を養っておけ」というおじの考えで、私は実家の小高に帰ってきました。大雪の晩でした。

昭和二十年一月初め、私は現役入隊することになりましたが、本隊が中国の下城子（かじょうし）というところにある満州第二〇一六部隊でした。大阪に集合し私は満州に渡りましたがすぐに四月ごろに関東軍大演習という名目で大移動することになり、朝鮮の釜山から、博多に上陸して日本に帰ってきました。戦況も悪くなっていたからでしょう。博多から汽車で九州の宮崎の佐土原というところの部隊に駐屯しました。そこでは私は重砲連隊に配属され、大砲の牽引の独立中隊でした。そして連日、大砲を格納する所を山に掘られる仕事をしたのですが、どういうわけか鼻血が出て止まらないのです。陸軍病院に入院し、その後大分など三か所ほど病院を回されました。私が広島で被爆することになったのも、その四つ目の病院として、広島の第二陸軍病院に転送されたことからです。

広島に転送されたのが七月の二十一日です。私たち白衣を着せられた患者達は広島駅に着くと、駅裏の貨物の広場に集められ、そこで広島市内のあちこちの病院に振り分けられたわけです。私は広島駅の北西、横川駅の近くの三滝分院に収容されました。その病院はすべて木造平屋建てで十数棟の長い病棟が南から北へ並んでいました。私が入院したのは六号棟八番でした。

それまで広島は空襲などなく、比較的静かな町でした。ある日、艦戦機がやってきて病院上空を旋回し高射砲で撃ち落されて、アメリカ兵が逮捕されたということが話題になっていました。やが

て空襲も多くなって、広島も危ないなということで、病院でも病棟を間引きして、裏の山へそれを建て直す作業をしていました。患者でも軽い症状の人は出役することになっていました。内科の患者にはその義務はなく、私も内科に入院していたので、別に出役する必要はなかったわけです。でもその作業をした人には、毎日二枚の黒パン、たぶんさつまいもで作られたものですが、とにかくパンが配給になったのです。食べるものもなかった時ですから、私はその配給を期待して自分から志願して作業に出ました。真夏で暑いのでみな上半身は裸でズボンだけで、材木を運ぶため肩にボロタオルをかけたりにして作業していました。

八月六日、原爆投下の日ですが、午前五時ごろ空襲警報が出て、やがて警戒警報に変わり、それも解除になって朝食の時間になっていました。その日私は前の晩からの頭痛がひどく、班長に申し出て作業を免じてもらい病棟に残りました。私の他に同室に三人残っていました。支那事変で片腕を失くしていた上等兵、それに老人兵などと一緒にいました。

原爆炸裂の瞬間、私はベッドで眠っていました。突然「空襲だ」という片腕の一等兵の叫び声で目を覚ましました。その一等兵は南側のベッドに寝ていて、私は二等兵でしたから北側の廊下側に寝ていました。その一等兵が廊下へ逃げる音がしました。とっさに私も廊下に出て逃げようと扉のレールを踏みつけました。その時のレールの冷たさが今でもこの足裏に残っているように、その瞬間のことをよく覚えています。時間が止ったようでした。片腕の一等兵が廊下の向こうに走って行ったのも覚えています。でもすぐに、「軍服、靴、戦闘帽は必ず持って逃げなければ」とひょっと考え、取りに戻ろうと部屋に入ったか入らない瞬間でした。霧でも吹きつけられたような爆風で私は廊下の壁に吹き飛ばされました。それに朝でしたから南の空に光る物なんかないはずなのに、南の方に閃光を感じたような気もしました。でも、私のベッドは壁のかげになっていて、直接に閃光は体に当らなかったのでしょうか。私は火傷はしていませんでした。他に部屋の中でも火傷をした人もいたのに。音は全く私は聞いていません。

病棟は真っすぐ上から押しつぶされたようなかっこうで破壊されました。私は廊下のところで頭を手で押えて立っていると、屋根のスレート瓦が雨のように落ちてきて、たちまち足のところにたまって足が動けなくなったほどです。その時の傷は今でも両足に残っています。それから、病棟のそばの防空壕に逃げ込みました。実に不気味なくらい静かだったように覚えています。でも、警報が出た時やいざという時は、私たちは病院の重要書類などを搬出することになっていましたから、私はカルテを運び出そうと医務室に行きました。ところが医務室の看護婦さん達がけがをしてうめき苦しんでいたもので、助け出したりしました。

そのうちに衛生兵がやってきて、「警救集合所に集まれ」と言うので病院内のそこに行きました。その時初めて私は自分が眼鏡を失くしているのに気づきました。その集合所には兵隊の患者だけでなく、付近の民間の人々もたくさん助けを求めて来ていました。気が動転していて、煙をみて飛行機だと叫んでいる人もいましたし、皆ひどい傷を負っていました。太陽が煙で黒い紫色だったことも鮮明に覚えています。それまで、投下されてから二十分程のことだったと思います。

そのうちに、山の防空壕へ逃げろという命令が出て、私たちは山に向いました。でも山は燃えていてとても行ける状態でなく、あちらこちらを一時間ぐらいさまよいました。その時にパラパラという音とともに雨が降ってきました。いわゆる、「黒い雨」で夕立ちのようでした。あちこちでドラムカンが爆発する音がバン、バンと聞こえました。私も他の人も白衣は血で真赤で、そこで初めて自分のけがのひどさに気がつきました。スレート瓦で頭からもかなりの出血、両足も、それに手の甲にも無数も傷ができていました。隣の兵隊は耳がなくなっていました。黒い雨に打たれながら茫然としていました。ああいう時、一旦自分のけがなどに気がついてしまうと、もう動けなくなるものなんですね。

いろいろあって、病院にもどり病院内の防空壕には八月十五日の朝までいました。私たちは一応兵隊で軍人ということで優先的に薬を使うことができましたが、逃げてきたり、助けを求めてきた

民間の一般の市民たちは本当にみじめでしたね。ろくな治療もしてもらえず精根も尽きはてて死んでいく人も多かった。赤ちゃんだけ生き残り、死んだお母さんの乳房をしゃぶっていたり、いろんなひどい場面を目撃しています。真夏ですから薄物のシャツなど血に染まっていたり、死んだ人の皮膚は皆ぶどう色でした。次々に死んでいく人も実に多かった。そして次々に衛生兵がその死体を焼いていくわけです。

八月十五日の終戦の日、私たちは広島から他の町に移ることになりました。私たちがいた第二陸軍病院三滝分院から横川駅まで歩きました。その途中、電柱に「本日正午重大放送あり」というはり紙を何度も見て、「何の放送なんだろう」と考えたりしました。横川駅から汽車に乗り広島駅を通過して芸備線の三、四つ目の山の中の駅に降ろされました。駅名は忘れしました。山の中の小学校の講堂に転送、つまり避難したわけです。そこで初めて、青い謄写インクの印刷物で日本の敗戦、終戦を知りました。

そこに一週間ほどいて、八月の下旬でしたが、「原隊に帰れ」というので九州の宮崎の佐土原にまた戻りました。佐土原に着いたのは台風の晩で、二里ぐらい歩いて、白衣のまま中隊へ夜中に着きました。中隊に帰って安心したのでしょうか、脱毛が起こり、肝臓を悪くし、また体一杯にブツブツができて化膿して破れたり、下痢も大変ひどかった。ブツブツは年々少なくなってきていますが、今でもやっぱり出来ます。下痢もその後ずっと現在まで続いています。五十歳を過ぎてようやく落ち着いていましたが、本当にこれには苦しみました。

十月二十日になって、ようやく武装解除で、また広島を通過して、両親のいるこの小高町に帰ることができました。その後、再び大阪のおじの家の建築事務所の手伝いをしていました。昭和二十五年に父が死亡したため、小高町に戻り、以来、材木店に勤めたり、図面書きをしたり、二十九年五月から現在の小高町役場に就職したわけです。

私は原爆の被爆者手帳は交付してもらっていません。手続きの書類をもらって申請しようとしたのですが、手帳なんか交付されると、かえって白血病になるんじゃないかという不安もあって止めたんです。でも今になって自分の記録として残すため手帳を交付してもらおうかな、と考えています。被爆を証明してくれる上官が東京荻窪にいますから。また広島市に行けば病院の記録も残っているはずですが、でも、私はあの被爆以来一度も広島には行ってません。行きたくないですね。いろいろ思い出しますから。もっと年老いてから行くかも知れませんが。

被爆の体験もそんなに話したくないですね。人前で話すのもいやですが、一度前に有線放送で話したことがあります。また頼まれて小高小学校の学校新聞にも書いたことはあります。また私は俳句をやっているんですが、体験を句で表現しているんです。「現代の秀句」（大和書房）という本で秀作に選ばれたこともありますよ。

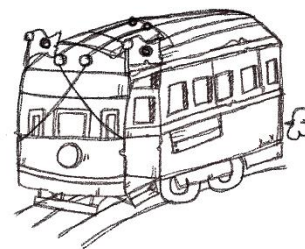
「夏草や生きて原爆受洗の徒」

「被爆者の悲歌のごとくに月赫し」

雅号は「梵天子」といいます。

私が現在担当している仕事のなかに、浪江、小高の原発立地への原石運搬道路建設があり、その担当責任者になっています。当然、原発問題は厳しい放射能の安全問題をかかえています。でも私は、「原発と原爆は全く違うもので、原発は今必要とするもので平和産業、放射能の平和利用だと信じている。勿論安全性は絶対に守らなければいけない。私自身被爆者だから放射能の恐ろしさはよくわかっているつもりだ。その上で一生懸命やっているんだ」と地主さんたちに説得しています。

もちろん、私は原爆には反対だし戦争もいやです。今後の戦争ではすべてが廃墟になってしまいます。米ソの軍備拡張など、いくら反対を叫んでみても、私たちの手の届かないところで動いてい



ることが問題です。平和、平和と言葉だけでは何とも仕方ないし、どうすれば本当に世界中が戦争のない平和な世界になれるのでしょうか。非常に難しいことですね。

(一九八三、五、一八談)

#### 8. 〈岡 実さんの証言〉

(当時 19 歳、男、相馬郡鹿島町大内在住)

「兵隊さん助けて」「水をください」

私は大正十五年二月、この鹿島町に生れ、広島で十九歳の時被爆しました。

昭和十八年に軍需省に入り大阪の近畿管理部で約半年間つとめました。その後、昭和二十年の四月二十四日ごろ広島の船舶通信補充部隊第一六七一〇部隊に現役召集され入隊しました。比治山の南の皆実町というところにあって爆心地から二キロメートル以内のところがありました。大変大きな部隊で一個中隊三百人とすると、全部で二千人ぐらいの兵隊がいたんじゃないですか。この体験集に掲載されている新地の飯土井鶴吉さんも、相馬の方も同じ部隊にいたんですね。飯土井さんには一度お目にかかりたいと思っています。出入りも激しい部隊ですから、当時はもちろん、誰が誰やら見当もつきませんでした。

四月に入隊してから、私は二等兵でしたが通信の幹部候補生で毎日モールス信号の訓練に励んでいましたが、五月ごろからはその部隊のなかの「力隊」というところに入りました。

八月六日の三日ぐらい前から、夜間の空襲が激しく、いや広島は空襲されないで、近くの<sup>くろ</sup>あたりがずい分やられていたようです。私の部隊から呉が空襲されるのがよく見えました。昼などアメリカ機が降下しては上昇するのがはっきりと。そして私たちの部隊でも、比治山の上の方に防空壕を掘って、そこに機材や衣類や食糧を保管する作業をしていました。夜間交替で作業は続けられたので、兵隊はみんな疲れていました。食糧事情が大変悪く、栄養失調のような状態でした。

私たちの部隊の食事はいつも一汁一菜で、ごはんなんか飯ごうのふたにさらっと一膳でした。それを二十分間かけて食べよ、と言われていました。でも私たちは十九歳で食べ盛りですから二、三分であっという間に終わってしまうのです。すると、「初年兵、はしを左手に持て」と言われ、無理にゆっくり食べさせられました。部隊によっても事情は違うでしょうが、私たちの部隊は本隊だったので、できるだけ節約して他の部隊に配給してやろうと考えていたのだと思います。

八月六日の原爆投下の日、いつものように五時の起床、朝食は七時でした。ところが、先ほどお話ししたように防空壕ほりの作業でみんな疲れきっていたので、私たちの部隊は午前中就寝休暇となりました。各自宿舎で自由に眠るなり休んでよいわけです。そこで私も、宿舎で寝ていました。宿舎は二階建てで一部屋に七十五人ぐらいいました。ベットは狭く幅は五十センチぐらいいきありません。本当は二段のベットなんです、その間にもう一段ベットが入っていて、それを「二段ギソウ」とよんでいました。つまり、兵隊が二倍収容できるわけで、二階建てでも四階建てのような宿舎になるわけです。とにかくその二階の北の窓から二番目のベットで私は眠っていました。

八時十分過ぎぐらいでしょうか、もちろん時刻はわかりませんでした、飛行機が飛んできたのが、うつらうつらわかっていったような気がします。空襲警報は鳴らなかったようで、だれも避難はしていません。ピカッと朝の太陽の光とはまた別に、それ以上の明るい、黄色っぽいような光を感じました。と同時にドーンというような大きな音がして、音と共に一瞬にして兵舎は破壊されました。棟が落ちてきて瓦がガラガラと崩れてきました。私はベットの「二段ギソウ」の下にちょうどまくぐってしまって助かりました。胸が圧迫されて苦しかったことを覚えています。瓦と同時に壁土も落ちてきたりして、もう土けむりでなにも見えませんでした。枕もとにきちんと置いたはずの服も靴も帽子も見当りません。下着は着ていましたが、そのままはだしで外に出てみまし

た。兵舎からは火事は起っていませんでしたが、町のあちこちからは火事が発生していました。とにかく比治山の上の防空壕の前に集合しました。集合といっても点呼をとるわけでもなく、茫然として山のところに背をもたれ空を見あげていました。するとそこにモクモクと黒い大きな雲ができていて、どんどん盛りあがって不気味に大きく動いていました。「夕立でもくるのかな」なんても考えましたが、いわゆる「きのこ雲」でした。

そのうち、「元気な者は出てこい」と言われ、靴と服をもらって内務班にもどって、部隊内のけが人の収容にあたりました。私と同じ部屋でも即死した人が一人だけいました。茨城県出身の山田という人でした。けが人の収容作業でいろんな負傷者に出あいました。整列していた兵隊はみな同じ方向の顔の半面だけがひどい火傷をして将棋倒しになっていたり、帽子の下の外に出ているところだけが火傷をしている人もいたり、脳みそって白いもんだなど初めてわかったり。また生れて初めて、死んだ人の体にふれて運んだりしました。死体はドンコロと全く同じで、固くのびたままでずい分重いもんだなあと感じました。十九歳でしたから、あまり気持ちいいとは思えませんでした。私たちの部隊二千人のうち、百人ぐらいは亡くなったんじゃないかと思います。無傷の人だって三分の一以下じゃないかと思います。

二、三時間後でしょうか、広島町の一般の負傷者たちが私たちの部隊に助けを求めてたくさんやって来ました。「兵隊さん助けて」「兵隊さん水をください」と言って、あの声は全くいいもんじゃありませんね。今でもあの声が忘れられません。水道はもう止って水は出ませんから、古井戸から水をくんで子供になんかも飲ませたりしました。火傷のひどい人は、皮がむけてしまってまるでポロのシャツを着ているようでした。それにまたゴミなんかがたくさんついて、本当に残酷なものでした。飲ませた水だって、そんなにきれいな水じゃありませんが、仕方ありませんでした。



それから仲間の負傷兵を広島の南の宇品船舶練習部に運びました。宇品にはそう、この鹿島の中川さんもいたところですよ。一里ぐらいあってタンカで運びました。運ぶ途中、「こんな遠いところまですっかり爆弾でやられてしまって、本当にすごい威力の爆弾だな」と思いました。原爆とわかったのは三日後ぐらいじゃないですか。その晩は、その宇品でゴロ寝をしました。けが人だけは毛布を一枚しいて並べておきました。昼食なんて食べるどころではなかったし、夜食に携行食のカンパンを初めて食べました。コンペイトウの二つくっついた、硬い小さなパンで味なんかありません。水を飲み飲み食べました。

翌七日には、また部隊にもどって兵舎の後片付けの作業をしました。兵舎はほとんど破壊されていました。幕舎(テント)をはって、その後二晩ぐらいそこで寝て、その後は半壊程度で残っていた被服廠に泊りました。ドラムカンの風呂に入る余裕もありました。ドラムカンの風呂は入る時はいいんですが、出る時になかなか大変でした。

その後、八月十五日の終戦の放送は、無線機を通して聞きました。その二、三日前ごろからどうも下士官たちの様子がおかしく、うわさ話でみんなで「戦争はやめるんじゃないか」なんて言っていました。海軍の方は早くから終戦のことはわかっていたようですが。そして、終戦後も残務整理に残り、機材の収納作業をしていました。部隊が解散になったのが九月二十日でした。

ところが私の生家では、終戦後一ヶ月以上もたつのに、私の消息がつかめず心配だということで、広島まで私を迎えに来たんです。いとこや姉たち三人で、切符も買えず、交通事情も悪く、瀬戸内海を経由して苦労して、九月二十三日の夕方に広島に着きました。私だって手紙を出そうにも着くかどうかわからない混乱ですし、連絡のしようがありませんでした。そして、四人で宇品から船で尾道へ、尾道から車で帰りました。

本当にこんな原爆や戦争中のことなんか夢のようです。私たちの部隊の戦友たちと年一回東京で八月六日に集まっていますが、いつもみんな「夢のようだな」と話します。全く現在では考えられないことばかりです。三十三年ぶりに戦友と広島へも行ってきました。

幸いにも私の体にはその後何ら異常はありません。現在も健康で酪農業に従事しています。子供も三人ですが、二世検診でも異常なしで孫も四人います。今だからこうして被爆の話もできますが、当時は不安でした。昭和二十七年に結婚した時も、被爆のことはふせていたんですよ。

原爆手帳は雑誌の『家の光』で読んで県に申請したところ却下されてしまいました。その後中川さんに証明してもらい、ようやく交付されました。でも二キロメートル以内の管理手当の該当になっていないので、今後申請してみようかなと考えています。

原爆なんて戦争の最後の手段で使ったんでしょうが、ひどいもんです。戦争だって決してやるべきじゃない。それはだれだってわかっていることです。でも民族の盛衰にかかわることですから、軍備は持つ必要があると思っています。ただし、軍備は実際に使うことなく外交に利用すべきものだと考えています。私が代用教員をしていたころの昭和十八、九年の元旦「日日新聞」に、マッチ箱ぐらいの武器で大艦隊を撃滅できる、というような、今考えると原子爆弾のことだと思うのですが、そんな記事があったのを覚えています。日本でも原爆を当時研究していて、製造過程で爆発したというようなこともあったそうです。とにかく、現在のようなお金が万能の人生や世の中ですが、お金のための国と国との対立をなくさなければ戦争はなくならないと思います。コツコツと働くことが生きがいと考えるようにしなければ争いはなくならないと思います。

(一九八三、五、二三談)

## 9. 〈Bさんの証言〉

(当時 20 歳、男、双葉郡大熊町在住)

素手で死体を担架に乗せて運ぶ

平和を守るために教育者の役割は大きい

私は大正十五年三月、双葉町に生まれました。二十歳の時、広島での原爆の惨状をつぶさに見た、そこでの体験をお話したいと思います。

戦争の末期、私は繰り上げの徴兵検査を十九歳で受け、翌昭和二十年三月に船舶工兵隊として入隊、二等兵の教育隊通信兵として、広島県三原市におりました。三原市は広島市から東へ二十里、約八十キロぐらい離れた、尾道に近い市です。三月下旬に入隊してから六カ月間教育を受けていたわけです。いろいろな日課が組まれていて、単にトンツターの通信の練習だけでなく、軍事教練やら、野菜作りの作業などもさせられました。

広島に原爆が投下された八月六日、夕方ごろに上官から話を聞かされ、夜になって、広島へ、救援に行くという連絡がありました。でも原爆とか、詳しいことは何も聞かされませんでした。何をさせられるのか全く知らされもせず、ただ引っぱって行かれるという感じです。夜中の十二時ごろ三原市を出発し、汽車で一時間以上かかって朝方、広島に着いたのですが、たしか、広島駅までは行けず、駅名は忘れましたが、一つ手前の駅で汽車を降りました。まだ外は暗く歩いて広島の本営に向いました。行軍です。周りの様子は暗くてわかりませんでした。街のあちこちで火災が起きており、それよりも何かわかりませんでした。いやものすごい臭いがしていました。なんとも表現できないひどい臭いで、翌日に考えてみると死体が焼けた臭いなんですね。広島を中心部にあった本営で仮睡し、明るくなった朝起きてみると、広島市は一面の廃墟になっていてびっくりしました。

八月七日から毎日、約一週間ぐらい、街での死体処理の作業が始まったわけです。「救援」なんて言っても、実は死体の運搬でした。出発前に湯ぎましの入った水筒一つを持たされ、それ以外の水は決して飲んではいけないと注意されての出発です。死体を運搬するのに、全く道具は配給されないで。だから、その辺の吹き飛ばされたようなトタンを見つけてきて、それに二本の棒をくっつけて担架を作りました。四人が一組になって運ぶのですが、まず死体を担架に乗せるのが大仕事

です。スコップとか軍手なんかありませんから、みんな素手で死体を担架に乗せるんです。死体は火傷していて水ぶくれしていて、引っぱるとズルッと皮膚がむけたりして。二、三キロ先の広い練兵場まで運び、そこに死体を並べて、身元を確認してから焼くわけです。でも死体は薄着ですし、黒くこげていますから身元なんか確認できる状態ではない方々も多かったですね。

運ぶ途中で死体の両うでがぶらんと担架から下るので、何回も胸にもどすのですが、またぶらんと下ったりして。なかには途中でもげたままで運んだものもあります。そりゃ、もうひどいもんです。腕がなかったり、腸が見えているようなものもあつたり。さきほども話しましたが、臭いがすごいんです。四人で担架を持つのですが、後の方が臭いので時々交替します。マスクの上にさらに自分のタオルなんかで鼻を強く押さえるんですがそれでもとにかくひどい臭いでした。一度死体を運ぶと、もうズルズルになって担架は使えない状態になります。三日目ごろに街中で馬車を見つけました。もちろん馬のいない車体だけのものです。その車体を担架がわりにして、八人で組んで死体を運んだりしました。死体をしばるローブなんかありませんから、素手で押えたりして。そんなふうにして広島市内はほとんど歩きまわりました。最後の一日だけは道路の整備作業をさせられました。

今こうして平和な時に考えてみると、あんなすさまじい死体運搬をよくできたものだ、しかも二十歳という若い時によくやれたな、と思いますよ、ふだんは死体に触ることだってできませんよね。戦争という異常な時だったし、自分は兵隊なんだという自覚があつたからできたんですね。

八月七日以降にも広島で空襲警報がしばしばありました。その度に防空壕に何回駆け込んだかわかりません。八月十五日の列の終戦の玉音放送の時は三原市に帰っていました。ラジオ放送は音声が不明瞭で、聞き取れませんでした。ともかく戦争は終わったとわかりました。やれやれ、家に帰れるなど思っていたら、原隊復帰ということになりました。ところが私たちの原隊は宮城県の石巻から山口県に移っていて、「柳井」とかいう駅のずっと在の方に一ヵ月ぐらいいました。特別昇格の辞令をもらい一等兵になれたはずですが、どうも正式の辞令ではないようです。そのうち、だんだん希望者だけが帰省できるようになりました。残務整理をするために軍隊に残れば、軍の物資をあげるとか言っていました。若い私なんか一日でも早く家に帰りたいたい気持ちでいっぱいでした。ようやく一ヵ月後の九月十四日、帰省解散の許可がおりて山口県から大阪までは貨物列車に乗り込み、さらに日本海まわりの青森行きの列車で新潟県の新津で降り、さらに会津若松、郡山、岩沼経由で、九月十六日の夜八時ごろ双葉駅に着くことができ、家へは十時ごろに帰れました。

私は昭和三十年ごろに原爆手帳を交付されました。毎年二回県立大野病院で検診していますが、白血球が少ないようです。七千ぐらいが平常の人だそうですが、私の白血球は三、五〇〇から四千ぐらいの半分しかありません。でもまあ健康なのですが、ただ肝臓が良くないようです。というのは私はアルコール性じんましんがひどく、お酒が飲めないのです。お酒を飲むと全身にじんましんがでて、特に足がひどいのです。そのうちお酒を飲まなくてもじんましんができるようになり、皮膚科病院に通い、お酒を飲むことをやめ、ようやく二年半ぐらいかかって、なんとか直りました。私の兄弟にも、親もそんな体質の人は誰もいないし、その原因が広島での二次被爆のせいかな、と考えたりもしました。被爆したために白血球が少なく、肝臓に原因があるのかとも考えました。でも、子供二人に恵まれ、孫も四人もできて、みな健康です。じんましんのことは被爆とは関係はないと思っています。なんでもかんでも、被爆のせいにするのは良くないと思います。きちんとした医学的な証明がない限りは。それにしても、私は被爆者として認定され、被爆者手帳を交付され定期検診を受けられるのでまだいい方です。同じ部隊で同じく広島で二次被爆した戦友のTさん、浪江町の請戸の人ですが、この人なんかは被爆者手帳を交付されないまま現在に至っています。気の毒というか、申し訳ないような気がします。

とにかく、あんな原子爆弾や戦争なんて、今後二度とあってはいけないことです。たった一発の原爆で広島があんなふうには壊滅するんですから、万が一、核戦争が勃発したら日本なんか一発でや



られてしまうし、本当に人類は破滅してしまいます。私たちが体験したことを、はたして今の若い人達にどの程度理解してもらえるかわかりません。だから平和を維持し守っていくためにあなたのような先生方、教育者の役割は大きいと思いますよ。若い人に戦争のひどさを伝えていかなければいけないと思います。

『にんげんをかえせ』という映画はみていませんが、以前に原爆の記録映画はみています。テレビでも多少みていますが。でも現場をみた私としては、あの映画のようなあんなもんじゃありません。現場はもっともっとひどく残酷ですさまじいものですよ。さっきからお話しましたように。二度とあってはいけないことです。くり返してはいけないことです。

(一九八二、一二、一四談)

Bさんが描いた原爆投下の翌日の広島



10. 〈Cさんの証言〉

(当時 24 歳、男、相馬市在住)

意識を失った私を誰かが川原に運んでくれた

私は昭和十七年七月に入隊しました。千葉の第一連隊 86 部隊の一中隊所属です。一般には鉄道部隊と呼ばれていました。そこで私は初年兵教育の助手や両国駅管轄の車輛修繕の仕事をしていました。

昭和二十年二月、私は広島の部隊へ転属となりました。夜行列車で広島へ行ったことはよく覚えているのですが、転属部隊名は不明です。忘れたのか、初めから教えられなかったのかもはっきりしません。部隊は広島の北部の横川町の学校（何という名だったか思い出せません）を利用していました。そこでの仕事は臨事召集兵の訓練が主でした。戦争も激しくなり鉄道の方も人手が足りなくなったため、一般の人々を召集し訓練して列車を運行させようとしたのです。

八月六日は月曜日だったと思います。というのは、日曜日は演習のために休めず、月曜日が代休となっていたのでよく覚えています。代休で私は外出するため点呼を受けていました。その時です。空襲警報が鳴りました。急いで私は、敷地内にあった防空壕に避難しました。しばらくすると警報が解除されたので、私は外へ出て内務班の兵舎に向かいました。

原爆が投下されたのは、私が兵舎内に足を入れるとすぐでした。人の運命は全くわからないものです。私たちがいた所は爆心地から一キロメートルちょっとですから、外にいればひとたりもなかったでしょう。まして、もうちょっとでも外出時間が早ければ、もっと爆心地の近くにいる私は確実に死んでしまったことでしょう。私と一緒にいた同僚のほとんどは死にました。私はと申すと、額のところに傷を受けて意識を失ってしまったのです。気がついた時は川原に收容されて横になっていました。どなたかはわかりませんが、私にとって命の恩人がいたのです。兵舎の建物は崩れ、その後燃えたのですが、あのような中を、気を失って倒れている私をかついで川原まで運んでくれた人がいたのです。

私は起き上がることもできないまま、一日中、川原に置かれました。横になりながら、横川橋だと思うのですが燃え落ちるのを見ました。あとで聞くと横川橋は木の橋でなかったということなので、別の橋かもしれません。その後約二十キロメートル離れた山奥にあった病院に收容され治療を受けました。四十日間ぐらいたったでしょうか、治療を受けたのは。それから進駐軍がやってくるというので、徒歩可能な者はすぐ退院して家に逃げ帰るように言われました。歩いてというのは、大洪水があって鉄橋が流されたままになっており列車が動けなかったのです。農家に泊まり泊まりしながら大阪まで行きました。大阪が病院にいた者の自然の集合場所になったのです。大阪から各方面ごとに汽車に乗り、私は十月一日に相馬駅へたどり着くことができました。

こんな具合でしたから、私が実際に目撃した広島の状態とは、川原で横たわりながら見た火と、一緒に横たわっていた人々のうめき声だけでした。あまり思い出したくないし、人にもそんなに話したくありません。現在は全く健康で異状はありません。

(一九八三、一、八談)

## 11 〈Dさんの証言〉

(当時 30 歳、男、相馬市在住)

ソ連を敵にまわすより平和外交を

私の広島での体験は人に話せるほどのものではありませんよ。爆心地から三・五キロメートルのところにおいて、かすり傷一つ負ったわけでもなく、放射能の影響も全くありませんし、健康そのものです。原爆手帳も早く交付されて年二回の検診でも異状なし、子供も孫も健康です。私は大正三年十月、相馬市に生まれました。昭和十九年七月一日召集で広島瀬戸内無線隊におりました。原隊は皆実町の船舶補充隊です。私は一年二ヵ月しか軍隊におりませんでした。選抜試験に合格して上等兵になっていました。

八月六日は晴天の暑い日でした。私たちの軍は仁保町の仁保小学校を兵舎にしていました。ちょうどその日、私は体のことで再検査を受けるため兵舎(仁保小学校の校舎)の二階で、九時からの開始を待っていたのです。実は、私は入隊の前、家業で使っている機械で左手の指を一本なくして、召集され入隊したものの家に帰される予定になっていたのです。どうも補充兵を集めすぎて余っていたようですね。

原爆が落とされた時の光も音も、私は全然わかりません。ただ地震のように建物がゆれ、それにウオーというような爆風がこちらに向ってくるのがわかり、二階から見ていると、木々がななめにあおられているのです。私たちはとっさに動物的なカンでというか、机の下にかくれ、そばにあった毛布を頭からかぶりました。窓がラスが爆風で粉々に割れて吹きとび、それが天井に突き刺さっ

たり、バラバラと頭の上から降ってくるような状態です。机の下に十分ぐらいかなあ、かくれていて、出てみると、屋根なんか蛇がのたくったようになっていました。全く幸運にも、私たちの部隊には一〇〇人ぐらいいたんですが、あまりひどいけがをした人はいなかったようです。でも外にいた人は片っぱ、光があたった方だけがやられていたようですね。その時はずいぶん大きい爆弾が落ちたなあと感じたぐらいで、原子爆弾という話は四、五日後に聞きました。

その後に皆実町の原隊の人が避難してきたり、夕方ごろにばけものようになった人が逃げてきました。講堂に収容されて手当てをうけていました。講堂に収容されて手当てをうけていました。私は火傷の人のために油を運んでやったぐらいで、おっかないので近付かないようにしていました。私なんか素人で手当てなんかできるわけありませんから。衛生兵が治療にあたっていました。市街の死体処理へ行く人が募集されて私達の部隊からも行った人がいます。月給を二倍にするぞ、白米のごはんが食べられるぞ、ということで志願していったようです。私はこわかったので絶対に行かなかった。行った人は放射能で被爆した人も多かったとあとで聞いて、本当に私はよかったと思っています。

広島から出発したのが九月十二日で、十四日に相馬市に帰って来ました。大阪までは貨物列車で。上野駅はいやもうものすごい混雑でした。軍隊からの荷物、毛布とか米とかたばことか、背中にしよわれるだけしよっていたので大変でした。

家に着いて何よりも家はいいなあと思いました。自由ですから。確かに軍隊は三食食べるし生活はいいですよ。でも自由がない。夜だって安心して寝てられない。私は家に帰って、一日一食でもいい、生活なんて貧しくたっていい、つくづく「自由」なことはいいことだと思っていました。

軍隊なんていい加減なもんだ、でたらめだなあとも考えました。三級通信士になるためには普通三年の教育が必要なのに、たった三ヶ月で私達を教養したりして。私なんか通信の教育を受けたってさっぱりわからない、カンも悪かったし、あんなの覚えられるわけもないのに。こんなことで日本軍は戦争に勝てるわけないな、日本もたいしたことないな、と考えていました。上官にしても中等教育を受けている上官はいいんです。ビンタを取られることもなかったし。ところが小学校しか出ていない上官はたちが悪くていやなヤツらでした。教育をうけた人と教育のない人との違いも大きいなと思いましたね。軍隊は人間の本性をみるには本当にいいところだとも思いました。

戦争なんて軍隊なんて全くいやなことです。戦争は絶対反対です。核戦争になれば原爆一発か二発で日本は終わりです。ソ連からやられる時はもうどうしようもありません。武力の差があります。だからソ連を敵にまわして軍備を拡大したりするより、そのお金をソ連との平和外交につかった方がいいと思います。仲良くすることに予算をつかう方が賢明です。

(一九八三、一、二七談)

## 12. 〈Eさんの証言〉

(当時 18 歳、男、相馬市在住)

「被爆者の子」という理由で解消された娘の縁談

私は昭和二年相馬市日立木に生まれました。通信兵として十八歳で広島で被爆しましたから、この相双地区の被爆した兵隊の中では若い方じゃないかなあ。原爆のことなんかもう忘れてしまいました。

私は初め志願兵として海軍に入りました。横須賀の鎮守直轄の特設有線班に十五歳から十七歳まで二年半ぐらいいて、その間外地へも行きました。海軍では太平洋戦争が始まってすぐにもう日本は敗けるとみんな思っていましたよ。敗戦も間近かになった昭和二十年の三月四日、乗る船もなくなって私たちは二十数名と共に、広島の船舶通信補充隊第一六七一〇部隊に転属となりました。

広島私たちの部隊は比治山の麓にありました。通信隊員として、本来なら私は教育を受ける必要もなかったわけですが、海軍と陸軍では兵器の名称なんかが違うので、たとえば陸軍で「機関銃」というのを海軍では「機銃」と呼んでいたり、それで一般兵と同じように三ヶ月間の教育を受けていました。その教育期間が終わるか終わらないうちに、八月六日を迎えたわけです。

八月六日の原爆投下の時、私は広島町のなかの日赤病院の有線の保守管理にむかうため道路を歩いていた。他の通信兵三人と一緒に。ピカッと青白く、写真のマグネシウムをたいたような光でした。その時私は運よく建物のかげにいたので、直接熱光線も浴びることはありませんでした。爆風なんか別に感じませんでしたが、瞬間に私の体は前にのめって路上に飛ばされました。両肩を強く打ち、破れたガラスで多少傷ができた程度で爆心地から一、五〇〇メートルで近かったのですが、私らよりずっと遠くにいても、ひどい火傷やけがをした人も多かったわけですが軽傷でした。

すぐに三人で部隊にもどったところ、比治山に中隊ごと退避することになりました。私は「全身打撲裂傷」ということで、他のけが人とともに部隊を離れて病院に収容されました。病院といっても小学校を改造しただけの野戦病院で、臨時のもので。一般市民の負傷者も収容されましたから大変でしたね。どんどん負傷者が運びこまれてきましたから、室内からあふれんばかりでした。みんな重傷で、私は立って歩けたので一番軽い方でした。それでもそこで私は十一月二十五日まで入院していました。死んだ人は二、三人の場合は病院、つまり学校の校庭で焼却し、多数の時は比治山の下あたりに運んで焼却したようです。だから、私は一歩も広島市内に出ていないので、町の様子などあまりわかりません。

十一月に退院する時は鉄道と警察と通信関係の従事者は優先的に郷里に帰されました。私の部隊は十二月十日に解散になりましたが、召集兵については召集解除、そして現役兵は一時帰郷の除隊となりました。現役兵はいつでも出勤できるように帰宅しても待機している、ということです。だから私など現役兵でしたから、今でも待機状態なのかも知れませんよ。冗談ですが、そのうちまた出勤命令が来るのではないかと思います。相馬に帰宅できたのが十二月二十五日でした。

そんなわけで、被曝してみなさんに話すような特別なことはありません。原爆手帳も福島県から直接連絡があって、それで申請して交付されました。体についても爆心地に近かったわりには何んともありません。ただ私の娘が年ごろになって今でも家にいるのですが、縁談で、私が被害者としてどこから聞いたのか、わかって解消となってしまいました。それも二度もです。私が被曝者で孫に悪い影響があるといけないからという理由でしようが、私だって好きで被曝したわけでないし、別にそんな狭い考えで娘をもらってもらわなくてもいいですよ、と言ってやりました。娘も私自身もこの通り全く健康なんです。この体験談集に私の名前を公表したっていいですよ。被曝者だなんて肩身の狭い思いをしている必要は全くないんですから。

(一九八三、五、二二談)

### 13. 〈Fさんの証言〉

(当時 23 歳、男、相馬市在住)

「京都へ避難せよ」というアメリカの宣伝ビラ

私は大正九年、相馬市生れです。二十三歳の時、広島軍隊で被爆しました。

初め、私は新潟県の新発田第 16 連隊の 23 部隊に入り、船舶歩兵隊に編入されて、中国へ二回、青島や徐州あたりの中部支那へも行きました。

広島へは昭和十八年の春に移りました。私たちの部隊は瀬戸内海に浮ぶ絵の島という小さな島にあって、隊長から直々に教育を受けたりしました。なんでも広島で二、三番とかいう大金持の別荘とかお屋敷とか、そこの一部に私たちの部隊があったわけです。

そこに半年ぐらいいて、次に広島市の東南の丹那というところに移りました。爆心地から三、八〇〇メートルぐらいのところですよ。丹那では千二、三百人の兵隊がいたと思います。私の階級は兵長でした。部隊は海の近くでしたので、潜水艦などの海上の見張りなどをおもにやっていました。

八月六日は月曜日でしたね。朝五時に空襲警報が出て、六時に解除になって警戒警報に変わっていました。それも七時半ごろには解除になっていたと思います。

原爆が投下されたのは、たしか八時十五分でしたよね。その時、私たちは営庭で朝の基本体操をしていました。雲ひとつない日本晴れでしたし、上半身はみんな裸でした。原爆が爆発した瞬間には、ちょうど、「腕立てふせ」をしている時で、突然、グワーンという大きな音とともに、ピカーとひどい光がしました。日中なのに花火のようにものすごく明るく光りました。「腕立てふせ」をしていた時ですから、顔は下を向けていたわけで、まるで地面が光ったようにも思いました。爆風で、そばにたたんで置いた服はどこかへ吹き飛ばされてしまい、さらに驚いたことに、あの重い銃さきもどこかへ飛ばされてしまっていました。

私自身もまわりの兵隊にも、幸いけがをした人は少く、炊事当番で仕事をしていた人がけがをしたようでした。「腕立てふせ」の姿勢を取っていたので良かったと、あとで考えたりしました。原爆を投下したのはB29で、もう一機ロッキード機が護衛していたそうです。私には飛行機の音なんかもわかりませんでした。不思議に思えたのは、兵舎の屋上で看視していた兵隊が、B29を見つけて「友軍機一機」と報告していたことです。空襲警報も出ていませんでしたから味方の飛行機だと誤ったんだと思います。

それからすぐに、私たちは部隊内の防空壕に入りました。私が入った防空壕は大きい方で五十人ぐらいが入れました。そこに午後の二時ごろまで避難していましたが、ポーン、ポーンという大きな音が何度も聞こえました。石油タンクが爆発する音だったようです。それに、例のきのこ雲もはっきり覚えています。モンモンと吸いこむような、中に巻き込むような、真っ白い雲でした。ちょうど蜜蜂が女王蜂を中心に大群をなして移動するような、あんな感じの雲でした。桃色っぽいような感じもしましたが、とにかくきれいな雲でした。

午後二時ごろになって、「カンミンポウ」と呼んでいたカンパンとカンヅメが渡され、また「無事な兵隊は救護に出るように」と連絡がありました。そのころには、私たちの部隊には一般の広島市民が大勢、助けを求めてやって来ていました。ところが、その市民の様子は、もうものすごいのです。火傷をしている人、体が溶けている人、けがをしている人など、とても言葉では表わせなようなひどい状態でした。一番印象に残っているのは、女子高生たちが五、六人で、薄いシャツを着て、ブルマというんでしょうか、短いズボンのようなのをはいていて、ひどい火傷をしていました。「私、助かるでしょうか」なんて言っていました、私には励ますことしかできませんでした。

それから二日間だけ、広島町の町に出て救援のために広島市内のほとんどを歩きました。

「水を飲みたい」と言っている人も多かったし、馬なんか腹がものすごくふくれたまま死んでいました。お婆さんなんか骨と皮だけで亡くなっていたり。市内電車なんか鉄骨だけになって残っていたのが印象的でした。救援といっても死体の処理をしたようなものです。死んだ人を宇品の防波堤のところに運び、夜になって油をかけて火葬にしました。干潮の時に火をつけるわけですが、その前に氏名や住所を書き移しておきました。遺骨はきちんとその氏名どおりに残しておきました。だから遺骨を引き取りに来た人もいましたよ。でも、親子はたいていバラバラで被爆していますから、引き取れる人はまだ良い方でした。二十一歳の大阪の電車の車掌さんという死んだ方のポケットから、六〇〇円のお金が出てきて驚いたこともあります。当時の六〇〇円というと本当に大金でした。どうしてあんな大金を持っていたんでしょうね。

三日後からは、私たちの兵舎で、負傷者の看護にあたりました。兵舎といっても小学校をそのまま使用していました。木造二階建の大きい校舎で、毛布をしいて相当な数の負傷者を収容しました

が、一日に八〇〇人ぐらいも死んでいきました。軍医などの医者も、看護婦さんもたくさんいましたし、薬もあったようです。

兵舎の付近に住んでいて、広島市役所に勤めていたという十九歳の青年の話もよく覚えています。その青年は市役所の窓ぎわで仕事をしていた時に被爆し、熱光線を受けた瞬間に「アチチ」と両手で頭をおさえたそうです。ところが、その両手でおさえた部分だけ髪の毛が残っていました。そして、その被爆の話私たちにしている最中に、突然「アチチ、アチチ」と言って立ち上がり、どこかに行ってしまいました。被爆してからずっと、ノイローゼのような状態で、頭がおかしくなっていたそうです。そんな人のことも忘れられません。

その後、私は部隊の残務整理をしていたため、帰省できたのは九月の末でした。広島から船で大阪へ。その船は民間のものでしたが、部隊で重油をあげたりして借りたそうです。大阪からは列車で帰ってきました。一緒に来た新潟と宮城県の人とは東京で別れました。列車はどこも大変混んでいました。

私の体の方は、被爆当時は吐き気がしたり、一週間ぐらい下痢も続きましたが、その後は別に異常はありません。多少疲れやすく、風邪もひきやすいかも知れませんが。原爆手帳も相馬の檀家の坊さんの紹介で交付してもらいました。年二回の検査でも異常なしです。子供四人も孫もみな健康です。

それから、これはあまり話したことはありませんが、広島に原爆が落とされる十五日前ぐらい前に、アメリカ機からビラがまかれました。朝四時ごろだったと思います。ピラピラと美しく光りながら地上に落ちてきました。憲兵隊が回収していたようですが、私もそのビラを手にとって読んでみました。「このまま日本は戦争を続ければ、日本人は奴隷になるので、もう戦争をやめなさい。広島を攻撃するので、広島市民はみやこ京都へ避難しなさい。」という文面が立派な黒い文字で印刷されていました。なぜ「京都へ避難しろ」と言うのか、なぜ京都が安全だというのか、よくわかりませんでした。ビラは表だけに印刷されていて、ハガキぐらいの大きさで、そうですね、ちょうど現在の結婚式の招待状のような、あれとそっくりの白い硬い紙でした。

また、当時同じ部隊の大学生は「この戦争は敗ける」と早くから言っていました。海軍では早くから敗けるとわかっていたので、休暇をとって田舎へ帰っていた人もいたそうです。広島の上空へアメリカ機がやってきて空襲警報が出ている時には、日本の飛行機は出動しないし、戦闘するでもなし、ふだんなんでもない時に飛んだりして、一般市民は「なんだ、日本の飛行機は、アメリカ機にたち打ちできないのか」なんて言っていましたよ。あんな大きなアメリカ機に対して私たちはせいぜい小銃ぐらいの武器で、どうしようもありませんね。竹槍の練習をしてみたって戦える相手ではなかったんですね。

この相馬に復員してからは、私は二男のオンツアマだったので、荒れていた実家や近所の田んぼの手伝いなどをしていました。そのうち農地法でなんとか自分の田を確保できました。お金なんか一銭もなかったので借金して、一反二千円で月賦で少しずつ返していきました。その後、バラックの家を建てて女房をもらいました。昭和三十年ごろ、被爆者が安心して仕事や、また、治療ができるようにと、被爆者援護法の制定運動をしましたが、警察が三人も家にやってきていろいろ聞いていきました。

昭和二十八年に、福島県内に在住していた二八〇人ほどの被爆者の会が郡山市で設立されました。私はその時副会長に選ばれ、会長は女の方で自衛隊の准将の奥さんでした。ところが、右翼からの圧力でその会長の旦那さんは北海道に転勤させられて会長の奥さんも北海道に行ってしまう、活動ができなくなるということもありました。全くひどい話です。また、被爆者の会の運動そのものも、だんだん政治的になっていき、政党によって考え方に違いがでてきて、ソ連の原爆には賛成というように矛盾したものになって、それ



がいやで私も運動から遠ざかってしまいました。それまでは私も県代表として、広島の水爆禁止世界大会に二回参加しました。私は平和を訴えるのは、アメリカやソ連やあらゆる国に行なうべきだと思うし、こんなに悲惨な戦争や原爆は二度とくり返さないということが、運動の最大目的だと思います。

(一九八三、五、二九談)

#### 14. 〈Gさんの証言〉

(当時 13 歳、男、原町市在住)

ふるさとの町・広島に原爆が投下されるなんて  
グラウンドに麦を蒔き、その生育ぶりをみて遺骨を掘り出す

私は広島市生れですが、原爆投下の時は朝鮮に住んでいたため直接被爆することはありませんでした。でも投下された翌年三月以後のことを知っておりますのでお話しします。

私の家は広島市の西方の古江というところにありました。家から海が近く、子供のころ、よくカニを取ったり、トンボつりをして遊びました。父につれられて福屋百貨店などに買い物に行ったこともあります。

八月六日の原爆投下の時、家には私の祖母が一人で住んでいました。幸い祖母はその時刻、山に行っていて助かりましたが、すごい熱風が吹いてきて、「どうしたのかなあ」と思ったそうです。ところが家に帰ってみると、壁は落ち、ガラスはみな破れて、屋根瓦もかなり被害を受けていたそうです。家そのものが山のかげになっていたため倒壊することもなかったのでしょうか。屋根だけは雨もりしないように近所の人直してくれたと言っていました。

父は教員で朝鮮の学校に勤めていました。そのため私も、家族と共に小学二年生の時に朝鮮に渡っていきました。終戦の時は十三歳、中学一年生で、父の教え子たちの朝鮮の方々の手助けで日本に引き揚げることができました。それほど苦勞もなく帰れた方でしょう。

広島へは原爆投下から七カ月後の昭和二十一年三月に帰ってきました。友達もたくさん亡くなっており、親類でも二人原爆死していました。特に同年輩だった市立中学生は、爆心地から約一・八キロの猿猴橋付近で、学徒動員の作業中に被爆し、大部分が亡くなったそうです。同級生や友人が原爆で亡くなったのに、私は朝鮮にいて助かったため、なんとなく心苦しいこともありました。近所の亡くなった友人の家の前を通るのが一番つらかった。家の人に出会うと必ず、「あんたは生きていて良かったねえ、うちの子は……」と言われたりして。だから自分の家に帰るのに毎日、暗くなってから人目をはばかりながら帰りました。

私の家の前あたりでも、広島を中心部で被爆して逃げてきた人が、ずいぶん行き倒れて亡くなったそうです。祖母が見るに見かねて自分で山から木を切ってきて、畑で七体ほど焼いたそうです。なかなか焼けきれず骨にならないで苦勞したと話していました。

広島に帰ってきて一学年遅れて中学に入りました。広島二中です。校舎はメチャメチャに壊れたままなので屋外で勉強しました。校舎の跡片付けや、特に忘れられないのはグラウンドの遺骨を掘りおこす作業です。それはひどいものでした。原爆死した遺体はそのグラウンドに集められ焼却され、そこにそのまま埋められたそうです。ところが、グラウンドのどの辺に埋められたのかわからない。そこで、グラウンド一面に麦のたねを蒔きます。やがて麦が芽を出しますが麦の実りのよい所に骨が埋まっているというわけです。昭和二十二年の春に、生徒二クラス、八十名程で掘らされました。各人に軍手と木のつるはし、米軍の小さなスコップがくばられ、まず麦を刈りとり、深さ 70 センチくらい掘りました。麦の穂の実ったところを目印にして。死体の焼却所、つまり遺骨の集中しているところが二カ所見つかり、骨もずい分出てきました。一万体を焼却したと言われていましたか

ら。中には完全に骨にならず皮などのついたものや、髪の毛などはそっくりしていたものも多かった。不思議と臭い<sup>にお</sup>はしなかったと記憶しています。トラックで運んだんですが二台分ぐらいあったようです。

ところが、その作業中同級生の中には軍手を使わず素手のまま遺骨を掘った人がいて、その後残留放射能の影響で、同じクラス四〇名のうち二名が亡くなりました。二次汚染、二次被爆ですね。朝礼で貧血をおこして倒れたりして、半年後に死んでいます。同級生どうして、「今度はおまえの番だ!」、と言いあったりして大変不安でした。それで発掘後に強制的に年二回、高校卒業までABCCで検査を受けさせられました。その後、日赤病院でも熱心に診てくれて検査もしてくれました。でも実験用のモルモットのように感じましたし、ずっと長く被爆したのではないかという不安も消えませんでした。幸い私には現在まで何の異常もありません。

中学校時代にはもう一つ印象的なことがあります。学園祭に町の人が撮影した原爆の写真展を開いたことです。被爆者の写真など二、三十点で、現在の写真展のものよりもっともって凄惨なものでした。予科練帰りの人々が開いたのですが、私も撮影した町の人からネガをもらったりしました。会場は原爆ドームの近くの文化会館(現在の広島球場のところにあった建物)で、市民も見に来ました。ところが三日目にMPに見つかり、写真は会場からはずされ没収されました。全部の写真ですが焼きすてられてしまったと聞いてます。私のネガも没収されたので、校長先生も、私にネガをくれた町の人も取り調べられて迷惑をかけました。MPは私服でしたがこわかったですね。

原爆で広島町もすっかり破壊され、私の家から五キロも離れた広島駅まで建物がなくなりずっと見通せました。汽車が広島を発車して己斐駅まで来るのがわかりました。残っている建物といえば、原爆ドーム、福屋百貨店、住友銀行、下村時計店、日赤病院など五つ程度記憶しています。残骸となったままの原爆ドームのてっぺんまで登って遊んだこともあります。瓦礫のままでしたから。

現在の反核運動、原水爆禁止運動についてですが、大変大切だと思うし必要な運動だと思います。でも広島で大会が開かれるのはどうもいやですね。お祭りのように騒ぎすぎるし、被爆者の本当の気持ち、心をくんだ上での運動でなければいけないと思います。前の浜井市長さんは被爆者の心をよく理解していたと思います。

(一九八二、九、一九談)

## 15. 〈Hさんの証言〉

(当時 25 歳、男、相馬市在住)

広島と長崎で二重に被爆し、顔も変形してしまった

私は大正九年、相馬市に生まれました。私の場合は、広島と長崎の両方の原爆を体験したいわゆる二重被爆者です。

私はプレス工として東京で働いていた若いころは、現在と違い体はガッチリした健康体でしたから甲種合格で召集され、筑波海軍航空隊に入り軍艦「隼鷹」<sup>じゅんよう</sup>に乗り込み、さらに昭和十六年一月からは横須賀海兵団に入り、海軍整備兵として、シンガポール、マニラ、トラック、アリューシャンなどに出向きました。いずれも激戦地で、特に第一次、二次、三次の南太平洋の激戦(ア号作戦で有名ですが)に参加しましたが、よく海の藻屑と消えずに生還できたのが不思議なくらいです。最後は航空母艦とともに九州の佐世保付近の港に逃げ込み、敵機の目をごまかすためその母艦を木の枝なんかで偽装して隠すようなこともしました。

ところが敗戦も間近い、昭和二十年八月(私はその少し前に特殊部隊に編入されていたのですが)軍の命令を受けました。その一片の命令とは、私の所属する横須賀海軍工作学校から、長崎の海軍武官府へ秘密兵器部品を受け取りに行け、という命令でした。



八月六日、M 技術中尉を上官に、私たち四人は横須賀を出発しました。翌七日、私たちを乗せた汽車は山陽本線の広島付近まで行ったところでストップ。広島は前日の原爆投下で壊滅状態でした。今でこそ原爆とわかりますが、その時はすごい爆弾だ、と考えるだけでした。街の方々が燃えていて焼夷弾にしては破壊力がすごいし、単なる爆弾にしては火事がずい分起きていて不思議に感じました。ともかく、軍の命令で派遣されていた私たちは引き返すこともできず、汽車を降り、徒歩で広島の街を通らねばなりません。広島城など何んにもなくなっていましたし、道路には人々がまだピクピクと動くだけの状態でいたり、人も馬も死体となって一緒にあちこちにゴロゴロしていました。広島駅に立ち寄ったのですが、時刻表の黒い文字のところが焼けて白い部分のまま残っていたことを覚えています。そんなふうに放射能に汚染された広島の街を翌日に歩いたのですから、これが私の第一回目の被爆体験です。その時はもう私は被爆してしまっていたんですね。

さらに広島の西の方の駅から再び山陽線に乗って、途中もう一度汽車を降りてトラックで運ばれ、また汽車に乗り込み、長崎には九日の朝に着きました。長崎駅からそれほど離れていない旅館に宿をとりました。着いたばかりで旅館名など覚えていませんし、町名などもわかりません。覚えているのは旅館の窓から見えた火の見やぐらとガスタンクぐらいです。被爆地が明確でないことが、戦後になって諸手当を申請する際に、書類不備でつり返される理由になってしまいます。でも知らないものは知らないのです。

九日の長崎での被爆の様子をお話します。九日朝に長崎に着いた私たちはその旅館に入って、それまで食べるものも食べずにいたので、まず食事を頼んで待っていた時、原爆が投下されました。十一時二分ですか。一瞬夕焼けのような光、それは金色でも赤色でもないような光を感じ、すぐにものすごい音がして、それっきり私は気を失ってしまいました。よくピカドンといいますが、そんな感じですね。

気がついた時は、佐世保海軍病院諫早分院いさはやの中にいました。右の頬にガラス片が突き刺さり手術をして抜きました。その傷はこのとおり大きく残っています。私は軍人でしたから軍の病院に収容され治療を受けることができましたが、私以上のけがや火傷をしても、道端にほっぽり出されていた人も多かったはずですよ。

諫早分院から看護婦付きで佐世保海軍病院へ車で移され、そこで約一ヶ月いて、汽車で横須賀に運ばれ、相馬へは九月半ばに帰ることができました。

原爆病という病気はないと思います。俗に言うそれは、放射能が体内の白血球を破壊するため、抵抗力が弱まって他の病気にかかりやすくなるのです。私の場合、昭和二十一年ごろから次第に全身がだるくなり、坐っていても横になってもだるく何をやる気にもなれません。被爆者はよくブラ病と呼ばれて白い眼で見られていましたが、本当にそうなんです。また胃腸に変調をきたし痛みもあり食欲も減退してきました。それで半年ほど相馬公立病院に入院したこともあります。それまでめったにひかなかった風邪も度々ひくようになりました。

また先ほどもお話しましたが、被爆の時、顔の右半分がやられ、頬のガラス片の跡も残り、その手術の後遺症だと思いますが、右耳の耳鳴りがひどく、右眼は視力が衰えて、常に涙がたまるようになり、引きつった唇からは涎よだれが絶えず流れるようになりました。被爆前の私の顔とは全然違った人相になってしまったのです。だから、昼間はなるべく外出しないようにしましたし、人間嫌いになったり、性格も変ってしまったと思います。

昭和二十三年ごろから徐々に快方に向かったので職をさがしました。以前の職のプレス工への復帰は、七年以上ものブランクがあるし体も弱いし、とてもかないませんでした。それで鮮魚の行商や小型漁船の漁で生計をたてました。しかし、快方に向かったとは言っても、元通りになったわけではなく、二日働いては一日休むという毎日でした。子供四人を育てなければなりませんから苦労話はいくらでもあり語り尽くせません。

このような生活が現在まで続き、経済的な面以外でも、通常の人には考えられないような余計な苦しみがあります。年とともにシワも増えてきましたが、顔の右半分は神経が麻痺してしまったためシワがありません。このとおり右半分はすべすべしているでしょう。左右の顔が全然違うのです。この異常を隠すため、外出の時は年中頬かぶりや防寒帽やマスクなどをします。しかし、親戚や知人の冠婚葬祭の時は困ってしまいます。まさか頬かぶりをして結婚式に出席するわけにもいかず、できるだけ妻をやったりしますが、やむなく義理を欠いてしまう時もあります。そんなわけで極度に人前を避けたり人嫌いになってしまったわけです。

昨年五十七年の一月には変形性脊髄症<sup>せきずい</sup>で大手術をしました。右手がしびれて痛み夜も眠れないほどでした。長崎で被爆した時に投げ出されたか何かで、ちょうどムチ打ち症のようになっていたんですね。そんなことは全く気づかないでいたわけです。手術は右下腹の軟骨を切り取り、それを首の頸椎<sup>けいつい</sup>に移植したのです。昭和五十二年にその病気が発見され、昨年一月に手術して四月に退院しました。ところが退院するころから今度は、腰が痛み、両足もつっぱってしびれがひどいのです。昨年からずっと病院通いで仕事にもつげず困ってしまいます。今も毎日通院で治療には午前中一杯かかります。今日も行ってきたところです。

戦後三十七年経った今でも、こんなふうに原爆の傷跡は消えませんし、これからも生活面、治療面にこの傷を背負って生きていかねばなりませんし、全く不安です。こんな悲惨な体験は、もう私だけでたくさんです。こんな戦争は二度とあってはいけない、くり返してはいけないと思います。とにかく原爆なんていうものは、みじめなもんですよ、残酷そのものです。諫早の病院では、今まで隣のベットで元気に話していた人が、急に死んでいくんですよ。本当にショックでした。そんなことを私は目の前で幾らも見ても来て自分もこんな傷を負って、戦争はもうたくさんです。

私が被爆者としてもらっている手当についても大変不満です。広島で二次被爆、長崎では直接被爆と二重に被爆していても、長崎の場合だけがようやくのことで被爆者としての認定を受けられました。認定されるまで二、三十ページの申請書を作成するのですが、これには本当に苦労しました。こんなに詳しく私にはとても書けないので、いろんな人にお世話になりました。私がいただいているのは健康管理手当という種類で、月額二万四千元。それも病気の間だけの三年間内です。仕事もできないで月二万四千元を支給されても今どき何が買えますか。軍の命令で被爆して苦労して馬鹿をみただけと腹が立ちますよ。海軍だから軍艦に乗っている期間だけが恩給の対象で、これも少額です。お金の話ばかりで申訳ありませんが、正直言って本当にもっと優遇してもらわないとどうしようもありません。現在の手当だって最近になってようやく改善されたもので、もっともっと早く制定されていればなあと思つづく思います。年二回の定期検診は受けていますし、何か相談があれば原町の保健所に行き係のYさんに話します。Yさんは本当に親切に考えてくれて説明してくれたり、手続きなどもよくやってくださって、心から感謝しています。

とにかく、そんなことを言っても、娘三人、息子一人もみんな結婚して孫も四人になり、今では女房と二人暮らしでしっかり生きていかなければと思います。こんな体で本当にあの時死んだ方が良かったのではと、以前は考えたこともありましたが……。先生もぜひがんばってください。

(一九八三、一、六談)



「あっ目がつぶれた」「私に落ちたのか」  
浦上天主堂で食べたおにぎりのこと

私が長崎で原爆を体験したのは十五歳、旧制中学三年生の時でした。

その前、私は父の勤務地の台湾にいたのですが、どうも台湾の気候が私にはあわないようで小兒ぜんそくにかかっていたのです。それで、家族と別れて私一人が、父の出身地の長崎へ、昭和十七年に移り一年やり直して、県立長崎中学校に入りました。はじめ、学校の寮というか宿舎に入ったのですが、そのころのことですから先輩の上級生が下級生の私たちをひどくいじめるのです。言葉づかいが悪いとか、態度がどうのと殴られるわけです。土曜日の夜は時にひどかった。軍隊の悪い面をそのまま、マネしているんですね。宿舎に二年の時までいましたが、そんな宿舎生活をかわいそうに思ってくれた父の知人が、その後私を引き受けてくれて、私は長崎市の南の方の中川町に住むことになりました。

中学校の正式な授業はそのころはすでになくなって、毎日学徒動員の作業をさせられていました。中学校の校舎を工場に改造し、三菱造船から機械を持ち込んで、<sup>まるナ</sup>工場と呼ばれていました。各種旋盤、スライス盤、ボール盤などがしつけられ、かつての教室は、油と鉄屑の匂いが充満していました。その中で私はターレット旋盤を動かして、新しく動員されて来た下級生の指導にあたっていました。「鋸」を作るのですが何の部品か知らされていません。後で考えると特攻艇の鋸のようでした。今でも旋盤を見るときとなつかしいと言うか、当時が思い出されます。

昭和二十年八月九日、その日は三交替の夜勤でしたので、私は下宿していた中川町郵便局の二階で昼寝をしていました。十二時前、下の郵便局で鳴らしていたラジオが、「警戒警報発令、B29 一機が島原半島を西北進中」と何回もくり返し告げていました。私は「またか、たいしたことはないな」と思っていました。もうすでに私の耳にはいつも聞きなれた B29 の爆音が、「ウォーン、ウォーン」と聞こえてきました。私は立ち上って窓の方へ見に歩きかけ空を見たその瞬間、ピカッともすごい閃光が眼前一ぱいに広がりました。「あっ目がつぶれた」「私に落ちたか」と思ったと同時に、ドカーンというごう音とともに体が吹っ飛びました。本能的に親指で耳をふさぎ、残りの指で目を押さえて倒れました。これは防空演習でいつも訓練していた格好です。家が大きくゆれ、背中の上に屋根瓦や土の塊がどんどん落下してきます。天井板をはずしておいたため、ひどかったのです。

その時の時間は一瞬のようでもあり、永い永い時間のようでもありました。やっと静まり、下の郵便局の局員やお客さんの悲鳴が聞こえて来ました。おそろおそろ立ち上ってみると、そばにあった桐のタンスに無数のガラスの破片が突きささっていました。幸い、私はどこも怪我はしていませんでした。すぐに下に降りました。郵便局内はガラスの破片で怪我した人達がうろうろしていましたし、お札、紙幣が舞いあがりとんでいたことを覚えています。

誰言うとなく、「横穴防空ごうに逃げるのだ」と言い出して表へ飛び出しました。爆風による「ほこり」で街全体がかすんでいます。その中を突っ走って神社にある横穴防空ごうにたどり着きました。近所の人達がゾロゾロ皆避難して来ました。その人達は口々に、「うちの裏に爆弾が落ちた」と言っています。私も郵便局の裏に落ちたと思っておりました。それほど衝撃が激しかったわけです。しかし、あとでわかったことですが、四キロメートルも離れた浦上に、たった一発の原爆が落下傘で落ちただけでした。友人には原爆の落下傘を目撃した人すらいます。

それはともかく、やっと落ちて空を見上げると、爆煙で太陽がボンヤリ輪郭がくっきりと見え始めました。きのこ雲が不気味にできていました。そしてその雲の間からキラキラというか白く光るものが無数に落ちて来ています。私はそれが今に爆発するんじゃないかと思われましたが、それ

は伝單(ビラ)でした。憲兵がすぐ回収してまわりましたが多数の長崎市民は読んでしまいました。私も読みました。こんな内容だったと思います。「この本日投下した爆弾はアメリカの優秀な科学者が発明した新型爆弾である。この一発はB29二百(二千か)機の塔戦する爆弾の量に匹敵する。早く寛大なるアメリカ政府に降伏せよ」。日の丸が表に印刷されていて、良質の紙を使っていました。伝單はこの種類だけで、午後の二、三時ごろに落下していたように記憶しているのですが、あるいは私の記憶違いで、九日の当日ではなかったかも知れません。

やがて夜になりました。爆心地の火災は街全体にひろがっていて、炎は夜空一ぱいを赤々とこがしています。ドラム罐が破裂する音や、建物が崩れる音が夜を徹して聞えてきます。一晩中まんじりともしないで防空ごうの中で明かしました。

翌十日、登校すると救護班が編成され、私は軍の指令部に集められ、連絡係つまり伝令となって爆心地方面に行かされました。長崎駅の大きな建物は跡形もなくなっていました。途中、担架で運ばれるたくさんの怪我人や、るいんと横たわる死人の山、馬などの動物の死体もゴロゴロしていて、今まで全然感じなかった恐怖感が一度に湧いてきました。そういう光景の中で今だに強烈な印象として忘れられないことがあります。

それは、顔といわず、胸、腹とグチャグチャに火傷を負った少年二人のことです。小学三、四年生の二人で兄弟のようです。「熱いよう、熱いよう」と叫び続け、母親らしい女の人が懸命にうちわであおいでやっています。そしてその傷口にハエがたかっている、その筋肉だけがピクピクとけいれんを起こしています。ふと、きのうの爆弾でもハエだけは死ななかつたのかと不思議に感じました。あの兄弟はその後、亡くなったと思います。また、下半身だけの男の人の死体にも出あいましたし、何人もがまるく車座に坐ったまま死んでいる死体もありました。内臓がはみ出していたり、炭素化して黒くなっているのもありました。担架で負傷者を運んでいるのですが、ピラピラと洋服が垂れているな、と思ったのが、実は体の一部の皮膚がピラピラと垂れていたり、本当にひどいものです。無傷で腹が大きくふくれて死んでいるものもありました。

翌々日には、Hが死んだ、Nも死んだと、学友の犠牲者の名前もわかってきました。Kという僧侶の子供で同級生がまだ生き埋めになっているという情報が入り、長崎駅の近くの丘の上の方へ向かいました。二十人ほど先生に引率されてスコップをかついで瓦礫の中を進みました。何回も死体を踏みつけそうになり、その度に悲鳴を上げて先生に叱られたりしました。やがて目的地につきました。幸い、Kはお堂の下から救出されていました。

その後も一カ月ぐらいの間に、何回か爆心地へやらされました。金比羅山から山越えして浦上へ行き、瓦礫の浦上天主堂の中で一休みし、そこでおにぎりを食べたこともあります。浦上天主堂はひどい悪臭がしており異様な雰囲気でした。食べたおにぎりにしても、バイ菌が入ってしまって自分も死んでしまうのではと、本能的に恐怖感をもったりしました。前に行った時は小川に死体がたくさんあったのですが、そのあと同じ場所に行ってみるとすっかり白骨化していたり。夕方になると、あちこちで死体を焼く茶毗(たび)に出あったり。死体には名札なんか付けてあるわけがありませんから、誰れが誰れかわからないまま焼くんです。友人が靴の箱に骨を入れてきて、「たぶん、おふくろの骨だろう」と言っていたり。また勇気のある友人は、燃えている最中のカンヅメ工場からカンヅメを取ってきて分けてくれたり、本当にいろんな体験をしました。

そうこうして何日かが過ぎ、下宿の人達も早岐というところへ全員疎開することになり郵便局にはおれなくなるので、矢上にいる友達のところへ歩いて頼みに行きました。

ちょうど友達の家に着いた時、ラジオで天皇の玉音放送が始まりました。あわててまた、長崎へ歩いて引き返しました。長崎市内に帰り着くと、向いのおばあさんが私に「日本が戦争に負けたのは本当か」と聞いて、「本当なら今夜からゆっくり寝れるからね」とつぶやきました。私は大人はなんて非国民なことを言うのだろうとその時は思いました。

夕方、軍の宣伝車が猛スピードで街を走りまわり、「こちらは西部軍、本日の放送は謀略放送なり、我々は最後の一兵まで戦う覚悟なり」と告げていました。それを聞いて、皆、「万歳」と叫びました。でも翌日になるとそれはウソで、本当に戦争が終わったことを先生から知らされました。やっと両親や家族に会える喜びがわいてきました。しかし私の場合実際に、引揚げて両親や家族に会えたのはそれから一年半も経ってからでした。

さて、私自身、原爆投下直後の爆心地付近を歩いて被爆しているはずですが、幸いにも後遺症は残っておりません。原爆手帳は持っていて、今でも年二回の検査は受けていますが、別に異状は何もありません。ただ、投下後の一週間目ぐらいに激しい下痢があったぐらいです。また、蚊に刺されたあとがグチャグチャになってなかなか直らなかったこともあります。それはまあ、当時の栄養状態が悪かったせいかも知れません。薬の力なんか借りないで直しましたよ。

原子爆弾というものは、自然の摂理に逆らって莫大なエネルギーを生み出すもので、私はどうも人間の傲慢さをあらわしている非常に危険な恐ろしいものだと考えています。原子核分裂の利用も、今話題の遺伝子の組み換えも同じで、この宇宙や自然や神の摂理に対する人間の挑戦だと思えます。人類自らが危機を生み出しているわけです。原水爆によって、また同じ誤ちを今繰り返そうとしているのではないかとさえ思えます。戦争は人間の心の中から起こるわけですから、一人一人の心の問題としてとらえ、隣人どおし仲良く生きるということから啓蒙していくべきです。だから、私は人づくりの教育をもっと目ざすべきだと考えています。現在の学校教育は勉強で学力をつけるだけでなく、原点として「人間の生き方、あり方」をしっかり教育しなければいけないと思います。人づくりを目ざす教育の責任は大きいと思います。人間を大事にする人づくりができれば、この世界から戦争はなくなると思うのですが。

(一九八二、一一、一四談)

17. 〈渡辺 豊さんの証言〉 (当時 27 歳、男、双葉郡富岡町小良浜在住)

空いっぱい赤黒い炎がうずをまいて

私は大正六年十二月、この富岡町に生まれ旧制上岡中学校を卒業しました。十八歳で横浜の日本郵船株式会社に入社しましたが、昭和十三年四月、第一補充兵として臨時召集となって、独立山砲兵第一連隊補充隊第四中隊に入隊しました。日中戦争のさなか、上海に上陸し、漢口攻略作戦に参加したのをはじめ、中国で数え切れないほどの戦闘に参加し、このとおりに体じゅう傷だらけです。四年間で満期除隊となり、昭和十六年七月帰国し、日本郵船に復帰したのですが、今度は船員動員の命令で広島宇品の暁第三〇四部隊に配属となって、敦賀丸に乗船してパラオ諸島に上陸したり、ボルネオのタラカン上陸作戦にも参加、敦賀丸はバリクパパン島で沈没しましたが。とにかくよく戦い、よく生き残ったと思います。

船が沈められたので日本に引きあげてきて敦賀へ、さらに横浜の日本郵船本社に戻り、それからは動員で兵員輸送にあたっていました。私の乗った船は次々に戦闘で沈められ、全部で六回も乗りかえました。

昭和二十年八月、私が長崎で被曝することになったのも、実は新造船に乗りくむために長崎に行っていたからです。考えてみれば、わざわざ被曝するために長崎に行ったようなものです。

私は横浜から汽車に乗って広島を通過して長崎に向いました。広島は原爆でやられた後で、窓から「ひどくやられたなあ」と言いながら街々を見ていました。その時は原爆ということも、勿論わかりませんでした。広島を通過するのに二日間ぐらいかかったように覚えています。でもはっきりした日時記憶がありません。とにかく、広島を汽車で通過する間、メシの配給もないし、暑い

し、広島駅がメチャメチャに壊されていたことは覚えています。そんなに早く鉄道が復旧していたかどうか、今になって疑問も残りますが。広島に降りたり歩いたりはしていません。

長崎に着いたのは、八月七日の夕方と記憶してますが、どうも日時がはっきりしません。そんなに早く着くわけもないのですが、七日、八日の二晩は長崎に泊まったような気がします……。私たち日本郵船からの派遣者たちは、長崎駅から二、三十分ほどの八坂町の「浪花旅館」に宿泊しました。二階建のけっこう大きい旅館でした。

八月九日、朝から良い天気でした。私たちが乗り組む予定の新造船へはまだ乗船しないで宿に残っていました。新造船に荷物を積もうとしたり、乗船しようとする、アメリカのグラマン機がやってきて狙われるので近づけなかったのです。仲間の幾人かは長崎の街に映画を観に出て行きました。長崎の街には女の人たちはワンピースなんかを着ている人もいて、東京なんかと違って、ちょっと開放的な雰囲気があったのです。映画を観に行った人たちのその後の消息はわかりません。宿に残った私たちは花札なんかをして時間をつぶしていました。暑い日でしたし、着るものもなかったもので、私たちはふんどし一本で部屋の中でごろごろしていたのです。

十一時ごろ、私はその二階の部屋に寝そべっていると、B29 がやってきて空襲警報が鳴りました。私はその時、「一機だけだな」と思いましたし、何か白いもの、パラシュートを四十五度の上空に目撃していますよ。B29 が去って、宿の女中さんが「警報解除です」と言っていたのを覚えています。そのパラシュートで落とした白いものが、実は原子爆弾だったんですね。その時は「カード焼夷弾」で炸裂するのではないか、と思ったりしました。

その瞬間、ものすごいウォーという音とともに、赤黒い炎がうずを巻いて空いっぱい、私たちの窓からも入りこんできました。私は窓側にいて割れたガラスを浴びたようでしたし、それよりも目の前にいた仲間で畳とともに空中に吹き上げられて飛ばされました。赤黒いうずが空一面に広がり、人々の騒ぐ声が聞こえたと、とにかくものすごい爆風というぐらいで、その後のことは覚えていません。

気がついた時、あたりは一面ほこりにつつまれて、全然物が見えません。目もやられていたと思います。私は無意識のうちに枕にしていた風呂敷包みをつかんで、ほこりの中を夢中で歩いていました。ふんどし一本の裸で、はだしで、ほとんど手さぐりで、私は山に逃げていたのです。体は傷だらけ、頭は前の方の髪は焼けて、後の方は残っていました。それは午後二時ごろだったと思います。八坂神社の手洗い水で頭や顔を洗ったり、腰をかけて体に刺さったガラスを引き抜いたりしました。

町から被爆者がどんどん集まって来ました。真っ黒になったり、全身水ぶくれの人とか、あるいは肉が裂けた人たちが次から次へと集まって来ました。私などまだ傷は軽い方でした。

翌十日になって、町内会で乾パンが配られたのですが、私たちはよそ者でしたから配られません。仕方なく、水だけ飲んでいました。ところが、八坂神社の中に入れず外で腹をすかしていると、かなりの歳のじいさんとばあさんが板の上におむすびをたくさん持ってきて、寝ころんでいた私に向って、「お世話になったから、たくさん食べなさい」と言うのです。じいさんたちの親戚の人が作ってくれたおむすびらしく、私は驚いたり喜んだりしながら、パクパクと五つぐらい食べました。とにかく、そのうまかったこと、その味は忘れられません。一緒にいた私の友だち、つまり、日本郵船の人たちにも分けてやりましたよ。その後しばらくして、私たちがおにぎりを食べる様子を見ていたのでしょうか、小学四、五年生ぐらいの子供が、たばこ、「光」だったと思いますが、たばことおむすびを交換してくれと言うのです。私もあげたかったけど、その時はもうなかったし、あの子供はその後どうしたものか、死んだんじゃないか、なんて考えたりしてますが。たぶん、たばこを買いにおつかいに出され、そのまま被爆したんじゃないか、本当にかわいそうだったと思います。

四日目ぐらいから、ようやく町が見えるようになりました。それまでは町は霧がかかったように、ほこりの中につつまれていたのです。火事にもなっていました。そのころ「女はアメリカの艦隊に連れていかれるぞ、男はきんたまを抜かれるぞ」などといううわさが流れていたもので、センブ班(宣伝班)の人達が、それはデマだと言って歩いていました。

八月十五日、天皇のラジオ放送があるというので山を降りて聞きに行きました。でも電気が通っていないので放送は聞けませんでした。後で、戦争は終って敗けたんだということを知らされ、私は本当にがっかりしました。それから私たちは町で簡単な傷の手当てを受けました。町の交差点ごとに治療所が設けられ、カンに白いどろどろした薬が入っていて、皆んな火傷のところに塗っていました。どこも長い列ができていて、中には並んでいるうちに死んでしまったような人もいました。私も白い薬を塗ってせいせいして気持ち良かったですよ。それから私たちは、長崎市役所に行き「罹災証明書」を書いてもらいました。そして、皆んな実家に帰るようと言うので、私は何か食べ物が欲しいと交渉したのです。でも、町内会に配るのが精一杯と断られ、その後横浜へ帰るまでの一カ月間は水だけで何も食べられませんでした。ほんとうにそうでした。着るものもなく、素っ裸で門司まで行きました。実は自分の荷物として衣類などの風呂敷包みは持っていたのに。だから、私はその頃、頭がバカになっていたんですね。足ははれていて靴などはけませんでしたからはだしのままでした。

いよいよ、私たちは長崎を離れるために長崎駅に行きました。列車はあったのですが、いつ発車するか、あてもないのです。車両の中はもうはみ出すほどの人、また人です。私たちは屋根によじ登り、落ちないように体を針金でくくりつけました。その針金は線路のわきの柵に使ってあったものを手で苦労してはずしてきたのです。四日間ぐらいかなあ、その屋根の上にとずっといました。屋根の上でも席を取られてしまうので、水を飲む時だけ降りて行って、またすぐ戻って列車が走り出すのを待ちました。ようやく機関車の煙が出はじめて、皆んなで「走るぞ、走るぞ」などと言いました。なんしろ、列車の両側は人の波、人でいっぱいです。列車のいたるところにしがみついています。ところが列車が走り出し、北九州の門司まで止まりませんから、しがみついている人たちが、ポン、ポンと列車から振り落されていくのです手や腕が痛くなって、がまんできなくて手を離してしまうのでしょうか。死んだ人もずい分いるんじゃないかと思います。

門司の駅もまたひどい混雑でした。ホームなど身動きもできません。押されてホームから線路にころげ落ち、そこにまた、長崎からの列車が入って来たりして。憲兵なんかが大声で騒いでいましたが、どうしようもありません。私たちは門司に三、四日間いましたが、ある神社の鈴打ちの太いひもを見つけ、その赤いひもをふんどしにしたり、腹巻きにしたりしました。次の列車が出るまで門司駅でごろごろと寝て待ちました。下関に渡るのに約一週間、横浜に着いたのは九月十日頃になっていたと思います。

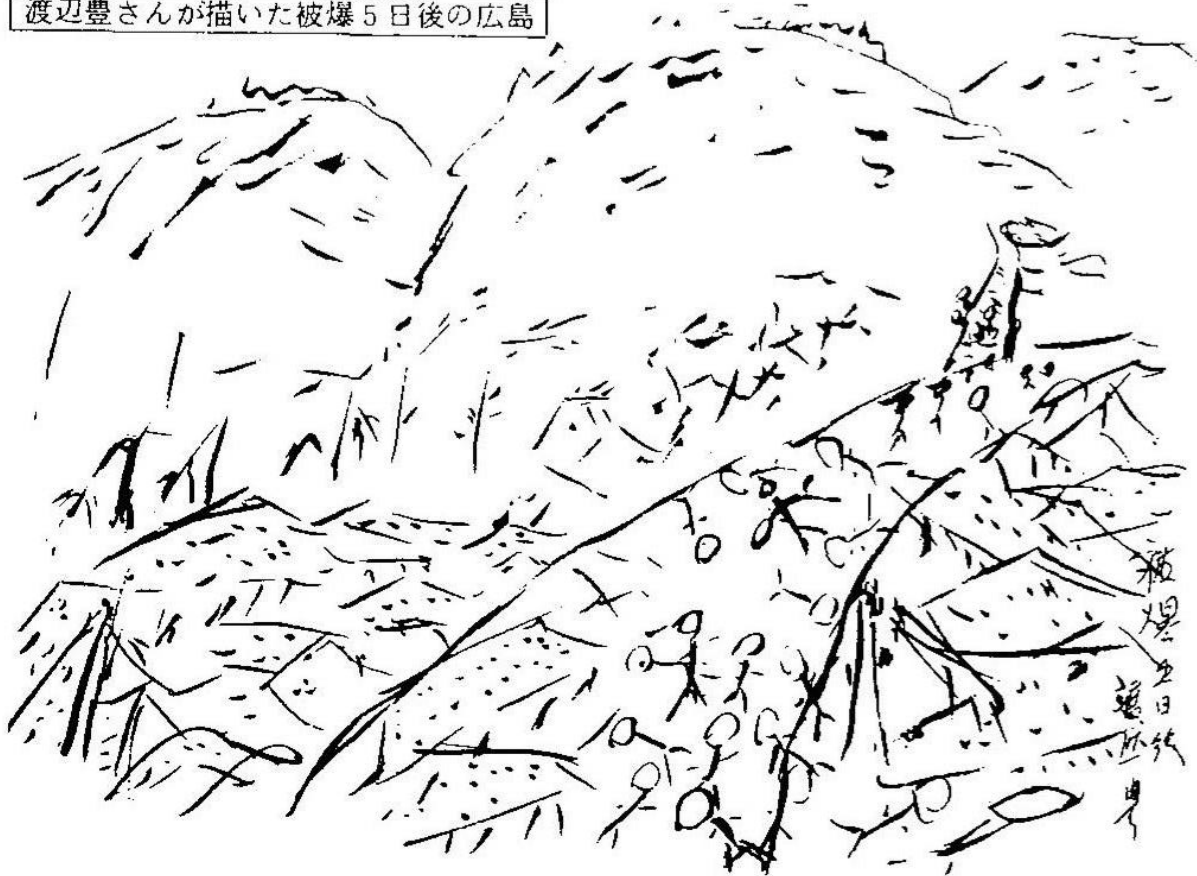
長崎で被爆してからそれまでずっと一緒だった日本郵船の友だちとも別れました。三人とも出身、名前もわかりません。

横浜に着いて私は以前下宿をしていた曙町四丁目を尋ねてみると、幸いその一角だけは焼け残っていました。下宿のおばさんたちに「よく生きていたね」と大歓迎されて、そこでようやく一カ月ぶりに物を食べることができたのです。最初はおかゆから食べさせられ、体を落ちつけなさい、と親切にしてもらいました。赤チンキを体につけてもらったり。本当に有難かったですね。二晩ぐらい泊ったと思います。

その後、富岡に帰ってきましたが、被爆しているためでしょう、体は弱くなりましたね。白血球が少ないこともあって、一時は相当心配しました。現在でこそ、子供も孫も元気ですが、私もまあ平常の体ですが、でもかぜなど家の中では一番ひき易いですね。

(一九八三、四、一談)

渡辺豊さんが描いた被爆5日後の広島



渡辺豊さんが描いた被爆5日後の広島

ภาพเมืองอิโรชิมาหลังจากระเบิดลง 5 วัน ที่คุณยุทธกะ วาดานาเบะวาด

18. 〈Iさんの証言〉

(当時小学六年 12 歳、男、原町市在住)

キラキラとゆっくり落ちてきた原爆のパラシュート  
膝の関節が変形し職にもつけない私

原爆のことは私はできるだけ忘れるようにしています。あまり気にしないようにしています。二人の子供たちにもくわしく話したいと思っていますが、実際話してみてもどれだけわかってもらえるか。子供たちは私が被爆者だということは知っていますが、あまり聞きたがらないようです。

私は昭和八年、長崎市中小島町に生まれました。兄弟は一人欠けましたが、二男六女で私はその二男でした。中小島町というのは、長崎駅からずっと南の方で、爆心地からは四キロメートル以上離れているところです。

長崎に原爆が落された八月九日、空襲警報が発令され、やがて警戒警報に変わってみんなが安心していた時、B29 がやってきて投下したと記憶しています。私は小学六年生で、その時暑くてパンツ一枚で家でマンガ本を読んでいました。爆音が聞えたので家の庭に出てみました。B29 が高いところを飛んでいて、だいたい十五センチぐらいに見えました。ところがその B29 から何かピラピラしたビラのようなものを落しました。キラキラというか、ピラピラというか、とにかく光ってゆっくりと落ちてきました。それが実はパラシュートをつけた原子爆弾だったんですね。それまで、何度もアメリカの飛行機からビラをまいていましたので、また、「日本は敗けた」とか、「避難せよ」とかを印刷したビラだと思っていました。それから十分か十五分経って、私も目をそらして庭にい



る時、突然、ピカーとすごい光を感じました。焼夷弾しやういだんが落ちたな、隣りあたりかなり近いところに落ちたな、「大丈夫か」などと考えていて、だから二、三分あとだと思います。今度はものすごい爆風です。木っ葉とか、塀の破片とか、屋根の瓦などが吹き飛んできたが、幸い私は塀に囲まれていてけがはしませんでした。家の中ではタンスの上のものが皆落ちたりして危なかったと思います。よく原爆のことをピカドンと言いますが、本当にそんな感じでした。

それから、はだしのまま、家の裏に住んでいた私のおばあさんのところにとんで行き、姉と妹と五人で家の裏山のお墓のところに避難しました。長崎駅のむこうの方、北の空にはモクモクときのご雲ができていました。何かこう、火薬の大爆発か、工場の薬品でも大爆発したのかと思われました。町のあちこちから火の手があがり、山の上だったのでよく見えました。きのご雲はだんだん大きくなって、なかなか消えないし、びっくりしましたね。夕方から夜になっても、三人でそのお墓のところで寝たりしていたのですが、自警団の人がやってきて、「夜にアメリカ兵が上陸してくるかもしれん。」というので、夜の十一時ごろだったでしょうか、親戚を頼って諫早いさはやに避難することになりました。三十キロぐらい離れた諫早へ、一晚中歩き続けました。途中でおにぎりの炊き出しをもらったりしました。

私の家は商売をしていて、その戦時中は、食糧とか衣類の配給所となっていました。中小島町や西小島町一帯の配給所でした。父は当日は、三菱造船所の技師で出勤していましたし、兄は十七、八歳で学徒動員というか徴用で長崎の川南造船所で働いていました。だから、五人で避難するしかなかったのです。

諫早に着いて翌十日、私は電々公社に勤めている人に連れられて、長崎の家に引き返しました。父や兄に連絡をとるためです。幸い父も兄も無事で家に帰ってきていてホッとしました。アメリカ兵も来ないだろうということで、また家族で家で生活するようになりました。

親戚の人や、近所の人で爆心地の方で行方不明の人がいたので、それから一週間ぐらい、リヤカーを引いて爆心地近くに出かけて行きました。父や兄や近所の人と一緒に行きました。そのころ、リヤカーを持っていたのは、配給所だった私の家ぐらいしかないので、そんなことを頼まれたんだと思います。爆心地の山里町を中心に、やけどをした人、死んだ人たちの間を捜して歩きました。道に倒れている人、防空壕の中、働いていた所、避難先、川の中の死体まで捜して歩きました。目的の人をようやく見つけ出し、リヤカーで運びました。全部で二十体ぐらい焼きました。並べて焼いたと思います。トタンの上に死体を並べ、倒れた家から木を集め火をつけて、完全に焼けて骨になるまで十五時間ぐらいかかったと思います。小学六年生でそんなことを手伝ったわけですが、こわいとは思わなかったですね。いつも家に父も兄もおらず、家の中で男手は私ひとりだったので期待もされていたし、責任感みたいなものもあつたんですね。無我夢中だったのかも知れません。

でも、特に忘れられないこともあります。それは、やけどをしたり、けがをした人々があちこちに倒れていて、その人達が「水を飲ましてくれ、水をください」と言って、私なんかの足に抱きついて離そうとしないんです。本当に足にしがみついてもう、「水をください」と叫んでいるんです。父などから、絶対やってはいけない、水を飲ませれば死ぬんだから、と厳しく言われていたので私もやりませんでした。でも、私は、どうせ死ぬかも知れないのに、あれほど水を飲みたがっているのに、と考えると、ある人に水筒の水を飲ませてやったのです。すると、本当にその人はその場で亡くなってしまいました。そのことが今でも心に引っかかっているというか、気になって忘れられないことです。でも一方で、いいことをしたんじゃないかという気もします。このことは、人には話していない初めて話すことですが。

その後、長崎の高校を卒業し、家庭内の事情もあって東京に就職しました。若かったのがむしろに仕事をしましたが、原爆、つまり放射能の後遺症なんか全く考えもしませんでしたし、また健康でした。ところが、昭和四十年ごろからどうも体の調子がおかしいんです。病気にかかり易く

直りにくいんです。特にかぜをすぐひいて寝こむことが多くなりました。これはおかしいな、働き過ぎたせいかな、と思いましたが、長崎の兄弟たちにもすすめられて、昭和四十五年十二月に初めて、被爆者健康手帳を交付してもらったのです。四十七、八年ごろからは骨の関節がどうもおかしくなりました。ちょっと力仕事をすると、手足がしびれたりして、ごはん茶わんも持てないほどです。特に足、膝の関節が弱くなって、もう現在ではごらんのように正座もできない状態です。まあ、以前ムチうち症になったので、そのせいも多少あるかも知れません。でも、やはり私の場合、投下直後の長崎市内を毎日歩いて被爆したのでしょう。

昭和五十年に原町に来ましたが、現在では被爆者としての検査に年二回、通院しますし、「高血圧、真性糖尿病、両変形性膝関節症」という病名で健康管理手当てをいただいています。右足が完全に變形してちんばになっています。体がだるく疲れやすく、最もひどい時は一カ月のうち二十日間ぐらい寝ていました。その時は仕事もできませんから、本当に自殺しようかと思ったほどです。本当ですよ。職を捜しに職安にも何度行ったかわかりません。職安の係の人も気の毒がってくれたのですが、私も適当な職もとうとう見つからずあきらめて職安に行くのを止めました。行きたくないのですが、軽い仕事があるというので、大熊町の原発へも職を求めて行きました。四、五年前だったと思います。被爆者ということも病弱だということもかくして応募したのですが、健康診断で高血圧ということで断わられてしまいました。

だから、今の私は無職で、今は女房に働いてもらい、私は家の中の仕事をするようにしています。洗濯をしたり、炊事をしたり、体に注意しながらなんとかやっています。このアパートの階段の登り降りなんかも大変です。それから、年二回の検査で白血球に異常があったこともあり、精密検査が必要だということもこれまで二回ありました。私の子供のことでも心配しましたね。高校二年生と中学三年生の二人いますが、小学生のころは二人ともひんぱんに鼻血が出て困りました。体も本当に弱く、病院につれていって診察してもらっても原因がわからないのです。苦労しました。中学生になったころから普通の子供のように元気になって、今では健康ですから本当にホッとしています。

今までお話しした原爆のこと、戦争のことなど思い出したくありませんね。こんな体になってしまい、自分のことを考えると、あの時死ねばよかったのかなあと思うこともあるのですから。原爆は本当にこわいですね。なんで長崎がやられたのか不思議です。

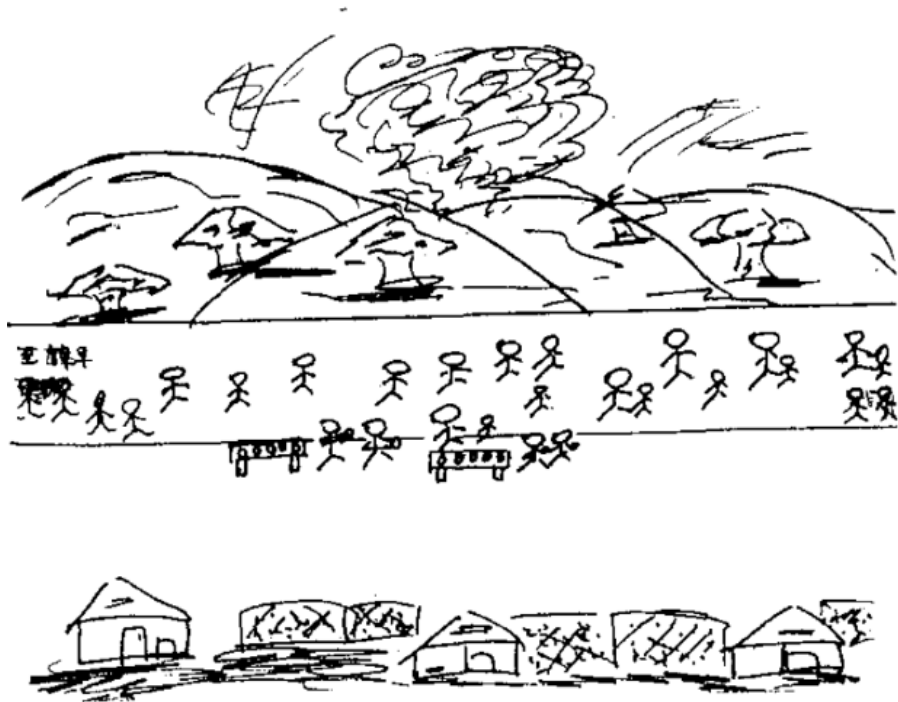
三菱なんかの兵器工場があったからかなあとも思います。今度戦争が起これば生きてはおれない、すべてはおしまいですね。今は平和だから本当にいいなあと思います。私の子供たちは戦争なんかへ絶対行かせたくありません。子供へも言っています。「自衛隊なんかに行くんじゃないよ」って。私も行かせませんし。軍備は全然ないのもなんだけど、これ以上増やすのには反対です。こわいですね。

被爆者としての話をきいてくれてありがとう。なんでもできることで協力したいと思います。いつでもこんなふうに家に閉じこもっているの、なにかあったらまたおいで下さい。五月に開かれた市文化センターでの『にんげんをかえせ』映写会にも行きたかった、行こうかなあと思いましたが、行けないで……。本当にありがとう。

(一九八二、一〇、三一談)

「さんが描いた長崎の被爆の状況

長崎浦上地帯一面火の海、その火の明りで遠方からも長崎の惨状が分かるほどだった。



鳴原、諫早方面への国道を、親戚や知人を頼って避難する老人女子供達。沿道には農家の方達が、おにぎりを出して元気付けてくれた。

19. 〈Jさんの証言〉

(当時 18 歳、男、原町市在住)

手を握ったまま亡くなった校友のこと

私は福島市出身、昭和二年生れです。長崎で原爆を体験した時は、長崎神学校という専門学校の生徒でした。その学校は二年制で全校生が一〇〇名程度だったと思います。徴用のがれのために入学していたのです。生徒は長崎付近の出身者が多く、福島からは私ひとり、宮城県からもひとりぐらいだったと思います。

戦争も激しくなって私たちも動員で長崎市内のあちこちの工場で分散して働いていました。その日も、私は南山手町という爆心地から南へ、四、五キロメートル離れた工場で働いていました。だから工場の中にいる時、原爆が投下されたわけです。ものすごい音がして、爆弾がすぐ近くに落ちたような気がしました。屋根瓦が落ちてきたり、ガラスが破れて、私の肩に刺さりました。このとおり肩に三、四センチの傷が今でも残っています。私の被害はそれだけで、別に熱線とか放射能の影響は全く受けていません。

その後、きのこ雲が空いっぱい広がってきて、町も暗くなったことを覚えています。工場内の後片付けなんかをしました。数時間後に、あちこちに分散していた校友たちが、三菱工場で作業をしていた校友たちですが、ひどい格好で学校に戻ってきました。ひどいやけどを顔にしている、皮がぶらさがっていて、その皮をはさみで切って薬をぬってやったり。薬といっても赤チンキとか、

亜鉛化軟膏なんかのありあわせの薬で、それも少なく四、五人でなくなったみたいです。顔なんかひどいやけどをすると、すごくふくれるものですね。皮がむけたのはピンクというか、赤くただれてひどいもんです。学校の寮が臨時の救護所になったようなぐあいです。私たちは元気だったので衛生班を組織して、やけどをしたり、けがをした校友たちのだれということなしに看護をしたわけです。看護したり手当をするといっても、薬もないし、食糧ありません。担架で運ぶ途中で死んだ人もいました。長崎の近くの出身の負傷者は、やがて家族、親が迎えに来てひきとられていき、だんだん少なくなっていきました。

ある校友は、私が手をにぎっているうちに亡くなりました。冷めたい手でしたね。石橋という友達でした。最後に「お世話になりました」と私に言って亡くなりました。父親がかけつけてきましたが、今でも忘れられないことです。

負傷した校友の手当をしたりしても、別に気味わるいとか、くさいとかそんなことを考える余地なんかありませんでした。夢中だったんですね。

爆心地付近へは一週間後ぐらいに行きました。一面の焼野原で、どこを歩いてよいのか道もわからないで、私は便所のために落ちたりして。黒こげの死体もころがっていたようです。なんとんでも、ひどい臭いがしていました。腐ったような、人の斃けたような、なんとも表現できないひどい臭いでした。

長崎には昭和二十一年の三月までいました。

戦争そのものが罪悪です。車国主義の時代はもう二度と来ないでもらいたい。反核運動、民運動で戦争のない社会ができれば理想ですね。市の文化センターで上映された「にんげんをかえせ」も、女房と見に行きましたよ。五月の時で大混雑していた時です。がんばって下さい。

(一九八二、一〇、三一談)

## 20. 〈Kさんの証言〉

(当時 16 歳、男、相馬市在住)

B29 から食糧でも落してくれたのか

私は昭和三年十一月、相馬市生れです。昭和十八年四月から十九年の一月まで東京の山川製薬株式会社で火薬づくりの仕事をしていて、ほとんど徴用と同じだったので志願して海軍に入りました。一旦相馬に帰り二月三日に出征祝いをしてもらい、また東京の工場でも二月五日に出征祝いをしてもらいました。横須賀の武山海兵団に入団したのが昭和十九年の二月五日で、この相馬市の原釜で大火があった日です。

海軍に入って訓練は非常に厳しかったですね。私は背も小さかったのでハンモックつりなんか大変でした。十九年の五月五日には、横須賀から青森県の大湊に第二十六期の機雷兵となって一等兵に昇級しました。最後の機雷兵だと思います。さらに十月二十五日には第七二号駆潜特務艇乗組員となって十一月には上等兵になりました。実務でどんどん昇進したんです。そして、北太平洋方面のアリュシャン列島や樺太、北海道などを巡りました。実戦は魚雷を一回うけたぐらいで、そんなに激しいことはありませんでした。この軍隊手帳に書いてあるように、その間、「戦務甲」というのをうけました。この「戦務甲」というのは実戦での、いわゆる最高の手柄をたてた時にうけられるもので、これが三回で金鶏勲章きんけいをもらえるわけです。戦務甲・乙・丙・丁と四種類ありますが。

次に横浜警備隊の船舶警備兵になりました。貨物の輸送船などに二、三名で乗り組むわけですが、東南アジアに行った場合は最も戦死する例が多かったんですね。幸い私は外地には行かず内

地にだけいました。昭和二十年三月二十九日に横浜警備隊の鹿児島支部付になって赴任しました。鹿児島では鹿屋飛行場が近かったので、朝早く特攻隊が出ていくのを何度も見えています。十機から二十機ぐらい沖縄方面に出ていくのですが、帰るのはわずかで、「ああ、やられたんだな」などと思っていました。また桜島の上空で、日本軍とアメリカのグラマン機の空中戦も日撃しました。日本の飛行機なんか白い煙を吐いたなと思ったらすぐに爆発してまって、日本兵はパラシュートで脱出したようでしたが。それから鹿児島ではアメリカの飛行機からばらまかれた宣伝ビラを拾いました。「時は至れり五分前」と印刷されたもので、もう日本本土攻撃も時間の問題で、はやく降伏しなさいという内容でした。五、六枚拾いましたが、どこにいったかももうなくしてしまいました。

六月九日に今度は長崎支部付になってそこで被爆することになるのです。長崎ではずっと南の出島あたりの警備にあたっていました。長崎は空襲はなかったのですが、佐世保などはよくやられていたようです。B29 が五十機ぐらい編隊を組んで佐世保に向っていましたが、本当にこわかったですね。空がこう黒くなってこちらに向ってくるようで、全くばかな話ですがゴミ箱のかけにかくれたりしたこともあります。ゴミ箱のかけで助かるわけがないのに。

八月九日、長崎の原爆投下の日ですが、朝からいい天気です暑い日でした。私は警備隊といってもそう仕事があるわけなし、火薬庫か何かの基礎づくりのためスコップで土方のような作業をしていました。大浦町二番地というところで、爆心地から南の方、約四キロメートル付近でした。九時半ごろ、B29 が一機、上空を旋回していた記憶があります。また多発のロッキード P38 という胴体の白いアメリカ機も飛んできました。九時からずっと警戒警報が発令中でした。

十一時ごろですね、原爆が投下されたのは。B29 から何かパラシュートで落したな、と私は見ていました。千メートルぐらい上空から、初めはごまつぶぐらいに小さく見えました。その時私は、アメリカは親切な国だから、食べ物が不足している日本人のために食糧でも落してくれたんじゃないか、と本当にそんな気持ちで見えていました。爆発の瞬間まで私は見ていたわけじゃありませんが、爆発するまでは一分以上、ずいぶんあったように思います。目撃者も多いはずですが、爆発はものすごい閃光でした。雷がいくつも一度に落ちたようで、みかん色のような閃光だったような気がします。光だけでなく、それは熱線で、まるで焼きひばしを体に押しつけられたような、大変熱いものでした。すぐに爆風がおこりました。雷の何十倍もの音をとめない、すごい力で私は二メートルぐらい吹き飛ばされ、胸をうったようでした。いざという時の習慣で、両手で目と鼻と耳をおさえたような気がします。なんしろ、すぐそばに爆弾が落ちたと感じました。運よく、私自身はそれほど火傷やけがはしませんでした。空を見上げると方角なんてわかりませんでした、不気味なおかしな黒っぽい雲ができていました。きのこ雲ですね。

すぐに隊本部に帰ってみると、瓦はめっちゃめっちゃ、屋根はずれたりしていました。それから長崎市内に一般人の誘導に向いました。大浦町から北へ長崎駅あたりまで行きました。駅の北の方が爆心地でしょうから、あまり爆心地の近くまで行かないでよかったと思います。それでも、鉄の扉が弓なりに曲がってしまっていたり、火事があちこちで起きていて、特に石油会社のドラムかんがすごい音とともに爆発し、火を吹いて上空に吹っこんでいたり、十二時間以上も町は燃えていたようでした。子牛のセリ市をやっている、何十頭もの子牛がばらばらに逃げて、私たちは一、二頭つかまえて殺してあとで食べたりしました。あれはうまかったですよ。まあ、その話はともかく、白い着物を身につけていた人はまだ良かったのですが、黒いものや 色ものを着ていた人は火傷がひどかったですね。女の人のかすりのもんぺで黒いところが焼けていたり、顔の半分が火傷で水ぶくれになっていたり、髪かチリチリに縮れてしまったり、熱戦をうけた片方だけ火傷して、片方は何んともなかった人もいました。私のすぐ近くにいた若い女の人も歩けないので助けてやったりしました。救護や応急手当をしてやるといっても、たいした薬を持っているわけじゃなく、黄色いアクリノールという外傷薬をぬってやるぐらいでした。ほんの気休めなんです。キズ薬として歯みがき粉をつけているようなもんです。

八月十五日の終戦の放送、たしか正午でしたね。私は民家の農家で聞きました。八月二十五日には相馬に復員し、家業の左官を継ぎました。原爆手帳もやがて交付してもらいましたが、まあ健康でこれまでやってこれました。年二回の検査で、原町保健所で一時、危険状態だから仕事も休みなさいと言われたことがありましたが、気にしないで普通どおり生活しましたよ。子供も二人ですが健康です。

私は運も良かったと思います。横浜の大空襲の時だって、私が横浜を離れた二日後ですし、長崎でだってたいした被爆でなかったですし。戦争はだれでもそうでしょうが二度とくり返してほしくないですね。子供のためにも、子供たちがかわいそうです。

(一九八三、五、二二談)

## 21. 〈清野肅郎さんの証言〉

(原町市本町在住)

新聞記者として第五福龍丸を取材

第五福龍丸事件の時、私は三十一歳。朝日新聞の静岡県島田市通信局の記者でした。

世紀の大事件であるこの第五福龍丸事件について、私に第一報が入ったのは、三月十六日の午前三時ごろだったと思います。本社から、「ロイター電で、焼津の漁船が何か光を見てやけどをしたらしいと入電した。すぐに調べよ」と言ってきたのです。その頃ちょうど島田市で少女の誘拐殺人事件があって、私はそちらの取材に追われていたのですが、朝日新聞の島田通信局員は私ひとりでしたから、すぐにタクシーで焼津にとびました。東海道、国道一号線はその頃舗装もしてなかったか、簡易舗装ぐらいしてあったかな、松並木なんかそっくり残っていて。

焼津に着いたのは明方の六、七時頃でした。早速、港に行き第五福龍丸を取材しました。乗組員に話を聞いたり、船の写真を撮影したり。「ピカッとした光を見た」とか「灰のようなものが降ってきた」とか話していて、乗組員なんか元気で、どこもやけどをしている様子なんか感じられませんでしたよ。魚をとる網なんかを片付けていました。

私も船の甲板にあがり船の中に入ってみたり、白い灰のようなものを直接、指でつまんだりしました。今でこそ、「死の灰」とわかりますし、その放射能の恐ろしさがわかっていますからそんなことするはずありませんが、その時は、誰も放射能のことなんか知らない。知らないってことは本当に恐ろしい。「死の灰」を指でつまんでみると、米粒の半分ぐらいで、塩のかたまりのような、ふわふわしているような白い粒々でしたよ。ほうきでかき集めビンにも入れました。今考えるとヒヤリとします。

昼頃になって各新聞の本社からワンサと取材にやってきました。朝日の社会部からは弓田美喜男記者が、その日の夕方に応援に来ました。それから一週間ぐらいは私はもう寝る時間もなく取材に明け暮れました。取材すると同時に、私は若手の下っ端の記者ですし、地理を知っていたので案内したり、漁協なんかに使い走りさせられたり。全く忙しい毎日が続いて私はとうとう倒れてしまいました。

この事件をスクープし、三月十六日の朝刊で他紙を出し抜いて特種として報道したのが読売新聞です。この世紀の大事件をスクープしたのが、その時、焼津の読売通信局の記者だった阿部君です。彼は大学を卒業したばかりで、焼津の第五福龍丸の持主の親戚の家にもちょうど下宿していたわけです。三月十四日に被曝したとわからないまま船が焼津に帰港したのですが、その下宿の高校生の息子さんが、「どうも船の様子がおかしい」とその阿部君に話したことがきっかけになったそうです。幸いにも読売新聞では「ついに太陽をとらえた」という原爆の連載を企画していた時点で、それを読んで「おかしい」と感じたわけです。阿部君は早速、二十行足らずの原稿を本社に

送り、ピンときたデスクが十六日の最終版で報道してスクープになったわけです。だから、その連載企画がなければボツになるような原稿だったと思います。知識が豊富で相当の自信がなければ、一面トップで報道するはずはありませんから、本社のデスクワークだったとも思えますよ。

阿部君はたしか静岡県伊東の僧侶の息子さんで、私も同じ記者なのでずい分親しかったですよ。人が良くてね、一緒に食事をしたり、金を貸したことなんかもありますし、いつも遊びに来ていたり。この事件の特ダネで彼は菊池寛賞を受賞し、本社勤務になったはずですが。その後退社して今は伊東にいるはずですが。

この事件でマグロの汚染のこともずい分話題になりましたね。放射能に汚染されたマグロを回収して相当の量を埋めて処分しました。全国的に「水爆マグロ」というわけで食べる人もいなくなり、値も暴落したはずですが。関係ないマグロまですべて回収されたりして。食べれば放射能に犯されると、まるで放射能を汚染病のように考えていたんですね。今から考えると見当はずれの対策ばかりですよ。放射能についてアメリカは一切アドバイスはなし、政府もどうして良いのかわからなかったんですよ。ましてや一般の漁民や市民だって何んにも分かっていなかった。原爆や水爆がどんなふうに爆発するのか、放射能とか半減期がなんとかこうとか、などというものも当時は知識がなかったんですね。

だから、第五福竜丸の被爆した乗組員への対策だって同じです。初めはちょっとやけどをしたぐらいに考えていて、急性放射能症だなんてわからない。藤江保健所の医者もわからないので、静岡の衛生研究所にまわされ、それでもわからない。東大病院でようやく「放射能のせいじゃないか」ということで入院する。それだけ当時は無知だったんです。

私も「死の灰」を直接指でつまんで、多少は被爆したかもしれませんが、別に病院にも行ってませんよ。勿論体に異常はありませんから。でも、二、三日後にガイガー・カウンターで放射能を測定され、頭髪に反応があらわれて頭髪を全部刈ったように記憶しています。ほかの記者でも丸刈りにされた人もいましたね。船自体もすぐに危険区域ということで立入禁止になりました。

九月に死亡した無線長の久保山愛吉さんのことですが、私に言わせれば、放射能が原因になっているかも知れませんが、直接原因は黄疸が死因だと思います。奥さんのすずさんも初めは漁師のお母さん、という感じで貧しい生活をしていたはずですが。マスコミからの問い合わせにどう答えたら良いのか、などと焼津の記者クラブに來たりして、私も文章なんか書いてやったり、一緒に考えてやったりしました。今では人前で堂々とお話をされているようですが。人間も場をふんでいけば立派になれるんですね。経験が大事なんですねえ。

ともかく、この事件は、広島・長崎に次ぐ第三の被爆事件、しかも平和時における大事件でした。そして、被害者は日本人ばかり。私個人としては本当に触れられたくない、記者として「抜かれた」大事件なのです。

## 第五福龍丸事件とは

広島・長崎の原爆投下から九年目の一九五四年(昭和二十九年) 三月一日、アメリカは中部太平洋マーシャル諸島のビキニ環礁で水爆実験(キャッスル作戦)を行った。この実験は珊瑚礁の島のやぐらの上で爆発させる地上爆発であったが、多量の石灰岩の粉末を上空に吹きあげた。付近の島や海だけでなく遠く離れて操業中の日本漁船にもこの白い粉は強い放射能をふくんだ「死の灰」として多量に降りそそいだ。

当日、静岡県焼津港所属のマグロ漁船第五福龍丸(一五六トン)は、ビキニ環礁の東方百六十キロの危険水域外で操業中であった。一瞬、南西方向の水平線に「西に昇る太陽」の閃光を見、七、八分後に爆発音を聞き、約三時間後に白い「死の灰」を船上一面にかぶった。水爆「ブラボー」は広島型原爆の約一、一五〇倍、十五メガトンの威力をもち、当時としては史上最大のものであった。

第五福丸は魚も船体も、二十三名の乗組員も汚染されたまま、三月十四日焼津に帰港。十六日読売新聞が「水爆か」とスクープ。以後、国内は言うに及ばず、国際的な問題に発展。乗組員全員が急性放射能症におかされ、九月二十三日、無線長の久保山愛吉さんが死亡。第五福龍丸は、広島・長崎に続く第三の被爆事件として、原水爆の犠牲の象徴となっている。

## 被爆体験者の聞き書きを終えて

山崎健一

この被爆体験談集が発行されるに至った経過はこうである。

昨年一九八二年、反核反戦の市民運動の一つとして私たちは10 フィート運動の原爆記録映画の上映をこの原町市で行なった。その上映運動の過程で、高校の教師を中心に一般市民も加わって、私たちの会、「原水爆を考える原町市民の会」も成立した。原町市公民館を会場に、『にんげんをかえせ』を上映し多数の市民や子供たちが入場した。六月にはその映写会の感想文集をささやかながら発行した。また八月には、原町市の後援のもと市長さんの入場もいただいて『予言』の映写会を開催し、その感想文集を再び手作りの文集として発行しようと計画していた。

ところがその頃になって、兵隊として、あるいは出身地としてヒロシマやナガサキで被爆された方々が私たちの町にも生活しておられることがわかってきた。そしてすでに、七年前の一九七七年夏に、NGO(国連非政府組織)被爆問題国際シンポジウム福島県推進委員会の呼びかけに応じて、当時の原町高校の社会科の先生方(松谷彰夫、大内秀夫、新妻慎一、大竹篤、守谷早苗の各教諭)が、相双地域の七名について調査を済ましており、七七年秋の原町高校文化祭にはそのうち五名の被爆体験談が発表されていた。

そこで、映写会の感想文集のなかにその貴重な体験談も掲載しよう、掲載のためには単に転載するだけでなく、もう一度直接会って了承を得てからにしようということに話が進んだ。早速九月から体験者を一人一人訪ねはじめたのだが、その五名のほかに、最終的には全部で二十名ほどの体験者がおられることがわかってきた。勿論、管轄の保健所からお名前を聞き出したわけではなく、体験者を通して一人ずつ判明したものである。さらに、ヒロシマ・ナガサキに次ぐ第三の被爆事件といわれる第五福龍丸を当時取材した新聞記者も、原町市内にいらっしゃることも聞き出した。次々に体験者を訪ねて被爆の様子や当時の状況を記録してまとめるうちに、手作りの文集などではどうにも手に負えない分量になってしまい、また内容も貴重なお話ばかりで、一冊のきちんとした冊子にして出版した方が良いのではないかと、ということになった次第である。

いずれにせよ、時間的にも距離的にもヒロシマ・ナガサキから遠く離れていて、原爆などとは無縁のはずのこの東北の片田舎、福島県相双地域でさえこれだけの被爆体験者がおられることは大きな驚きであった。それだけ原爆や戦争の爪跡は深く広く、しかも現在も依然として進行中の深刻な社会問題なのである。せっかく心を開いて勇気を奮って、あの忌わしい体験を詳細に話して下さった方々のためにも、また一般市民に子供たちに、原爆や戦争の実相や無意味なことを考えていただくためにも、出版する意義はあると考えた。

いざ体験者を訪問し、お話をうかがう時には大変神経をつかった。初めは、体験を話すことをためらったり、断わられる方も出てくるのではないかと不安の方が大きかった。被爆者であることを家族にも知らせていない場合もあると考え、直接本人に会って私たちの主旨や目的を理解してもらうよう心がけた。遠方でやむをえない場合だけ、電話で問いあわせたが、その場合も直接本人に手短かに説明し、会える時間を作っていただくようお願いした。訪問の時も、なるべく二、三人か一人でひっそりと訪ねるよう気を配った。



幸いにも、私たちが知りえた二十名のすべての方々のご理解を得ることができ、会ってお話をうかがい、また出版物にして公表するお許しもいただきました。原爆を語ることなどはタブーであり、まして被爆者への認識など皆無と言ってよい、この狭い地域社会の中で、特にお名前の公表を認めてくださった方々の勇氣には、大変敬服し、また感謝申し上げるばかりである。しかも、「良い仕事だ」「私も体験談をまとめておきたかった」「しっかりやってください」と励まされるに及んでは、私たちも大変勇氣づけられた。ただ、さまざまな事情からお名前の公表を控えたい方は匿名として、ご迷惑のかからないように配慮した。

一人一人お話をうかがってみると、映画『にんげんをかえせ』や『予言』の画面以上のすさまじさで、さすがに体験者でなければ、その場で直接遭遇していなければどうも考えつかないような場面が、各体験談の随所に見うけられる。たとえば、多くの死体に囲まれて自分も死んでいるのではないかという錯覚を起したり(飯土井鶴吉さん)、腕時計と引きかえに水をくださいと哀願する女学生のこと(桑原馨さん)や、人間の死体はその体の油でどんどん燃えていくという実感(中川善久さん)や、復員列車の惨状たる状況(渡辺豊さん)、などなど、いかにもリアリティが感じられる。あまりの悲惨さに聞き手の私たちも話について引き込まれ、ノートを取る手が動かなくなったり、また私自身の猟奇趣味、単なる好奇心でたずねているのだろうかと思問自答したこともある。さらに、体験者自身も話をしているうちに当時を思い出して涙ぐむこともあって、私たちのこの仕事はかえって体験者を苦しめているのではないかと考えたりもした。それに、ヒロシマとナガサキで二重の被爆を体験し、私たちがお会いした方の中では最もひどい後遺症に今もなお苦しんで、入院と退院をくり返しているHさん。慰めや励ましの言葉が一体何になろうと、私たちの無力さを思い知らされた訪問もある。

原爆が炸裂のその瞬間、わずか数秒のことも、実によく記憶されている。ほんの一瞬でも人間は相当のことを頭の中で考えるものだと感心し、決定的瞬間には時間は止まるのだろうか、とも考えた。そして、ほんの偶然によって辛うじて直接被爆を避けられた方も多し、被爆によって、あるいは被爆後に体験者自身が死線をさまよいながらもようやく一命をとりとめた方々も多く、そこに何かしら人間の運命のようなものを感じとることもできようか。踏切でトラックが止められたために命びろいをしたAさん、意識を失ったところを誰かが安全な場所に運んでくれたために助かったCさん、建物のかげにいて軽く済んだという桑原さんやEさん、被爆後に麻酔なしで盲腸手術をし、不十分な手当てで死を覚悟した中川さん、など。

さらに、たくさんの方々に会いながら、必ずと言ってよいほど各体験者が忘れられないと語っているのが、幼い子供たちや女学生のことである。極限状況の中でも、人間はやはり幼いものや弱者へのいたわりや同情の気持ちを強く持ち続けているのだろうか。そこに人間の優しさのようなものが感じられてうれしく思った。終戦を迎え、ヒロシマやナガサキから肉親の待つ遠い生家へあえぎながらも復員する途中の状況も克明に語られている。復員はできたものの、誰しもが生活に追われていた戦後の混乱の中、放射能の後遺症という思いもかけない苦しみをかかえ、人知れずさまざまな苦勞を重ねて三十八年間、体験者がひたむきに生きてきたその強さには激しく感動した。原稿をまとめている深夜、私自身体験者に同情しふっと涙ぐんだり、また戦争をおこし原爆を製造させ投下し、また、そうさせてしまった指導者への怒りを新たに。また何らかの形で軍隊の真の姿や本質を垣間みて、軍隊や戦争や原爆を厳しく批判している生の声も聞くことができ大変うれしかった。それに、平和を守るためには教育者、学校の先生方の役割も大きいという二、三の率直な指摘もあった。私たち生徒を育てる教員にとって、月並みだがその責任の重さを再認識し、「その立場でできることをやろう」という励ましとして受け取った。

体験者が話すことはテープレコーダーには録音しないで、ノートにメモするだけでそれを文章にした。テープを使用すればそれに頼って私たちの記憶があいまいになるから、初めからメモだけにした。それにテープを準備したりカメラを構えたりすれば、体験者自身がそれを意識するのではな

いかという危惧もあった。自由に思い出すままに率直に語ってはしかなかった。だから写真は一枚も撮影していない。話されたことの正確を期すため、文章に直したものをあとで体験者に読みかえしていただき、聞き手の脚色が加わらないようつとめたつもりである。さらに体験者自身最も印象に残っていることを自ら絵に描いてくださるようお願いし、この冊子に同時に掲載した。いずれも素人の絵とはいうものの大きな迫力で私たちに語りかけてくる。

また、ここで体験を話していただけた方はまだしも、この相双地域の出身者でヒロシマ・ナガサキの波爆によって命を奪われ、名も知られずに葬られてしまった方々も案外多いのではないかとも考えた。復員しても被爆の放射能障害に苦しみ、原因もわからないまま単なる怠け病、ブラブラ病という誤解のままに厄介者として亡くなった方もいて、その無念さに胸が痛む。一昨年になるが、この相双地域の被爆者で放射能の後遺症に苦しみ将来を悲観して、自ら命を絶たれた方もいる。原爆や戦争が決して風化も化石化もしていない現在の問題であることを如実に物語っている。被爆体験者もすでに高齢に達し、ここ五、六年の間に亡くなられた方も相双地域だけでも数名になる。その多くの死因がガンであると伝え聞いて気が重くなる。確実に被爆しているにもかかわらず、証明者がいないため被爆者の認定も手帳の交付も受けられず放置されたままの方もいる。たとえ認定され手当を受けていても不十分で、後遺症の治療などに経済的な負担も大きいと訴える方も多いのが現状である。懸案の被爆者援護法など早急に制定させなければとも考える。

最後になりますが、この体験談集のために勇気をもって被爆の状況を話してくださった二十一名の方々に、謹しんで心より感謝申し上げますと同時に、今後のご健康とご多幸を切にお祈り申し上げます。更に、ヒロシマ・ナガサキの原爆をはじめ、戦争で亡くなられた方々のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

(一九八三、六、一〇記)



h.u.l.

(จาก HIDANKYO “Hibakusha kara anatani, Ima Tsutaetaikoto” หน้า 1-20)

## เกริ่นนำ

ตั้งแต่ที่สนธิสัญญายกเลิกอาวุธนิวเคลียร์มีผลใช้บังคับในวันที่ 22 มกราคม ค.ศ.2021 หลังจากการทิ้งระเบิดปรมาณูที่ฮิโรชิมาและนางาซากิผ่านไป 76 ปี ในที่สุดกฎหมายสากลได้จัดให้อาวุธนิวเคลียร์ไม่ว่าจะในความหมายใดเป็นเรื่อง “ผิดกฎหมาย” เป็นครั้งแรก

นับเป็นปีที่ 65 ที่เหยื่อระเบิดปรมาณูจากทั่วประเทศรวมตัวกันก่อตั้งองค์กรระดับชาติในชื่อ “The Japan Confederation of A- and H-Bomb Sufferers Organizations” (HIDANKYO) ในค.ศ.1956 พวกเขาได้แสดงความคาดหวังว่าไม่อยากให้มีผู้ใดในโลกต้องกลายเป็นผู้อับรังสีอีกแล้ว มนุษย์ไม่ควรต้องใช้ชีวิตอยู่ร่วมกับอาวุธนิวเคลียร์ พวกเขายังพยายามเรียกร้องให้กำจัดอาวุธนิวเคลียร์ให้หมดในขณะที่ยังมีลมหายใจอยู่ สำหรับผู้ได้รับผลกระทบจากสารกัมมันตรังสีแล้ว เป็นเส้นทางอันยาวไกลเหลือเกิน

ในบางส่วนของความคิด พวกเขาจะคิดถึงภาพของครอบครัว มิตรสหาย ผู้สูญเสียจากระเบิดปรมาณูจำนวนมาก และผู้อับรังสีที่ต่อสู้อาตมาตลอดที่เสียชีวิตไปก่อนกฎหมายนี้ถูกบัญญัติขึ้น

ความมานะพยายามของผู้อับรังสีตั้งแต่เริ่มก่อตั้งองค์กรจนถึงทุกวันนี้ ได้สื่อสารไปถึงผู้คนในทั่วโลก จึงได้มีวันที่นำภาคภูมิใจเช่นนี้ ก่อนจะเริ่มประกาศสนธิสัญญานี้ขึ้น เทรุมิ ทานากะ ประธานกรรมการองค์กรฯ กล่าวว่า “เรามาถึงครึ่งหนึ่งของเส้นทางสู่การกำจัดอาวุธนิวเคลียร์ให้หมดไปแล้ว” และกล่าวต่อว่า “ส่วนที่เหลืออีกครึ่งหนึ่งนั้น จะเป็นเส้นทางที่ลำบากยากเย็นมาก”

สนธิสัญญายกเลิกอาวุธนิวเคลียร์จะนำมาใช้เพื่อการเริ่มต้นที่จะนำไปสู่จุดจบของอาวุธนิวเคลียร์อย่างจริงจังได้ ยังมีปัญหาอีกมากมายอยู่ ปัจจุบันมีอาวุธนิวเคลียร์อยู่ถึง 23,400 ลูก ประเทศที่มีอาวุธนิวเคลียร์อยู่ในครอบครอง และประเทศอื่น ๆ ที่ยึดติดกับ “การใช้อำนาจกดดัน” และที่สำคัญ ประเทศของเราซึ่งเป็น “ประเทศเดียวในโลกที่ถูกทิ้งระเบิดปรมาณูจากสงคราม” เองก็ยังหันหลังให้กับสนธิสัญญานี้

หนังสือเล่มนี้ ผู้อับรังสีมีความหวังว่า “อยากช่วยเหลือผู้คนจากอันตรายของมนุษยชาติ ผ่านประสบการณ์ของตัวเอง เพื่อช่วยเหลือตัวเองไปในขณะเดียวกัน” (คำกล่าวในวันก่อตั้งองค์กร) อยากจะก้าวผ่านความทุกข์ทรมานจากภัยระเบิดปรมาณู และเหนือสิ่งอื่นใด คือหวังว่า “จะต้องไม่ทำให้มีผู้อับรังสีอีก” พวกเขาเฝ้ามองเส้นทาง 65 ปีที่ผ่านมา ประสบการณ์ “นรกระเบิดปรมาณู” ที่ผ่านมา ต้องมีชีวิตอยู่ภายใต้ความเจ็บปวดรวดร้าวทั้งร่างกาย ชีวิต และจิตใจ เรียกร้องให้กำจัดอาวุธนิวเคลียร์ให้หมดจากทุกประเทศทั่วโลกมาตลอด เพราะไม่อยากให้ผู้ใดต้องพบกับความทุกข์ระทมจาก “นรกระเบิดปรมาณู” และ “ชีวิตในฐานะเหยื่อสารกัมมันตรังสี” อีกต่อไป

การรณรงค์ต่อสู้กับ “ระเบิดปรมาณู” ของผู้อับรังสีมีความเป็นมาอย่างไร ทำไมพวกเขาจึงเรียกร้องให้ “กำจัดอาวุธนิวเคลียร์ให้หมดไป” และ “ให้มีการชดเชยต่อผู้เสียหายจากระเบิดปรมาณูในระดับประเทศ” อยู่จนถึงปัจจุบัน และยิ่งรณรงค์เรื่องนั้นในตอนนี้อย่างไร

เราปรารถนาให้ทุกท่านได้ร่วมรับรู้เส้นทางการรณรงค์ของเหยื่อผู้อับรังสี และเชิญชวนให้คิดว่าทำอย่างไรจะช่วยให้ยุคที่มีอาวุธนิวเคลียร์บนโลกใบนี้จบสิ้นลง

## ระเบิดปรมาณูทำอะไรไว้กับมนุษยชาติ

### 1. ความสูญเสียจากอาวุธนิวเคลียร์ครั้งแรกในประวัติศาสตร์

#### ประสบการณ์แรกของมนุษยชาติ

ระเบิดปรมาณูถูกทิ้งลงจากอากาศโดยทหารสหรัฐอเมริกา 600 เมตรที่อิโรชิมา เมื่อวันที่ 6 สิงหาคม ค.ศ.1945 เวลา 8.15 น. และหลังจากนั้น 3 วันคือ วันที่ 9 เวลา 11.02 น. ประมาณ 500 เมตรที่นางาซากิ ลูกไฟจากแรงระเบิดที่เกิดขึ้นมีความร้อนสูงถึงล้านองศา ขนาดบนพื้นดินยังร้อนกว่า 3,000-5,000 องศาเซลเซียส เส้นความร้อนที่รุนแรงเผาไหม้ตั้งแต่ศูนย์กลางของระเบิดแผ่ออกไปกว่า 2 กม. ทำให้มีผู้เสียชีวิตและบาดเจ็บจำนวนมาก นอกจากนั้นลมระเบิดหลังจากระเบิดแล้วพัดจากศูนย์กลางระเบิดไปกว่า 1.5 กม. ทำลายบ้านเรือนที่ทำด้วยไม้พังราบในชั่วพริบตา

จะเห็นได้ว่าระเบิดปรมาณูทำให้เกิดความร้อนรุนแรงและลมแรงอย่างที่ไม่มียุทธวิธีใดมาเปรียบเทียบกับกันได้ สิ่งที่แตกต่างกันจากอาวุธอื่นอย่างเห็นได้ชัดคือ มันทำลายเซลล์ของมนุษย์ และยังมี “สารกัมมันตรังสี” ที่สามารถทำร้ายยีน (ระบบพันธุกรรม) ระเบิดปรมาณูที่อิโรชิมาและนางาซากิ ต่างใช้พลังงานที่ปล่อยกัมมันตภาพรังสี จากการเผาผลาญนิวเคลียร์ด้วยยูเรเนียม พลูโตเนียม ความน่ากลัวของมันไม่เพียงแต่พลังอำนาจทำลายล้างอย่างรุนแรงในขณะที่ระเบิดเท่านั้น ยังก่อให้เกิดผลกระทบระยะยาวด้วย

ผู้คนที่คิดว่ารอดชีวิตแล้ว เมื่อได้เดินทางเข้าไปตามหา ช่วยเหลือ หรือจัดการกับศพของครอบครัว ต้องถูกคร่าชีวิตไปด้วยภัยจากการอาบรังสีอย่างเฉียบพลันคนแล้วคนเล่า นับถึงปลายปีเดียวกันนั้น ผู้คนเสียชีวิตกว่า 140,000 คนที่อิโรชิมา และ 70,000 คนที่นางาซากิ คนที่เหลือรอดมาก็ต้องมีชีวิตอยู่อย่างหวาดระแวงในผลกระทบจากระเบิดปรมาณูที่จะนำไปสู่ความตายในภายหลัง

วันนั้น ผู้คนจำนวนมากที่ผ่านประสบการณ์ระเบิดปรมาณู ไม่เคยรู้ตัวมาก่อนเลยว่าจะเกิดอะไรขึ้น คำบอกเล่าจากผู้เห็นเหตุการณ์ไม่น่าเชื่อว่า “ระเบิดลงที่บ้านของตัวเองพอดี” “คิดว่าถังแก๊สของบ้านข้าง ๆ ระเบิด” เมื่อออกไปนอกบ้านจึงเพิ่งได้เห็นภาพอันน่าสะพรึงกลัวของสิ่งที่ไม่อาจนิยามเป็นอย่างอื่นได้เลยนอกจากคำว่า “นรก”

“ศพที่ถูกเผาไหม้จนแดงบวมกองซ้อนกันเป็นภูเขา ศพที่ถูกตาและอวัยวะภายในกระเด็นหลุดไปจากร่าง รถไฟที่อัดแน่นด้วยผู้คนดำเกียมน ผู้คนที่ถูกสิ่งก่อสร้างที่พังลงมาทับ ผู้คนที่ยังมีชีวิตอยู่แม้ร่างกายจะไหม้พุพอง ผู้คนเดินแถวเรียงกันราวกับผี เส้นผมชี้ฟู ผิวหนังขาดวินัยอยู่ เป็นภาพที่น่าเวทนาที่ไม่ควรจะเกิดขึ้นบนโลกที่มนุษย์อาศัยอยู่นี้” (จากบทความ “ข้อเรียกร้องพื้นฐานของเหยื่อระเบิดปรมาณู”)

ระเบิดปรมาณูเป็นภัยพิบัติที่ร้ายแรงในประวัติศาสตร์มนุษยชาติ ผู้คนไม่เลือกหน้าต้องถูกคร่าชีวิตไปมากมาย เส้นทางสงครามมาถึงจุดที่คนธรรมดาทั่วไปต้องแบกรับเคราะห์กรรมอย่างสิ้นหวัง จาก “ยุทธวิธีทำลายล้าง” ด้วยรูปแบบที่นำเวทนา เมือง 2 เมืองล่มสลายลงในพริบตา ไม่เพียงแต่ในทางกายภาพเท่านั้น ยังทำลายรูปแบบการดำเนินชีวิตพื้นฐานของผู้คน เรียกได้ว่าเป็นการปฏิเสธความเป็นมนุษย์เสียสิ้น ยุคแห่งการครอบครองอาวุธนิวเคลียร์เกิดขึ้นจริงเสียแล้ว คุณวาทานาเบะ ชิเอะโกะ ผู้ที่ท่อนล่างถูกทับเพราะระเบิดปรมาณูได้กล่าวถึงตัวเองว่า “มนุษย์ผู้ถูกให้มีประสบการณ์รับกระสุนนัดแรกของการฆ่าล้างเผ่าพันธุ์มนุษยชาติที่เกิดขึ้น” (การประชุมนานาชาติ NGO กรุงเจเนวา ค.ศ.1978)

## 12 ปีแห่งการปกปิดภัยจากระเบิดปรมาณูและการจัดการกับศพผู้ประสบภัย

ที่ผ่านมา รัฐบาลญี่ปุ่นและสหรัฐอเมริกามีท่าทีอย่างไรต่อภัยที่ไม่อาจรู้ได้ที่ระเบิดปรมาณูก่อไว้ ในช่วงที่ผู้ประสบภัยต้องการความช่วยเหลืออย่างยิ่ง กองบัญชาการทหารอเมริกันกลับซ่อนความเสียหายจากระเบิดปรมาณูไว้ (ญี่ปุ่นอยู่ภายใต้การปกครองของศูนย์บัญชาการทหารสัมพันธมิตรโดยมีสหรัฐอเมริกาเป็นหลัก ตั้งแต่วันที่ 2 กันยายน ค.ศ.1945 จนถึงวันที่ 28 เมษายน ค.ศ.1952)

วันที่ 9 สิงหาคม ค.ศ.1945 Dr.Marcel Junod (1904~1961 แพทย์ชาวสวิสเซอร์แลนด์) ผู้แทนคณะกรรมการสภากาชาดสากล เดินทางมาประเทศญี่ปุ่นเพื่อสำรวจเชลยศึกของกองกำลังสัมพันธมิตร เมื่อได้ทราบเหตุการณ์สะเทือนขวัญที่อิโรชิมาะแล้วก็รีบร้องขออุปกรณ์และกำลังเสริมทางการแพทย์จาก GHQ<sup>1</sup> ทันที ยารักษาโรคจำนวน 15 ตันถูกจัดส่งมายังอิโรชิมาะ แต่ความช่วยเหลือหลังจากนั้นถูกสั่งห้าม วันที่ 30 สิงหาคม นายพล Douglas MacArthur ผู้บัญชาการ GHQ มาถึงเมืองออตสึกิ วันที่ 6 กันยายน หัวหน้าทีมวิจัยระเบิดปรมาณูและรองผู้รับผิดชอบแผนการแมนฮัตตันซึ่งเป็นการดำเนินการคิดค้นระเบิดปรมาณู พลตรี Thomas F. Farrell ได้มาประจำการที่โตเกียว เขาเคยกล่าวว่า “ที่อิโรชิมาะ นางาซากินั้น คนที่ควรจะตายก็ตายไปแล้ว ตอนนี้อยู่คนเดียวกันยายน ไม่มีใครต้องทุกข์ยากจากสารกัมมันตรังสีเลย” (ทาเคฮาชิ อิโรโกะ “อิโรชิมาะ นางาซากิที่ถูกปิดผนึก การทดลองอาวุธนิวเคลียร์และแผนป้องกันประชาชน” สนพ.โกฟุชะ 2008) GHQ ได้เริ่มการสอบสวนหนังสือพิมพ์ 5 ฉบับในโตเกียว และเมื่อวันที่ 19 เริ่มออกกฎการใช้ Press Code (ระเบียบสำหรับหนังสือพิมพ์ของญี่ปุ่น) หลังจากนั้นข่าวเกี่ยวกับระเบิดปรมาณูก็เริ่มจางหายไป

รัฐบาลญี่ปุ่นเอง ได้ปิดศูนย์ช่วยเหลือกรณีฉุกเฉินตามกฎหมายปกป้องคุ้มครองยามเกิดภัยพิบัติ เมื่อเดือนตุลาคม ค.ศ.1945 หลังจากตั้งมาได้ 2 เดือน ในเดือนกันยายนปีถัดไป ค.ศ.1946 กฎหมายนี้ก็ถูกยกเลิกไปด้วย ทั้งผู้ประสบภัยและเด็กเล็กต่างถูกทอดทิ้ง สิ่งที่อยู่คือโรคภัยและความยากจน แพทย์ก็ไม่รู้จักอาการที่ตามมาของระเบิดปรมาณู เหลือผู้เคราะห์ร้ายจึงได้แต่ทรมาณต่อไปโดยไม่มีการรักษาพยาบาล

คณะกรรมการสำรวจความเสียหายจากระเบิดปรมาณู (ABCC) ที่ก่อตั้งขึ้นจากศูนย์วิจัยวิทยาศาสตร์ทั่วประเทศสหรัฐอเมริกา ตามคำสั่งของประธานาธิบดี ได้ตั้งสำนักงานในโรงพยาบาลสภากาชาดอิโรชิมาะ เมื่อเดือนมีนาคม ค.ศ.1947 เก็บตัวอย่างเลือดตั้งแต่เดือนเมษายน และเริ่มสำรวจที่นางาซากิตั้งแต่กรกฎาคม ทว่า ABCC เป็นหน่วยงานที่สำรวจและวิจัยเพื่อคาดการณ์กรณีที่น่าจะเกิดสงครามอาวุธนิวเคลียร์ในอนาคต ไม่ได้มีการรักษาพยาบาล ทำให้ผู้ประสบภัยจำนวนไม่น้อยไม่ให้ความร่วมมือ โดยกล่าวว่า “พวกตนไม่ใช่หนูทดลอง” เอกสารการสำรวจต่าง ๆ ถูกเก็บกลับไปสหรัฐฯ หหมด

ดังมีคำกล่าวว่า “ช่วงว่าง 10 ปี” ระหว่างนี้ สหรัฐฯ และรัฐบาลญี่ปุ่น ไม่เพียงแต่ไม่ค้นคว้าเพื่อพิสูจน์ความเสียหายจากระเบิดปรมาณูอย่างจริงจัง แต่กลับปกปิดไว้ องค์การผู้ประสบภัยระเบิดปรมาณูแห่งประเทศญี่ปุ่น (Nihon Hidankyo) ได้จัดตั้งขึ้นเมื่อ ค.ศ.1956 และในปีถัดไป ค.ศ.1957 กฎหมายการรักษาพยาบาลผลจากระเบิดปรมาณูก็ได้บัญญัติขึ้น นับจากเหตุการณ์ระเบิดผ่านไปแล้วเป็นเวลา 12 ปี

<sup>1</sup> หลังจากญี่ปุ่นพ่ายแพ้ในสงครามโลกครั้งที่สอง ญี่ปุ่นต้องยอมรับเงื่อนไขที่เสนอโดยประเทศฝ่ายสัมพันธมิตร โดยสหรัฐอเมริกาคัดตั้งหน่วยงาน Supreme Commander for the Allied Powers (SCAP) หรือเรียกว่า General Headquarters (GHQ) ซึ่งมีจอมพล ดักลาส แมกอาร์เธอร์ (General Douglas MacArthur) เป็นผู้ควบคุม (1945-1952)

## การค้นคว้าวิจัยของ Hidankyo ข้อพิสูจน์ผลกระทบจากผู้ประสบภัยเอง

ชีวิตหลังจากระเบิดปรมาณูตกลงมา สำหรับผู้ประสบภัยแล้ว ต้องต่อสู้กับความทุกข์ทรมานไปในขณะที่ต้องเปิดเผยข้อเท็จจริงในฐานะผู้มีประสบการณ์ตรงด้วย

รัฐบาลญี่ปุ่น ได้เริ่มสำรวจความจริงของผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณูหลังจากปี ค.ศ.1965 ไปแล้ว แต่ไม่เคยพยายามอย่างจริงจังที่จะเปิดเผยภาพรวมของผลกระทบและความเดือดร้อนของภัยจากนิวเคลียร์เลย ไม่ได้พยายามจัดทำหรือนำเสนอข้อมูลต่อนานาชาติทั่วโลก ไม่ว่าจะเป็นในรูปแบบ “รายงานผลกระทบจากระเบิดปรมาณู” ฯลฯ ในฐานะที่ญี่ปุ่นเป็นประเทศเดียวในโลกที่ถูกทิ้งระเบิดปรมาณู

เหยื่อผู้อาบรังสี (Hibakusha) ที่อาศัยอยู่ในฮิโรชิมา นางาซากิ และตามจังหวัดต่าง ๆ ทั่วประเทศ ต่างจัดตั้งกลุ่มผู้อาบรังสีในแต่ละท้องถิ่นของตัวเองขึ้น กลายเป็นองค์กรระดับชาติที่เรียกว่า Nihon Hidankyo ในปี ค.ศ. 1956 ได้ดำเนินกิจกรรมรณรงค์ที่หลากหลายรูปแบบ พวกเขาพยายามถ่ายทอดประสบการณ์แม้ว่าจะอัดอั้นใจที่จะเล่าออกมา พยายามเขียนบันทึกไว้ และได้จัดสำรวจผู้อาบรังสีผ่านงาน “ประชุมวิชาการนานาชาติ องค์กร NGO เพื่อสะท้อนปัญหาเหยื่อผู้อาบรังสี” (ค.ศ.1977) หรือ “การสำรวจผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณู” (ค.ศ.1985) หรือการสำรวจอื่น ๆ ไม่ว่าจะเป็นงานขนาดเล็กหรือใหญ่ ระเบิดปรมาณูทำอะไรต่อมนุษย์ ทำให้มนุษย์ต้องสูญเสียอะไรต่อไปอีกบ้าง ภาพรวมของผลกระทบที่เกิดในทุก ๆ ด้านที่ทำให้เกิดความเสียหายมากมายผ่านทุกช่วงเวลามาแล้ว ต้องอาศัยเสียงจากผู้มีประสบการณ์เองที่จะทำให้ชัดเจนขึ้นมาได้ องค์กร Hidankyo มุ่งมั่นทำงานโดยสำนึกเสมอว่า เรามีหน้าที่เผยแพร่ความจริงที่จะทำให้เห็นถึงภัยจากระเบิดปรมาณู ในขณะที่เดียวกับที่เราจะพยายามเต็มที่ที่จะเปิดเผยข้อเท็จจริงมูลเหตุ เพื่อจะไม่ทำให้ต้องมีผู้อาบรังสีเหมือนกับพวกเราอีกเป็นครั้งต่อไป

### 2. ระเบิดปรมาณูไม่อนุญาตให้เราได้เป็นมนุษย์คนหนึ่ง ไม่ว่าจะเสียชีวิตหรือตายแล้ว – ระเบิดปรมาณูที่ปฏิเสธความเป็นมนุษย์

ใน “การสำรวจผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณู” ที่ปฏิบัติการโดยองค์กรผู้ประสบภัยระเบิดปรมาณูแห่งประเทศไทยญี่ปุ่น ตั้งแต่ฤดูใบไม้ร่วงปี ค.ศ.1985 จนถึงฤดูใบไม้ผลิปี ค.ศ.1986 จากความร่วมมือของผู้รอดชีวิตจากระเบิดปรมาณู 13,168 คน กับครอบครัวผู้เสียชีวิตประมาณ 220 คน เปิดเผยว่าจำนวนผู้เสียชีวิตจากระเบิดปรมาณูมีมากกว่า 12,000 คน

ผลสำรวจนี้ เป็นจุดเริ่มต้นของการเปิดเผยว่าระเบิดปรมาณูนำอะไรมาสู่มนุษยชาติ โดยใช้คำให้การจากการสำรวจแต่ละประเภท (ในวงเล็บข้างหลังของคำให้การนั้นระบุถึงสถานที่เกิดเหตุ, สถานการณ์ตอนเกิดระเบิด, เพศ, อายุ, ระยะเวลาประสบภัย และที่อยู่ตอนทำการสอบสวน ผลสำรวจที่ไม่มีชื่อหัวข้อนั้น มาจากการสำรวจเหยื่อระเบิดปรมาณู ที่เกิดในปี ค.ศ.1985)

#### ความเป็นจริงของภัยระเบิดปรมาณู (1) นรกใน “วันนั้น”

65% ของผู้เสียชีวิตในวันนั้น (วันที่ 6 ที่ฮิโรชิมา และวันที่ 9 ที่นางาซากิ เดือนสิงหาคม ปี ค.ศ.1945) โดย 2 ใน 3 เป็นเด็กที่อายุน้อยกว่า 9 ปี (18%) ผู้หญิงอายุ 10-59 ปี (39%) และผู้ชายที่มีอายุ 60 ปีขึ้นไป (8%) ไม่อาจเรียกระเบิดปรมาณูเป็นอย่างอื่นได้เลยนอกจากว่ามันคือ “อาวุธทำลายล้าง” ที่ฆ่าพลเรือนโดยไม่เลือกหน้าเท่านั้น

#### การตายอย่างทุกข์ทรมาน

ในวันนั้น เกินกว่า 60% ของผู้เสียชีวิตเป็นการเสียชีวิตจากถูกระเบิดภายนอก และการถูกเผา ถูกบีบอัดอยู่ภายในอาคารต่อให้พยายามจะหนี สักพักใต้ซากตึกอาคารผู้พังอาคารก็พังหล่นลงมาทับ และถูกเผาทั้งเป็น คนที่อยู่

บริเวณโดยรอบไม่สามารถตอบกลับเสียงร้องขอความช่วยเหลือได้ ความเจ็บปวดทุกข์ทรมานแสนสาหัสนี้ ถือเป็นความโหดร้ายในการตายที่เป็นสิ่งที่ไม่สามารถเรียกว่าเป็นความตายของมนุษย์ได้ เรื่องราวนี้ไม่สามารถลบเลือนไปจากหัวใจของผู้ที่รอดชีวิตจากกัมมันตภาพรังสีมาได้

- ที่เผาศพก็ไม่มี ต้องเอาท่อนไม้มากองรวมกันที่สนามหน้าโรงเรียนประถม การเผาศพมนุษย์ที่ราวกับย่างปลา พอมาคิดดูตอนนี้ก็ยังขนลุกไม่หาย (นางซาคิ โดนะเบิตโดยตรงที่รัศมี 3 กิโลเมตรจากจุดระเบิด เพศชาย อายุ 18 ปี ไซตามะ)
- ไกล ๆ ที่หลุมหลบภัยชั่วคราว ทุกวันจะมีศพที่ถูกแบกมากองทับกันสูงเท่าภูเขา เอน้ำมันราดจากนั้นก็จุดไฟเผา ราวกับไม้ไผ่มนุษย์ แต่เป็นแค่สัตว์ (อิโรชิมะ โดนะเบิตโดยตรงที่รัศมี 2 กิโลเมตร เพศหญิง อายุ 29 ปี โอซากา)
- ตอนอยู่ชั้นประถมศึกษาปีที่ 2 เพราะเหตุการณ์ชั่วพริบตาเดียว ชีวิตก็พลิกผันจากหน้ามือเป็นหลังมือ สิ่งที่สะท้อนอยู่ตรงหน้านั้นคือนรกทั้งเป็น เพียงแค่คิดถึงเรื่องในวันนั้นก็ทรมานแล้ว ...ยังได้แต่มองผู้คนที่พากันล้มตายด้วยสภาพโหดร้าย ยิ่งรู้สึกท้อทุกอย่างบ้างครั้งราวกับนรก การที่เราเกิดเป็นมนุษย์ก็ควรจะให้ความตายอย่างมนุษย์หรือเปล่า (นางซาคิ โดนะเบิตโดยตรงที่รัศมี 2 กิโลเมตร เพศหญิง อายุ 8 ปี อชิกาวะ)

### ความตายที่ไม่สามารถระบุตัวตนได้

ผู้เสียชีวิตที่มีครอบครัวดูแลมีเพียงไม่ถึง 4% ของร่างทั้งหมด อีกทั้ง 42% ยังคงหายสาบสูญ แม้แต่ศพและถ้ากระดูกก็ยังไม่ได้รับการระบุ ระเบิดปรมาณูบีบบังคับให้พวกเขากลายเป็น “ความตายที่ไม่สามารถระบุตัวตนได้” ด้วยเหตุนี้เอง ครอบครัวผู้สูญเสียจึงต้องทนทุกข์ทรมานจากการนึกถึงวาระสุดท้ายของบุคคลอันเป็นที่รักโดยที่ตนเองไม่สามารถทำอะไรได้

- ฉันไม่อยากเชื่อว่าคุณแม่ในบ้านตัวเองที่เมืองอิระซึเกะได้เสียชีวิตไปแล้ว ทั้งที่เมื่อเช้าเธอเพิ่งส่งฉันออกไปทำงานด้วยท่าทางแจ่มใสแท้ ๆ จนถึงตอนนี้ก็ไม่มีแม้แต่ถ้ากระดูกของคุณแม่ ฉันได้แต่รอว่าเมื่อไหร่คุณแม่จะกลับมาสักที พอได้ยินเสียงลมก็ลองออกไปดูว่าใช้คุณแม่รีเปล่า ใช้เวลานานกว่าฉันจะทำใจบอชื่อเธอออกจากทะเบียนบ้าน (อิโรชิมะ โดนะเบิตโดยตรงที่รัศมี 2 กิโลเมตรจากจุดระเบิด เพศหญิง ไม่ทราบอายุ ปัจจุบันยังคงอาศัยอยู่)
- พี่สาวของฉันที่เป็นนักเรียนโรงเรียนหญิงล้วนชั้นปีที่ 1 ได้ไปทำงานเก็บกวาดหลังรื้อตึกทำกำแพงกับทุกคนในชั้นเรียนโดยมีคุณครูเป็นผู้นำ ณ จุดลี้ภัยที่ห่างจากใจกลางการระเบิด 800 เมตร (แม้ว่าวันถัดมาฉันกับแม่จะตามหาพี่สาวไปทั่วตลอดหนึ่งสัปดาห์) คุณพ่อที่ตามหาพี่สาวไม่เจอ เอาแต่โทษตัวเองตลอดชีวิตจนตายจากไป คุณพ่อเจอกลุ่มเด็กสาวที่ใบหน้าบวมและกลายเป็นสีทองแดงจากแรงระเบิด ก็เลยส่งเสียงเรียกว่า “มาซาโกะ ไข่มามาซาโกะหรือเปล่า” แต่ก็ไม่ได้รับคำตอบกลับมา และไม่ได้เห็นใบหน้าของลูกสาวตัวเองจากเด็กสาวกลุ่มนั้น (อิโรชิมะ โดนะเบิตขณะอยู่ในครรภ์มารดา เพศหญิง ปัจจุบันอาศัยที่จังหวัดชิบะ ให้ข้อมูลในการบรรยาย)

เพื่อยับยั้งไฟลุกลามที่เกิดจากการโจมตีทางอากาศที่จังหวัดอิโรชิมะจึงมีการเกณฑ์นักเรียนไปทำงานเก็บกวาดซากตึกที่พังทลาย มีนักเรียนกว่า 6,000 รายเสียชีวิตจากการทำงานนี้ และยังมีอีกจำนวนมากที่หายสาบสูญ

### ไร้ซึ่งความช่วยเหลือ

ระเบิดปรมาณูนั้นได้ทำลายเมืองจนแทบไม่เหลือเค้าเดิมในช่วงพริบตาเดียว การป้องกันภัยหรือความช่วยเหลือฉุกเฉินก็ไม่อาจทำได้ ซึ่งในสถานการณ์ที่รุนแรงแบบนั้น ทั้งเด็ก ทั้งผู้ใหญ่ ทุกคนต่างก็มีแต่ต้องช่วยพากันหนีตายออกมาจากกองเพลิงเท่านั้น แคมป์ไม่มีที่แหวของญาติ ๆ คนที่มาช่วยเหลือ หรือคนที่ช่วยกันขนน้ำมาดับไฟเลยแม้แต่คนเดียว

ความคิดที่ว่า “ในตอนนั้นตัวฉันไม่ใช่มนุษย์อีกต่อไปแล้ว” จนถึงตอนนี้ก็ยังคงอยู่ และเหตุการณ์ในวันนั้นก็ให้เป็น “บาดแผลทางใจ” ให้กับผู้ที่สัมผัสกับสารกัมมันตรังสีจำนวน 1 ใน 4 คนจากทั้งหมดที่ยังมีชีวิตอยู่ ระเบิดปรมาณูซึ่งเปรียบต่อนรกที่เกิดขึ้นในยุคสมัยนี้ ในสถานการณ์ที่ “รุนแรง” เกินขีดจำกัดที่มนุษย์จะรับได้นั้น ทำผู้คนในตอนนั้นไม่



รู้สึกถึงความโหดร้าย ความน่ากลัว ความเศร้าโศกอีกต่อไป เหตุการณ์ในวันนั้นก็เปลี่ยนแปลงเป็นบาดแผลที่ฝังลึกลงไป  
จิตใจของเขาเหล่านั้นไปจนวันตาย

- ฉันนึกได้ว่าเอาแต่วิ่งต่อไปเรื่อย ๆ ในขณะที่เจอคนผิวลอกเหมือนเอาอะไรมาแขวนไว้หลายต่อหลายครั้ง จนกระทั่ง  
กลับถึงบ้าน ไม่ได้ยินใครพูดอะไรยกเว้นเสียงกรีดร้องและทุกคนที่พบกันไม่แสดงความรู้สึกใด ๆ เมื่อมองย้อนกลับ  
ไป คิดว่าตอนนั้นไม่ใช่โลกมนุษย์แต่เหมือนนรกโลกหน้า เห็นอะไรได้ยินอะไรก็ไม่รู้สึกอะไร คิดว่าประสาทชินชา  
(เป็นอัมพาต) ได้รับรู้ว่าในสถานการณ์แบบไม่ปกติ มนุษย์กลับกลายเป็นสิ่งที่ไม่ใช่มนุษย์ มันช่างน่ากลัวจริง ๆ ค่ะ  
(ฮิโรชิมะ โดนระเบิดโดยตรงที่รัศมี 3 กิโลเมตรจากจุดระเบิด เพศหญิง อายุ 15 ปี ปัจจุบันอาศัยอยู่ที่จังหวัดเฮียว  
โกะ)
- ผมรู้สึกกระวนกระวาย ทรมานใจ และหายใจไม่สะดวกทุกครั้งทีพุดถึงเรื่องนั้น ไม่สามารถพูดเรื่องนั้นได้เลย หาก  
ฝันพูดไปอาจจะกลายเป็นคนเสียสติไปเลยก็ได้ ผมยังรู้สึกฝังใจกับการจากไปของน้องชายอยู่ ในตอนนั้นไม่ว่าจะ  
เรียกน้องเท่าไรก็ไม่ขานกลับ เลยหนีไปและคิดเพียงว่าน้องแค่สลับไปเท่านั้นเอง นึกถึงตอนนั้นที่เรารู้สึกวาบไปทั้ง  
ห้อง (นางาซากิ โดนระเบิดโดยตรงที่รัศมี 2 กิโลเมตรจากจุดระเบิด เพศชาย อายุ 12 ปี ปัจจุบันอาศัยอยู่ที่จังหวัด  
มียาจิ)
- ตั้งแต่วินาทีที่ได้รับการช่วยเหลือ สิ่งที่ผมคิดได้ก็คือลูกชายกับตัวฉันจะต้องมีชีวิตรอด ในระหว่างที่กำลังวิ่งหนี เด็ก  
ที่จับขาของฉันไว้ฉัน ตาของเขาข้างหนึ่งหลุดออกมาติดอยู่กลางใบหน้า และตาข้างเดียวนั้นก็จ้องฉันเขม็งจาก  
ด้านล่าง "ไอ้เด็กตาเดียว!" ฉันเตะเด็กคนนั้นออกไป มันทั้งบ้าและน่าหวาดกลัว สัตว์ประหลาดตาเดียวเข้ามาใกล้  
ฉันได้แต่วิ่งหนีเท่านั้น

ฉันได้รับความช่วยเหลือจากคู่สามีภรรยาที่อยู่ข้าง ๆ แต่ก็ไม่มีใครรอดชีวิตอีก มีคำกล่าวว่า “แม้แต่ปีศาจที่โหดร้าย  
ก็ยังหลั่งน้ำตา”<sup>2</sup> แต่ว่าฉันนะ ไม่ได้เป็นแม่แต่ปีศาจ

(หนังสือคู่มือของประจักษ์พยาน ผู้ประสบภัยในจังหวัดฮิโรชิมะ โดนระเบิดโดยตรงที่รัศมี 1.7 กิโลเมตรจากจุด  
ระเบิด เพศหญิง อายุ 23 ปี ปัจจุบันอาศัยอยู่ที่โตเกียว)

## ความเป็นจริงของภัยระเบิดปรมาณู (2) ความตายหลังจากนั้น / ชีวิตในฐานะผู้อับรังสี

โรคที่ตามมาอย่างเฉียบพลัน หลังจาก “วันนั้น” ชีวิตเสมือนความตาย เหลือก็เสียชีวิตลงทีละคนจากความ  
เจ็บป่วยจากระเบิดปรมาณู ภายในเดือนสิงหาคม ผู้เสียชีวิตจากความเจ็บป่วยจากระเบิดปรมาณูแซงหน้าผู้เสียชีวิตจาก  
ไฟคลอกคิดเป็น 60% ของผู้เสียชีวิตทั้งหมด อาการป่วยเฉียบพลันจากรังสีระเบิดปรมาณู ได้แก่ มีไข้ ท้องเสีย อาเจียน  
เลือดออก (จ้ำเลือด) แผลในปาก ผมร่วง ปวดศีรษะ สติสัมปชัญญะไม่สมบูรณ์ ในช่วงเวลานี้ ผู้คนต่างเฝ้ามองคนรอบตัว  
ทยอยตายลงทีละคนและถูกความรู้สึกกลัวตายถาโถมเข้าใส่ว่า ครั้งนี้อาจจะถึงคราวของตนเองและเสียชีวิตลงไปพร้อม  
กับถูกทรมานจากความกลัวนั้น

**การตายที่ผ่านช่วงทรหด** จากการสำรวจครอบครัวผู้เสียชีวิต ในบรรดาจำนวนผู้เสียชีวิต 7,030 ราย ตั้งแต่  
ค.ศ.1946 มีจำนวนมากกว่า 90% ที่ไม่ได้เสียชีวิตจากระเบิดปรมาณูในทันทีและทนทุกข์ทรมานหลังจากช่วงเวลานั้น มี  
ผู้เสียชีวิตมากมาย ที่มีอาการป่วยกระเสาะกระแสะหลังจากถูกระเบิด ต้องต่อสู้กับโรคร้ายอยู่ทุกคืนวัน และตายไป  
พร้อมแบกรับทั้งความกลัวและความทุกข์ใจจากโรคร้ายต่าง ๆ ที่เกิดจากรังสีปรมาณู

ความทุกข์ทรมานก่อนที่ความตายจะมาถึง คือ การตายของครอบครัวและญาติมิตรที่ทำให้เราสูญเสียที่ยึด  
เหนี่ยวทางจิตใจไป ไม่สามารถทำงานได้ตั้งใจคิด ความทรมานในการใช้ชีวิตหลังเหตุระเบิด เหตุการณ์ในวันนั้นที่คอย  
ตามหลอกหลอน และความรู้สึกเป็นห่วงเป็นใย ความทรมานเหล่านี้ก้าวเข้ามาสู่ในทุก ๆ ด้านของชีวิตมนุษย์

<sup>2</sup> “Oni no me nimo namida” สำนวนที่หมายถึงแม้แต่ปีศาจที่โหดร้ายยังร้องไห้ ในที่นี้ผู้พูดต้องการบอกว่าตนเองร้ายกาจกว่าปีศาจ  
เพราะไม่มีน้ำตา

**การตายที่ล่าช้า** “อาการป่วย” จากการได้รับรังสีจากระเบิดปรมาณู เป็นสาเหตุการตายประมาณ 90% ในเวลานั้นการเสียชีวิตจาก “มะเร็ง” เพิ่มขึ้นอย่างรวดเร็วตั้งแต่ 10 ปีหลังการทิ้งระเบิดปรมาณู และยังคงเพิ่มขึ้นอย่างต่อเนื่องตั้งแต่นั้นมา โดยเฉพาะอย่างยิ่ง ผู้คนจำนวนมากที่อยู่ในวัยยี่สิบหรือสามสิบได้รับผลกระทบในขณะที่เกิดระเบิดปรมาณู และครอบครัวผู้เสียชีวิตจึงได้รับรู้ถึง “การเสียชีวิตก่อนวัยอันควร” จึงเกิด “ความกลัวเกี่ยวกับระเบิดปรมาณู” และ “ความกลัวตาย”

เกี่ยวกับการเสียชีวิตของผู้สัมผัสสารกัมมันตรังสีหลังค.ศ.1946 ครอบครัวผู้เสียชีวิตที่เชื่อว่าการเสียชีวิตไม่เกี่ยวข้องกับระเบิดปรมาณูมีเพียงไม่ถึง 10% จำนวนผู้เสียชีวิตครึ่งหนึ่งเชื่อว่าเกี่ยวข้องกับระเบิดปรมาณู อีก 40% ที่เหลือไม่สามารถประเมินได้ กล่าวคือครอบครัวผู้เสียชีวิตกว่า 90% ก็คิดว่าการเสียชีวิตอาจจะเกี่ยวข้องกับระเบิดปรมาณู กล่าวอีกอย่างคือไม่สามารถปฏิเสธข้อสงสัยการเสียชีวิตหลังจากสัมผัสระเบิดปรมาณูได้

- วันที่ 1 ตุลาคมในปีเดียวกัน โรงเรียนได้เปิดใหม่อีกครั้ง นักเรียนชั้นปีเดียวกันรวมตัว 20 คน จาก 320 คน ส่วนใหญ่เป็นเพื่อนร่วมชั้นกัน แต่ว่าได้เสียชีวิตลงทีละคนสองคน ลงจินตนาการถึงโต๊ะในห้องเรียนที่มักจะถูกระดับไปด้วยดอกไม้าลัยเพื่อนร่วมชั้นที่ได้จากไปทีละคนจากผลข้างเคียงของระเบิดปรมาณูในระยะเวลาประมาณทุก ๆ 1-2 เดือน รายต่อไปจะเป็นเราหรือเปล่า ตัวเรานั้นจะมีชีวิตอยู่ได้ถึงเมื่อไร สถานการณ์ที่เต็มไปด้วยความกังวลใจและไร้ซึ่งทางออกยังคงดำเนินต่อไป กำลังใจได้สูญสิ้นไปจากผู้ที่ยังอยู่ (ผู้เดินทางเข้าสู่จังหวัดอิโรชิมาะหลังจากเกิดเหตุระเบิดปรมาณู เพศชาย อายุ 13 ปี ปัจจุบันอาศัยอยู่ที่นิงาตะ)
- หลังจากทีรอดชีวิตจากระเบิดปรมาณูและอดทนกับชีวิตที่ทรมาณ ฉันก็ถูกวินิจฉัยว่าเป็นโรคมะเร็งเม็ดเลือดขาว ความเศร้าโศกนี้ยากที่จะหาอะไรมาทดแทนได้ น้องชายที่มีชีวิตอยู่จนถึงอายุ 18 ปีและตายอย่างทรมาณ (โดนระเบิดโดยตรงในระยะ 1-2 กิโลเมตร ตอนอายุ 4 ขวบ เสียชีวิตช่วงปี ค.ศ.1960) ทุกวันนี้ฉันยังไม่สามารถลืมได้ (นางาซากิ, โดนระเบิดโดยตรงที่รัศมี 1.5 กิโลเมตร เพศหญิง ตอนอายุ 8 ขวบ ปัจจุบันอยู่ที่นางาซากิ)
- หลังจากน้องสาววัย 24 ปีแต่งงาน ก็มีระเบิดพล่อยลงมาใส่เมือง ระเบิดที่กระแทกลงมายังเมืองโดยตรงทำให้ทุกอย่างหายราบเป็นหน้ากลอง ทว่าในเดือนกันยายน ปีโชวะที่ 32 (ค.ศ.1957) เขาวัย 36 ปี ตายอย่างทรมาณด้วยโรคลูคีเมีย เรื่องที่น้องสาวเขาตายด้วยโรคลูคีเมีย เรื่องที่ตัวฉันได้รับแผลไฟคลอกขนาดใหญ่และเรื่องที่น้องสาวของฉันเสียชีวิตคาที่จากระเบิด ทำให้ฉันรับรู้ถึงความน่ากลัวของระเบิดปรมาณูได้อย่างถึงแก่นเลย (อิโรชิมาะ, โดนระเบิดโดยตรงที่รัศมี 2 กิโลเมตร เพศหญิง อายุ 31 ปี ปัจจุบันอยู่ที่อิโรชิมาะ)

### ชีวิตที่จมอยู่กับความวิตกกังวลและความทุกข์ทรมาณ

“ไม่รู้ว่าจะมีชีวิตอยู่ต่อไปเพื่ออะไร” “การมีชีวิตก็เหมือนอยู่ท่ามกลางความเจ็บปวด” แท้จริงแล้วความทุกข์ที่ผู้อับรังสีต้องทนทรมาณจนเสียชีวิตนั้นไม่ใช่สิ่งอื่นใดนอกจาก “ความทุกข์ของการมีชีวิตอยู่” ผู้ที่ “สัมผัสกับสารกัมมันตรังสีแต่ไม่รู้สึกรทรมานอะไร” ก็มีเพียง 18% จากทั้งหมดเท่านั้น

**ชีวิตที่จมอยู่กับความวิตกกังวล** สิ่งที่ทุกข์ทรมาณมากที่สุดสำหรับผู้รอดชีวิตจากระเบิดปรมาณูคือ ความกังวลเกี่ยวกับสุขภาพร่างกาย เช่น “ความกังวลที่เวลารู้สึกไม่สบายขึ้นมาอาจเป็นเพราะการสัมผัสกับรังสีหรือเปล่า...” (62%) “ความกังวลที่ไม่รู้ว่าโรคที่มาจากสารรังสีจะมาเมื่อไหร่” (52%) นอกจากนั้นก็จะมีความกังวลในการมีชีวิตอยู่ต่อ ความกังวลเกี่ยวกับสุขภาพของลูกหลานในอนาคต ซึ่ง 3 ใน 4 ของผู้อับรังสีกำลังทุกข์ทรมาณอยู่กับความวิตกกังวลเหล่านี้

ความวิตกกังวลของการเป็นผู้อับรังสีนั้นมาจากการที่พบว่ามีการสัมผัสที่ผู้อับรังสีมีการป่วยอย่างเฉียบพลันถึง 87% แม้ว่าสถานการณ์ที่ผู้อับรังสีไม่เกิดอาการป่วยอย่างเฉียบพลันเองก็มีถึง 13% เองก็ตาม แต่สังเกตได้ว่าผู้คนมากกว่าครึ่งก็รู้สึกกังวลอยู่ดี เนื่องจากเรายังคงไม่สามารถปฏิเสธถึงความเป็นไปได้ที่คนเหล่านี้เองก็อาจกัมมันตภาพรังสีมาแล้วเช่นกัน

เข้าใจได้ว่า “ความวิตกกังวล” ของผู้อาบรังสีนั้น เป็นสิ่งที่เกิดขึ้นกับผู้รอดชีวิตจากระเบิดปรมาณูครั้งนี้จริงๆ กล่าวก็คือ ความวิตกกังวลเหล่านั้นคือบาดแผลที่เกิดจากระเบิดปรมาณู

**ความกลัวถึง “ความตายที่ค่อย ๆ คืบคลานเข้ามา”** เนื่องจากผู้รอดชีวิตเกิดความเคลือบแคลงในจิตใจว่าความตายที่ตนเองจะต้องเผชิญคือ “การต้องตายอย่างช้าๆ” พวกเขาจึงตกอยู่ในความหวาดระแวงที่ “ชีวิตของพวกเขา กำลังถูกพรากไป” มะเร็งกลายเป็นสิ่งที่สื่อถึงโรคร้ายที่เกิดจากระเบิดปรมาณู ทั้งยังสื่อถึง “การกลัวความตาย” อีกด้วย “การสำรวจผู้ประสบภัยจากการระเบิดปรมาณู” เริ่มขึ้นหลังจากเหตุการณ์ที่ระเบิดปรมาณูถึง 40 ปีแต่ผู้อาบรังสีกลับต้องใช้ชีวิตอยู่กับ “การกลัวความตาย” และในปัจจุบันยังคงมีผู้ที่หวาดกลัวกับสิ่งเหล่านั้นอยู่

**ประสบการณ์จากระเบิดปรมาณูในจุดเปลี่ยนชีวิตแต่ละช่วงชีวิตของมนุษย์** ในสมัยก่อน ผู้อาบรังสีต้องเผชิญหน้ากับเหตุการณ์ระเบิด ทั้งในช่วงจุดเปลี่ยนของชีวิตของตน การใช้ชีวิตครอบครัว รวมไปถึงงานเลี้ยงบุตรอย่างหลีกเลี่ยงไม่ได้ ถึงพวกเขาจะพยายามลืมเหตุการณ์ที่เกิดขึ้นแต่มันก็เป็นเรื่องยากในการลืมความเจ็บปวดเหล่านั้น และยังทำให้มีผู้คนออกมาแสดงอคติและความเกลียดชังออกมาต่อเหล่าผู้เคราะห์ร้าย เพราะผู้คนเหล่านั้นนอกจากจะไม่สามารถทำงานได้แล้ว ยังไม่มีความสามารถที่จะสร้างชีวิตครอบครัวได้อีกด้วย ถึงแม้พวกเขาจะแต่งงานและวางแผนที่จะให้กำเนิดบุตรแล้ว แต่เหล่าผู้อาบรังสีไม่สามารถให้กำเนิดบุตรได้ ด้วยเหตุนี้คนที่ปิดบังความจริงว่าตนเป็นผู้อาบรังสีจากระเบิดปรมาณูและเด็กที่พ่อแม่สั่งให้ปิดบังความจริงเรื่องนี้ จึงมีจำนวนไม่น้อย

- คนในครอบครัวแต่ละคนเป็นมะเร็งและเสียชีวิตลง ซึ่งพวกเขามีอาการวิตกกังวลจนถึงวาระสุดท้ายของชีวิต (นางาซากิ เพศหญิง อายุ 16 ปี โคนระเบิดโดยตรงในรัศมี 1.2 กิโลเมตร ปัจจุบันอาศัยอยู่ที่จังหวัดยะมะกุจิ ยังต้องสำรวจเพิ่ม)
- เซลล์เม็ดเลือดขาวในร่างกายกลายเป็นจำนวนมาก กังวลเรื่องสุขภาพของตัวเองจนกลายเป็นคนที่มีอาการวิตกกังวล และตัวเองก็เริ่มรู้ด้วยซ้ำว่าเริ่มมีอาการดังกล่าวตั้งแต่เมื่อไร ตอนนี้อยู่เป็นผู้ป่วยทางจิต (ย้ายเข้ามาอาศัยที่อิโรชิมะ เพศชาย อายุ 34 ปี ปัจจุบันอาศัยอยู่ในจังหวัดวากายามะ ยังต้องสำรวจเพิ่ม)
- ไม่ว่าใครจะมองจากทางไหนก็รู้ว่าเป็นผู้ที่อาบรังสีมา ถูกล้อเลียนเพียงเพราะเดินลากขาอย่างอ่อนแรง อยากสวมรองเท้าส้นสูงที่บางและสูง แล้วลองเดินอย่างคนทั่วไปเขาสักครั้งหนึ่ง (นางาซากิ โคนระเบิดโดยตรงในรัศมี 2.2 กิโลเมตรจากจุดระเบิด เพศหญิง อายุ 3 ปี ปัจจุบันอาศัยอยู่ในจังหวัดนางาซากิ ยังต้องสำรวจเพิ่ม)
- อยากได้ชีวิตที่ไม่ใช่ผู้อาบรังสีกลับคืนมา (นางาซากิ โคนระเบิดโดยตรงในรัศมี 2.1 กิโลเมตรจากจุดระเบิด เพศชาย อายุ 9 ปี ปัจจุบันอาศัยอยู่ในจังหวัดโอซากา)
- ฉันทกใจมากที่ตอนแต่งงานสามีพูดกับฉันว่า “ให้เก็บเรื่องที่โดนปรมาณูเป็นความลับ” แม้แต่ตอนนี้คนรอบตัว (ครอบครัวของฝ่ายชาย) ก็ยังไม่ทราบ (นางาซากิ โคนระเบิดโดยตรงในรัศมี 3.5 กิโลเมตรจากจุดระเบิด เพศหญิง อายุ 7 ปี ปัจจุบันอาศัยอยู่ในจังหวัดคานางาวะ สำรวจหลังระเบิดลง 70 ปี)

**การสูญเสียความปรารถนาที่จะมีชีวิต** ในกลุ่มผู้สัมผัสสารกัมมันตรังสีที่ใช้ชีวิตอย่างยากลำบากดังที่กล่าวมานั้น มีคนที่สูญเสียความตั้งใจในการดำรงชีวิตอยู่ไม่น้อย ผู้ที่ผ่านประสบการณ์สูญเสียความปรารถนาที่มีความคิด เช่น “ถ้าจะใช้ชีวิตอย่างเจ็บปวดขนาดนั้นแล้ว ตายซะดีกว่า” หรือ “ถ้าตอนนั้นตายก็คงจะดี” เป็นต้น พวกเขาเป็นผู้รอดชีวิตตั้ง 25% หรือ 1 ใน 4 ของผู้ประสบภัยที่เหลือรอด

การสูญเสีย “ความปรารถนาที่จะมีชีวิต” คือ “การใช้ชีวิตอยู่ในฐานะผู้สัมผัสสารกัมมันตรังสี” สิ่งนี้เป็นเรื่องทุกข์ทรมานเกินกว่าที่มนุษย์จะรับได้ ความบิดเบือนวิถีธรรมชาติของมนุษย์จากการระเบิดปรมาณูแสดงให้เห็นได้จากรายงานผู้เสียชีวิตจำนวน 12,700 รายในแบบสำรวจ รวม 47 รายที่ฆ่าตัวตาย “วันเวลาที่ต้องต่อสู้กับโรคร้ายยาวขึ้นเรื่อย ๆ” (38%) “หวาดกลัวความตาย” (11%) “ตกอยู่ในความสิ้นหวังที่จะไม่หายดีไปชั่วชีวิต” (29%) หรือ “ถูกดับฝันโดยระเบิดปรมาณู” (33%) “ยังรู้สึกทรมานจากประสบการณ์ในวันนั้น” (21%) ความทุกข์ทรมานเช่นนี้ซ้อนทับกันเรื่อย ๆ จนนำไปสู่การจบชีวิตตัวเอง

- (พี่ชาย) มีแผลไฟคลอกครึ่งร่างแม้จะโดนหมอตอดทิ้งอย่างไม่แยแส แต่เขากลับรอดชีวิตอย่างน่าเหลือเชื่อ ใช้ชีวิตด้วยความหวาดกลัว และในวันที่สภาพอากาศไม่ดีแผลไฟคลอกของพี่จะเจ็บปวดอย่างมาก เพราะว่าร่างกายมีบาดแผลไฟคลอกจึงทุกข์ใจทุกครั้งที่มีการดูตัว เขาไม่รู้จะทำอย่างไรกับความทรามของแผลไหม้พวกนี้ สูญเสียความหวังที่จะมีชีวิตและเลือกจบชีวิตตัวเอง  
(พี่ชายเป็นผู้ประสบภัยจังหวัดอิโรซิมะ โดนระเบิดโดยตรงในรัศมี 1 กิโลเมตรจากจุดระเบิด ฆ่าตัวตายขณะอายุ 30 ปี ในเดือนกันยายน ค.ศ.1957)
- บิดา (41 ปี), มารดา (35 ปี), พี่ชาย (12 ปี), น้องสาว (2 ปี) ถูกไฟคลอก ไม่พบแม้กระทั่งศพ สุดท้ายก็ไม่ทราบว่าจะเสียชีวิตด้วยสภาพไหน เพียงชั่วพริบตา ก็กลายเป็นของที่ไร้ค่า ตามข้างถนนมีผู้คนเกลือกกลิ้งอย่างทรามคนแล้วคนเล่า เหมือนได้เห็นขุมนรก หลังจากนั้น 64 ปีผ่านไป ฉันทยังคงจมปลักกับความทุกข์และความเศร้าที่ไม่อาจลืมได้ลง ไม่มียาใดที่รักษาความเจ็บปวดในใจได้เลย ตัวฉันในตอนนั้นก็คิดว่า “ตายไปพร้อมกับพ่อแม่เสียยังจะดีกว่า” ตอนนี้องค์ก็ยังคิดแบบนั้น  
(ข้อความในปี ค.ศ.2010 จากผู้สัมผัสสารกัมมันตรังสี โดนระเบิดโดยตรงที่อิโรซิมะ ในรัศมี 1.3 กิโลเมตรจากจุดระเบิด เพศหญิง ขณะอายุ 9 ปี ปัจจุบันอาศัยอยู่ที่จังหวัดยามากุจิ)

### ความขมขื่นต่อเนื้ออย่างไร้จุดจบ -ความกังวลที่ส่งไปถึงเหล่าลูกหลาน-

ผู้สัมผัสสารกัมมันตรังสี ใช้ชีวิตโดยแบกรับความกังวลถึงสุขภาพของตนเองไปพร้อม ๆ กับสุขภาพของลูกหลาน และเรื่องในอนาคต มีบางคน que คิดถึงเหล่าเด็ก ๆ ที่มีโรคหรือมีความบกพร่องต่าง ๆ ว่าหลังจากที่พ่อแม่เสียไปแล้วจะใช้ชีวิตอย่างไรด้วยเช่นกัน

ผู้สัมผัสสารกัมมันตรังสีได้มีการรวบรวมสมุดปกขาวหรืองานวิจัยที่เกี่ยวข้องกับเหล่าลูกหลานของผู้สัมผัสสารกัมมันตรังสีเอาไว้ล่วงหน้า ซึ่งภายในนั้นก็จะมีคำร้องให้ขอตีพิมพ์สมุดบันทึกสุขภาพหรือขอการสนับสนุนในการรักษาทางการแพทย์ที่คล้ายคลึงกับของผู้สัมผัสสารกัมมันตรังสีอยู่ด้วย ผู้สัมผัสสารกัมมันตรังสีคนหนึ่งได้กล่าวว่า “เพราะยังมีบางคนที่มีความคิดอคติอยู่ พอคิดถึงเรื่องการแต่งงานของลูกหลาน ก็ไม่อยากจะบอกว่าตัวเองเป็นผู้ที่สัมผัสสารกัมมันตรังสี”

- หลังจากนั้นไป ในขณะที่ยังมีชีวิตอยู่ เหล่าลูกหลาน รวมถึงตัวฉันเองก็กลัวว่าสภาพร่างกายของพวกเราจะมีอะไรผิดปกติหรือไม่ トラバใดที่ยังมีชีวิตอยู่ก็จะไม่สามารถหลุดพ้นจากความขมขื่นนี้ได้เลยหรือ มันทรามมาก สงครามก็คือนรก มันเป็นเรื่องราวที่น่ากลัวที่ฉันจะไม่มีวันลืมไปชั่วชีวิต  
(นางซาคิ โดนระเบิดโดยตรงในรัศมี 3.6 กิโลเมตรจากจุดระเบิด เพศหญิง อายุ 7 ปี ปัจจุบันอาศัยอยู่ในจังหวัดฟุกุโอกะ สํารวจหลังระเบิดลง 70 ปี)

### 3. ระเบิดปรมาณูไม่สามารถอยู่ร่วมกับมนุษย์ได้ - อาวุธที่ชั่วร้ายโดยสมบูรณ์

#### อาวุธที่ชั่วร้ายโดยสมบูรณ์

จากการสืบหาข้อมูลและคำให้การ ในปี ค.ศ.1984 สมาพันธ์ผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณูแห่งประเทศญี่ปุ่น ได้ตัดสินใจให้มีการเรียกร้องขั้นพื้นฐานแก่ผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณู จากบทความก่อนหน้านี้ ได้มีการบันทึกผลกระทบของระเบิดปรมาณูไว้ดังนี้

จนถึงทุกวันนี้ระเบิดปรมาณูยังคงสร้างความเสียหายต่อสภาพร่างกาย สภาพจิตใจและการใช้ชีวิตของผู้ประสบภัยระเบิดปรมาณูทำให้ไม่เหลือแม้แต่ซากศพของผู้ประสบภัยและยังสร้างความทรามให้กับผู้เหลือรอด อาวุธนิวเคลียร์แต่เดิมแล้วเป็นอาวุธมรณะที่มีไว้เพียงเพื่อการทำลายล้างเท่านั้น ซึ่งในฐานะมนุษย์แล้วไม่สามารถยอมรับอาวุธที่มีความชั่วร้ายโดยสมบูรณ์แบบนี้ได้ จากมุมมองของมนุษย์ อาวุธนิวเคลียร์เป็นสิ่งที่ไม่เข้ากับการดำรงอยู่ของมนุษย์ หรือก็คืออาวุธที่เอาไว้ต่อต้านการมีอยู่ของมนุษย์นั่นเอง ต่อให้มีเหตุผลอะไรก็ไม่สามารถทำให้อาวุธนิวเคลียร์เป็นที่ยอมรับได้และต้องประกาศให้รู้โดยทั่วกันว่าสิ่งนี้เป็นอาวุธที่ชั่วร้ายโดยสมบูรณ์

- ผมได้ไปขอร้องเพื่อนบ้านที่เดินผ่านมาให้ช่วยคุณแม่แต่เขาก็กลับปฏิเสธผมอย่างไม่ใยดี แม้กระทั่งตอนนี้ความรู้สึกขุ่นเคืองยังคงหลงเหลืออยู่ในใจของผม “มนุษย์” เป็นสิ่งมีชีวิตที่อำมหิต ไม่สิ ควรให้ความไว้มนุษยธรรมภายในจิตใจไล่ต้อนมนุษย์ถึงขีดสุดจนสร้างระเบิดปรมาณูขึ้นมาเป็นปัญหาหลัก  
(ฮิโรชิมา ถูกระเบิดโดยตรงในรัศมี 1.5 กิโลเมตร จากจุดระเบิด เพศชาย อายุ 16 ปี ปัจจุบันอยู่จังหวัดอิซิกาวะ)
- คินพ่อกะเรามา คินความเป็นมนุษย์มา คือทรัพย์สินบ้านเรือนของเรา มาขอชีวิตที่มีความสุขก่อนหน้านั้นคินมาด้วย (ย้ายเข้ามาอยู่ที่ฮิโรชิมา เพศชาย อายุ 16 ปี ปัจจุบันอยู่ที่จังหวัดนากาโนะ)

## ใช้ชีวิตด้วยการต่อต้านระเบิดปรมาณู

จากการสำรวจผู้เสียหายจากระเบิดปรมาณูโดยองค์กร Hidankyo ในค.ศ.1985 ระบุว่า ในวันนั้น มีทั้งผู้ที่เสียชีวิต และผู้ที่ได้รับผลกระทบทางร่างกาย การใช้ชีวิต หรือจิตใจ มันเสียหายมาจนถึงปัจจุบัน

สำหรับผู้เสียหาย สิ่งที่ทำให้สามารถมีชีวิตอยู่ต่อมาจากจนถึงทุกวันนี้ได้ คือ การรายล้อมไปด้วยครอบครัวอย่างราบรื่นและปกติสุข ซึ่งพวกเขาพยายามใช้ชีวิตเพื่อจะได้มันมา

แต่จากการสำรวจพบว่า ยิ่งผู้เสียหายหนักจากการโดนทำลายชีวิตปกติไป พวกเขาจะมีชีวิตอยู่ด้วยความคิดที่ต่อต้านอาวุธนิวเคลียร์ อย่างเช่น การไว้อาลัยแก่วิญญาณของผู้เสียชีวิตในวันที่เกิดระเบิดปรมาณู ให้การช่วยเหลือผู้ที่ได้รับความเสียหายด้วยกัน รวมถึงการเป็นพยานต่อการโดนระเบิดปรมาณู สืบทอดจากรุ่นสู่รุ่น มีชีวิตอยู่จนกว่ากฎหมายคุ้มครองจะถูกบัญญัติขึ้น เพื่อให้อาวุธนิวเคลียร์หายไปจากโลกนี้ พวกเขาใช้ชีวิตด้วยเหตุผลนี้มาตลอด

มนุษย์กับอาวุธนิวเคลียร์อยู่ร่วมกันไม่ได้ สำหรับผู้เสียหายแล้วเส้นทางชีวิตนั้นมีเพียงสิ่งเดียวคือการต่อสู้กับบางสิ่งที่จะบั่นทอนชีวิต

ถ้ามนุษย์ไม่เป็นฝ่ายปฏิเสธอาวุธนิวเคลียร์ อาวุธนิวเคลียร์จะเป็นฝ่ายที่ปฏิเสธมนุษย์เสียเอง ผู้เสียหายพูดออกมาว่า “ขอใช้มาซะ” พวกเขาลุกขึ้นตะโกนออกจากกันบึ้งของหัวใจว่า “ทำให้ร่างกายเรากลับมาเป็นเหมือนเดิม”

ความปรารถนาของผู้เสียหายที่เคยโดนระเบิดปรมาณู คือไม่ต้องการให้มันเกิดขึ้นซ้ำสอง ไม่ใช่แค่ลูกหลาน แต่ไม่ว่ากับใครก็ไม่ต้องการให้พบเจอเหตุการณ์นี้อีก องค์กร Hidankyo ได้รวบรวมความปรารถนาของผู้เสียหายเหล่านี้ รวมถึงรณรงค์มาจนถึงทุกวันนี้ ในบทต่อไปเราจะมาตามรอยกิจกรรมที่องค์กรดำเนินมาจนถึงปัจจุบัน เพื่อไม่ให้มีผู้เสียหายเกิดขึ้นอีก



(จากหนังสือรวมบทความกลุ่มผู้สัมผัสสัมผัสกับมันตภาพรังสีเมืองฮารามาจิ จังหวัดฟูกูชิมะ Genbaku o kangaueru Haramachi shimin no kai “Watashimo shougensuru”)

## 1. คำบอกเล่าของคุณ A

(อายุในขณะนั้น 34 ปี เพศชาย อาศัยอยู่เขตโซมะ)

เมื่อการเลือกหยุดที่ทางข้ามรถไฟ กลายเป็นจุดเปลี่ยนแห่งโชคชะตา ผู้ป่วยที่ได้รับวินิจฉัยอาการป่วยจากระเบิดปรมาณูคนแรกของจังหวัดฟูกูชิมะ

ผมเกิดช่วงปีแรกของยุคไทโซ (ค.ศ.1912) ในเขตโซมะ ปัจจุบันอายุ 70 ปี ในปีโชวะที่ 16 (ค.ศ.1941) พอผมอายุ 29 ปีก็ถูกเกณฑ์ไปเป็นทหารกองหนุนที่ 1 และในปีโชวะที่ 20 (ค.ศ.1945) เดือนมีนาคมหลังประจำการอยู่ที่เกาหลีได้ 4 ปีผมจึงถูกเรียกตัวกลับมาที่เขตโซมะอีกครั้ง

ตอนที่ระเบิดปรมาณูถูกปล่อยลงมา ผมได้ประจำการอยู่กรมการทหารสื่อสาร ที่กองบัญชาการใหญ่ของฮิโรชิมา รับหน้าที่เป็นแพทย์ทหาร กองกำลังของพวกเราได้กระจายตัวตั้งค่ายชั่วคราวในฝั่งภูเขาแถบตะวันออกของเขตฮิโรชิมา ที่เมืองโอนากะ

ในช่วงประมาณเจ็ดโมงครึ่งของวันที่ 6 สิงหาคม ผมได้รับคำสั่งให้รถนอนที่อยู่เพื่ออพยพ และยกทัพขึ้นรถบรรทุกที่มุ่งหน้าเข้าเขตฮิโรชิมา มีรถบรรทุกให้แบ่งคนขึ้นไปทั้งหมดห้าคัน ผมขึ้นรถคันที่สี่ และยืนบนรถทั้งอย่างนั้นตลอดการเดินทาง ช่วงประมาณแปดนาฬิกาสิบนาที ตอนที่ใกล้ถึงทางข้ามรถไฟเมืองอะตะโกะ ซึ่งอยู่ทางตะวันออกของสถานีฮิโรชิมา เนื่องจากเป็นเส้นทางที่มีรถไฟบรรทุกสินค้าเคลื่อนขบวนผ่าน รถบรรทุกของพวกเราจึงได้จอดรออยู่ตรงนั้น ในตอนนั้นเองสัญญาณเตือนการโจมตีทางอากาศได้ถูกยกเลิกไป และ เปลี่ยนเป็นสัญญาณเตือนภัยแทน แต่บนานฟ้าของฮิโรชิมา ผมเห็นเครื่องบินทิ้งระเบิดปี 29 ลำหนึ่ง ดูไกล ๆ ขนาดเท่าแมลงปอกำลังบินไปทางทิศตะวันตก ในตอนนั้น ผมคิดว่า “ไอ้เจ้าเครื่องบินทิ้งระเบิดปี 29 หนีไปแล้วระอ่ะ” ช่วงพริบตานี้เองผมเห็นแสงแฟลชขนาดใหญ่ราวกับแมกนีเซียมที่เผาไหม้สว่างวาบขึ้นมา แล้วทุกอย่างก็มีตกลง ในขณะที่ภาพของพวกฝุ่นและเศษไม้ปลิวว่อนสะท้อนอยู่ในตา ทันใดนั้นเองแรงดันระเบิดมหาศาลได้เป่าพวกเรากระเด็นออกจากรถบรรทุกไปบนถนน ผมหมดสติไปราวหนึ่งชั่วโมง พอฟื้นสติกลับมาอีกที ปรากฏว่าครึ่งหนึ่งของรถบรรทุกถูกฝังอยู่ในดินและทราย ยิ่งไปกว่านั้นผมยังเห็นคนที่โดนระเบิดบางคนก็บาดเจ็บ บางคนก็หนีด้วยสภาพแผลไฟคลอกทั้งอย่างนั้น (ตอนแรกผมเห็นแค่ขาของพวกเขา) ส่วนคนขับรถก็เลือดอาบไปทั้งตัวเพราะเศษกระจก

หลังจากนั้นพอมาคิดดู ตรงทางข้ามรถไฟที่พวกเราจอดรถบรรทุกรถไฟบรรทุกสินค้าเคลื่อนขบวนผ่าน จะบอกว่าเป็นทางแยกแห่งโชคชะตาดี หรือเป็นเส้นแบ่งความเป็นความตายดี รถบรรทุกสามคันที่วิ่งนำหน้าเราไปก่อนนั้นได้มุ่งหน้าไปศูนย์กลางเมืองคามิยะเสียก่อน ทำให้ไม่รู้ความเป็นไปของพวกเราเลย ตัวผมเองถ้าไม่ได้หยุดที่ทางข้ามรถไฟในตอนนั้นละก็ ไม่รู้จะเกิดอะไรขึ้นบ้าง... บนรถบรรทุกคันแรกนั้นมีทหารอยู่ราวสามสิบนายเลยนะ

ต่อจากนั้นก็ลำบากพอสมควร ไฟลุกปกคลุมเมืองไปทุกหนทุกแห่ง ได้ยินเสียงกรีดร้อง “คุณทหารช่วยฉันที” ออกมาจากกองเพลิง ส่วนตัวผมเองใบหน้าด้านซ้ายก็ถูกไฟคลอก ขาก็เดินกะเผลกเพราะมีรอยฟกช้ำ แต่ก็ยังพอเดินได้ด้วยตัวเองอยู่ พวกผมมุ่งหน้าไปยังโรงเรียนมัธยมต้นมัตสึโมะโตะ (ปัจจุบันโรงเรียนมัธยมปลายพาณิชยศาสตร์มัตสึโมะโตะ) เพราะว่าผมเป็นแพทย์ทหาร จึงตัดสินใจไปช่วยทำการพยาบาล ระหว่างเดินทางนั้นเองพวกเราก็ได้พบกับเมืองที่มีสภาพน่าหดหู่ ผมเห็นศพที่นอนในน้ำเสีย ไม่ว่าจะตรงไหนก็มีศพนอนกองพะเนิน คนที่บาดเจ็บหรือโดนไฟคลอกก็มาพันแข้งกอดขาขอร้องให้ช่วย นี่คือนรกบนดินอย่างแท้จริง

ที่โรงเรียนมัธยมต้นมัตสึโมะโตะเองผมก็ได้พบเจอเรื่องราวมากมายในระหว่างที่ให้ความช่วยเหลือด้านการรักษาพยาบาล ผมผู้ผ้าห่มที่สนามโรงเรียนและภายในอาคารเรียน จากนั้นก็ให้ผู้บาดเจ็บที่อพยพมาไปนอนตรงนั้น ถึงจะบอกว่าทำการรักษาแต่สิ่งที่ผมทำได้ก็คือการเช็ดทำความสะอาดเหล่าคนที่โดนไฟคลอกกรวากับถูกทอดด้วยน้ำมันก็เท่านั้น มีเด็กสาวคนหนึ่ง ดวงตาของเธอถูกเศษกระจกรูปสามเหลี่ยมขนาดใหญ่ที่มอยู่ ไม่สามารถเอาออกมาได้ ผมจึงพันผ้าก็อตไว้กับแขนบนก้นส้น จากนั้นเอาขาข้างหนึ่งทับหน้าอกของเด็กสาวไว้จนในที่สุดก็คีบออกมาได้ “ตาของหนูจะกลับมามองเห็นได้อีกครั้งไหมคะ” เด็กสาวถามขึ้นมา แต่ผมไม่สามารถตอบอะไรเธอได้เลย ยิ่งไปกว่านั้นสิ่งที่ผมไม่มีวันลืมเลยคือ คนเป็นแม่อุ้มลูกที่หัวแตกเลือดอาบราวกับมะเขือเทศ พูดว่า “ช่วยลูกฉันด้วย” ทั้ง ๆ ที่เด็กนั้นตายไปแล้วแท้ ๆ แต่คนเป็นแม่คงเสียสติไปแล้วสินะ นี่มันรบกวนดินซัด ๆ นอกจากนั้นผมยังต้องตัดแขนคนที่ห้อยต้องแต่งด้วยกรรไกรอีก ไม่มีอะไรที่จะทำได้ดีกว่านั้นเลย

หลังจากนั้นไม่นาน ใบหน้าของผมก็บวมเพราะแผลไฟคลอก ผู้บังคับบัญชาที่สั่งผมว่า “หยุดแล้วมาดูแลตัวเองได้แล้ว” ผมจึงหันมาททาย และรับการรักษาบนใบหน้าด้านซ้ายที่ถูกไฟไหม้ด้วยการฉีดยารักษาหนอง ถึงแม้ว่ามันจะเจ็บปวดมากแต่ผมก็ได้รับการรักษาที่ดีกว่าคนทั่วไป จากนั้นไม่นานผมก็กลับไปกองกำลังที่อยู่บนเขาเมืองโอนากะ เนื่องจากอยู่บนภูเขา จึงสามารถเห็นเมืองที่ถูกเผาสองวันสองคืนจากที่นั่นได้ มีผู้คนมากมายบุกรุกขึ้นเขาที่พวกเราอยู่ และขอร้องว่า “ช่วยด้วย” แต่ระหว่างทางขึ้นเขามาก็มีหลายคนที่ล้มตาย จนศพโดนหนอนไชตาและจุมูก หากสี่ถึงห้าวันผ่านไปแล้วยังไม่มีคนมารับศพ ก็จะมีทหารหน่วยเก็บกู้ซากศพมาเก็บไป

ยิ่งไปกว่านั้นหลังจากเหตุการณ์ที่ระเบิดผ่านไปเจ็ดถึงสิบวัน ผมถึงเพิ่งได้ไปกลางเมืองเพียงครั้งเดียวเท่านั้นในฐานะหน่วยกู้ภัย แม่น้ำสายนั้นที่เคยสวยงามในจังหวัดอิโรชิมะ แม่น้ำเจ็ดสายที่ไหลผ่านอิโรชิมะ และยังคงเรียกว่าเป็นเมืองแห่งน้ำ แต่กลับมีศพมากมายนับไม่ถ้วนลอยอยู่ในแม่น้ำนั้น ราวกับเป็นแพศพ มันช่างน่าสลดใจเสียจริง หลังจากนั้นกองกำลังของพวกผมก็ไม่ได้ถูกยุบอย่างเป็นทางการ แต่เหล่าผู้บังคับบัญชากลับแอบแยกย้ายกลับบ้านเกิดไปที่ละคนที่ละคนอย่างเงียบๆ เปรียบได้กับหัวมังกรหางงู (ท่าดีที่เหลว) ข้าเหล่าผู้บังคับบัญชายังชนของยังชีพของกองทัพใส่กระเป่าเป่ของตนเอง ทั้งเสบียงอาหารอย่างน้ำตาลและอาหารกระป๋องก็ถูกเอาไป ด้วยเหตุนี้ไต้ยีนมาว่าคนที่ใช้อำนาจแสวงหาผลประโยชน์ให้ตนเองก็มี พวกเขาาก็กลับมาและชนของไปหลายต่อหลายครั้ง ซึ่งเป็นเรื่องที่โหดร้ายมาก ผู้คนในบริเวณใกล้เคียงจังหวัดอิโรชิมะและภูมิภาคคันไซได้ทำเรื่องแบบนั้น แต่พวกเราที่มาจากภูมิภาคโทโฮคุไม่สามารถกลับบ้านได้ในทันที พูดตามตรงแล้วพวกเราถูกทิ้งให้จัดการงานที่เหลือ คนที่มาขโมยเสบียงอาหารของพวกเราก็มีเป็นจำนวนมาก จึงลือมั่วลวดหนามกันไว้

ด้วยเหตุนี้ผมได้ปลดประจำไปยังบ้านเกิดที่เมืองโซมะ ในวันที่ 7 เดือนกันยายน ปีโชวะที่ 20 (ค.ศ.1945) จากจังหวัดอิโรชิมะไปยังเมืองคุระะ นังเรือประมงไปโทคุชิมะ และจากนั้นก็นั่งรถไฟบรรทุกสินค้าไร้อันหลังคาไปยังจังหวัดโอซากา เนื่องจากเป็นรถจักรไอน้ำผมจึงคลุมศีรษะด้วยผ้าห่มเพื่อป้องกันควันในอุโมงค์ ยิ่งไปกว่านั้นเมื่อเดินทางด้วยรถไฟสายชูโอ ผมก็ได้คิดว่า “ที่นี่คือเมืองคิโสะ จังหวัดฟุกุชิมะหรือเปลาณะ” ที่บ้านเกิดที่เมืองโซมะ น้องชายของผมทั้งสองคนได้เสียชีวิตในสงครามไปแล้ว และผมคิดว่าผมที่เป็นหัวหน้าครอบครัวก็คงจะตายที่อิโรชิมะแน่ ๆ แต่อย่างไรก็ตามถึงแม้ว่าผมจะถูกอาบรังสี ก็ยังมีชีวิตกลับมาบ้านได้อย่างปลอดภัย

ครึ่งปีผ่านไป หนึ่งปีผ่านไป ร่างกายของผมก็แปลกไปอย่างมาก ผมเคยทำงานค้าขายมาก่อน แต่ตอนนี้แค่ไปส่งของเพียงเที่ยวเดียวเหวี่ยงก็ไหลโซมกาย ทั้งเหนื่อยง่าย บางครั้งเลือดก็ไหลไม่หยุด ภาวะอาหารและลำไส้ก็ไม่ดี เป็นเวลา 7-8 ปี ที่ผมเข้ารับการรักษาโรคจุดแบบซีดสีและไปหาหมออย่างต่อเนื่อง แผลไฟไหม้ที่หน้านั้นเป็นแผลไฟไหม้

ระดับแรกจึงไม่หลงเหลือรอยแผลเป็นค็ลอยด์<sup>3</sup> แต่รอยของสายรัดคางของหมวกเหล็กนั้นไม่ว่าจะผ่านไปนานเท่าไรก็ยังเหลือรอยสีขาวเหมือนกับผิวส่วนที่ไม่ไหม้แตกต่างจากการเล่นน้ำทะเล ทุกครั้งที่ไปร้านตัดผมจะถูกมองว่าแปลก อย่างไรก็ตามร่างกายของผมไม่เป็นไปตามที่คิด จึงไปพบหมอหลายๆ ที่แต่หมอกลับบอกแค่ว่าอาจจะขาดสารอาหารหรือขาดวิตามิน แต่ก็ไม่สามารถหาสาเหตุได้

ในปีโชวะที่ 32 (ค.ศ.1957) ผมก็เป็นโรคหอบหืด<sup>4</sup> จึงไปหาหมอที่คลินิกอาโอยามะในเมืองโซมะ นั่นเป็นครั้งแรกที่ผมได้เล่าเรื่องของระเบิดปรมาณูให้คุณหมออาโอยามะฟัง หลังจากนั้นคุณหมอก็เจาะเลือดจากหูเพื่อไปตรวจเม็ดเลือดขาวทันที จึงได้รู้ว่ามียู่น้อยนิดเพียง 4,200 เซลล์ต่อไมโครลิตร<sup>5</sup> เท่านั้น และถูกวินิจฉัยว่าอาการป่วยที่ผ่านมานั้นคือ “อาการป่วยจากระเบิดปรมาณู” ในตอนนั้นแพทย์เองก็ไม่ค่อยรู้เกี่ยวกับอาการป่วยจากระเบิดปรมาณู ยิ่งในพื้นที่ต่างจังหวัดแบบนี้ยิ่งไม่รู้ ผมรีบไปตรวจที่โรงพยาบาลมหาวิทยาลัยโทโฮคุที่เมืองเซนได พบว่ามีเม็ดเลือดขาว 3,400 เซลล์ต่อไมโครลิตร นอกจากนี้โรงพยาบาลภายในจังหวัดนั้นดีกว่า จึงเข้ารับการรักษาที่โรงพยาบาลมหาวิทยาลัยการแพทย์ฟุกุชิมะ ผมกลายเป็นผู้ป่วยจากระเบิดปรมาณูที่ได้รับการรับรองรายแรกจังหวัดฟุกุชิมะ ทันทีที่เข้ารับการรักษาในโรงพยาบาล บ้านก็น้ำท่วมเพราะได้ฝุ่นหมายเลข 24 พอดี ผมจึงออกจากโรงพยาบาลโดยพลการ และหลังจากนั้นก็พยายามที่จะพักรักษาตัวที่บ้าน ได้รับยาสร้างเม็ดเลือด ทานตับข้าง บำบัดด้วยออนเซ็นบ้าง และเม็ดเลือดขาวก็เพิ่มขึ้นมาเป็น 4,500 เซลล์ต่อไมโครลิตร เงินบำนาญในกรณีที่ได้รับบาดเจ็บและป่วยจึงถูกระงับไป ในปีโชวะที่ 50 (ค.ศ.1975) จำนวนเม็ดเลือดขาวอยู่ที่ 6,000 เซลล์ต่อไมโครลิตร ปีโชวะที่ 52 (ค.ศ.1977) 4,800 เซลล์ต่อไมโครลิตร และในเดือนพฤศจิกายน ปีโชวะที่ 57 (ค.ศ.1982) มี 5,500 เซลล์ต่อไมโครลิตร ในระหว่างนั้นก็ต้องทำงานจึงเป็นช่วงเวลาที่ลำบากมาก ผมคิดว่าคุณหมออาโอยามะผู้ที่วินิจฉัยอาการป่วยจากระเบิดปรมาณูนั้นเป็นผู้มีพระคุณ แต่ในใจก็รู้สึกเจ็บปวดอย่างยิ่ง ผมกลายเป็นคนที่มองโลกในแง่ร้ายและเป็นโรคประสาท ทุกครั้งที่ได้ยินข่าวเกี่ยวกับจำนวนผู้เสียชีวิตจากโรครากระเบิดปรมาณูในจังหวัดฮิโรชิมา บ้างก็คิดว่าผมจะเป็นรายต่อไปหรือเปล่า และตกอยู่ในสภาวะกลัวตาย บ้างก็หวาดหวั่นมาก ๆ เพราะไม่มียารักษา ตอนกลางวันก็หมกมุ่นกับการทำงานจนไม่สนใจเรื่องอื่น แต่พอตกกลางคืนพอเริ่มคิดก็กลายเป็นว่าไม่สามารถนอนได้

ตอนนี้ผมก็ยังเป็นหอบหืดและไม่สามารถงดยาได้ เพราะเป็นผู้ป่วยพิเศษไม่ใช่ผู้ป่วยทั่วไปจึงได้รับการรักษา แต่มันก็ยังไม่เพียงพอ ขาขาจนตอนนี้ก็ยังลีบ ร่างกายเหนียวง่าย ป่วยก็ง่าย ภูมิคุ้มกันโรคก็ไม่มี เพราะมีปริมาณเม็ดเลือดขาวเพียงครึ่งหนึ่งของคนทั่วไปจึงเป็นธรรมดาที่ร่างกายจะอ่อนแอ ก่อนที่จะนำกฎหมายประกันสุขภาพผู้ป่วยจากระเบิดปรมาณูมาใช้ ต้องจ่ายค่ารักษาพยาบาลเองทั้งหมด โรงพยาบาลที่ถูกกำหนดสำหรับผู้อาบรังสีได้แก่ โรงพยาบาลรัฐบาลโซมะ โรงพยาบาลสาธารณสุขคาชิมะ โรงพยาบาลมหาวิทยาลัยการแพทย์ฟุกุชิมะ และโรงพยาบาลในสังกัดมหาวิทยาลัยโทโฮคุ เป็นต้น แต่ก็เป็นเรื่องยากทั้งในด้านเวลาและเงิน ถึงจะไปโรงพยาบาลอื่นก็สามารถจ่ายไปก่อนชั่วคราวและหลังจากนั้นหากยื่นเรื่องก็จะได้รับค่ารักษาพยาบาลคืน ถึงจะขอให้สถานีอนามัยเขียนหลักฐานรับรองคำร้อง แต่ขั้นตอนการดำเนินการก็ยังยุ่งยาก ถ้าปฏิบัติต่อพวกเราดีขึ้นอีกสักหน่อยคงจะดี ก็เป็นหัวข้อในการสนทนาในงานพบปะของผู้อาบรังสี การรักษาพยาบาลต่าง ๆ ได้รับการปรับปรุงให้ดีขึ้น แต่เพราะผมอยู่ห่างจากจุดเกิดเหตุระเบิดปรมาณูที่จังหวัดฮิโรชิมา 2.1 กิโลเมตร จึงถูกปฏิเสธการรักษาพยาบาลดังกล่าว งบในการรักษาพยาบาลก็ค่อนข้างต่าง

<sup>3</sup> รอยแผลเป็นชนิดหนึ่ง ซึ่งมีลักษณะเป็นแผลนูนมีการขยายใหญ่ออกนอกขอบเขตบาดแผลเดิม

<sup>4</sup> โรคหืดหรือหอบหืดเกิดจากการอักเสบของหลอดลมเรื้อรัง ร่วมกับการที่หลอดลมมีความไวต่อสิ่งที่มีมากระตุ้นมากผิดปกติ ทำให้ช่องทางเดินหายใจส่วนหลอดลมหดตัวหรือตีบตัน ในกรณีของเรื่องนี้เกิดในบริเวณหลอดลมใหญ่

<sup>5</sup> คนทั่วไปมีเม็ดเลือดขาวประมาณ 4,500 – 10,000 เซลล์ต่อไมโครลิตร

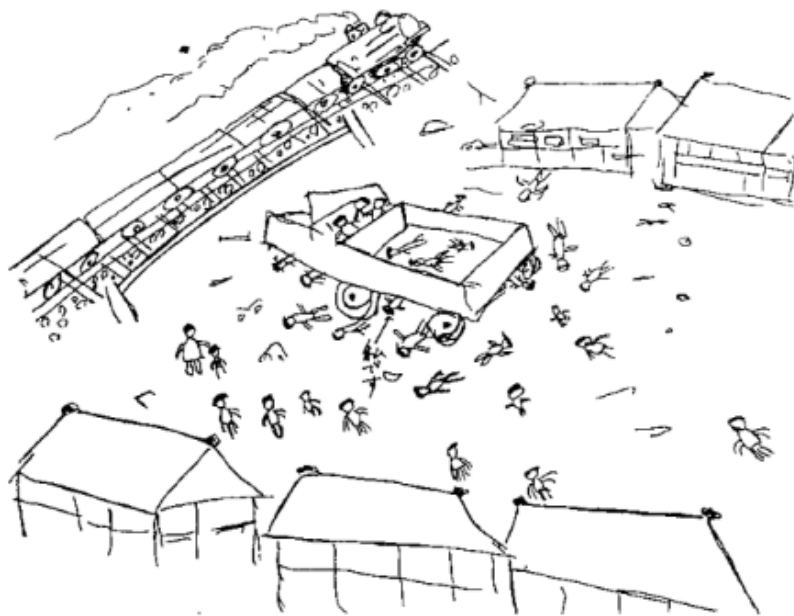


จากผู้ที่อยู่ภายในจุดเกิดเหตุ 2 กิโลเมตรมาก ในช่วงสงครามผมอยู่แค่ที่อิโรชิมะและประเทศเกาหลีซึ่งที่ตรงนั้นไม่ใช่ด้านหน้าของสงครามจึงไม่ได้รับเงินบำนาญ

ผมเองก็เป็นเหยื่อของสงคราม น้องชายสองคนก็เสียชีวิตระหว่างการรบ ผมไม่มีทางต้องการให้สงครามปรมาณูเกิดขึ้น สงครามนั้นไม่ได้มีเพียงแค่ทหารเท่านั้น แต่ชาวบ้านธรรมดาที่ถูกตีกเข้าไปเกี่ยวข้องเช่นกัน นำเศร้าและเป็นการกระทำที่โหดร้ายจริง ๆ ผมได้เห็นและสัมผัสมันด้วยตาของตัวเอง ผมจะต้องปกป้องสันติภาพในปัจจุบัน และต่อต้านสงครามโดยไม่มีเงื่อนไขผมเห็นด้วยเป็นอย่างมากในการจัดบันทึกประสบการณ์ของพวกเขาเราลงไป เพื่อเป็นการณรงค์เพื่อสันติภาพ และเพื่อหลงเหลือเอกสารส่งต่อไปให้คนรุ่นหลัง แต่ว่าได้โปรดเข้าใจด้วยว่าในบรรดาผู้อาวุโสรังสีเอง ก็มีหลายคนที่มีระมัดระวังไม่ให้เป็นที่รู้จักในฐานะผู้อาวุโสรังสีด้วยเหมือนกัน

จนกระทั่งก่อนหน้านี้ ผมเองก็ไม่ได้ไปดูนิทรรศกาลภาพระเบิดปรมาณูอะไรนั้นหรอก มันทำให้นึกถึงความทรงจำหลายๆ อย่าง ทั้งน่าหวาดหวั่นและสั่นกลัว แต่เมื่อปีที่แล้วผมได้ลองไปนิทรรศกาลฉายภาพ ณ ศูนย์กลางชุมชนในเขตโซมะ ในหัวข้อ “จงดืบมนุษยชาติกลับมา” หรือ “คำพยากรณ์” เป็นครั้งแรก แน่ใจว่านั่นไม่ใช่สิ่งที่พวกผมได้ประสบมาทั้งหมด คุณ 00 สหายร่วมรบของผม ที่มาจากเขตโซมะเหมือนกัน เขาจะเสียชีวิตอย่างน่าเศร้าเสียวนะ แน่ใจว่าเขาถูกอาบรังสีที่จังหวัดอิโรชิมะเช่นกัน ถึงจะปลดประจำการไปแล้วร่างกายก็ทรุดลง และไม่ที่จะอยากทำอะไรเลย ทุกคนมองเขาว่าเป็นคนเกียจคร้าน ถูกมองว่าเป็นคุณลุงที่มีปัญหา (ภาษาถิ่นฟูกูชิมะ) จึงไม่สามารถไปพบแพทย์ได้ 2-3 ปีถัดมาก็เสียชีวิตทั้งๆ ที่ไม่รู้ชื่อโรคและสาเหตุ หลังจากที่เขาเสียชีวิต ดูเหมือนว่าเป็นเพราะถูกอาบรังสีและมีอาการป่วยจากระเบิดปรมาณู แต่อย่างไรกรณีของเขานั้นน่าสงสารเหลือเกิน ผมเองก็เลิกทิ้งเหล้าทั้งบุหรี่ยี่สิบเชิงเพื่อรักษาสุขภาพ ผมเกลียดสงครามเหลือเกิน เด็กเองก็น่าสงสาร

(บทสัมภาษณ์วันที่ 6 มกราคม ค.ศ.1983)



ภาพเหตุการณ์หลังจากเกิดระเบิดปรมาณูทันทีที่วาดโดยคุณ A

“เวลาประมาณ 8.10 น. ในตอนที่รถบรรทุกที่ผมนั่งกำลังจอดอยู่ทางตะวันออกของสถานีรถไฟอิโรชิมะ บริเวณถนนที่มีรางรถไฟตัดผ่านของเมืองอะดาโกะ เพื่อรอให้รถบรรทุกสินค้าแล่นผ่าน ระเบิดปรมาณูก็ถูกปล่อยลงมา ผมถูกพัดกระเด็นไปบนถนน ได้รถบรรทุกนั้นร่างกายครึ่งหนึ่งถูกฝังในทราย”

## 2. คำบอกเล่าของคุณอิเตะสะบุโร ฮานะฟูสะ

(อายุในขณะนั้น 29 ปี เพศชาย อาศัยอยู่ที่เขตฟุตะบะ เมืองนะมิเอะ บริเวณคาริยาโดะ)

**เมฆรูปเห็ด<sup>6</sup> ที่ดูงดงามราวกับเมฆฝนฟ้าคะนอง**

**ความกังวลในเรื่องผลกระทบต่อลูก-หลานจากระเบิดปรมาณู**

ผมตั้งใจที่จะสรุปประสบการณ์ที่ผมผ่านการอาบรังสีที่จังหวัดอิโรชิมะด้วยตนเองให้ได้ ก่อนหน้านี้ผมเคยเริ่มต้นเขียน 1 ครั้งแล้ว แต่ว่าไม่ค่อยถนัดในการเขียนเลยปล่อยที่เขียนไว้แบบนั้น ผมตั้งใจที่อยากจะบอกต่อประสบการณ์ในครั้งนั้นเพื่อที่จะได้ไม่ต้องเขียนเกี่ยวกับความโหดร้ายขนาดนั้นของระเบิดซ้ำอีก ถึงแม้การเขียนนี้จะบอกชื่อผมออกไปก็ไม่เป็นไร

ผมเกิดในเดือนพฤศจิกายน ปีไทโชที่ 4 (ค.ศ.1915) ในปัจจุบันอายุ 67 ปี ผมถูกเรียกเกณฑ์ 2 ครั้ง ครั้งแรกคือ ที่กองกำลังทหาร 24 แถบตะวันออกของเมืองไอสึวากามัตสึ แต่ว่าที่จริงแล้วคือ ต้องไปที่กองกำลังทหารที่ 29 ที่เมืองวากามัตสึ ผมอยู่ที่นั่นเพียงแค่ 3 เดือนเพราะถูกเรียกไปในเรื่องการศึก ครั้งที่ 2 คือ ในตอนเดือนมีนาคม ปีโชวะที่ 20 (ค.ศ 1945) ถูกเกณฑ์ไปที่คามิอูนิ แขวงเซตางายะ จังหวัดโตเกียว ในวันที่ 10 เดือนเมษายน มีการโจมตีทางอากาศครั้งใหญ่ที่โด่งดังที่โตเกียว และเพราะว่าผมอยู่ที่แขวงเซตางายะเลยได้รับความช่วยเหลือ ดูเหมือนว่าพื้นที่เขตไทโตถูกทำลายจากการโจมตีทางอากาศ ที่จริงมันโหดร้ายแต่ตัวผมเองจำอะไรไม่ค่อยได้มาก

ราว ๆ วันที่ 12 เดือนเมษายนก็ได้ออกเดินทางไปที่จังหวัดอิโรชิมะ และใช้เวลา 3 วันถึงที่หมาย มีกองกำลังทหารของพวกเราตั้งอยู่ที่ตีนเขาฮิชิ เมืองมินามิ ซึ่งอยู่ทางตะวันออกของเขตอิโรชิมะ กองกำลังฝั่งตะวันตกที่ 13377 ซึ่งเป็นหน่วยสื่อสารที่อยู่ภายใต้การควบคุมกองบัญชาการทั่วไปของจักรวรรดิ มีคนทั้งหมดอยู่ประมาณหนึ่งพันคน ผมเป็นแพทย์ทหารที่นั่น และคุณ A จากเมืองโซมะก็อยู่ที่นั่นด้วย

การโจมตีทางอากาศที่จังหวัดอิโรชิมะก็ค่อย ๆ ทวีความรุนแรงขึ้นเรื่อย ๆ ผมคิดว่ามันแปลก ๆ ที่ทำไมมีเพียงจังหวัดอิโรชิมะเท่านั้นที่ไม่โดนโจมตีทางอากาศและทำไมจังหวัดอิโรชิมะถึงไม่ได้รับความเสียหาย ดังนั้นในราวเดือนกรกฎาคม กองกำลังจึงย้ายไปที่เมืองโอนางะ ซึ่งตั้งอยู่ทางตะวันออกเฉียงเหนือของเขตอิโรชิมะ บริเวณแถบภูเขาของเมืองโอนางะเคยเป็นหมู่บ้านของคนเกาหลี กองกำลังได้ยึดพื้นที่ตรงนั้นเพื่อที่จะประจำการที่นั่น อาจฟังดูแย่มากๆ แบบนี้และเกิดความขัดแย้งระหว่างสายสัมพันธ์มิตรภาพญี่ปุ่น-เกาหลี แต่บ้านที่คนเกาหลีอาศัยอยู่นั้นเป็นอาคารแบบบอนดอล<sup>7</sup> และมันสกปรกมากด้วยเศษกระดาดที่กองเคลื่อน ถึงแม้กองกำลังหลักจะย้าย แต่ผมยังอยู่ในเมืองมินามิพร้อมกับคนอื่น ๆ อีกประมาณ 50 คน

ในวันที่ 5 สิงหาคม คือ หนึ่งวันก่อนการทิ้งระเบิดปรมาณู ได้มีเครื่องบินของกองทัพสหรัฐฯ ลำหนึ่งบินเข้ามาในช่วงกลางวันและทิ้งใบปลิวไว้ และเพราะว่าทหารกรูเข้าไปรวมตัวทันที เลยทำให้ผมไม่รู้เนื้อหาในใบนั้น แต่ได้ยินมาว่ามันถูกพิมพ์ข้อความว่า “พลเมืองทุกคนอพยพซะ” ในคืนวันที่ 5 สัญญาณเตือนภัยของการโจมตีทางอากาศดังขึ้นตลอดทั้งคืนเมื่อเมืองถูกระเบิดทิ้งระเบิดแล้วก็ได้เข้าสู่ในระยะเวลาเตรียมพร้อมสำหรับสงคราม และเพราะว่าผมเป็นแพทย์ทหาร ผมจึงเข้าเวรตอนกลางคืนที่โรงพยาบาลร่วมกับสิบเอกคางาวะจากจังหวัดคางาวะ

<sup>6</sup> เมฆรูปเห็ด เมฆจากการระเบิดปรมาณู

<sup>7</sup> บ้านบอนดอล บ้านแบบเกาหลีที่มีตัวทำความร้อนอยู่ด้านล่าง

ในวันที่ 6 สิงหาคมเป็นวันที่ทิ้งระเบิดปรมาณู ซึ่งเป็นวันที่อากาศร้อนจัด แดดส่องจ้าตั้งแต่เช้า สัญญาณเตือนภัยการโจมตีทางอากาศของเมื่อคืนก่อนถูกลดลงมาเป็นเพียงสัญญาณเตือนภัย และในท้ายที่สุดก็ถูกยกเลิกไป ราว ๆ เวลา 8:10 น. ผมกำลังเดินจากสถานีรถไฟฮิโรชิมาไปยังสะพานซารุกับสึบเอกางาวะ เพราะว่าทหารรับใช้ของบ้านผู้ป่วยอาการเกิดปวดท้องขึ้นมาตรงสะพานซารุ ใกล้ ๆ กับสถานีอิโรชิมะ

ผมได้ยินแต่เสียงเครื่องบินทิ้งระเบิดปี 29 เครื่องบินทิ้งระเบิดปี 29 ปล่อย "ลูกโป่งสีแดง" ลงมาหรือก็คือในบรรดาเพื่อนร่วมรบคนอื่น ๆ ก็เป็นพยานในการเห็นการทิ้งระเบิดปรมาณู อย่างไรก็ตามระหว่างที่ผมเดินอยู่บนถนน ก็ได้มีระเบิดปรมาณูถูกทิ้งลงมา และทั้งผมและสึบเอกางาวะก็ถูกระเบิด

ด้วยแรงระเบิดทั้งผมและสึบเอกางาวะก็ถูกพัดไปและหมดสติไปทั้ง ๆ แบบนั้น ผมจำแสงสว่างในช่วงพริบตาของช่วงการเกิดระเบิดได้ ผมไม่รู้จะพูดอย่างไร แต่มันเป็นลำแสงที่น่าประหลาดใจมากโดยแสงที่ออกมาอย่างเรียบนิ่งแต่เป็นแสงสว่างที่ทรงอนุภาพ ทั้งๆ ที่เป็นกลางวันแสดๆ แสงนี้กลับสว่างกว่าราวกับเป็นการเผาแมกนีเซียม<sup>8</sup> พื้นที่ที่ผมพินคินสติ อาจจะห้าหรือสิบนาทีต่อมา แถวน้ำมันมีดสนิทและผมมองไม่เห็นอะไรเลย ผมบาดเจ็บเล็กน้อย มีรอยบาดแผลฟกช้ำจากการกระแทกที่กลางหลังและบาดแผลรอยไหม้ และมีแผลเปิด แต่ไม่ได้เป็นแผลพวกแผลคีลอยด์<sup>9</sup> สึบเอกางาวะหัวกระแทกแต่ยังอยู่ในระดับสามารถเดินได้ เมื่อพิจารณาว่าจุดระเบิดปรมาณูอยู่ห่างจากศูนย์กลางการระเบิดไม่เกิน 2,000 เมตร ผมคิดว่ามันเบามาก อย่างไรก็ตามผมตัดสินใจกันว่ากลับไปที่ยุงกำลังที่ภูเขาฮิโรชิมา แต่ในเขตอิโรชิมะอยู่ในสภาพที่น่าอดสู เป็นสถานการณ์ที่เรียกได้ว่าเหมือนอยู่ในนรกจริงๆ ตามถนนมีแต่ความโหดร้ายทารุณ อย่างเช่น มีคนที่มีบาดแผลเปิด สภาพดูไม่ได้ ซากศพราวกับภูเขา เสียงของทหารที่ถูกไฟคลอกกรีดร้องว่า “ร้อนๆ ช่วยฉันด้วย!” จนถึงตอนนี้ผมยังคงไม่สามารถเอาเสียงกรีดร้องนั้นออกจากหัวได้

เมื่อผมกลับไปที่ยุงกำลังในเมืองมินามิ ค่ายทหารยังไม่ถูกไฟไหม้ แม้ว่าค่ายจะถูกทำลายแต่พลเมืองก็มาที่ค่ายทหารเพื่อขอความช่วยเหลือ แต่เพราะพวกเขาที่ต้องช่วยเหลือเพื่อนทหารของตัวเองอย่างสุดความสามารถเหมือนกัน ดังนั้นพวกเขาก็รับมือไม่ทัน ในขณะที่เดียวกันเมฆรูปเห็ดของระเบิดปรมาณูก็มีขนาดใหญ่และพองตัวกระจายไปทั่วท้องฟ้า สิ่งนั้นมันงดงามราวกับแสงตะวันในยามอัสดงที่เปล่งประกายท่ามกลางเมฆฝนฟ้าคะนอง พุดตามตรงผมไม่เคยเห็นเมฆที่สวยงามเช่นนี้มาก่อน พอตกกลางคืนผมก็ออกจากเมืองฟางงาไฟเพื่อไปช่วยเหลือทหาร บริเวณรอบ ๆ สะพานเอนโคว มีศพจำนวนมากกองทับถมกันราวกับภูเขา เพราะทั้งสองฝั่งกลายเป็นทะเลเพลิง ผู้คนจำนวนมากจึงวิ่งหนีขึ้นไปบนสะพานและกระโดดลงไปแม่น้ำ

ตรงแม่น้ำเองก็มีศพลอยอยู่เป็นจำนวนมาก รอบ ๆ ก็อยู่ในสภาพที่เลวร้าย ไม่มีทั้งผู้หญิงและผู้ชายเหลืออยู่ ผู้ที่บาดเจ็บเล็กน้อยก็ถูกอพยพไปที่ลานฝึกทหารทางตะวันออกตรงใต้ภูเขาฟูตาบะ ระหว่างที่ทำการรักษา ผมไม่สามารถลืมภาพของคุณแม่อายุประมาณ 40 ปีกับลูกสาวอายุประมาณ 17-18 ปีที่ได้รับแผลไฟไหม้เข้าขั้นรุนแรงมาเกาะขาผมพร้อมกับร้องขออย่างสุดเสียงว่า “ช่วยด้วยคะคุณทหาร” สึบเอกางาวะกับผมจึงแบกลูกสาวขึ้นหลังและพามาตรงรถบรรทุกผู้อพยพ และเนื่องจากพวกเรานำกับผ้าพันแผลจากหน่วยพยาบาลมาจำนวนหนึ่ง จึงทำการปฐมพยาบาลเบื้องต้นให้เรียบร้อยก่อนจะพาขึ้นรถบรรทุก ผมคิดว่าอีกไม่นานแม่ลูกคู่นี้คงจะได้รับความช่วยเหลือ และในเย็นวันนั้นผมคิดว่าจะนอนหลับโดยที่ไม่ทานข้าวเย็น

<sup>8</sup> เมาแมกนีเซียม การเผาแมกนีเซียมจะทำให้เกิดการลุกไหม้ที่โชติช่วง เป็นแสงสีขาว

<sup>9</sup> คีลอยด์ แผลเป็นที่เปื่อยยุ่ย

วันรุ่งขึ้น วันที่ 7 ผมกลับไปยังกองกำลังที่เมืองโอนางะ ผมได้รับมอบหมายให้ส่งทหารจำนวนมากที่อพยพมาไปยังโรงพยาบาลสภากาชาดญี่ปุ่น ถึงจะบอกว่าเป็นโรงพยาบาล แต่ก็ยังอยู่ในสภาพที่อาคารคอนกรีตหลงเหลืออยู่และประตูกับหน้าต่างก็ไม่ได้ปลิวหายไปตามแรงระเบิด เนื่องจากผู้คนที่บาดเจ็บมีจำนวนมาก พวกเขาจึงถูกวางเรียงกันทั้งบนพื้นและบนทางเดิน โดยให้รับการรักษาเบื้องต้นเท่านั้นเพราะที่นี่ไม่มีแม่แต่ยารักษา ไม่ว่าจะเป็นเสียงกรีดร้องหรือเสียงร้องคร่ำครวญของผู้บาดเจ็บ แม้แต่ตอนนี้ผมก็ยังจดจำสิ่งที่เกิดขึ้นตอนนั้นได้ไม่ลืม ผมไม่รู้จะพูดอย่างไรดี มันคืออนรกของจริงเลย

หลังจากผ่านไปราว 2 วัน ก็มีคุณแม่อุ้มลูกสาววัยนักเรียนที่ได้รับบาดเจ็บบาดเจ็บสาหัสมาที่กองกำลังเมืองโอนางะ ผมได้รับคำสั่งจากแพทย์ทหารให้ทำการรักษา อย่างไรก็ตามเด็กคนนั้นมีแผลใหญ่เหวอะหวะตรงต้นขาจนมองเห็นกระดูก อีกทั้งตรงปากแผลก็มีหนองแมลงวันฟักไข่อู้อยู่ด้วย ผมจึงใช้แหวนดึงหนองแมลงวันออกมาและล้างแผลด้วยไฮโดรเจนเปอร์ออกไซด์ (Hydrogen peroxide : H<sub>2</sub>O<sub>2</sub>) ผมประหลาดใจที่มีหนองแมลงวันมาฟักไข่ เด็กคนนั้นหมดสติไปทั้งๆ ที่ยังไม่ได้รับการรักษา จึงเสียชีวิตเพราะเสียเลือดมากในวันถัดไป หากเป็นตอนนี้ก็คงจะช่วยได้ด้วยวิธีการถ่ายเลือดและยารักษาใดๆ แต่ๆ ช่างน่าสงสารเสียจริง คุณแม่ของเธอเล่าว่านักเรียนหญิงคนนั้นโดนรังสีในที่ตั้งเธอถูกระดมไปใช้แรงงานและเธอก็เดินทางกลับบ้านในระยะทางถึง 4 กิโลเมตรทั้งๆ ที่ยังบาดเจ็บอยู่ เป็นเรื่องที่น่าหดหู่มาก ที่ใจกลางเมืองฮิโรชิมะ ผมมักจะเห็นรถรางลุ่มอยู่บ่อยครั้ง และส่วนมากนักเรียนหญิงจะทำงานเป็นคนขับรถหรือพนักงานตรวจตั๋ว พวกเขาจึงถือเป็นผู้เสียสละไปด้วย นักเรียนหญิงเหล่านั้น ทุกคนมีท่าทีน่าเกรงขามและคาดฟ้าคาดหัวลายธงชาติญี่ปุ่นที่สลักว่า “หน่วยงานรับใช้ชาติ”

เหล่าภรรยาของนายทหารชั้นสัญญาบัตรของกองกำลังก็อยู่ที่โรงพยาบาลเช่นกัน แต่ใบหน้าและร่างกายกระเซอะกระเซิงจนแยกไม่ออกว่าใครเป็นใคร และจะแยกแต่ละคนยังงั้นหรือ ผมรู้ว่าใครเป็นใครจากเสียงของพวกเขา

ในวันที่ 1 เดือนกันยายน ผมได้รับคำสั่งให้ปลดประจำการ ผมนั่งรถส่งสินค้าที่ไม่มีหลังคาไปตามเส้นทางรถไฟสายโฮคุริคุ ผ่านไอสึวากามัตสึไปตามที่ราบสายบันเอ็ตสึโจนสามารถกลับมาถึงเมืองนามิเอะ (จังหวัดฟูกูชิมะ) เมื่อวันที่ 3 เดือนกันยายน

ถึงแม้บ้านของผมจะเป็นครอบครัวเกษตรกร แต่ระยะเวลา 1 ปีที่หยุดพัก ร่างกายทั้งอ่อนล้าและไม่มีเรี่ยวแรง งานก็ไม่ทำ และไปพักผ่อนด้วยการไปแช่น้ำร้อนอยู่บ้าง หลังจากนั้นสุขภาพก็ทรุดโทรมลงเรื่อยๆ และประมาณปี.ศ. 1937 ก็เป็นโรคตับอักเสบ จึงต้องเข้ารับการรักษาที่ Rosai Hospital<sup>10</sup> เกือบ 3 เดือน

นอกจากนี้ในระยะเวลา 10 ปีที่ผ่านมา ผมสูญเสียการรับรู้กลิ่นมาตลอด อาการหูอื้อก็ไม่เคยหายกลับมาเป็นปกติ เป็นหวัดง่ายและยังรู้สึกเหนื่อยบ่อยๆ ด้วย ผมได้รับสมุดบันทึกสุขภาพสำหรับผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณูและไปตรวจสุขภาพที่โรงพยาบาลโอโนะทุกๆ ปี ปีละ 2 ครั้ง ซึ่งคือเดือนมิถุนายนกับเดือนธันวาคม วันนี้ผมก็ไปที่นั่นเพื่อฟังผลการตรวจในเดือนธันวาคม แต่คราวนี้เป็นการตรวจอย่างละเอียดเนื่องจากความผิดปกติของตับ ในทุกๆ ครั้ง ผมมีภาวะเม็ดเลือดขาวต่ำ ในปี.ศ. 1956 มีเม็ดเลือดขาว 4,200 cell/ml และในปี.ศ. 1957 มีเม็ดเลือดขาว 4,500

<sup>10</sup> Rosai hospital คือ โรงพยาบาลสำหรับผู้ประสบอุบัติเหตุและความเสียหายที่เกิดขึ้นในระหว่างการทำงาน ในบริษัทนี้สามารถเป็นโรงพยาบาลสำหรับผู้ประสบภัยพิบัติ (การอาบรังสี) ได้ด้วย

cell/ml<sup>11</sup> ผลตรวจของเดือนธันวาคมปีที่แล้วก็มีความผิดปกติ โดยค่า GOT สูงถึง 84 IU/L และค่า GPT สูงถึง 50 IU/L<sup>12</sup>

เนื่องจากเกิดความผิดปกติร่างกายเพราะการอาบรังสีเช่นนี้ ผมจึงกังวลเหลือเกินว่าลูก ๆ ของผมจะได้รับผลกระทบบางอย่าง ผมมีลูก 6 คน 3 คนเพิ่งเกิดหลังจากผมถูกอาบรังสี โชคดีที่เติบโตมาอย่างแข็งแรง แต่ก็ยังเป็นห่วงเรื่องการแต่งงาน หลังแต่งงานแล้วก็ยังกังวลอีกว่าหลานจะเป็นอย่างไร โดยเฉพาะตอนที่หลานคนที่สองเกิด ณ ตอนนั้นผมใจสลายมากเพราะที่ใบหน้าของหลานมีปานขึ้นอยู่ ผมตกใจมากจริง ๆ ว่าจะทำอย่างไรดี แต่นั่นเป็นสิ่งที่เกิดตอนคลอดลูก พอเริ่มโตปานนั้นก็หายไปตามธรรมชาติผมจึงโล่งใจ ครอบครัวของผมเองทุกคนก็รับรู้ว่ามีผมเป็นผู้อาบรังสีหลานที่ร่างกายอ่อนแอก็ไม่มี ผมจึงสบายใจไปเปลาะหนึ่ง

ดังที่ผมได้กล่าวไว้ก่อนหน้านี้ เป็นเรื่องเกี่ยวกับคุณ A จากเมืองโซมะซึ่งอยู่ในกองกำลังฮิโรชิมะด้วยกัน แม้มัน A ได้รับรังสีที่รุนแรงมากกว่าผม แต่คุณ A ก็คอยให้กำลังใจคนอย่างผมมาตลอด จิตวิญญาณที่แข็งแกร่งของเขาทำให้ผมทิ้งหลังจากคุณ A กลับไปที่โซมะก็ตั้งใจทำงานจนร่ำรวย ช่างเป็นคนที่เจ๋งจริง ๆ ผมเคารพนับถือเขาและคิดว่าเขาทำงานหนักจริง ๆ

เมื่อ 6 ปีที่แล้วในเดือนมีนาคม ผมตัดสินใจไปฮิโรชิมะกับภรรยาเป็นครั้งแรกตั้งแต่เกิดเหตุการณ์นั้น ซึ่งมีการฟื้นฟูบูรณะจนต่างกับตอนนั้นอย่างสิ้นเชิง ผมยังได้ไปที่พิพิธภัณฑ์ระเบิดปรมาณูฮิโรชิมะ (Hiroshima Peace Memorial Museum) ด้วย ถึงจะมีการจำลองตุ๊กตาเป็นผู้หญิงที่ถูกอาบรังสีแต่ก็ยังห่างไกลกับโศกนาฏกรรมในตอนนั้น ตั้งแต่ตื่นเขาฟูตาระไปจนถึงข้างในเมืองฮิโรชิมะ เพลวไฟเผาผลาญที่ลุกไหม้อยู่ทุกคืน อย่างไรก็ตามก็ไม่สามารถสัมผัสได้ชีวิตถึงแม้จะมีรูปถ่ายของเหตุการณ์ตอนนั้นก็ไม่อยากจะให้ใครมาเห็นเลย

ผมไม่สามารถสัมผัสมันได้ ขนาดที่ว่าถ้ามีรูปในตอนนั้นก็อยากที่จะเล่าเรื่องราว ตอนนี้นะไม่มีทางที่จะอยากคิดเกี่ยวกับเรื่องของสงครามอะไรนั่นซ้ำอีก นับประสาอะไรกับสงครามระเบิดปรมาณู ผมต้องการให้หลีกเลี่ยงสิ่งนี้ ที่จังหวัดฮิโรชิมะกลายมาอยู่ในสภาพนี้ด้วยระเบิดปรมาณูเพียงลูกเดียว นอกจากนี้มีการกล่าวกันว่าระเบิดปรมาณูไฮโดรเจน ในปัจจุบันมีอำนาจรุนแรงกว่านี้หลายร้อยหรือหลายพันเท่า เป็นเรื่องที่น่ากลัวมาก

ผมสงสัยว่ากองกำลังป้องกันตนเองของญี่ปุ่นต้องการทำสงครามจริง ๆ หรือไม่ ผมรู้สึกว่าคุณวุธุโระปรกรณ์ของกองกำลังป้องกันตนเองเหมือนเป็นเพียงแค่เครื่องประดับ และดูเหมือนว่าตอนนี้พวกเขาก็กำลังเพิ่มอาวุธวุธุโระปรกรณ์อยู่ ผมสงสัยเกี่ยวกับเรื่องนี้เช่นกัน ผมคิดว่ามันอันตรายที่จะยั่วยุประเทศที่อยู่รอบ ๆ เพื่อทำสงคราม ผมคิดว่าเงินที่ใช้ไปกับอาวุธวุธุโระปรกรณ์ควรใช้เพื่อการทูตรักษาสันติภาพและป้องกันสงคราม นอกจากนี้ดูเหมือนว่ากองกำลังจะถูกบังคับให้ซื้ออาวุธวุธุโระปรกรณ์ทางทหารจากสหรัฐอเมริกาด้วยราคาที่สูงอีกด้วยเรื่องนั้นช่างแปลกพิลึกเสียจริง

ผมไม่ดื่มเหล้า บุหรี่ก็ไม่สูบ มันไม่ดีต่อร่างกาย งานอดิเรกคือการเดินทางออกไปโน่นไปนี่

ไปดูหนังเรื่อง “เอาความเป็นมนุษย์คืนมา”<sup>13</sup> “คำทำนาย” ตอนที่ฉายที่นาไมเอะปีที่แล้วมา

(บทสัมภาษณ์วันที่ 13 มกราคม ค.ศ. 1983)

<sup>11</sup> ผู้ที่ร่างกายแข็งแรงจะมีเม็ดเลือดขาวประมาณ 5,000 – 10,000 cell/ml

<sup>12</sup> การตรวจ SGOT และ SGPT คือการตรวจค่าตับ โดยค่าปกติคือต้องไม่ถึง 40 IU/L

<sup>13</sup> 「にんげんをかえせ」 Ningen o Kaese! ภาพยนตร์บันทึกเหตุการณ์ระเบิดปรมาณูที่ฮิโรชิมะและนางาซากิ กำกับโดย Tachibana Yuuten ฉายครั้งแรกค.ศ.1982

花房さんが描いた広島町の町



比治山

### สถานที่ที่ผมโดนระเบิดปรมาณู

ในเวลาเดียวกันจุดศูนย์กลางที่โดนระเบิดก็เกิดไฟไหม้และไฟก็ลุกลามไปทั่วบริเวณรอบ ๆ ผมได้เห็นเหตุการณ์ที่สถานที่ใหญ่ ๆ อย่างโรงเรียนฝึกทหารพังทลายลง รถไฟปะทะกันอย่างรุนแรงเกิดขึ้นซ้อนกัน



ผมคิดว่าภาพนี้เกิดขึ้นหลังจากผ่านไป 2 วัน รรรางที่ล้มคว่ำไปก็มอดไหม้จนเหลือแต่โครงเหล็ก นักเรียนหญิงที่ทำงานเป็นคนขับรถหรือพนักงานตรวจตัวในฐานะหน่วยงานรับใช้ชาติที่คาดผ้าคาดหัวลายธงชาติญี่ปุ่นก็มีชะตากรรมเดียวกัน

### 3. คำบอกเล่าของคุณอิอิโตะ สึรุคิจิ

(อายุในขณะนั้น 32 ปี เพศชาย อาศัยอยู่ที่เขตโซมะ เมืองชินจิ หมู่บ้านโคมางามิเนะอิมะคามิ)

“น้ำเหลือง” นอกของเพื่อนร่วมรบนั้นแท้จริงแล้วคือ สมอ!

ต้องใช้ประสบการณ์นี้แก้ความเข้าใจผิดของผู้คน เกี่ยวกับผู้สัมผัสสารกัมมันตรังสี

ผมที่เกิดในเมืองโทมิโอกะปีเมจิที่ 44 (ค.ศ.1911) และจะอายุ 71 ปีในปีนี้

ผมถูกเรียกไประดมพลสองครั้ง ครั้งแรกคือที่โอกินาวะ ก่อนที่การระดมพลครั้งที่สองจะทำให้ผมได้เห็นสภาพอันน่าเวทนาของการทิ้งระเบิดปรมาณู ณ ฮิโรชิมาแห่งนั้นอย่างละเอียดด้วยร่างกายของตัวเอง

การระดมพลครั้งที่สองนั้นเกิดขึ้นในปีโชวะที่ 18 (ค.ศ.1943) เป็นวันเดียวกันกับที่ผมเข้าประจำการเป็นทหารในกองกำลัง 27 ทางตะวันออกของเมืองเซนต์ไคและได้รับคำสั่งให้ประจำหน่วยที่ 6710 ของกองกำลังรุ่งอรุณในฮิโรชิมา หน่วยแห่งนี้คือหน่วยสื่อสารคมนาคมทางเรือ ตอนที่ทิ้งระเบิดปรมาณูลงมา ผมอายุ 32 ปี ดำรงตำแหน่งพลทหารในกองกำลัง ช่วงเดือนมิถุนายน กองกำลังได้มีการจัดการแข่งขันซูโม่ทำให้ผมได้รับบาดเจ็บบริเวณหัวเข่าระหว่างกำลังแข่งรอบตัดสิน ผมถูกนำตัวไปรักษาที่โรงพยาบาลกองทัพบกที่ 1 แม้จะอยากรีบออกจากโรงพยาบาลให้เร็วที่สุดก็ตามแต่เจ้าหน้าที่ระดับสูงกลับบอกว่า “การเข้ารักษาเองก็เป็นหนึ่งในหน้าที่” บ้างละ แม้กระทั่งหลังจากออกจากโรงพยาบาลแล้วก็ยังคงต้องไปพักฟื้นที่ท่ามัตสึริออนเซ็นในเมืองอิซุโมะอีกด้วย จนในที่สุดผมก็ได้กลับไปประจำการที่หน่วยเดิมในฮิโรชิมาเมื่อประมาณวันที่ 20 ของเดือนกรกฎาคม ซึ่งเป็นสิบห้าวันก่อนที่จะเกิดการทิ้งระเบิดปรมาณู

วันที่ 6 สิงหาคม ในวันนั้นมีการประกาศเตือนภัยโจมตีทางอากาศตั้งแต่เช้า จนกระทั่งช่วงประมาณ 7 โมงเช้า การประกาศก็ถูกยกเลิกและกลายเป็นเสียงไซเรนเตือนภัยเสียแทน เสียงไซเรนเตือนภัยนั้นยังคงดังต่อเนื่องจนถึงช่วงประมาณ 8 โมง 10 นาที ในตอนนั้นผมกำลังคุยกับเพื่อนจากจังหวัดอากิตะอยู่บนชั้นสามของอาคารที่พักทหาร แม้จะรู้สึกสงสัยกับการเตือนภัยที่กำลังดังอยู่ก็ตามแต่หลังจากนั้นประมาณ 1 นาที ทางวิทยุกลับแจ้งว่า “เพราะเป็นความผิดพลาดของเครื่องบินพันธมิตร จึงจำเป็นต้องยกเลิกการประกาศเตือน” วินาทีนั้นเองที่ทั้งผมทั้งเพื่อนต่างก็รู้สึกใจชื้นขึ้นมา ทว่าทันทีที่รู้สึกถึงแสงสว่างสีม่วง ความรู้สึกสับสนในใจและความอึดอัดบางอย่างก็ก่อตัวขึ้นอย่างกะทันหัน ที่พักอาคารไม้แตกออกก่อนที่ตัวผมจะร่วงลงมาจนถึงชั้น 1 อาคารที่พักทหารแห่งนั้นตั้งอยู่ที่เชิงเขาฮิชิ ทางตะวันออกของจังหวัดฮิโรชิมา เพราะห่างจากศูนย์กลางการระเบิด 1,800 เมตร ทั้งแสงและเสียงของระเบิดจึงแทบเกิดขึ้นพร้อมกัน จะบอกว่าร่วงลงมาก็ไม่เชิงนัก เรียกว่าตกลงมาจนถึงชั้น 1 น่าจะดีกว่า ผมทั้งรู้สึกทรมาน จุกแน่นท้องราวกับมันจะแตกออกและหมดสติไปทั้งแบบนั้น หลังจากนั้นก็ผ่านไปประมาณ 30 นาทีรีเปลาณะ รู้สึกตัวอีกทีผมก็ติดอยู่ในรางน้ำขนาดประมาณ 45 เซนติเมตรซึ่งแยกออกเป็นสองส่วนในอาคารอย่างสมบูรณ์ ตัวทั้งร่างถูกทิ่มแทงด้วยตะปูจากแผ่นไม้มุงหลังคาที่ตกลงมา พอมานับรอยแผลเป็นพวกนั้นที่หลังแล้วก็พบว่ามิดั้ง 104 จุดเลยละ สุดท้ายแล้วผลจากการทิ้งระเบิดครั้งนั้นก็มีเพียงแค່รอยแผลเป็นพวกนี้ แน่แน่นอนว่าร่างกายของผมเจ็บปวดไปทั่วจากการฟกช้ำ แต่ถึงอย่างนั้นช่วงวินาทีที่เกิดการระเบิดขึ้น เพื่อนจากจังหวัดอากิตะคนนั้นเองก็ร่วงลงมาและเสียชีวิตทันทีข้างๆ ผม ทั้งศีรษะและกระดูกหลุดออกมาพร้อมกัน เป็นการตายที่แสนโหดร้ายและน่าสังเวช ผมหนีออกจากซากปรักหักพังของอาคารที่พักทหารมาได้ พลทหารโอคุมะที่เห็นสภาพในตอนนั้นพูดกับผมว่า “นายนี้มันถึกทนชะมัด” อีกทั้งเขายังบอกด้วยว่า “นายมีน้ำเหลืองติดบนหน้าอกอยู่นะ” พอได้ยินแบบนี้ผมจึงก้มลงไปมอง แล้วก็พบสิ่งที่เหมือนกับเครื่องในปลาติดแน่นอยู่บนหน้าอกจริงอย่างที่เขาวา ผมใช้ใบฟักทองที่อยู่แถวนั้นเช็ดมันออก หลังจากนั้นไม่นานก็ได้รู้ว่าสิ่งนั้นคือมันสมอของ

เพื่อนร่วมรบที่ตายทันทีที่เพิ่งเล่าไป เขาถูกแรงระเบิดตัวลอยกระเด็น ทำไม่ถึงกลายเป็นแบบนี้ไปได้ พอนึกถึงเพื่อนคนนั้นแล้วผมก็พูดอะไรไม่ออก

ผมไม่มีแผลไฟไหม้ก็จริง แต่ในบรรดาทหารที่อยู่บริเวณหน้าต่าง บางคนมีแผลไฟไหม้อย่างรุนแรงเสียจนผิวหนังเป็นสีแดงเหมือนกับเนื้อลูกมะเดื่อ บางร่างศีรษะก็พัดปลิวหาย กลายเป็นศพที่ไร้ศีรษะ มีคนที่เข้าห้องน้ำและถูกพัดปลิวไปทั้งที่ยังอยู่ในนั้นแล้วยังรอดชีวิต อีกทั้งมีคนที่ส่งางามน่านับถือแม้กระทั่งตอนนี้ คนๆ นั้นคือหัวหน้ากองกำลังของเรา พันโทอิชิโจว อิเดโอะผู้เกิดที่เมืองซัปโปโรนั่นเอง กรรมาลาของเขาไม่ได้ถูกระเบิดพัดปลิวหายไปแต่ตอนที่ร่างปรากฏอยู่ตรงหน้าพวกเรา เครื่องแบบของเขาถูกสวมใส่เต็มยศอย่างเป็นระเบียบเรียบร้อย ในขณะที่บาดเจ็บร้ายแรงเสียขนาดนั้น ผมรู้สึกประหลาดใจอย่างมากกับความแข็งแกร่งและรู้สึกเป็นเกียรติแก่เขา ผมคิดถึงช่วงเวลาหลังสงครามที่ได้พบคุณอิชิโจวผู้แสนร่าเริงในสมาคมสหายร่วมรบมากเหลือเกิน... อย่างไรก็ตาม กำลังพลทั้ง 600 นายของพวกเรามีชีวิตรอดเหลือเพียงไม่ถึงร้อยภายในช่วงเวลาสั้น ๆ ส่วนที่เหลือก็จากไปอย่างกะทันหันหลังจากนั้น นั่นทำให้ผมอดคิดไม่ได้ว่าพลังทำลายล้างของระเบิดปรมาณูนั้นช่างโหดร้าย ผมมองภูเขาที่เคยเขียวขจีตั้งอยู่รอบ ๆ อิโรชิมะ ในตอนนี้มันกลายเป็นสีแดงฉานไปแล้ว ความรู้สึกหนึ่งก่อตัวขึ้นในใจ ผมรู้ได้ทันทีว่ามนุษย์ไม่สามารถมีชีวิตรอดในสถานการณ์เช่นนี้ได้แน่ๆ เพราะเพียงแค่ชั่วพริบตาเดียวมันก็กลายเป็นแบบนี้ไปแล้วอย่างไรละ

ผมได้เข้าใจที่หลังว่าระเบิดที่ทิ้งลงอิโรชิมะคือระเบิดปรมาณูและเพิ่งรู้ว่าเป็น “ระเบิดชนิดใหม่” ก็เมื่อช่วงเที่ยงของวันนั้น อันที่จริงหน่วยของพวกเราเป็นหน่วยสื่อสารคมนาคม รับคลื่นสัญญาณวิทยุโทรทัศน์จากคนจีนถ่ายทอดมายังญี่ปุ่น หากถูกค้นพบว่าเผยแพร่ความลับของทางการก็อาจถูกศาลทหารเรียกตัวไปได้ ทางหน่วยได้ติดตั้งเครื่องที่เรียกกันโดยทั่วไปว่า “เครื่องหมายเลข 5” ในการรับคลื่นสื่อสารระยะไกลแต่ดูเหมือนพวกเขาจะประกาศออกไปแค่ “พืชผลคงจะไม่เติบโตเป็นเวลาหลายทศวรรษ” เพียงเท่านั้น ในคืนวันที่ 6 คนที่อาคารดีขึ้นสามารถทานอาหารได้แล้ว ผมห่อตัวนอนในผ้าห่มอยู่กลางแจ้งใกล้ ๆ อาคารที่พักทหาร แม้จะรู้สึกคันที่เท้าแต่ก็ทำอะไรไม่ได้ ทว่าสุดท้ายก็ทนไม่ไหว ผมลองดึงผ้าห่มที่ปิดเท้าอยู่ออก พบว่ามีหมัดเกาะแน่นอยู่ที่เท้าก็รู้สึกตกใจขึ้นมา นั่นจึงทำให้ผมคิดได้ว่า ขนาดเป็นระเบิดปรมาณู พวกเห็บหมัดก็ยังไม่ตายอยู่ดี

หลังจากนั้น 7 วัน หน่วยของพวกเราที่ย้ายไปที่โรงเรียนประถมศึกษาในโฮะเพื่อหลบภัย พอเข้าไปในตึกเรียนแล้ว ผมก็รู้สึกเหมือนเจอประสบการณ์อันโหดร้ายจากระเบิดอีกครั้ง พวกเรานอนกันใโรงหมอนที่ติดมุ้งกันยุงสองชั้นและเดินทางไปทั่วจังหวัดอิโรชิมะเพื่อช่วยเหลือและเก็บกู้ซากศพ ผมเจ็บแผลบนหลัง มันมีเลือดซึมออกมา พวกเราพบร่างหลายรูปแบบของผู้คนมากมายในระหว่างนั้น ผู้เสียชีวิตเองก็มีเยอะเสียจนเรียงรายเป็นกองพะเนิน ที่ลืมนไม่ได้เลยคือภาพของศพไร้หัวที่ติดอยู่ในหลุมหลบภัยมากกว่า 11 ร่าง ไม่รู้เพราะอะไรร่างเหล่านั้นติดแน่นจนดึงขึ้นมาไม่ได้ ผมเหยียบบนหลุมนั้นแล้วดึงศพสุดแรงทั้งหมดที่มี ทุกคนอาจแย่งกันกระโจนลงไปหลุมหลบภัยเพราะร้อนมาก อีกทั้งยังมีร่างของผู้หญิงคนหนึ่ง ร่างกายส่วนล่างแยกออกเป็นริ้วๆ เรียวเล็กราวกับเส้นด้าย และด้วยสาเหตุบางอย่างทำให้ผู้หญิงคนนั้นเสียชีวิตโดยที่กำลังเงยหน้า เธอใส่เสื้อผ้าบางๆ ในฤดูร้อน เลื่อนนั้นเผาไหม้หมด ผมคลุมร่างกายส่วนล่างของเธอด้วยใบไม้ หวังว่าจะช่วยปิดบังให้ เจ้าหน้าที่ระดับสูงชมผมที่ทำแบบนั้น อย่างไรก็ตาม ไม่มีการแบ่งแยกชายหญิงอยู่แล้ว ไม่ใช่เวลาที่จะมาคำนึงเรื่องแบบนี้ด้วย อิโรชิมะนั้นเป็นเมืองศรีวิไล ผู้คนที่ต่างดงาม แม่น้ำลำธารใส และอุดมสมบูรณ์ไปด้วยอาหารดี ๆ จะว่าไปแม่น้ำอิชิที่เคียงดงามสายนั้น ตอนนี้มีแต่ซากศพจำนวนมหาศาลลอยเกลื่อน ผมใช้ตะขอลากศพขึ้นมาบนฝั่งแล้วใช้เท้าเหยียบหน้าท้องที่พองโตไปด้วยน้ำให้มันไหลออกมา พอทำแบบนี้แล้วจึงนำศพมารวมและเผาไว้ในที่เดียวกัน เพราะพวกเขาคือผู้ล่วงลับผมจึงพนมมือภาวนาพลาญทำลายผลบนหน้าผากเป็นสัญลักษณ์เพื่อนับจำนวนผู้ตาย แล้วนำน้ำมันเบนซินที่เก็บรักษาไว้ในทะเลเซโตะโนมาราดศพและเผา ไม่ต้องพูดถึงเรื่องกลิ่น มันเลวร้ายเสียจนแทบทนไม่ไหว บางครั้งผมก็เห็นภาพลวงตาว่าตนได้ตายไปแล้ว เพราะซากศพมากมายนอนรายล้อม



ตัวผม จึงลองหยิกแขนของตน ความเจ็บปวดได้ปลุกผมจากภาพลวงตา “เรายังมีชีวิตอยู่” ขณะที่กำลังกำจัดศพ ผมพกดาบทหารเดินไปมา นายสิบตรีชื่ออินะอุเอะที่เห็นเช่นนั้นก็คิดว่าผมเป็นเจ้าของที่ระดับสูง จึงทำวันทยาหัตถ์เคารพผม ขณะที่ผมจับมือเขาโดยไม่ได้ตั้งใจ เขามีแผลไฟไหม้ทั่วร่างและตัวเย็น จากนั้นก็เสียชีวิตไป ผมเผ่าร้างของบุรุษคนนี้ต่างจากศพอื่นๆ เผ่าร้างของเขาด้วยความเคารพ เนื่องจากเขามีภูมิลำเนาอยู่ที่ชิโกกุ ผมจึงนำอัฐิส่งไปยังครอบครัวของเขา ในภายหลัง เป็นเวลาราว 5 วัน ไม่มีสิ ราว 8 วันที่ผมใช้เวลาจัดการงานเก็บกู้ซากศพ ระหว่างนั้นตลอดช่วง 11 วันเมืองอิโรชิมะก็ยังคงลุกไหม้ ไม่มีใครคิดที่จะดับเพลิงนั้น ไม่มีสื่อให้คิดที่จะดับแต่ก็ไม่มีวิธีจัดการกับมัน

ราว 3 วันหลังจากการทิ้งระเบิด ผมเดินทางไปยังกองกำลังทหารประจำตะวันตกที่ 2 และได้รู้สึกประทับใจอย่างยิ่ง เพราะที่นั่นคนหนุ่มอายุราว 25-30 ปีทุกคนที่เป็นทหารกองหนุนจะเข้าไปประจำการในเช้าวันที่ 6 สิงหาคม พวกเขาล้มตายในสภาพที่เรียงแถวหันหน้าไปทิศทางเดียวกันทุกคน ผมคิดว่าคงจะเกิดระเบิดขึ้นช่วงที่กำลังตรวจสอบความพร้อมการเข้าประจำการอยู่เป็นแน่ จากการตายในสภาพที่กำลังกำยามทหาร อีกทั้งชาวเมืองอิโรชิมะที่มาให้กำลังใจพวกเขาที่หน้าด่านประตูก็เสียชีวิตอยู่ในสภาพทั้งอย่างนั้น ทหารเหล่านั้นล้มตายในสภาพที่ยังคงครองความสุขุมในสถานการณ์ตึงเครียดเรียงรายกัน ไม่ได้อลหม่าน กระวายเป็นแน่ในช่วงพริบตาการทิ้งระเบิดคราวนั้น ประเทศญี่ปุ่นที่มีเหล่าทหารอันสง่างามเช่นนี้ไม่มีทางจะแพ้สงครามหรอก ในตอนนั้นก็เป็นอย่างยิ่งที่ผมประทับใจอย่างยิ่ง และไม่อาจลืมได้ และผมก็คิดว่าในเวลาเดียวกันมนุษย์เราสามารถสร้างจิตใจอันแข็งแกร่งด้วยการฝึกฝนและการศึกษาคณะหนุ่มสาวที่ไม่ได้เรื่องได้ราวในปัจจุบัน ก็อาจช่วยแก้ไขให้มือนาคตติขึ้นได้ด้วยการศึกษา

ในวันที่ 11 สิงหาคม ผมได้ลองไปยังโรงพยาบาลกองทัพบกที่ 1 ที่คูแลมก่อนหน้านั้น ที่นั่นเองก็พังพินาศไปเสียแล้ว

วันที่ 15 สิงหาคมหลังสิ้นสุดสงครามก็มีเหตุการณ์ชาวเมืองบุกเข้ามาทำร้ายกองทหารของพวกผม การบุกเข้ามาประท้วงว่า ทำไมถึงไม่ทำสงครามต่อ แม้ว่าเมืองอิโรชิมะจะถูกทำลายขนาดนี้ไม่เสียใจในฐานะชายชาติทหารบ้างหรือไม่เจ็บใจบ้างจริง ถึงขั้นที่ว่าในหมู่ทหารในกองเองก็มีทหารที่ข่มขู่ว่า หากไม่รีทำสงครามต่อจะสังหารผู้บัญชาการเสีย ผมคิดว่าสำหรับชาวเมืองอิโรชิมะ ความแค้นใจจากการโดนทำลายล้างโดยระเบิดเพียงลูกเดียวกับความเจ็บปวดคงใหญ่โตขนาดนั้นเขี้ยวละ ผมคิดถึถ้วนแล้วการดำเนินสงครามต่อมันเป็นไปได้เลย เพราะอีกฝ่ายไม่ใช่คู่ต่อสู้ที่เราจะต่อกรได้ด้วยหอกไม้ไผ่หรอก

แม้กระทั่งโรงเรียนประถมนิโสะที่พวกผมเคยอยู่ก็มีความทรงจำมากมาย อย่างเรื่องที่ใช้น้ำมันสปินเดิลทอดเทมปุระ แน่นนอนว่าห้องร่วตั้งแต่ตอนกินมันแล้ว ทั้งกลิ่นกลิ่นเรื่องเห็บหมัด เรือด ยุง ผมยังสอนวิธีทำลูกอมจากหัวไชเท้าและมันเทศแก่เหล่าหญิงสาวใกล้ๆ แถวนั้น แล้วยังมีคำเรียก “อาจารย์” และคำขอบคุณจากพวกเธอ อีกทั้งชาวเกาหลีก็มาเยี่ยมเยียนปลอบขวัญ และให้ความช่วยเหลือแม้กระทั่งการซักผ้า หนึ่งในชาวเกาหลีกลุ่มนั้นได้มอบซองจดหมายบรรจุเมล็ดถั่วเหลืองคั่วถึง 120 ซองให้กับผม แล้วบอกว่า “แม้ฉันจะเป็นคนเกาหลี จนถึงทุกวันนี้บริจาการเงินเพียงคนเดียวให้แก่ประเทศ ก็ยังมีจดหมายขอบคุณนับร้อยฉบับจากโทโจ ฮิเดกิ แต่ถึงอย่างนั้นแล้วทำไมประเทศญี่ปุ่นถึงพ่ายแพ้กันเล่า ช่างน่าเจ็บใจเสียจริง” มีคนเกาหลีแบบนี้อยู่ด้วย หลังจากนั้นพอแบ่งถั่วเหลืองที่ได้รับมาบนรถไฟขบวนที่มุ่งตรงกลับบ้าน หลายคนต่างดีอกดีใจกันมาก เพราะเป็นช่วงเวลาที่เราขาดแคลนเสบียงอาหารโดยแท้

หลังจากนั้นกองทหารของพวกผมก็ถูกยุบไป กว่าผมจะสามารถกลับบ้านได้ก็เป็นวันที่ 2 กันยายน ผมอาศัยรถไฟบรรทุกสินค้าเฉพาะกิจกลับบ้าน

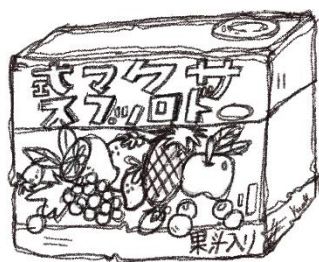
จะให้สงครามเกิดขึ้นอีกไม่ได้ มีผู้สังเวทชีวิตไปมากมาย มันมากพอแล้ว แม้จะบอกว่าเวลาที่ประเทศญี่ปุ่นแพ้สงครามมันช่างน่าเจ็บใจ เพราะพวกเราทุกคนเป็นผู้บริสุทธิ์จึงจะก่อสงครามต่อ จะต้องแก้แค้น หรืออะไรก็ตาม การใช้อาวุธนิวเคลียร์อย่างระเบิดปรมาณูและระเบิดไฮโดรเจนในสงครามนั้นจะทำให้เกิดขึ้นอีกไม่ได้ อาวุธอย่างนิวเคลียร์ไม่ใช่การก้าวหน้าแต่เป็นการถดถอยของมนุษยชาติเสียมากกว่า ไม่เพียงแค่ประเทศญี่ปุ่นเท่านั้น ผู้คนทั่วทั้งโลกต้องออกมาเคลื่อนไหวรณรงค์ร่วมกันทำให้อาวุธนิวเคลียร์หายไปเพื่อไม่ให้เกิดการใช้อาวุธนี้อีก ผมคิดว่ากองกำลังป้องกันตนเองในปัจจุบันควรกลับไปเริ่มต้นใหม่ตามความมุ่งมั่นเดิม กองกำลังป้องกันตนเองเดิมที่เป็นสิ่งที่เกิดมาเพื่อ “ป้องกันตนเอง” ของประเทศญี่ปุ่น ต้องป้องกันกองกำลังที่จะมารุกรานเท่านั้น แต่ว่ากองกำลังป้องกันตนเองในปัจจุบันกลับเป็นกองกำลังทหารสำหรับต่างชาติ จุดประสงค์แตกต่างออกไป นั่นทำให้ผมรู้สึกสงสัยอย่างมาก

ผองเพื่อนในศึกที่เหลือรอดของพวกผมได้สร้างสมาคมสหായร่วมรบเรียกว่า “สมาคมอรุณไมตรี” เป็นครั้งแรกที่พวกผมมารวมตัวพบปะกันจากแต่ละพื้นที่ทั่วประเทศในรอบ 30 ปี พอลงไปยังสถานที่ที่เคยมีที่ตั้งกองกำลังทหารตอนนี้ก็มีตึกบริษัท Nippon Telegraph and Telephone ตั้งอยู่ แต่ข้าง ๆ มีจุดที่เกาตันวิสทีเรียพันรุ่มร่าม พอมองดู ๆ มันคือหลุมหลบภัยที่พวกผมเคยใช้นั่นเอง ผมรู้สึกตื่นตันด้วยความคิดถึงและตะลึงใจ ที่นั่นพวกผมได้ไปเจอกับนายกเทศมนตรีเมืองฮิโรชิมะชื่ออารากิ ตอนที่ผมมอบเครื่องเผาเป็นของกำนัลแก่เขาก็ลองถามเรื่องนี้ไปดู แล้วเขาก็บอกตอบมาว่า “หลุมหลบภัยตรงนั้นทางจังหวัดให้เก็บรักษาไว้” สมาคมสหായร่วมรบจะมารวมตัวกันราว 60 คนพร้อมครอบครัวปีละหน ทั้งยังมีหลายคนที่ประสบความสำเร็จตามที่ตั้งใจ ๆ ตัวผมเองก็ได้ติดต่อ สนับสนุนกับพวกเขาตีเซียวละ ในปีนี้จะมารวมตัวที่บ้านของผม ณ เมืองชินจิด้วย

ผมถูกประเมินว่าเป็นผู้สัมผัสสารกัมมันตรังสี แล้วได้รับสมุดบันทึกสุขภาพสำหรับผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณู ไม่ใช่ว่าสภาพร่างกายปกติแต่อย่างใด เพราะการเดินทางมาขนาดนั้นในฮิโรชิมะหลังการทิ้งระเบิด มันต้องมีอาการอะไรสักอย่างที่ตามมาทีหลังแน่ ๆ แต่ตัวผมคิดว่าในกรณีของตุนั้นผ่าฟันมาด้วยพลังใจ ตั้งแต่เมื่อก่อนผมศึกษาเกี่ยวกับพืชสมุนไพร ค้นคว้ามันมากกว่าใครๆ และยังดูแลตนเองเสมอ ผมมีบุตรรวม 8 คน ลูกคนเล็ก 3 คนเกิดหลังสงครามสิ้นสุด ทุกคนแข็งแรงดี และผมมีหลานอีก 12 คน

ผมคิดว่าการรวมเรื่องราวประสบการณ์ระเบิดปรมาณูแบบนี้เป็นสิ่งดีและสำคัญ ผมคงทำไม่ได้หากไม่รวมไว้เสียเดี๋ยวนี้ และคิดว่าอยากจะให้ความร่วมมือในส่วนที่พอจะทำได้ ในกรณีของผมสามารถใส่ชื่อจริงในหนังสือได้เลยโดยไม่ขัดข้องแต่อย่างใด โลกนี้คงจะแย่มาก ถ้าการเปิดเผยว่าเป็นผู้สัมผัสสารกัมมันตรังสีแล้วจะทำให้เคราะห์ร้าย ดังนั้นผมคิดว่าต้องขจัดความเข้าใจผิดและอคติต่อผู้สัมผัสสารกัมมันตรังสีด้วยการนำเสนอประสบการณ์รูปแบบนี้ ในทางกลับกันก็ควรที่จะให้ประสบการณ์นี้เป็นบทเรียนที่เกิดประโยชน์แก่คนรุ่นหลังไม่ให้ประสบการณ์ที่น่าสลดเกิดขึ้นซ้ำอีกเป็นครั้งที่สอง วันนี้ต้องขอขอบคุณเป็นอย่างยิ่งครับ

(บทสัมภาษณ์วันที่ 10 มกราคม ค.ศ.1983)



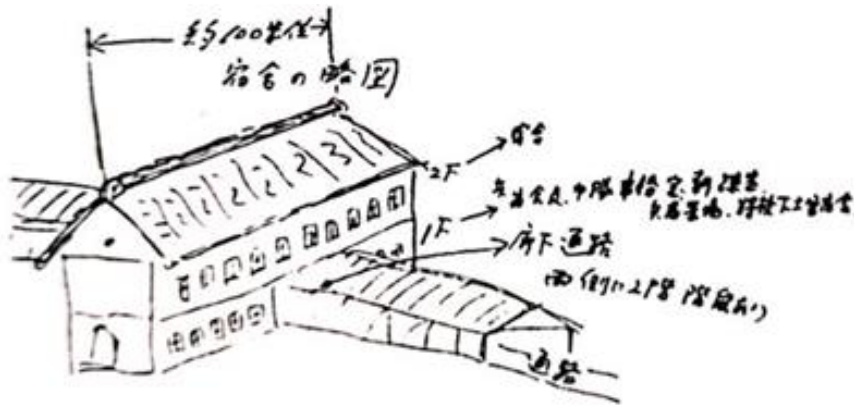
#### 4. คำบอกเล่าของคุณคุณวาระ เคย์

(อายุในขณะนั้น 32 ปี เพศชาย อาศัยที่เมืองฮารามาจิ หมู่บ้านมิชิมะ)

ผมถูกเงาของตึกช่วยเอาไว้

เรื่องราวของเด็กนักเรียนหญิงที่เสียชีวิตขณะร้องเพลง

ตัวผมในตอนนั้นประจำการอยู่ที่ศูนย์ฝึกกองกำลังทหารเรืออุจินะที่อิโรชิมะ ที่ศูนย์ฝึกนั้นประกอบไปด้วย 6 กองร้อย ผมสังกัดในกองร้อยที่ 4 (หน่วยเสาะหาระเบิด) หน่วยของผมมีหน้าที่ส่งคลื่นเสียงความถี่สูงออกไปเพื่อตรวจหาตอร์ปิโด หรือเพื่อระบุภูมิประเทศของจุดขึ้นฝั่ง แม้ว่าทุกวันนี้จะไม่มีอะไรผิดปกติแล้วและใช้เป็นเครื่องมือในการตรวจหาฝูงปลาแทน แต่ในสมัยนั้นเรียกได้ว่าเป็นอาวุธลับที่ล้ำหน้ามากเลยทีเดียว ด้วยเหตุนี้ผมจึงได้เป็นครูฝึกที่ให้คำแนะนำกับนักเรียนทหารชั้นสัญญาบัตร (นักเรียนนายร้อย หรือ นายร้อย) ที่ถูกส่งไปประจำ ณ กองกำลังต่าง ๆ ในห้องเรียน ผมเป็นครูฝึกของนักเรียนทหาร แต่เมื่อก้าวพ้นออกจากห้องเรียนแล้วผมเป็นสิบตรีและเหล่านักเรียนทหารเป็นผู้บังคับบัญชาของผม



宇品船舶練習部の宿舎  
(榮原さん自身が描いたもの)

หอพักที่ศูนย์ฝึกกองกำลังทหารเรืออุจินะ

(รูปที่คุณคุณวาระวาดด้วยตัวเอง)

ที่กองกำลังเราจะประชุมแอกกันทุกเช้าตั้งแต่แปดนาฬิกาเพื่อรับคำสั่ง ในวันนั้น วันที่ 6 สิงหาคมเองก็เป็นเช่นนั้น พวกทหารและนักเรียนทหารทั้งหมดออกมารวมตัวกันที่ลานกว้าง ผมคิดว่าตัวผมโชคดีจังเลยนะที่ไม่ต้องออกไป ในตอนนั้นผมยังมีหน้าที่ในการประจำการ จึงคุ้นเคยกับการใช้ชีวิตแบบนั้น และถึงจะเป็นครูฝึกก็มีหน้าที่ที่ต้องคอยเฝ้ายุทธโศภรณ์ด้วย ส่วนการประชุมแอกสำหรับผมเป็นการทำภายในห้องแทน ตอนที่เข้าห้องน้ำเสร็จแล้วออกมาข้างนอก ก็คิดขึ้นมาว่าท้องฟ้าในเดือนสิงหาคมนี้สว่างมากเลย แต่ก็คงเป็นเพราะยังเข้าอยู่ละมั้ง แล้วก็เข้าใจว่าอาจมีแสงอะไรูบวาบในตอนกลางคืนได้เหมือนกัน แต่ในเช้าที่สดใสนั้นมีแสงรังสีสว่างวาบขึ้น คุณเข้าใจไหมว่าแสงนั้นมันสว่างเสียจนแทบตาขนาดไหน ผ่านไปสักครู่เดียว คราวนี้มีเสียงระเบิดดังกึกก้องตามมา ระเบิดปรมาณูที่ว่ากันว่าจะสาดแสงสว่างวาบแล้วก็มีเสียงดังสนั่นนั้นเป็นเรื่องจริงนะ

สว่างจ้าและดั่งคลื่นเลย ด้วยแบบนั้นจึงทำให้หน้าต่างที่เป็นกระจกรวมถึงขอบหน้าต่างก็ถูกพัดจนปลิวหายไป ในขณะเดียวกัน ต้นไม้ทั้งต้นก็ถูกลมจากแรงระเบิดพัดจนกิ่งก้านแยกออกจากกัน เสียงดังก็ก้องนั้นคงจะเป็นเสียงเดียวกับเสียงลมจากระเบิด ลมของพายุได้ฟุ้งยังไม่สามารถเทียบกับแรงลมนี้ได้เลย เป็นแรงลมมหาศาล จุดที่ผมอยู่ตอนนั้นห่างจากจุดศูนย์กลางที่โดนระเบิดประมาณ 4 กิโลเมตร บริเวณนั้นจึงไม่เหลืออะไรเลย นอกจากอาคาร แต่ถึงอย่างนั้นทุกอย่างก็พังพินาศไปหมด จากที่ผมพูดไปก่อนหน้านี้ว่าผมอยู่ภายในตัวอาคารที่ตรงกับเงาของตึก จึงโชคดีที่ไม่ได้รับอันตรายอะไรเลยจากแสงนั้น พวกทหารที่อยู่ที่ลานกว้างนั้นโดนรังสีอาบไปทั่วร่างกาย จึงคิดว่าคงสัมผัสกับสารกัมมันตรังสีไปมากระดប់หนึ่งเลย

จนถึงจุดนี้ ด้วยเหตุผลอะไรบางอย่าง แต่ฮีโรซิมะไม่ได้เป็นเป้าหมายการโจมตีทางอากาศตั้งแต่แรก ทั้งที่มีเครื่องบินของสหรัฐอเมริกาบินอยู่เหนือ่านฟ้าของฮีโรซิมะจากทิศตะวันออกเฉียงใต้อยู่ตลอด แต่ทำไมถึงไม่ถูกโจมตี ผมแคลงใจว่าเป้าหมายน่าจะเป็นบริเวณท่าเรือคุระ ไม่ใช่ฮีโรซิมะไม่ใช่หรือ แต่ที่ว่าถ้าเครื่องบินเข้ามาทางตะวันออกเฉียงใต้ก็จะบินกลับไปทางตะวันตกเฉียงใต้เสมอ เส้นทางการบินเป็นแบบนี้ตลอดซึ่งดูแปลกประหลาด หลังจากระเบิดลงผมเห็นเครื่องบินทิ้งระเบิดปี 29 ด้วยนะ เครื่องบินอยู่ห่างออกไป 5-6 กิโลเมตรจากเหนือฮีโรซิมะมุ่งไปทางตะวันตก จากนั้นก็จำได้ว่าช่วงบ่ายของวันที่ระเบิดลงก็เห็นเครื่องบินทิ้งระเบิดปี 29 อีก 1 ลำ คงมาเพื่อสืบข่าว

ช่วงเช้าของวันนั้น มีการจัดระเบียบภายในกองกำลัง และตั้งแต่ช่วงบ่ายเหล่าทหารก็ออกไปปฏิบัติการกู้ภัยในตัวเมืองฮีโรซิมะ บ่ายวันนั้นทั้งเมืองลุกเป็นไฟ ทั้งควันโขมงจากเพลิงไหม้และเมฆครึ้มก่อตัวขึ้น เหลือเพียงแต่ความทรงจำประหลาดที่ได้ยินเพียงเสียงฟ้าร้องครืน ๆ ดังออกมาผ่านกลีบเมฆ จากใจกลางอันมืดมัวของจุดศูนย์กลางระเบิด ทหารที่เข้าเมืองไป เหตุการณ์ในวันนั้นเกินกว่าที่พวกเขาจะรับมือได้ พวกเขาเดินทางกลับมาในสภาพน่าเวทนา ได้พักอยู่ประมาณสามวันละมั้ง ระหว่างนั้นในเมืองก็ยังมีเพลิงกลามต่อเนื่อง หลังจากนั้นกองกำลังก็มีคำสั่งให้ออกปฏิบัติการกู้ภัยประมาณ 7-10 วัน ในตอนนั้นผมก็เข้าเมืองไปด้วยประมาณสามวันเช่นกัน เหล่าทหารที่เข้าไปในเมืองไม่รู้เกี่ยวกับสารกัมมันตรังสีจึงเข้าไปในปริมาณมาก ผู้ที่มีอาการท้องร่วงเพิ่มมากขึ้นเรื่อย ๆ สิ่งนั้นเลวร้ายมากเลยนะ หลังจากแยกกอง พวกทหารก็ถูกแบ่งออกเป็นส่วน ๆ ตามหน้าที่ แต่ก็ได้ยินมาว่ามีทหารที่ท้องร่วงหนักจนไม่สามารถช่วยเหลือได้ บางครั้งผมนึกถึงว่าทหารหนุ่มพวกนั้นจะเป็นยังไงกันบ้างแล้วนะ ไม่มีทางได้รู้ความเป็นไปของพวกเขาหลังจากนั้นเลย

มาพูดถึงศูนย์พักพิงผู้อับรังสีกันบ้าง กองกำลังของพวกเราที่อุจิมะมีหอประชุมขนาดใหญ่อยู่ ที่นั่นถูกใช้เป็นศูนย์พักพิงชั่วคราวตั้งแต่วันนั้นเป็นต้นมา ผมไม่มั่นใจนัก แต่ที่นั่นคงเป็นศูนย์พักพิงที่สี่ ถึงจะเรียกว่าศูนย์พักพิงแต่เชื่อว่าจะมีสิ่งอำนวยความสะดวกอะไรมาบ้าง อีกทั้งการรักษาก็ยังไม่มีประสิทธิภาพ อาจเพราะเป็นหอประชุมขนาดธรรมดา จึงสามารถรองรับผู้ลี้ภัยได้ประมาณพันกว่าคน ที่นั่นมีหลายคนที่หนีภัยมา ที่นั่นเต็มไปด้วยคนที่ได้รับบาดเจ็บจากไฟไหม้ แผลไฟไหม้ของพวกเขามองจากภายนอกดูเหมือนจะไม่สาหัสสักเท่าไหร่ แต่ถ้าผิวของพวกเขาสัมผัสกับอะไรเข้าก็จะลอกออกจนเผยให้เห็นเนื้อใต้ผิวหนัง กองกำลังได้ให้มีการสอบถามและจดบันทึกชื่อที่อยู่ของผู้ลี้ภัยลงในสมุดรายชื่อ คนที่หมดอาลัยตายอยากและในที่สุดก็ตอบชื่อที่อยู่ออกมาจนได้ก็มี คนที่อยู่ในสภาพหุดหุดและไม่ยอมพูดอะไรออกมาเลยก็มี อีกทั้งยังมีคนที่พูดด้วยเสียงเบาแผ่วซ้ำ ๆ ว่า “เรื่องนั้นนะ ไม่สำคัญแล้วละ” และเดินไปทั่วหอประชุม ด้วยเหตุนั้น สมุดรายชื่อนั้นก็จึงไม่เคยเสร็จสมบูรณ์ ผู้ที่รับการรักษาทุกคนมีท่าทางไม่ปกติคล้าย ๆ กัน เพราะเมื่อเหนื่อยก็อยากจะเอนตัวนอน แต่ถ้าเอนตัวลงก็จะเจ็บ

แผลไฟไหม้ที่มีทั่วร่างกายใช้ไหมละ จึงต้องนั่งให้มีแค่สันเท้าและสะโพกเท่านั้นที่สัมผัสพื้น โดยการนั่งแล้วเอาแขนโอบหน้าตักเอาไว้ทั้งแบบนั้น พวกคนที่ทิ้งตัวลงอย่างแรงคือคนที่ล้มเลิกความตั้งใจในการมีชีวิตอยู่ และในความเป็นจริง คนที่ทิ้งตัวลงแบบนี้ก็จะเสียชีวิตลงในไม่ช้า

พวกเราเดินตรวจตรารอบหอประชุมนั้นกันตามลำดับเวรยาม ถ้าพูดถึงเวรยามของผม เป็นการแจกจ่ายข้าวปั้น แต่ถึงกระนั้นก็ไม่มีการกินข้าวปั้นนั้นเลย เพราะแต่ละคนกินอะไรไม่ได้มากนัก เมื่อเข้ามาหาผม ทุกคนก็จะร้องขอด้วยเสียงอิดโรยว่า “คุณทหาร...ขอ...น้ำ...หน่อย” หรือ “ขอ ร้อง...ขอ น้ำด้วย” ตัวผมเองก็รู้ว่าให้น้ำได้มากแค่ไหน แต่ว่าเป็นคำสั่งของกองทัพว่าห้ามแจกจ่ายน้ำดื่ม เพราะถ้าให้น้ำไปละก็จะเป็นอันตรายถึงชีวิตแน่นอน แม้ว่าพวกเราอยากจะให้น้ำจริง ๆ แต่ก็ทำไม่ได้เพราะว่ามันอาจจะทำให้ผู้บาดเจ็บตายได้ ในเหตุการณ์ที่เกิดขึ้นนั้น มีเรื่องเกี่ยวกับนักเรียนหญิงคนหนึ่งที่ผมยังคงจำได้จนถึงตอนนี้ ในตอนที่ผมเข้าไปใกล้เด็กสาวคนนั้นเธอก็พูดว่า “ขอน้ำหน่อยนะคะพี่ทหาร แค่น้ำแก้วก็ได้ค่ะ” ผมเลยบอกให้ฟังว่าผมก็อยากตักน้ำให้คุณนะ “แต่ถ้าดื่มคุณก็จะตายเอาได้นะครับ ขอให้อดทนอีกนิดนะครับ” จริง ๆ แล้วถึงแม้ว่าจะให้เธอดทนต่อไปอีกนิดแต่ผมก็ไม่มีหนทางที่จะช่วยเธอได้เลย แล้วเด็กสาวคนนั้นพูดว่า “พี่ทหารคะ ขอ ร้อง ล่ะคะขอน้ำหน่อยคะ แค่น้ำแก้วก็ได้ค่ะ ตอนนี้หนูไม่ได้พกของมีค่าอะไรติดตัวมาเลยแต่มีนาฬิกาคะ หนูจะให้นาฬิกาเรือนนี้กับพี่ ขอ... น้ำหน่อยคะ” เพราะว่าผมเองอายุยังน้อย ก็คงจะเห็นใจเด็กสาววัยรุ่นเป็นพิเศษในช่วงสงครามที่ไม่มีอะไรเลยนั้น การขอ ร้อง ให้แลกน้ำกับนาฬิกานั้น มันช่างเจ็บปวดเหลือเกิน แม้จะนึกออกในตอนนี้ แต่เด็กสาวคนนั้นคงจะต้องหิวน้ำมาก ๆ แน่เลย ถึงจะไม่ต้องให้นาฬิกา แต่ผมเองก็อยากให้น้ำมากจริง ๆ แต่อย่างไรก็ตามผมทำได้เพียงพูดว่า “ถ้าดื่มน้ำคุณก็จะตายได้นะครับ ขอให้อดทนอีกนิดนะ” เท่านั้น ในไม่ช้าจากตอนนั้น พอเด็กสาวคนนั้นเอนตัวลงนอนและในตอนที่เธอกำลังจะสิ้นใจนั้น เธอก็เริ่มร้องเพลง ผมไม่แน่ใจว่าเพลงนั้นเป็นเพลงอะไรแต่ฟังดูเหมือนเพลงยอตนนิยม แล้วเธอก็เสียชีวิตลงไปแบบนั้น ผมยังคงจำได้ขึ้นใจเกี่ยวกับเรื่องนี้

เพราะว่าตอนนั้นเป็นตอนกลางฤดูร้อน ศพของพวกคนที่ตายจะเน่าเสียทันทีและกลิ่นคละคลุ้งจะออกมา ก็เลยจำเป็นต้องเผาศพทันที ผมจำได้ว่าพวกคนที่หนีมาวันที่ระเบิดลงตายหมดแล้ว ในการเผาศพนั้น ต้องขนำร่างผู้ตายออกมาข้างนอกหอประชุมก่อน แล้วจัดเรียงเอาไว้ที่บริเวณสวน ด้วยการนั้น พวกทหารจึงนำพืนที่รวบรวมมาจากเศษไม้ที่เหลือจากไฟไหม้บ้าง ซากไม้ที่ฟุพังบ้าง มาวางเอาไว้ด้านบนศพและจุดไฟเผาในตอนบ่าย วันต่อไปก็ทำเหมือนกัน เดียวก็เรียงศพเดียวก็ใส่พืนและประมาณบ่ายสองบ่ายสามก็จุดไฟสองวันต่อมาก็ทำเหมือนกัน ใน 1 วัน จัดเรียงและเผาศพได้ประมาณ 30 ถึง 40 ร่าง

จะว่าไปแล้ว ที่ผมเคยเล่าไปก่อนหน้านี้ว่าผมมีหน้าที่เฝ้ายุทธโธปกรณ์ แต่ยุทธโธปกรณ์นั้นดันมาตั้งอยู่หน้าเรือยกพล (เรือที่เต็มไปด้วยรถกระสุนที่พ่นเหมือนรังผึ้ง จากเหตุการณ์ที่ยะโฮร์บาห์รู แถบคาบสมุทรมลายู) และการเผาศพก็เกิดขึ้นที่ตรงนั้น เมื่อไฟลุกจุด เห็นศพถูกเผาอยู่ตรงหน้าและกลิ่นเหม็นมากจนอธิบายไม่ถูก เหม็นเสียจนยังได้กลิ่นอยู่แม้ในตอนกลางคืน กลิ่นเหม็นน่ารังเกียจมากเหมือนกลิ่นที่เผากีบม้า ผมเองก็แทบจะเป็นบ้าไปด้วยถ้าเจอแบบนี้ต่อไปเรื่อยๆ หลังจากนั้นผมถูกย้ายไปที่หน่วยอื่น ผมจึงสามารถผ่อนคลายได้ในที่สุด

นอกจากนี้ มีคนในครอบครัวจำนวนมากที่ได้ยินว่าญาติของพวกเขาได้รับการรักษาอยู่ที่นั่นจึงมาตามหา แรกเริ่มครอบครัวจะมาหาญาติของพวกเขาที่หอประชุม แต่เมื่อมาดูก็ไม่สามารถแยกแยะพวกเขาได้เพราะ



เมื่อแพ้สงคราม สิ่งที่ต้องทำเป็นอย่างแรกก็คือการส่งมอบอาวุธ แต่แม้เวลาผ่านไปนานเท่าไร กองบัญชาการก็ไม่มา มาหนึ่งครั้งแต่ไม่ใช่เพื่อมารับอาวุธแต่มาเยี่ยมผู้สัมผัสสารกัมมันตรังสีที่รับการรักษาอยู่ จริง ๆ แล้วเป็นการมาเพื่อตรวจสอบนั่นเอง เมื่อสิ้นเดือนสิงหาคม พวกทหารที่ถูกส่งมาจากแต่ละกอง เลิกกองและแยกย้ายกันกลับบ้าน พวกเขาไม่ได้เลิกกองหลังจากกลับเข้าร่วมกองของเมืองฮะระ แต่พวกเราถูกทิ้งไว้ที่นั่น ในขณะเดียวกันหนึ่งคนออกไปแล้วและสองคนออกไปแล้ว หัวหน้าเองก็บอกว่า "เหลืออยู่ที่นี้กันบ้างสิ" แล้วหลังจากนั้นเขาก็ไม่กลับมาอีก อาจจะเพราะว่าเขากลับบ้านแล้ว เมื่อกลางเดือนกันยายน ศูนย์ฝึกกรมทหารเรืออุจินะมีเพียงแค่ 4 คนรวมผมด้วย แม้ว่าพวกเราจะอยู่ที่นั่นเหมือนเดิมแต่ไม่มีความรู้สึกอยากอยู่ต่อเลย ในที่สุดผมกับเพื่อนร่วมงานที่มาจากจังหวัดนีกาตะก็บอกว่า "ที่เหลือ ผ่าด้วยนะ" แล้วจึงเดินทางกลับผมเดินจากเขตอุจินะไปถึงสถานีอิโรชิมะ ที่สถานีอิโรชิมะมีคนเยอะมาก แต่ในที่สุดก็ได้ขึ้นรถไฟและไปถึงสถานีโตเกียว ระหว่างที่เดินจากสถานีโตเกียวไปสถานีอุเอโนะผมมองดูไรรานาที่ถูกเผาบริเวณนั้นไปด้วย ที่สถานีอุเอโนะมีคนเยอะมากจริง ๆ โดยเฉพาะรถไฟสายโยโจบั้ง ผมพลาดรถไฟถึงสามครั้ง ถ้าจำไม่ผิดผมไปถึงจังหวัดฟุกุชิมะซึ่งเป็นบ้านเกิดของภรรยาผม ในวันที่ 9 ตุลาคม

จนถึงช่วงนี้ บางครั้งผมยังรู้สึกเจ็บใจเกี่ยวกับกัมมันตภาพรังสีของระเบิดปรมาณู ปีโซวะที่ 29 ตอนที่ลูกคนที่ 2 อยู่ชั้นประถมปีที่ 1 และลูกคนที่ 3 ในวัยอนุบาล ภรรยาผมเสียไปด้วยโรคมะเร็งต่อมไทรอยด์ เดิมทีเธอมีก้อนที่คอที่เรียกว่าโรคคอพอก แต่ได้รับการผ่าตัดออกแล้ว ตอนที่ผมกลับมาโรคคอพอกเกิดขึ้นอีกครั้งจนกลายเป็นมะเร็งแล้วก็ในที่สุดเธอก็เสียชีวิตลง แต่จริง ๆ แล้วตอนที่กลับมาจากอิโรชิมะ ผมแบกหามผ้าห่มกลับมาด้วยซึ่งอาจมีรังสีอยู่เยอะ เมื่อคิดย้อนกลับไปผมไม่รู้แน่ชัดว่ามันเป็นเหตุผลให้ภรรยาผมเสียชีวิตหรือเปล่า แต่ช่วงนี้ก็มักมีคำกล่าวกันว่ากัมมันตภาพรังสีมีความเกี่ยวข้องกับการเกิดมะเร็งไข่ม้อยละ ผมคิดว่าผ้าห่มนั้นคงเป็นเหตุจริง ๆ ละมัง แม้ว่าอย่างน้อยเธอจะมีชีวิตต่อได้อีกนิด แต่ด้วยผ้าห่มนั้น.. ผมคิดไม่ตก

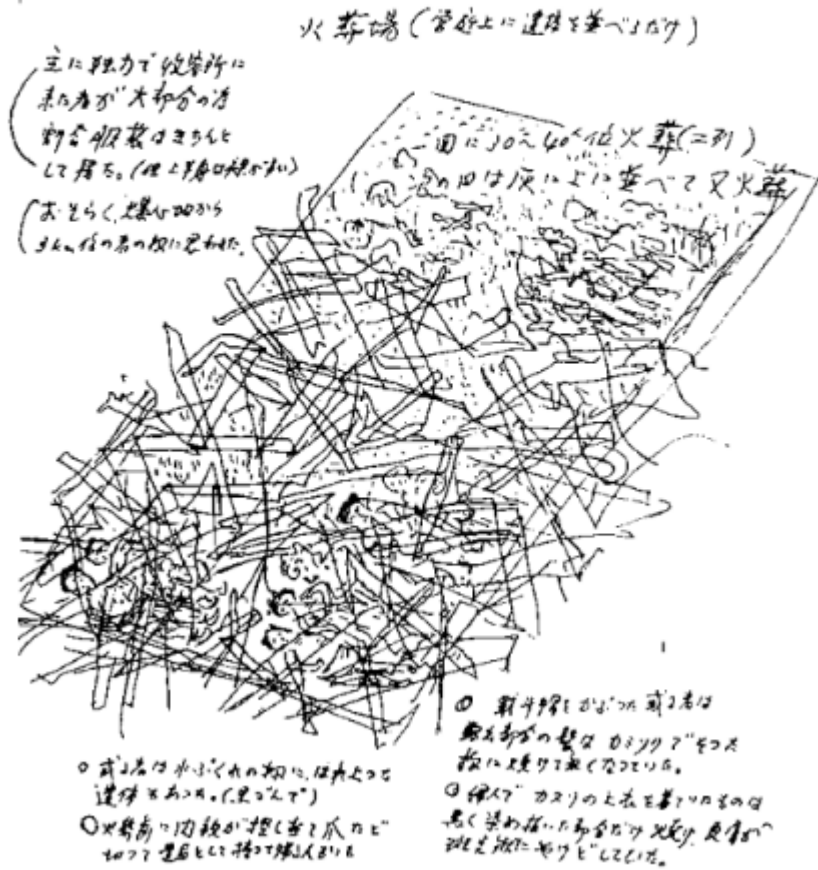
ในตอนแรกที่กล่าวไปว่าผมโชคดีที่ไม่ได้รับอันตรายจากกัมมันตภาพรังสีใช่ไหม แต่ผมได้รับสมุดบันทึกสุขภาพสำหรับผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณูและตรวจร่างกายปีละ 2 ครั้ง และเมื่อ 34 ปีผ่านไป ในปีโซวะที่ 54 ที่ ซึ่งเป็น 3 ปีที่แล้วจากตอนนี้ผมถูกวินิจฉัยว่าป่วยเป็นโรคตับวาย สาเหตุจากค่า GOT กับ GPT ในโลหิตเพิ่มขึ้นกระทันหัน ผมเองก็ดูแลสุขภาพร่างกาย จนปีนี้ ปีโซวะที่ 58 เดือน ค่า GOT กับ GPT เกือบจะกลับสู่ระดับปกติแล้วแต่ยังสูงอยู่เล็กน้อย ผมคิดว่าคงเป็นผลกระทบจากสารกัมมันตภาพรังสีจากระเบิดปรมาณูแน่นอน

ผมไม่ค่อยอยากพูดเกี่ยวกับเรื่องของระเบิดปรมาณูแบบนี้ ผมมีความรู้สึกที่อยากบอกความจริงออกไป แต่ก็คิดว่า แม้ว่าจะพูดออกไปเท่าไรแต่ก็ไม่หมดเสียที่ ผมยินดีที่ได้ให้ความร่วมมือและรู้สึกขอบคุณพวกคุณ (สมาคมพลเมืองฮารามาจิที่เป็นต้นคิดเกี่ยวกับระเบิดปรมาณูและไฮโดรเจน) ที่ได้จัดทำบันทึกนี้ แต่การรณรงค์ต่อต้านนิวเคลียร์ปัจจุบันนี้และวัตถุประสงค์หรือเป้าหมายของพวกคุณไม่เหมือนกับวิธีที่คิดของตัวเอง ผมอ่านรายงานหนังสือชื่อ "เอาความเป็นมนุษย์คืนมา" ไปนิดหน่อย แต่ผมรู้สึกว่าเป็นการใช้ตัวหนังสือเล่นคำเท่านั้น การตะโกนแต่คำว่าสันติภาพ สันติภาพอย่างเดียว ก็ไม่สามารถรักษาสันติภาพเอาไว้ได้หรอก

(บทสัมภาษณ์วันที่ 23 กันยายน ค.ศ.1982)

4. 建物のかけにいて助かった私

桑原馨さんが描いた、原爆犠牲者の火葬場の状況



สภาพของสถานที่เผาศพเหยื่อระเบิดปรมาณูที่คุนคูวาระ คาโอรูวาด

5. คำบอกเล่าของคุณทาคายามะ ฮะจิเมะ

(อายุในขณะนั้น 36 ปี เพศชาย อาศัยอยู่ในซึรุโก เมืองฮารามาจิ)

ผมถูกพัดปลิวไปไกลกว่า 20 เมตร

ผมกับคุณคูวาระจากเมืองฮารามาจิและคุณนาคะวะจากเมืองคาชิมะต่างก็ประสบกับเหตุการณ์  
ที่ระเบิดปรมาณูที่หน่วยฝึกทหารเรืออุจินะในจังหวัดอิโรชิมะเหมือนกัน โดยขณะนั้นผมดำรงยศสิบตรี  
ตำแหน่งเจ้าหน้าที่สื่อสารในหน่วยฝึก ตอนที่มีการทิ้งระเบิด ณ วันที่ 6 สิงหาคม พวกเราอยู่ที่ลานกว้างในค่าย  
พักทหาร หลังจากจบการประชุมในตอนเช้าแล้ว ผมยังอยู่ตรงนั้นเพื่อจะทำงานบางอย่าง ทันใดนั้นก็เกิด  
เหตุการณ์รุนแรงขึ้น เกิดลมจากแรงระเบิดอันน่ากลัว จากนั้นทุกคนก็พากันล้มลงหรือกล่าวได้ว่าถูกพัดจนปลิว  
หายไปมากกว่า ผมเองก็ถูกพัดปลิวไปไกลกว่า 20 เมตร ร่างกายที่เต็มไปด้วยความเจ็บปวดนั้นไม่ได้มีแผลอะไร  
เป็นพิเศษแต่เพราะสภาพที่ถูกเหวี่ยงมาทำให้รู้สึกเจ็บตามร่างกายหลายที่ ผมจำเรื่องรังสีและแสงวาบของ  
ระเบิดปรมาณูไม่ได้เลย ผ่านไปสักพักหนึ่งผมพยายามอดทนกับความเจ็บปวดที่ช่วงขาและสะโพก จากนั้น



คลานราบไปกับพื้นและเข้าไปในหลุมหลบภัยใกล้ๆ เหตุการณ์ที่ผมถูกเหวี่ยงจนลอยที่ข้างนอกได้จบลงแล้วแต่คนที่ยังอยู่ในตึกคงอยู่ในสภาพที่ย่ำแย่เลยไม่ใช่หรือ เพราะว่าข้างในตึกมีสภาพที่พังยับเยินทีเดียว

หลังจากนั้นพวกเราก็ได้รับคำสั่งให้เก็บกวาดซากที่ถูกไฟไหม้ในเมืองฮิโรชิมา ตั้งแต่วันที่ 9 สิงหาคม รวมทั้งหมด 6 วัน จากนั้นจึงออกจากเมือง ดูเหมือนว่าในเมืองฮิโรชิมาคงเกิดไฟลุกต่งทะเลเพลิงต่อเนื่องเป็นเวลาประมาณ 1 สัปดาห์ได้เลย และแล้วผมก็ผ่นลงไปบนทะเลที่ไฟลุกอยู่อย่างนั้น ถึงจะบอกว่าเป็นการเก็บกวาดแต่ก็คือการจัดการกับศพนั้นแหละ

ผมเข้าไปในบริเวณที่มีศพกองเท่าภูเขาและหามศพโดยใช้เปลที่ด้ามทำจากท่อนไม้ เมื่อหามศพได้ 2-3 ครั้งก็ไม่สามารถใช้เปลที่มีสภาพเหนียวติดกันได้ สภาพช่างโหดร้ายนัก ผมพยายามที่จะไม่จับศพโดยตรงและรับถุงมือที่แจกมา

มีคนที่ได้รับบาดเจ็บจำนวนมาก แม้แต่เหล่านายทหารชั้นสัญญาบัตรที่ทำตัวอดแบ่งอยู่เสมอก็ได้รับบาดเจ็บและส่งเสียงอะอะโวยวาย “ช่วยด้วยๆ” แต่ผมก็แสร้งทำเป็นไม่รู้เรื่อง

ประวัติในกองทัพของผมนั้นเริ่มจากไปเกณฑ์ทหารที่แมนจูเรีย (แคว้นหนึ่งในประเทศจีน) เป็นระยะเวลา 2 ปี 7-8 เดือน หลังจากนั้นก็ได้กลับบ้านที่เมืองฮารามาจิแห่งนี้ชั่วคราวและไม่สามารถกลับไปอยู่ที่บ้านได้ 100 วัน ตั้งแต่ฤดูใบไม้ผลิ ปีโซวะที่ 19 (ค.ศ.1944) ได้เดินทางไปเขตอุจินะในจังหวัดฮิโรชิมา ในเวลาเดียวกันนั้นหน่วยสื่อสารมีกองกำลังพิเศษเพียง 2 แห่ง คือที่เมืองฮิโรชิมาแห่งนี้และเมืองมะเอะบะชิ ถึงกระนั้นในช่วงเดือนกรกฎาคม ปีโซวะที่ 19 (ค.ศ.1944) ณ โถงทางเดินของอาคารหอพักกองกำลังทหารแห่งนี้ ผมโชคไม่ดีเลยที่บังเอิญเจอกับผู้บังคับบัญชาเข้าและถูกต่อว่าอย่างแรง หลังจากนั้นก็ถูกคุมประพฤติเป็นเวลา 3 วัน อีกทั้งยังได้รับโทษไม่ให้สามารถเลื่อนยศได้ทั้ง ๆ ที่ผมไม่ได้ทำผิดอะไรเป็นพิเศษเลย นั่นเป็นสาเหตุที่ยศของผมหยุดอยู่ที่ตำแหน่งสิบตรี ในเวลาต่อมาผมปลดประจำการที่เขตอุจินะ จังหวัดฮิโรชิมาเมื่อวันที่ 14 กันยายน ปีโซวะที่ 20 (ค.ศ.1945) จังหวัดฮิโรชิมาพังราบเป็นหน้ากลองจากระเบิดปรมาณู จนถึงตอนนั้นผมคิดว่ามันแปลกและสงสัยว่าทำไมฮิโรชิมาถึงไม่ได้รับความเสียหายจากการโจมตีทางอากาศ แต่เมื่อลองคิดดูในตอนนั้นก็พบว่าเพื่อที่จะทิ้งระเบิดในตอนท้ายเลยหลงเหลือพื้นที่เอาไว้แน่นอน

เมื่อแยกกองไปเมื่อวันที่ 14 กันยายน หลังจากนั้น 20 วัน ผมก็ตัดสินใจกลับเมืองฮารามาจิ และแล้วพวกเรา 3 คนประกอบไปด้วย ผมและคนที่มิถิโนกำเนิดอยู่ที่เมืองคาเตะและเมืองคาชิมะ ก็ได้จากเมืองฮิโรชิมา มา แต่ว่าคุณนาคากะวะจากเมืองคาชิมะในตอนนั้นได้รับการผ่าตัดไส้ติ่งมาประมาณ 20 วัน มีอาการปากแผลเป็นหนองจึงอยู่ในสภาพที่ไม่สามารถเดินทางกลับคนเดียวได้จริง ๆ พวกเรา 2 คนจึงช่วยพาเขากลับ

ผมผูกสัมภาระอย่างพวกเสื้อผ้าหรือหม้อสนาม (หม้อที่ใช้หุงต้มอาหารของทหาร) ติดกับเปลที่ด้ามทำจากท่อนไม้และแบกสัมภาระไว้ที่หลังแล้วจึงเดินต่อไป เมื่อถึงภายในรถจักรไอน้ำก็วางเปลไว้ข้างบนแล้วมาดูแลคุณนาคากะวะ พวกเราได้รับอาหารและข้าวสารดิบมาระหว่างทางจึงใช้หม้อสนามหุงข้าวไปพลาง อีกทั้งพวกขนมปังอบแห้งก็มีแจกด้วย บนรถจักรไอน้ำอัดแน่นไปด้วยคนจำนวนมากตั้งแต่สถานีฮิโรชิมาจนถึงสถานีโตเกียว สายใจบังทีมาจากอุเอโนะก็ยิ่งแออัดขึ้นไปใหญ่ ทำให้ค่อนข้างลำบากที่ต้องหอบคนป่วยไปด้วย แต่ก็สามารถพาคุณนาคากะวะไปส่งถึงบ้านที่คาชิมะได้อย่างปลอดภัย คนในครอบครัวของเขารู้สึกขอบคุณมากที่

พามาส่ง ทุกคนปลื้มใจที่ผมได้ทำเรื่องที่ยิ่งใหญ่และได้พักที่บ้านคุณนาคากะวะ 1 คืน ในวันถัดมาผมจึงเดินทางกลับบ้านที่เมืองฮารามาจิ คิดว่าคงใช้เวลาประมาณ 2 วันเต็ม ๆ จากเมืองอิโรชิมะจึงจะถึงบ้าน

หากจะกล่าวถึงผลกระทบจากสารกัมมันตรังสีที่มีต่อร่างกายของผมนั้น โชคดีที่ผมยังใช้ชีวิตอยู่โดยมีสุขภาพดี ผมมีลูก 5 คน หลาน 10 กว่าคนและทุกคนล้วนมีสุขภาพที่ดี ผมได้รับสมุดบันทึกสุขภาพสำหรับผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณูจากหน่วยงานรัฐบาลและได้เข้ารับการตรวจที่โรงพยาบาลของเทศบาล 2 ครั้ง ต่อปี ไม่สามารถระบุได้อย่างชัดเจนว่าเป็นเพราะสารกัมมันตรังสีหรือเปล่า แต่ว่าตั้งแต่ช่วงเดือนมิถุนายนของปีนี้ มีอาการปวดขามาก โดยเฉพาะที่เข่าข้างซ้ายทำให้ไม่สามารถทำงานอะไรได้เลย อาจจะเป็นเพราะผมแก่และอายุ 72 ปีแล้ว แต่เมื่อได้ยินว่าแม้แต่ผู้อาวุโสถึงจะเป็นคนหนุ่มสาวก็ป่วยเป็นโรคข้อเสื่อมหลายคน ผมเลยคิดว่าสาเหตุมาจากระเบิดปรมาณู

ในเรื่องของสงครามนั้น แคนึกถึงก็รู้สึกสะพรึงกลัวและสะอิดสะเอียนขึ้นมาเนื่องจากทั้งเมืองอิโรชิมะและประเทศญี่ปุ่นได้รับความเสียหายอย่างรุนแรงขนาดนั้น ผมจึงอยากเอาคืนประเทศอเมริกาบ้างแต่ก็...อืม... เรื่องแบบนั้นคงเป็นไปได้ ผมคงต้องกล่าวอย่างชัดเจนเลยว่าไม่อยากจะเกิดสงครามแบบนั้นอีกเป็นครั้งที่ 2

(บทสัมภาษณ์วันที่ 14 ตุลาคม ค.ศ.1982)

## 6. คำบอกเล่าของคุณโยชิฮิสะ นาคากะวะ

(อายุในขณะนั้น 34 ปี เพศชาย อาศัยอยู่ที่คาราสุซากิ เมืองคาชิมะ เขตโซมะ)

เขาพูดกันว่า “พวกผมคือปีศาจจากรก” จากการเผาทำลายศพ

และเข้ารับการผ่าตัดไส้ติ่งโดยไม่วางยาสลบ

ผมเกิดที่เมืองคาชิมะเมื่อวันที่ 15 สิงหาคม ปีไทโชที่ 1 (ค.ศ.1912) ผมอายุ 34 ปีตอนที่เกิดเหตุทิ้งระเบิดปรมาณูที่อิโรชิมะ และตอนนี้ผมอายุ 71 ปีแล้ว เดิมทีผมทำอาชีพเกษตรกรคู่กับเป็นชาวประมง แต่ในปีโชวะที่ 18 (ค.ศ.1943) ผมก็ถูกเรียกตัวไปที่เซนได และในเดือนพฤษภาคมของปีนั้นเอง ผมก็ได้รับมอบหมายหน้าที่ให้เป็นทหารสื่อสารประจำกองหนุนฝ่ายทหารสื่อสารของเมืองอุจิมะ ที่อิโรชิมะทันที ดังที่ตีพิมพ์ไว้ในหนังสือรวบรวมเรื่องเล่าเหตุการณ์ที่เคยประสบไว้ในเล่มนี้ ผมเคยอยู่สังกัดเดียวกับคุณคุบาระและคุณทาคายามะจากเมืองฮารามาจิ ซึ่งปีโชวะที่ 18 (ค.ศ.1943) นั้น สถานการณ์สงครามก็ได้ขยายวงกว้างและเกิดการขาดแคลนทหาร ในช่วงแรกผมจำเป็นต้องฝึกฝนการเป็นทหารสื่อสาร ทุก ๆ วันผมใช้เวลาตลอดวันไปกับการฝึกซ้อมเกี่ยวกับรหัสสมอร์ส อย่างการส่งสัญญาณจิ้งหะฮะสั้น (จุด) การส่งสัญญาณจิ้งหะฮะยาว (ขีด) หรือพวกเสียงป๊อป ป๊อป จำพวกนั้น และแม้จะยังจำอะไรเกี่ยวกับพวกวิทยุโทรเลขไม่ได้ ถึงอย่างนั้นผมก็สามารถส่งสัญญาณสื่อสารได้

วันนั้น วันที่ 6 สิงหาคมก็เหมือนกัน ผมกำลังตั้งใจเรียนรหัสสมอร์สอยู่ในหอประชุมทางฝั่งตะวันตกของส่วนฝึกซ้อมการเดินทางเรือสมุทรที่เขตอุจิมะ มันก็เหมือนกับโรงเรียนในปัจจุบัน อาจารย์ผู้สอนจะอยู่ด้านหน้า

และมีสายไฟเชื่อมผ่านไปยังนักเรียนแต่ละคน ที่นั่นมีนักเรียนหรือก็คือทหารสื่อสารประมาณ 100 คน ผมก็เป็นหนึ่งในนั้น ซึ่งกำลังจ่ออยู่กับรหัสสมอร์สโดยที่ร่างกายท่อนบนปราศจากเสื้อผ้า

ช่วงเวลาที่ระเบิดปรมาณูถูกทิ้งลงมาเป็นเพียงแค่ชั่วพริบตาเดียว ระเบิดปรมาณูนั้นเกิดแสงที่สว่างจ้า เสียจนแสบตา ในขณะที่เดียวกันก็มีลมแรงจากระเบิดพัดเข้ามา อาจารย์คลับคล้ายจะพูดว่า “ระเบิดเพลิงตกลงมาแล้ว เอาหัวหลบใต้โต๊ะ” ผมที่ไม่มีเวลาทำแบบนั้นจึงทำได้แค่เอามือกุมหัวไว้แล้วพุบหน้าลงกับโต๊ะ ระหว่างนั้นลมจากระเบิดที่ตั้งกีก้องก็พัดผ่านหัวพวกผมไปปะทะเข้ากับค่ายทหารด้านหน้า แล้วหลังคาก็หลุดปลิวออกไป แต่เนื่องจากสภาพอากาศร้อนในกลางฤดูร้อน หน้าต่างกระจกทั้งหมดในหอประชุมเลยถูกถอดออก ลมระเบิดจึงแค่พัดออกไป ถ้าหากยังติดไว้อยู่กระจกหน้าต่างก็คงจะแตกเป็นเสี่ยง ๆ แล้วเกิดอันตรายขึ้นอย่างแน่นอน ดังนั้นผมในตอนนั้นจึงไม่ได้รับบาดเจ็บอะไร และเนื่องจากอยู่ห่างจากจุดศูนย์กลางของการระเบิดถึงสี่กิโลเมตร จึงไม่ได้รับความเสียหายจากรังสีแสง

ประมาณหนึ่งชั่วโมงหลังจากการทิ้งระเบิด เมืองฮิโรชิมาทั้งเมืองก็ถูกท่วมไปด้วยเปลวไฟ หน่วยดับเพลิงถูกจัดตั้งขึ้นอย่างเร่งด่วน ส่วนผมก็ขับรถบรรทุกออกไปยังเมือง ทว่าถนนถูกขวางด้วยรถยนต์กับรถไฟที่พลิกคว่ำ และตึกที่ถล่มลงมาจนไม่สามารถขับไปข้างหน้าได้ ผมไม่มีทางเลือกอื่นจึงกลับไปที่กองทหาร ที่นั่นก็เต็มไปด้วยผู้คนที่ได้รับบาดเจ็บจากระเบิดปรมาณูและประชาชนที่อพยพมาเรื่อย ๆ แล้ว ค่ายทหารจึงได้กลายเป็นโรงพยาบาลชั่วคราว แต่ไม่มีทั้งไฟฟ้า และน้ำประปาก็ไม่ไหลเลยลำบากมากจริง ๆ แถมยังไม่มีทั้งยา และไม่มีพยาบาลหรือหมอ ผู้คนมากมายเสียชีวิตที่นั่นโดยไม่ได้รับการรักษา เหตุการณ์นั้นมันโหดร้ายมาก

วันรุ่งขึ้นในวันที่ 7 สิงหาคม พวกผมเคลื่อนพลไปยังเมืองฮิโรชิมาเพื่อให้ความช่วยเหลือ หน้าที่ของผมคือตักน้ำที่ยังคงหลงเหลือจากบ่อน้ำเก่าใส่ถังแล้วเดินไปให้ผู้บาดเจ็บดื่ม ทว่าทั้งเมืองเต็มไปด้วยคนที่ไม่สามารถเดินได้ คนที่นั่งอยู่ตามถนน คนที่นอนสลบไสล ภายใต้แสงแดดที่แผดเผาจากดวงอาทิตย์ ผมเดินถือแก้วสแตนเลสให้ดื่มคนละแก้ว มีคนที่ขอน้ำมากกว่าแก้วเดียว และมีคนที่พนมมือไหว้ขอร้องพร้อมกับพูดว่า “ขอน้ำด้วยเถอะนะ” ความร้อนจัดภายใต้แสงแดดที่เจิดจ้าขนาดนั้นก็คงจะคอแห้งอยู่แล้ว และทุกคนก็อยากจะดื่มแต่น้ำเท่านั้น ผมพยายามให้อาหารฉุกเฉินสำหรับทหารอย่าง Kanmenbou<sup>14</sup> ที่เป็นขนมปังแห้งแก่ผู้บาดเจ็บ แต่ทุกคนกลับดื่มเฉพาะน้ำไม่มีใครสักคนกินมันเลย และตลอดทั้งวันผมก็คอยเดินส่งน้ำให้พวกเขาโดยไม่ได้คิดถึงเรื่องที่ว่า “ถ้าให้น้ำกับคนที่กำลังบาดเจ็บ คนเหล่านั้นก็จะตาย” เลยสักนิดเดียว



มีหลายคนได้รับบาดเจ็บสาหัส ทั้งคนที่เศษไม้เสียบคาอยู่ตามใบหน้าและลำตัว คนที่สูญเสียหู คนที่ดวงตาสูญเสียการมองเห็น คนที่ขาถูกไฟลวกจนผิวหนังหลุดห้อยลงมาถึงรองเท้า สถานการณ์นั้นไม่สามารถอธิบายออกมาเป็นคำพูดได้เลย มีทหารที่ตะโกนว่า “หลังผ่านช่วงเวลาอันเลวร้ายนี้ไป จะต้องมีการแก้แค้นอย่างแน่นอน” ทหารยามตามประตูของหน่วยอื่นล้วนแต่ตายในสภาพเปลือยเปล่า และแม้ว่าจะไม่ควรพูดก็ตาม แต่มันก็น่าขบขันที่ผมของทหารหลายคนเหลืออยู่แค่ตรงที่ใส่หมวกไว้เพียงส่วนเดียวเท่านั้น ส่วนอื่นๆ เช่นตรงต้นคอด้านนอกถูกเผาด้วยรังสีแสงของระเบิดปรมาณูจนเหมือนเด็กที่ไว้ผมทรงกะลาครอบ

<sup>14</sup> 乾麵包 (かんめんぼう)

วันต่อมาช่วงวันที่ 8 ก็ดูแลช่วยเหลือผู้บาดเจ็บและเริ่มกู้ศพ มีการรวมกลุ่มกันสี่คนและรวบรวมศพมาไว้บนเปลหาม ศพประมาณห้าสิบศพกองรวมกันเป็นภูเขาจากนั้นก็มาปนกิจศพเหล่านั้น แล้วผมก็ต้องตกใจที่มนุษย์นั้นสามารถติดไฟได้ดี ถึงแม้ว่าจะไม่ได้เผากับไม้ที่ติดไฟง่ายเป็นพิเศษ น้ำมันจากศพของผู้ตายทำให้เกิดการเผาไหม้มากขึ้นเรื่อยๆ เมื่อเอาไม้ยาวๆ มากวนตรงที่เผาองซากศพที่ไหม้เกรียมเพื่อให้กระดูกสะอาด มันก็เหมือนกับการเผาขะนั้นแหละ พอมาคิดดูแล้ว มันเป็นฉากที่โหดร้ายและน่าสลดใจจริง ๆ พวกเราที่เป็นทหารกำลังเผาศพ และยังคงทำงานที่โหดร้ายต่อไปในขณะที่พูดว่า "พวกเราคือปีศาจจากนรก" ผมไม่มีทางเลือกนอกจากวิธีเผาแบบนี้ ถ้าปล่อยศพทิ้งไว้และไม่ทำให้เหลือแต่กระดูก มันก็จะเน่าอย่างรวดเร็วและทำให้เกิดความเดือดร้อนมาก แล้วผมก็ทำงานที่น่าขยะแขยงแบบนี้ต่อไปอีกประมาณหนึ่งสัปดาห์ ตกกลางคืนผมนอนห่มผ้าอยู่ข้างๆ ศพ พวกเราที่เป็นทหารกังวลกันว่า การเผาศพแบบนี้จะทำให้ผีออกมาหรือเปล่า? อย่างไรก็ตามพวกเราไม่เห็นลูกไฟวิญญานลอยอยู่แม้แต่ลูกเดียว แล้วท้ายที่สุดก็สงสัยกันว่า "มนุษย์ที่ตายแล้วยังมีวิญญาณหรือเปล่า" อย่างไรก็ตามไม่รู้ว่าการเผาศพไปมากแค่ไหนแล้ว เพียงกลบดินฝังกระดูกและตั้งไม้หนึ่งแท่งเท่านั้น ตอนที่จะบูรณะฟื้นฟูเมืองฮิโรชิมาขึ้นใหม่อีกครั้ง จะค้นพบกระดูกมนุษย์ที่ถูกฝังจำนวนมากเท่าไรกันนะ ตอนนี้ก็ต้องมีกระดูกมนุษย์จำนวนมากจมอยู่ใต้เมืองฮิโรชิมาแน่นอน

ผมยังได้ส่งคนบาดเจ็บไปยังโรงพยาบาลต่างๆ ด้วยรถบรรทุก และพบกับสถานการณ์มากมายระหว่างนั้น ผมคิดว่าเขาเป็นพ่อแม่ลูกกันและเอาพวกเขาขึ้นรถบรรทุกแล้วส่งพวกเขาไปโรงพยาบาลเดียวกัน แต่จริงๆ แล้วพวกเขาเป็นคนแปลกหน้ากัน ในทางกลับกันก็ส่งคนที่เป็นครอบครัวเดียวกันแยกกันไปโรงพยาบาลที่ต่างกัน และใช้เรือส่งคนจำนวนมากไปยังเกาะนิชิชิมะในฮิโรชิมา ทั้งๆ ที่พ่อแม่ล้วนได้รับบาดเจ็บสาหัสและไม่สามารถพูดได้ แต่เด็กๆ กลับไม่ได้รับอันตรายอย่างน่าประหลาดใจ บางทีเด็กๆ ก็อยู่ด้วยกัน 4 หรือ 5 คน เมื่อผมกำลังจะเอาพวกเขาขึ้นรถบรรทุกและให้พวกเขาอพยพ แต่พวกเขาที่ดูตื่นไม่ยอมออกไป เขาพูดว่า "แม่บอกให้อยู่ที่นี้ก็เลยรออยู่ที่นี้จนกว่าแม่จะกลับมา" หลังจากนั้นพวกเราทุกคนก็คุยกันว่าต่อจากนี้เด็กๆ เหล่านี้จะเป็นอย่างไร น่าสงสารมาก แม้แต่ตอนนี้ ภาพนั้นก็ยังคงติดอยู่ในใจของผม ต้องมีเด็กจำนวนมากที่กลายเป็นกำพร้าเนื่องจากระเบิดปรมาณู เด็กๆ ช่างน่าสงสารเหลือเกิน

ผมคิดว่าเรื่องนี้อาจฟังดูประหลาดหน่อย ประมาณ 10 วันก่อนที่ฮิโรชิมาจะโดนทิ้งระเบิด ก็ได้มีเครื่องบินของอเมริกาไปโปรยใบปลิว ซึ่งถึงจะบอกว่าเป็นใบปลิวก็เถอะแต่ด้านหน้าเป็นธนบัตร 10 เยน ซึ่งถ้าเทียบกับค่าเงินในสมัยนี้คิดว่าน่าจะประมาณ 10,000 เยน แต่จริงๆ แล้วเป็นการพิมพ์รูปธนบัตรลงบนกระดาษ ส่วนด้านหลังมีข้อความพิมพ์ว่า "ฮิโรชิมาจะถูกทิ้งระเบิดภายใน 10 วัน ให้ประชาชนรีบอพยพโดยด่วน" ใบปลิวจำนวนมากถูกโปรยลงมาจากเครื่องบิน ระเบียบระยับตั้งพายุกลีบดอกไม้ที่โปรยปราย ผมเองก็ได้ลองหยิบมาอ่านดู รู้สึกว่าเป็นธนบัตร 10 เยนที่ทำออกมาได้ดีทีเดียว เรื่องใบปลิวนี้ แม้แต่กองของผมยังคงฝึกซ้อมการอพยพเป็นเวลาประมาณหนึ่งสัปดาห์ และแม้กระทั่งการบังคับทำลายอาคารเพื่อเตรียมพร้อมสำหรับการโจมตีทางอากาศ ก่อนที่ระเบิดปรมาณูจะถูกทิ้ง ฮิโรชิมาไม่เคยถูกทิ้งระเบิด ดังนั้นทุกคนจึงพูดว่า "ฮิโรชิมาคือดินแดนแห่งความฝัน" ได้ยินว่ามีผู้คนที่ย้ายจากเมืองอื่นมายังฮิโรชิมา นั่นเป็นเหตุผลที่เมืองฮิโรชิมาลดการป้องกันลง

ขอเล่าย้อนกลับไปทีเรื่องก่อนหน้านี้ ผมยังคงเก็บศพต่อไปจนกระทั่งประมาณวันที่ 20 สิงหาคม ผมปวดท้องในตอนเย็นและเกิดไส้ติ่งอักเสบ เช้าวันถัดไปผมได้รับการผ่าตัดที่โรงพยาบาลสนาม แต่ไม่มีการดม

ยาสลบ ผมได้รับการผ่าตัดไส้ติ่งในขณะที่ผมยังรู้สึกตัวอยู่ มือและเท้าของผมถูกกดไว้จนไม่สามารถเคลื่อนไหวหรือทำอะไรรุนแรงได้ ไม่สามารถอธิบายความเจ็บปวดที่ผมรู้สึกในตอนนั้นได้เลย มันเป็นความเจ็บปวดและความปวดร้าวที่ไม่สามารถแสดงออกมาเป็นคำพูดได้ ถึงกระนั้นผมก็รู้สึกว่าตัวเองเป็นถึงทหาร ดังนั้นผมจึงอดทนกับมันได้ แต่อย่างไรก็ตาม ผมไม่อยากรู้ถึงมันอีก

ไม่มียาห้ามหนองหลังการผ่าตัดก็เลยเอาผ้าก๊อชปิดแผลไว้ แล้วรอให้เนื้อมันบวมเองตามธรรมชาติ แต่เนื่องจากมีผู้บาดเจ็บคนอื่น ๆ จากระเบิดปรมาณูในโรงพยาบาลสนามอีก ผมจึงถูกทิ้งให้อยู่ตามลำพังเป็นเวลา 5 วันโดยที่ไม่สามารถช่วยเหลือตัวเองได้ ผ้าก๊อชก็ไม่ได้เปลี่ยนแถมมีสิ่งสกปรกที่คล้ายน้ำไหลออกมาจากปากแผล ผมถึงกับคิดกับตัวเองว่า "ไม่ไหวแล้วละ ผมกำลังจะตายรีเปลาณะ" แต่ว่าผมก็รอดชีวิตมาได้ ผมเข้ารับการรักษาในโรงพยาบาลประมาณหนึ่งเดือน ผมจึงได้เห็นผู้บาดเจ็บหลายคนที่ได้รับอันตรายจากระเบิดปรมาณู แพทย์ฉีดยาให้ผู้บาดเจ็บที่ต้องทนทุกข์ทรมานในตอนกลางคืน พอผมคิดว่าอาการคงบรรเทาแล้วรีเปลาณะ เข้าวันต่อมาคนนั้นก็กลับตายแล้ว ในปัจจุบันผมคิดว่ามันเป็นสิ่งที่เรียกว่าการุณยฆาตไม่ใช่หรือ อีกทั้งคณะตรวจการของอเมริกาก็เคยมาเยี่ยมหลายครั้ง นอกจากนี้ในขณะที่ผมอยู่ที่โรงพยาบาล ผมของผมก็เริ่มร่วงมากขึ้นเรื่อยๆ ผมยังจำได้ว่ามันแย่มากที่มีแมลงวันเยอะผิดปกติ ผมเคยเอาหนอนออกจากปากแผล มีแต่สิ่งที่ไม่สามารถแสดงออกมาเป็นคำพูดได้และมีแต่เรื่องที่เกิดขึ้นในปัจจุบัน

กลางเดือนกันยายน กองทหารของพวกเราก็ยุบไป แต่แผลผ่าตัดยังไม่หายดีก็เลยกลับบ้านคนเดียวไม่ได้ ในตอนนั้นเองคุณทาคายามะจากฮารามาจิเป็นคนที่มาส่งผมถึงที่บ้าน เขาถือเป็นผู้มีพระคุณสำหรับผม ตั้งแต่ฮิโรชิมาถึงอุเอโนะก็มีคนจากเมืองดาเตะในจังหวัดฟุกุชิมะมาด้วยอีกคนหนึ่ง แต่ว่าคนคนนั้นก็ได้เสียชีวิตไปแล้วประมาณสามปีกว่าด้วยโรคมะเร็งกระเพาะอาหาร ตอนนี้คุณทาคายามะเองก็คงจะคอยเล่าเรื่องในตอนนั้นอยู่เหมือนกัน เขามีพระคุณสำหรับผมจริงๆ เราก็ได้นั่งรถไฟขบวนสินค้าจากฮิโรชิมาจนถึงอุเอโนะ แล้วพอถึงสถานีอิวาเกะ-โตะที่อยู่ในสายรถไฟโจบัง คุณทาคายามะก็ได้ขนของลงไปรอบหนึ่ง จากนั้นก็ส่งผมลงที่สถานีคาชิมะ ทุกครั้งที่รถไฟโคลงเคลง แผลของผมก็กระเทือนไปด้วย เป็นอะไรที่ทรมานมากจนต้องเอามือกดปากแผลอยู่ตลอดเวลา ตั้งแต่สถานีคาชิมะมาจนถึงบ้านที่ชิมะซากิหลังนี้ก็เป็นระยะทางกว่าหนึ่งลี้ครึ่ง<sup>15</sup> เพราะไม่มีทั้งรถทั้งอะไรเหมือนกับปัจจุบัน ก็เลยต้องทนกดปากแผลไปเดินต๊อกแตกไปเรื่อยๆ จนมาถึงบ้านในที่สุด วันนี้ผมก็ได้ไปเจอกับคุณทาคายามะมาด้วย เขาบอกผมว่าเจ็บหัวเข่าอยู่ ทั้งช่วยเหลือผม แล้วก็ออกหนังสือบันทึกระเบิดปรมาณูนี้ที่คุณทาคายามะทั้งนั้น รวมถึงให้ผมเป็นพยานเรื่องระเบิดปรมาณูด้วย

หลังจากนั้น เมื่อลองคิดว่านี่ขนาดตายไปแล้วครั้งหนึ่งแต่ก็ยังชีวิตต่อได้อีกแบบนี้ ต่อไปก็คงไม่มีอะไรน่ากลัวแล้วละ ตอนแรกก็ขึ้นเรือโดยเป็นชาวประมง (सानวน แปลว่า ตอนแรกก็เป็นคนธรรมดา) แต่เมื่อก้าวข้ามความตายไปแล้วก็จะแข็งแกร่งขึ้น แต่ว่าที่ผมกังวลมากที่สุดก็คือ ลูกหลานตนเองจะได้รับผลกระทบจากสารกัมมันตรังสีในตัวผมหรือเปล่า ถึงจะสมมติว่าอาการป่วยจากระเบิดปรมาณูไม่ได้ร้ายแรงก็ตาม เราก็ปฏิเสธไม่ได้ว่าจะต้องมีผลกระทบจากรังสีบนอยู่ในร่างกายนี้อยู่ดี ซึ่งก็จริงอย่างที่ว่ามา อาการบวมที่เท้าทั้งสองข้าง สามสิบแปดปีแล้วก็ยังเหมือนเดิม เอนี่วกตอยังไงก็ยุบลงไปแบบนั้นไม่คืนตัวเลย ถึงจะไม่เจ็บไม่คันแต่ถ้าผมไม่ทำงานเมื่อไหร่ อาการบวมก็จะแย่งลงเป็นพิเศษ ตื่นเข้ามา หน้าก็บวมเป่ง ไปโรงพยาบาลกลางที่ฮารามาจิ

<sup>15</sup> หนึ่งลี้ (นับแบบญี่ปุ่น) คือ ระยะทางประมาณ 4 กิโลเมตร

ก็รักษาไม่หาย และที่สำคัญคือ ผมไม่ชอบการที่จะไปบอกใครว่าผมโดนรังสีมา ผมเป็นผู้แอบรังสี แล้วก็ถึงจะมีคนบอกให้ไปตรวจอย่างละเอียดที่โรงพยาบาลโรงเรียนแพทย์ฟุกุชิมะ ผมก็ไม่มีกะจิตกะใจจะไปหรอก แต่อย่างไรก็ตาม ไม่ว่าจะระเบิดปรมาณูหรือรังสี ผมคิดว่าเป็นสิ่งที่น่ากลัวจริงๆ เพราะว่ามันจะคงอยู่ในร่างกายไปตลอดชีวิต

ผมคิดว่าหลังจากนี้เราไม่ควรจะทำสงครามกันอีก ทุกคนที่ทุกข์ทรมานจากสงครามก็คงคิดแบบนี้เหมือนกัน ระเบิดปรมาณูก็เช่นกัน เป็นสิ่งที่อภัยให้ไม่ได้เลย มันเป็นเรื่องที่น่ากลัวจริงๆ แต่ก็ยังมีคนบางกลุ่มที่คิดว่า ถ้าทำสงครามจะทำให้เศรษฐกิจดีขึ้น แล้วจึงเพิ่มกำลังทางทหาร หรือไม่ก็กำลังคิดที่จะก่อสงครามอยู่ ซึ่งเป็นเรื่องที่ผมฟังไม่เข้าหูเลย ญี่ปุ่นเองหลังสงครามจบลง ชีวิตผู้คนดีขึ้นแล้วก็คงจะไม่ใช้เงินไปกับการสร้างกำลังทางทหาร แต่ไปใช้สร้างความสงบสุข สร้างเศรษฐกิจที่ดี ถึงกระนั้น อย่างน้อยก็อาจต้องมีกองกำลังป้องกันตัวเองไว้บ้าง ถ้าครั้งหน้ามีสงครามจริงล่ะก็ ญี่ปุ่นจะถูกโจมตีก่อนอเมริกา และคงจะไม่มีใครรอดเลยแม้แต่คนเดียว

แต่ถึงอย่างนั้นก็เถอะ ผมคิดว่าการปลุกฝังความเป็นลัทธิฝักใฝ่ทหารของประเทศญี่ปุ่นที่รัฐทำมา มีประสิทธิภาพ นั่นก็เพราะมีการหล่อหลอมว่าญี่ปุ่นเป็นประเทศของเทพ ใดๆ ก็จะไม่แพ้สงครามอย่างแน่นอน การที่กองทัพเรือพายัพแพ้ก็ไม่ทราบเลย ไม่สิ ต้องพูดว่าไม่ได้แจ้งให้ทราบมากกว่า ก็เข้าใจอยู่ว่าญี่ปุ่นในสงครามในตอนนั้นกำลังลำบาก แต่ก็เชื่อว่าอีกไม่นานจะมีปาฏิหาริย์เกิดขึ้นและจะดีขึ้นเหมือนตอนสงครามโอกินาวะ เพราะอย่างนั้น ในวันที่ 15 สิงหาคม วันที่องค์จักรพรรดิประกาศยอมแพ้สงครามนั้น ไม่มีใครอยากจะเชื่อเลยว่าญี่ปุ่นแพ้แล้ว และก็มียาทหารชั้นสัญญาบัตรชกตาออกมาเหวี่ยงไปรอบ ๆ และฟันสิ่งของอย่างหลอกล่อไปเป็นการระบายความโกรธแค้น พร้อมกับพูดว่าเรื่องบ้าๆ แบบนั้นไม่มีทางเป็นไปได้หรอก นอกจากนั้นก็ยังมียาที่คอยตะโกนว่า “ด้วยเกียรติของทหาร” และพร้อมสู้จนตัวตายอยู่ด้วย เหล่ากองบินเองก็มีการโปรยใบปลิวที่เขียนว่า “ญี่ปุ่นยังไม่แพ้ สงครามยังไม่จบ” อยู่อีกด้วย พูดกันตามตรง ทหารธรรมดาๆ อย่างผมดีใจมากที่ได้กลับบ้านหลังจากสงครามยุติลง ทุกคนเมื่อรู้ว่าแพ้แล้วก็คงจะถอดเข็มขัด 1000 ตะเข็บของทหารทั้งกันหมด สรุปว่าที่ญี่ปุ่นเป็นประเทศของเทพนั้นโกหกทั้งเพ รู้สึกเหมือนกับโดนเทพหักหลังเลย สิ่งต่างๆ เหล่านี้ก็คือสิ่งที่ประเทศของเทพได้ปลุกฝังเอาไว้ จะเห็นได้เลยว่า พลังของการปลุกฝังนี้มีอำนาจมากจริงๆ



ผมคิดว่าการเก็บรักษาหนังสือบันทึกต่างๆ ที่เกี่ยวกับสงครามและระเบิดปรมาณู เป็นสิ่งสำคัญสำหรับรุ่นลูกรุ่นหลาน แต่ตัวผมเองก็ไม่ได้มีบันทึกอะไรเหลือไว้เลยด้วยสิ คุณ T จากฮารามาจิที่โดนรังสีที่นางาซากิก็เสียชีวิตไปแล้วเมื่อสองสามปีก่อน คุณ Y ที่อยู่อิดาเตะเองก็เหมือนจะเสียชีวิตไปแล้วด้วย ถ้าไม่รีบมาเล่าเอาไว้ตั้งแต่ตอนนี้ ผมว่าก็คงจะไม่มีใครรู้เรื่องราวนี้ล่ะครับ สำหรับวันนี้ก็ขอบคุณมากครับ ขอความกรุณาด้วยครับ

(บทสัมภาษณ์วันที่ 19 พฤษภาคม ค.ศ.1983)

## 7. คำบอกเล่าของคุณเอนโต มาซาฮิโระ

(อายุในขณะนั้น 20 ปี เพศชาย อาศัยอยู่เขตโคดากะ เมืองโซมะ)

### รู้สึกงงจันจากสายฝนสีดำ

ผมเกิดที่เมืองฟูกุชิมะในเดือนพฤศจิกายนปีโชวะที่ 14 (ค.ศ.1925) พ่อย้ายไปเขตโคดากะเพราะเป็นตำรวจ ผมก็เรียนจบ “โรงเรียนประถมโคดากะ” หลังจากนั้นก็เข้า “โรงเรียนอุตสาหกรรมคันไซ”

ผมไปตรวจสอบร่างกายเพื่อเป็นทหารรอบสุดท้ายที่ญี่ปุ่นแล้วก็ผ่านได้เป็นทหารตัวสำรอง (second class passed) ตอนนั้นจึงไม่ได้ออกจากบ้าน เพื่อเตรียมตัวไปสนามรบเพราะไม่รู้ว่าจะโดนเรียกไปเป็นทหารตอนไหน คำสั่งเกณฑ์ทหารจะมีกระดาษสีแดงส่งมาที่บ้าน เพราะฉะนั้นตอนสิ้นเดือนพฤศจิกายน ในปีโชวะที่ 19 (ค.ศ. 1944) ในตอนนั้นเป็นตอนกลางคืนที่หิมะตกหนัก ผมจึงกลับมาที่บ้านเกิดที่เขตโคดากะ เพราะคุณลุงบอกว่าต้องเพิ่มความแข็งแรงให้ร่างกายโดยการพักผ่อน

ต้นเดือนมกราคมในปีโชวะที่ 20 (ค.ศ.1945) ผมเข้ากองทัพซึ่งเป็นส่วนหนึ่งของกองทัพหลักชื่อ “หน่วยที่ 2016 แมนจูเรีย” อยู่ในเมืองฉงชิ่งที่ประเทศจีน ในตอนนั้นทหารมารวมกันที่โอซากาแล้วผมถูกส่งไปแมนจูเรีย อาจจะเพราะว่าสถานการณ์แย่ง ในเดือนเมษายน มีคำสั่งที่จะย้ายตัวผมกลับมาญี่ปุ่นภายใต้คำสั่งที่ว่ามีการฝึกซ้อมทางทหารครั้งใหญ่ ผมจึงกลับมาที่ญี่ปุ่นโดยใช้เครื่องบินจากเมืองปูซานที่เกาหลีใต้ถึงเมืองฮากาตะ ผมนั่งรถไฟจากฮากาตะไปเมืองซาโตฮาระที่จังหวัดมิยาซากิในภูมิภาคคิวชู แล้วกองทัพก็อยู่ที่นั่นชั่วคราว ผมได้รับมอบหมายให้เข้ากรมทหารปืนใหญ่ ผมเป็นบุคคลในกลุ่มที่ลากปืนใหญ่ และมีหน้าที่ขุดภูเขาเพื่อเก็บปืนใหญ่ ตอนนั้นไม่รู้ว่าจะทำไมแต่เลือดกำเดาไหลไม่หยุดจึงเข้ารับการรักษาในโรงพยาบาลของกองทัพ และหลังจากนั้นผมก็ไปโรงพยาบาลอีกสามที่รวมทั้งโรงพยาบาลที่จังหวัดโออิตะ แล้วผมก็ถูกย้ายไปโรงพยาบาลของกองทัพบกที่ 2 ที่จังหวัดอิโรชิมะทำให้ผมกลายเป็นเหยื่อระเบิดปรมาณู

วันที่ถูกย้ายไปอิโรชิมะคือวันที่ 21 เดือนกรกฎาคม พอถึงสถานีอิโรชิมะ พวกเราที่สวมเสื้อผู้ป่วยก็มารวมตัวกันที่ลานหลังสถานีที่มีส้วมเกาะเก็บอยู่ แล้วฟังคำสั่งที่แจ้งว่าแต่ละคนจะไปโรงพยาบาลไหนในอิโรชิมะ ผมถูกย้ายไปโรงพยาบาลชื่อ “ซันตากิ-บุนอิน” ที่อยู่ใกล้กับสถานีโยโกกาวะซึ่งอยู่ที่ทิศตะวันตกเฉียงเหนือของสถานีอิโรชิมะ โรงพยาบาลนั้นเป็นโครงสร้างไม้ชั้นเดียวที่มีหอผู้ป่วยยาวสี่แห่งเรียงกันจากใต้ไปเหนือ ผมนอนรักษาตัวที่หอเลขที่ 8 ในตึกที่ 6

อิโรชิมะเป็นเมืองที่ค่อนข้างเงียบสงบที่ไม่มีการโจมตีทางอากาศก่อนวันที่เครื่องบินรบลำหนึ่งมาบินวนเหนือโรงพยาบาลและถูกยิงตกด้วยปืนต่อต้านอากาศยานและทหารอเมริกาถูกจับ ในไม่ช้ามีการโจมตีทางอากาศเพิ่มมากขึ้นและอิโรชิมะถือว่าอันตรายแล้ว ก็เลยมีงานที่สร้างหอผู้ป่วยใหม่หลังภูเขาแทนที่จะลดจำนวนหอผู้ป่วย ผู้ป่วยที่มีอาการเล็กน้อยควรไปทำงานนั้น แต่ผู้ป่วยแผนกอายุรกรรมไม่จำเป็นต้องทำ คนที่ไปทำงานจะได้รับอาหารแจกจ่ายเป็นขนมปังดำสองแผ่นที่ผมคิดว่าทำมาจากมันหวาน ถึงแม้ว่าผมรับการรักษาในแผนกอายุรกรรมที่โรงพยาบาลซึ่งถือว่าไม่มีความจำเป็นต้องไปทำงาน แต่ผมไปทำงานเพราะหวังจะได้อาหารแจกจ่าย ขณะนั้นอาหารการกินหาได้ไม่ง่ายเลย ทุกคนใส่กางเกงแต่ด้านบนเปลือยเปล่าเพราะอากาศร้อน และทำงานโดยวางผ้าชีริวบนไหล่เพื่อบรรทุกไม้

ในวันที่ 6 สิงหาคม วันที่ระเบิดปรมาณูถูกปล่อยลงมา ช่วงเวลาประมาณตี 5 สัญญาณเตือนภัยได้ดังขึ้น เสียงสัญญาณเปลี่ยนไป แล้วจากนั้นก็หยุดลงพอดีกับช่วงเวลาอาหารเช้า ผมปวดหัวหนักตั้งแต่คืนก่อน จึงขอลางานกับหัวหน้าทีมและนอนพักในหอผู้ป่วย ในหอผู้ป่วยนอกจากผมมีผู้ป่วยอีกสามคน พลทหารสิบตรีผู้เหลือแขนข้างเดียวหลังจากผ่านสงครามจีน-ญี่ปุ่นครั้งที่สองและทหารผู้สูงอายุ

ตอนเกิดระเบิดปรมาณู ผมนอนอยู่บนเตียง พลทหารสิบตรีผู้มีแขนข้างเดียวนอนอยู่เตียงทางทิศใต้ และผมนอนอยู่ทางทิศเหนือ ผมตื่นเนื่องจากได้ยินเสียงตะโกนของทหารสิบตรีคนนั้นที่บอกว่า “โจมตีทางอากาศ” และได้ยินเสียงทหารสิบตรีคนนั้นหนีออกไปทางเดิน ผมก็รีบออกไป ตอนนั้นผมเหยียบรางใต้ประตู ผมจำเวลาได้ดีและยังสัมผัสได้ถึงความเย็นของรางนั้นที่อยู่บนฝ่าเท้า เวลาดูเหมือนจะหยุดลง จำได้ว่าทหารสิบตรีคนนั้นวิ่งไปตามทางเดินไป แต่ผมก็ออกมาว่าต้องกลับไปหยิบเครื่องแบบทหาร รองเท้า และหมวกทหารไปด้วยเมื่อหลบหนี ก็เลยพยายามกลับไปห้อง ตอนที่ใกล้จะเข้าห้องนอน แสงระเบิดได้พัดพาผมไปชนกับผนังทางเดิน ถึงแม้ว่าตอนเช้าเป็นไปไม่ได้ที่มีอะไรส่องสว่างจากทิศใต้ แต่ผมรู้สึกเหมือนว่ามีแสงวาบขึ้นที่ทางทิศใต้ มีคนถูกไฟลวกในห้องแต่ผมไม่ถูกไฟลวก อาจจะเพราะว่าเตียงของผมอยู่ข้างหลังของผนังและผมไม่ได้โดนแสงวาบโดยตรง ผมไม่ได้ยินเสียงอะไรเลย

หอผู้ป่วยพังราวกับว่าถูกตกลงมาจากฟ้าตรง ๆ ตอนที่ยืนอยู่ที่ทางเดิน ผมเอามือปิดหัวไว้ กระเบื้องหลังคาตกจากหลังคาเหมือนฝนตกและทับถมจนผมขยับรองเท้าไม่ได้ ผมได้รับบาดเจ็บที่ขาซึ่งรอยแผลตอนนั้นยังไม่หายจนถึงวันนี้ หลังจากนั้นผมหลบหนีไปเข้าที่หลบภัยทางอากาศที่อยู่ใกล้กับหอผู้ป่วย จำได้ว่าเสียบเกินไปจนรู้สึกประหลาดใจ พวกเรามีหน้าที่ที่เอาเอกสารสำคัญออกจากโรงพยาบาลเมื่อมีเตือนภัยการโจมตีทางอากาศหรือเผชิญภาวะฉุกเฉิน ผมจึงไปสำนักงานทางการแพทย์เพื่อเอารายงานการรักษา เห็นพยาบาลที่ได้รับบาดเจ็บและทนทุกข์ทรมานที่สำนักงานทางการแพทย์ จึงไปช่วยเหลือพวกเขา

มีแพทย์สนามมาบอกว่า “ให้ไปรวมกันที่โรงพยาบาลสนาม” ผมก็เลยไปที่นั่น ตอนนั้นผมเพิ่งรู้ว่าทำแวนตาหาย นอกจากผู้ป่วยที่เป็นทหารแล้ว คนทั่วไปในบริเวณใกล้เคียงจำนวนมากก็มาขอความช่วยเหลืออีกด้วย บางคนตื่นตกใจและเห็นควันก็ตะโกนว่าเป็นเครื่องบิน ทุกคนได้รับบาดเจ็บสาหัส จำได้ชัดเจนว่าเห็นพระอาทิตย์สีม่วงดำเพราะควัน คิดว่าตอนนั้นประมาณ 20 นาทีผ่านไปแล้วหลังจากอิโรชิมาะถูกทิ้งระเบิดปรมาณู

จากนั้นไม่นานก็มีคำสั่งออกมาให้หลบหนีไปยังหลุมหลบภัยที่ภูเขา พวกเราจึงได้มุ่งหน้าไปยังที่ภูเขาแห่งนั้น แต่เพราะที่ภูเขาถูกนั้นไฟกำลังไหม้ลุกไหม้อยู่ เป็นสภาพที่ไม่สามารถจะไปได้เลย พวกเราเดินเร่ร่อนไปทางนั้นที่ทางนี้ที่อยู่ประมาณชั่วโมงกว่า ตอนนั้นฝนก็ตกลงมาพร้อมกับเสียงโพรยปราย ฝนนั้นถูกเรียกกันว่า “พิรุณทมิฬ(ฝนสีดำ)” เป็นเหมือนฝนหนาร้อนที่ตกลงมาในช่วงเวลาค่า ผมได้ยินเสียงระเบิดของถังน้ำมันดังตูมมาจากทั่วทุกสารทิศ ผมและคนอื่น ๆ ก็ได้เห็นชุดผู้ป่วยที่เต็มไปด้วยเลือด ในตอนนั้นนั่นเองที่พวกผมก็เพิ่งได้รู้สึกถึงความเจ็บปวดจากผลของตนเอง ทั้งอาการเลือดไหลไม่หยุดบริเวณศีรษะจากแผ่นกระเบื้องมุงหลังคาตกใส่ รวมไปถึงขาทั้งสองข้างและหลังมีเนื้อที่เต็มไปด้วยบาดแผลมากมายนับไม่ถ้วน ส่วนทหารที่อยู่ข้าง ๆ นั้นก็สูญเสียหูของตัวเองไปเสียแล้ว เขายืนเหม่อลอยท่ามกลางสายฝนสีดำที่ตกกระหน่ำลงบนตัวของเขา เมื่อคนเราได้รู้ตัวว่าร่างกายบาดเจ็บ ในเวลาแบบนั้นร่างกายก็เริ่มขยับไม่ได้เสียแล้ว



หลังจากเกิดเรื่องขึ้นมากมายผมก็ได้กลับไปโรงพยาบาลและพักรักษาตัวอยู่ที่หลุมหลบภัยภายในโรงพยาบาลจนถึงเช้าของวันที่ 15 เดือนสิงหาคม เพราะพวกเราเป็นทหาร เราจึงได้สิทธิในการใช้ยารักษา ก่อน แต่ประชาชนคนธรรมดาที่ร้องขอความช่วยเหลือบ้างหนีตายอลหม่านมาบ้างนั้นช่างน่าสงสารเหลือเกิน พวกเขาไม่ได้รับการรักษาอย่างที่ควรจะเป็น มีผู้คนที่หมดแรงและค่อยๆ หมดลมหายใจไปเป็นจำนวนมาก ผมเฝ้ามองจากที่หน้าสลตใจมากมาอย่างทารกที่มีชีวิตรอดกำลังดูนมจากร่างของแม่ที่เสียชีวิตไปแล้ว และเพราะเป็นช่วงหน้าร้อน เสื้อผ้าบาง ๆ อย่างเสื้อเชิ้ตก็เปื้อนไปด้วยเลือด ผิวหนังของผู้ตายทุกคนจึงมีสีม่วงช้ำ และคนก็ค่อย ๆ ล้มตายไปที่ละคนที่ละคนเป็นจำนวนมาก เหล่าทหารเสนารักษ์ก็ค่อยๆ เผลอร่างที่ตายไปแล้วเหล่านั้นไปที่ละคนที่ละคนเช่นกัน

วันที่ 15 เดือนสิงหาคมหลังสงครามจบลง พวกเราก็ได้ย้ายจากฮิโรชิมาไปยังเมืองอื่นๆ พวกเราเดินจากโรงพยาบาลกองทัพบกมิตากิที่ 2 ที่เราเคยพักอยู่ไปยังสถานีโยโคกาเวะ ระหว่างนั้นก็เห็นกระดาษที่ติดอยู่ตามเสาโทรศัพท์เขียนไว้ว่า “วันนี้เที่ยงตรงจะมีการประกาศที่สำคัญ” ผมก็สงสัยว่า “จะเป็นประกาศอะไรกันนะ” พวกเราขึ้นรถไฟไอน้ำที่สถานีโยโคกาเวะผ่านสถานีฮิโรชิมาและถูกให้ลงที่สถานีสายเกบิที่อยู่ใจกลางภูเขาสถานีที่ 3 หรือ 4 ผมลืมชื่อสถานีไปแล้วละ พวกผมย้ายไปที่หอประชุมของโรงเรียนประถมกลางป่ากลางภูเขา หรือพูดให้ถูกก็คือเป็นการอพยพนั่นแหละ ตอนนั้นแหละเป็นตอนที่ผมฟังได้รู้ว่า “ญี่ปุ่นพ่ายแพ้แล้ว สงครามจบแล้ว” ผ่านกระดาษโรเนียวสีฟ้าๆ

พวกเราอยู่ที่นั่นเป็นเวลาเกือบหนึ่งสัปดาห์ในช่วงปลายเดือนของเดือนสิงหาคม จนได้รับคำสั่งให้กลับไปหน่วยเดิม พวกเราจึงได้กลับไปซาโตวาระที่จังหวัดมิยาซากิฝั่งคิวชูอีกครั้ง ตอนที่ถึงซาโตวาระเป็นคืนที่เกิดพายุไต้ฝุ่น พวกเราเดินไปได้ประมาณ 2 ลี้ ทั้งๆ ที่ยังสวมชุดผู้พลีชีพจนถึงกองร้อยในตอนดึก ไม่รู้ว่ เพราะผมโล่งใจที่ได้กลับมาถึงกองร้อยรีเปล่าเส้นผมของผมถึงเริ่มร่วง สภาพตัวของผมก็แย่ง ร่างกายของผมก็เต็มไปด้วยแผลพุพอง มีหนอง อาการท้องร่วงก็เริ่มแย่งลงไปอีก ตุ่มแผลพุพองค่อยๆ หายไปในทุกๆ ปีแต่จนตอนนี้ก็ยังคงหลงเหลืออยู่ อาการท้องร่วงก็ยังคงดำเนินต่อไปเรื่อยๆ จนเมื่ออายุ 50 อาการท้องร่วงก็ได้ทุเลาลง ที่ผ่านมามันเป็นช่วงเวลาที่ยเจ็บปวดมากจริงๆ

เช้าวันที่ 20 เดือนตุลาคม ในที่สุดก็ได้มีการยกเลิกกองกำลัง ผมจึงสามารถกลับไปเมืองโอดะกะกะที่ที่พ่อกับแม่อาศัยอยู่ได้โดยผ่านทางฮิโรชิมาอีกครั้งหนึ่ง หลังจากนั้นผมก็ได้กลับไปช่วยงานที่สำนักงานสถาปัตยกรรมที่บ้านของลุงในโอซากาได้อีกครั้ง พ่อของผมเสียชีวิตลงในปีโชวะที่ 25 (ค.ศ.1950) ผมจึงกลับไปยังเมืองโอดะกะกะ ตั้งแต่นั้นมาผมก็ทำงานที่ร้านค้าไม้บ้างรับเขียนแปลนบ้านบ้าง ในปัจจุบันผมก็ได้เริ่มทำงานที่ว่าการอำเภอในเมืองโอดะกะกะเริ่มตั้งแต่เดือนพฤษภาคมในปีโชวะที่ 29 (ค.ศ.1954) เป็นต้นมา

ผมไม่ได้รับสมุดบันทึกสุขภาพสำหรับผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณูมา ผมก็กะว่าจะลงทะเบียนตามระเบียบการที่ได้รับ แต่ก็กังวลว่าถ้าผมรับสมุดประจำตัวนั้นมา ในทางกลับกันแล้วอาจจะทำให้เป็นโรคลูคีเมียหรือเปลา ผมเลยยกเลิกการสมัครไป แต่ในตอนนั้นผมคิดว่าจะรับสมุดประจำตัวนั้นมาเพื่อที่จะให้หลงเหลือไว้เป็นบันทึกของตัวเองเพราะมีเจ้าหน้าที่ระดับสูงในเขตโอจิคุโระที่พิสูจน์เรื่องการอาบรังสีอยู่ หรือถ้าไปเมืองฮิโรชิมา ที่โรงพยาบาลจะต้องมีประวัติเหลืออยู่แน่ๆ แต่ตั้งแต่ที่โดนระเบิดครั้งนั้นผมก็ไม่ได้ไปฮิโรชิมาอีกเลย ผมไม่อยากจะไปนะเพราะจะนึกเรื่องราวในตอนนั้น ถ้าเกิดผมแก่ตัวลงแล้วบางทีผมอาจจะกลับไปที่นี่อีกครั้งก็ได้มั้งนะ ผมไม่อยากจะพูดถึงประสบการณ์ที่ถูกระเบิดลงนักรอก ต่อหน้าผู้คนผมก็ไม่อยากพูดถึงมัน แต่

ผมก็เคยได้ไปเล่าประสบการณ์ที่ถูกทิ้งระเบิดลงในรายการโทรทัศน์ ผมยังเคยถูกขอร้องให้ไปเขียนหนังสือพิมพ์ของโรงเรียนประถมอีกด้วย แต่ผมก็กำลังเรียงร้อยเรื่องราวประสบการณ์ของผมเป็นกลอนอยู่เช่นกัน ถึงผมจะกำลังลบนั่นทิ้งไปก็ตาม และผลงานของผมยังเคยถูกคัดเลือกให้เป็นผลงานดีเด่นในหนังสือ “เคนไดโนซอซุคุ” จากบริษัทสื่อสิ่งพิมพ์ไควะโชโบอีกด้วย

“หญ้าในฤดูร้อน ถูกระเบิดกวาดล้างหมดสิ้น เหลือทิ้งไว้แต่ความว่างเปล่า”

“จันทร์ส่องสว่าง ดั่งบทเพลงอำลาผู้ตาย ให้สงบจากเสียงระเบิด”

นามปากกา “บนเทนชิ”

ในบรรดางานที่ผมรับผิดชอบอยู่ในตอนนี้ก็มีผู้รับผิดชอบในการสร้างถนนสำหรับขนส่งแร่ไปยังโรงไฟฟ้านิวเคลียร์ในโอตะกะ เป็นเรื่องธรรมดาที่ปัญหาของโรงงานพลังงานไฟฟ้านิวเคลียร์มักจะมาพร้อมกับปัญหาเรื่องความปลอดภัยของกัมมันตภาพรังสีที่รุนแรง แต่ยังไงผมก็กำลังโน้มน้าวให้ผู้ที่อยู่ในพื้นที่เข้าใจว่า “โรงไฟฟ้านิวเคลียร์กับระเบิดปรมาณูเป็นสิ่งที่แตกต่างกันอย่างสิ้นเชิงเลย ผมเชื่อว่าโรงงานพลังงานไฟฟ้าเป็นสิ่งจำเป็นในตอนนี้ และยังเป็นอุตสาหกรรมที่สงบสุขและมีการใช้กัมมันตภาพรังสีได้อย่างปลอดภัยอีกด้วย แน่ใจว่าในด้านความปลอดภัยก็ต้องมีการรัดกุมอย่างหนาแน่น เพราะตัวผมเป็นเหยื่อจากระเบิดปรมาณูยังง่อยๆ ถึงได้เข้าใจความน่ากลัวของกัมมันตภาพรังสีได้อย่างถ่องแท้ และนั่นแหละเป็นเหตุผลที่ผมทำงานนี้อย่างเต็มที่” แน่ใจว่าผมต่อต้านการใช้ระเบิดปรมาณูและสงครามก็เช่นกัน สงครามที่จะเกิดขึ้นนั้นก็แค่ทำให้ทุก ๆ อย่างพังพินาศ ถึงแม้จะเรียกร้องเรื่องการต่อต้านการขยายกองกำลังทหารของสหรัฐอเมริกาและโซเวียตไปเพียงใดก็ตามแต่ ปัญหาคือมันกำลังเกิดขึ้นในที่ที่เราไม่สามารถเอื้อมถึง แค่คำพูดที่ว่า “สันติภาพ! สันติภาพ!” มันไม่ได้ช่วยเปลี่ยนแปลงอะไรหรอก แล้วต้องทำยังไงโลกถึงจะสงบสุขปราศจากสงครามจริงๆ เสียที มันยากมากนะครับ

(บทสัมภาษณ์วันที่ 18 พฤษภาคม 1983)

## 8. คำบอกเล่าของคุณโอกะ มิโนรุ

(อายุในขณะนั้น 19 ปี เพศชาย อาศัยอยู่ที่โอจิ เขตคาชิมะ เมืองโซมะ)

“ทหาร ช่วยฉันด้วย” “ขอน้ำหน่อย”

ผมเกิดที่เขตคาชิมะ ในเดือนกุมภาพันธ์ ปีไทโชที่ 15 (ค.ศ.1926) และมีประสบการณ์ในเหตุการณ์ระเบิดปรมาณูที่จังหวัดอิโรชิมะขึ้นเมื่อผมอายุ 19 ปี

ในปีโชวะที่ 18 (ค.ศ.1943) ผมได้เข้าร่วมหน่วยยุทโธปกรณ์และปฏิบัติหน้าที่ในหน่วยการจัดการคินกิของจังหวัดโอซากาประมาณครึ่งปี หลังจากนั้นเมื่อประมาณวันที่ 24 เมษายน ของปีโชวะที่ 20 (ค.ศ.1945) ผมถูกเรียกตัวให้ไปปฏิบัติหน้าที่ประจำหน่วยงานกองกำลังเสริมการสื่อสารทางเรือที่ 1671 ของจังหวัดอิโรชิมะ ซึ่งตั้งอยู่ที่เขตมินามิตองอนไตของภูเขาอิชิ ห่างจากศูนย์กลางระเบิดไม่เกิน 2 กิโลเมตร เป็นหน่วยกองกำลังทหารที่ใหญ่มาก มีกำลังพลกองละ 300 นาย ดังนั้นจึงมีทหารทั้งหมดประมาณ 2,000 นาย คุณอิโด้ อิสุ

กิจที่มีรายชื่ออยู่ในหนังสือรวบรวมประสบการณ์เล่มนี้ก็อยู่ในหน่วยงานกำลังโซมะที่เดียวกัน ผมคิดมาตลอดว่าอยากจะทำเขาซักครั้ง แต่เนื่องจากหน่วยงานกำลังมีคนเข้าออกอย่างคับคั่ง แน่ใจว่าในตอนนั้นผมไม่รู้ว่าเป็นใคร

หลังจากที่ผมได้เข้าร่วมเป็นทหารประจำการตอนเดือนเมษายน ผมเป็นแค่พลทหารธรรมดา แต่เพราะผมอยากเป็นว่าที่ผู้บัญชาการทหารด้านการสื่อสาร ผมเลยทุ่มเทกับการฝึกหัดสมอร์สทุกวัน และตั้งแต่ประมาณเดือนพฤษภาคมผมก็ได้เข้าร่วม “หน่วยงานกำลัง” ซึ่งเป็นหนึ่งในกองกำลังทหารนั้น

ช่วงประมาณ 3 วันก่อนหน้าวันที่ 6 เดือนสิงหาคม ในคืนนั้นการโจมตีทางอากาศก็รุนแรงขึ้น ตัวเมืองของอิโรชิมะไม่โดนโจมตี แต่ดูเหมือนว่าพื้นที่ของเมืองคุเรที่อยู่ใกล้ๆ จะถูกโจมตีอย่างหนัก ผมมองเห็นเมืองคุเรโดนโจมตีได้จากหน่วยงานกำลังของผม อย่างในช่วงตอนกลางวันก็มองเห็นเครื่องบินของอเมริกาบินขึ้นลงอย่างชัดเจน หน่วยงานกำลังทหารของพวกเราจึงชุดหลุมหลบภัยบนภูเขาอิชิ และทำงานที่นั่นเพื่อเก็บอุปกรณ์เสื้อผ้า และอาหาร ทหารทุกคนเหน็ดเหนื่อยเพราะต้องทำงานกะดึกอย่างต่อเนื่อง สถานการณ์ด้านอาหารแย่มาก ทุกคนจึงอยู่ในสภาวะขาดสารอาหาร

อาหารของหน่วยเราคือซูบ 1 อย่าง เครื่องเคียง 1 อย่าง พร้อมกับข้าวเพียงแค่หยิบมือในฝาชามข้าวเล็กๆ ผมถูกบอกให้ใช้เวลาในการกิน 20 นาที แต่ในขณะนั้นพวกผมอายุ 19 ปีเป็นวัยที่กำลังโตเลยใช้เวลาเพียงแค่ 2-3 นาทีก็คงจะกินหมดเกลี้ยง แต่ทันใดนั้นผมถูกสั่งว่า “ทหารใหม่ที่เพิ่งประจำการได้ไม่ถึง 1 ปี จงถือตะเกียบด้วยมือซ้าย” และถูกบังคับให้กินข้าว โดยไม่มีเหตุผล อาจจะเพราะสถานการณ์แตกต่างกันไปในแต่ละหน่วยงานกำลังทหาร แต่เพราะหน่วยของผมเป็นหน่วยงานกำลังทหารหลัก ผมคิดว่าเขาคงตั้งใจจะประหยัดให้ได้มากที่สุดเพื่อที่จะแจกจ่ายให้หน่วยงานกำลังทหารอื่นๆ

ในวันที่ 6 สิงหาคม วันที่ทิ้งระเบิดปรมาณู ผมตื่นนอนตอนตี 5 ตามปกติ และกินข้าวตอน 7 โมงเช้า แต่เพราะทุกคนเหน็ดเหนื่อยจากการชุดหลุมหลบภัยอย่างที่เคยกล่าวไว้ก่อนหน้านี้ ดังนั้นหน่วยของผมก็เลยนอนพักกันในช่วงเช้า สามารถพักผ่อนได้ตามอิสระในที่พักของแต่ละคน ผมเองก็นอนพักที่นั่นเหมือนกัน ที่พักเป็นอาคาร 2 ชั้น ใน 1 ห้อง อยู่ห้องละประมาณ 75 คน ขนาดเตียงแคบและความกว้างแค่ประมาณ 50 เซนติเมตร จริงๆ แล้วมันเป็นเตียง 2 ชั้น แต่มีอีกเตียงที่อยู่ระหว่างนั้น จึงเรียกว่า “เตียง 2 ชั้นที่มีชั้นเสริมตรงกลาง” กล่าวอีกอย่างก็คือสามารถรองรับทหารได้มากถึง 2 เท่า แม้แต่อาคาร 2 ชั้นยังสามารถเปลี่ยนเป็นอาคาร 4 ชั้นได้ อย่างไรก็ตามผมนอนเตียงที่ 2 ถัดจากหน้าต่างทางทิศเหนือบนชั้น 2

น่าจะประมาณช่วง 8 โมง 10 นาที แน่ใจว่าผมก็ไม่รู้ว่ากี่โมงแล้ว แต่ในขณะที่ผมกำลังสะลึมสะลืออยู่นั้นผมก็เห็นเครื่องบินบินมาแล้ว และดูเหมือนว่าจะไม่มีสัญญาณเตือนภัยทางอากาศเลยไม่มีใครอพยพออกไป นอกจากแสงสว่างจ้าของพระอาทิตย์ยามเช้าแล้วผมรู้สึกได้ถึงแสงสีเหลืองๆ สว่างขึ้น ในขณะเดียวกันผมก็ได้ยินเสียงระเบิดดังตูม พอเสียงระเบิดดังขึ้นภายในชั่วพริบตาเดียวหน่วยงานกำลังทหารก็ถูกทำลายอาคารถล่มลง และกระเบื้องหลังคาพังครืนลงมาดังโครมคราม ผมรอดมาได้เพราะมุดไปอยู่ใต้ “เตียง 2 ชั้นที่มีชั้นเสริมตรงกลาง” พอดี ผมยังจำความเจ็บปวดที่หน้าอกโดนกดทับได้อยู่เลย ในขณะที่กระเบื้องหลังคาถล่มลงมา ปูนปลาสเตอร์ก็ถล่มลงมาด้วย ฝุ่นดินคละคลุ้งเต็มไปหมดจนมองไม่เห็นอะไรเลย ผมพยายามหาเสื้อผ้า รองเท้า และหมวกที่วางไว้ใต้หมอนอย่างเป็นระเบียบไม่เจอ ผมเลยใส่แค่ชุดชั้นใน แล้วลองเดินเท้าเปล่าออกไป

ข้างนอก มีไฟไหม้ทั่วเมืองแต่อาคารที่พักของทหารไม่มีไฟไหม้ พวกผมมารวมตัวกันที่หน้าหลุมหลบภัยบนภูเขาอิจิ ถึงแม้จะบอกว่าเป็นการรวมตัวแต่ไม่ได้มีการขานชื่อที่ละคน ผมเอนหลังฟังภูเขาและแหงนมองท้องฟ้าด้วยความงุนงง หลังจากนั้นที่นั่นก็มีเมฆสีดำก้อนใหญ่ก่อตัวขึ้น มันขยายใหญ่ขึ้นและเคลื่อนไหวยวดเร็วจนน่าแปลกใจ จนผมคิดว่า “ฝนอาจจะกำลังมาหรือเปล่านะ” แต่อยู่ดีๆ มันก็กลายเป็น “เมฆรูปเห็ด”

หลังจากนั้นไม่นาน ผมได้รับคำสั่งว่า “คนที่แข็งแรง จงออกมา” หลังจากที่ผมได้รับรองเท้าและเสื้อผ้าแล้ว ก็กลับไปอาคารหน่วยกิจการภายในเพื่อดูแลผู้บาดเจ็บในหน่วยกองกำลังทหาร ในห้องเดียวกันกับผมมีเพียงคนเดียวที่เสียชีวิตคาที่ ชื่อของเขาคือยามาตะ มาจากจังหวัดอิบารากิ ในขณะที่ผมดูแลผู้บาดเจ็บผมก็ได้พบผู้บาดเจ็บหลากหลายรูปแบบ ทหารทุกคนถูกไฟไหม้อย่างสาหัสที่ใบหน้าเพียงแค่ครึ่งซีกไปในทิศทางเดียวกันหมดและล้มทับกันเป็นทอดๆ ร่างบางคนเผาไหม้เฉพาะส่วนที่หมวกไม่ได้ปกคลุม เป็นครั้งแรกที่ได้รู้ว่าสมองคนเรามีสีขาว และเป็นครั้งแรกในชีวิตที่ได้สัมผัสและแบกร่างของคนตาย ศพดูราวกับท่อนไม้ที่ทิ้งเหยียดแข็งและหนัก ผมที่อายุสิบเก้าก็รู้สึกไม่ค่อยจะดีนัก จาก 2,000 คนในหน่วยของเรา คิดว่าประมาณ 100 คนเสียชีวิต มีคนไม่ถึงหนึ่งในสามที่ไม่มีบาดแผล

ไม่กี่ชั่วโมงต่อมา พลเรือนของอิโรชิมะที่ได้รับบาดเจ็บจำนวนมากมายังกองทหารของเราเพื่อขอความช่วยเหลือ พวกเขาพูดว่า “ทหาร ช่วยฉันด้วย” “ทหาร ช่วยเอาน้ำให้ฉันหน่อย” เอย่ขอด้วยน้ำเสียงที่ไม่ค่อยดีนัก จนถึงตอนนี้ผมยังไม่ลืมเสียงนั้น น้ำประปาไม่ไหล จึงต้องตักน้ำจากบ่อน้ำเก่ามาให้เด็ก ๆ ดื่ม คนที่มีแผลไฟไหม้รุนแรงนั้นผิวหนังลอกออกราวกับกำลังสวมเสื้อที่ยับเยิน ยิ่งไปกว่านั้นก็มีเศษขยะติดอยู่บนตัวจำนวนมาก และมันรโหดร้ายมากจริง ๆ ถึงน้ำที่ให้ดื่มมันไม่ค่อยสะอาดนัก แต่มันไม่มีทางเลือกแล้ว

จากนั้นผมก็พาเพื่อนทหารที่บาดเจ็บไปที่หน่วยฝึกทหารท่าเรืออุจิมะทางตอนใต้ของอิโรชิมะ ที่อุจิมะ คุณคาชิมะ นาเคะงะวะก็อยู่ที่นั่น ใช้เปลหามเพื่อนประมาณ 4 กิโลเมตร ระหว่างทางที่หาม ก็คิดว่า “ระเบิดทำลายได้ถึงสถานที่ห่างไกลแห่งนี้จนราบ เป็นระเบิดที่มีอำนาจร้ายแรงจริงๆ” ไม่ถึงสามวันต่อมาที่รู้ว่ามันเป็นระเบิดปรมาณู ในคืนนั้นผมก็นอนหลับที่อุจิมะ มีเพียงแค่ผู้ที่ได้รับบาดเจ็บใช้ผ้าห่ม 1 ผืน ปูนอนเรียงกัน ผมไม่ได้กินแม้แต่ข้าวกลางวัน เลยได้กินขนมคันปัง<sup>16</sup> ที่พกมาด้วยเป็นอาหารมือเย็นมือแรก มันเป็นขนมปังอันเล็กๆ แข็งๆ ไม่มีรสชาติ มีลูกอมคอมเบโต<sup>17</sup> 2 อันติดอยู่ ผมดื่มน้ำพร้อมกับกินไปด้วย

วันถัดมาในวันที่ 7 ผมกลับไปกองทหารและทำความสะอาดที่พักของทหาร ที่พักถูกทำลายจนเกือบหมด ทางเดินที่นอนที่นั่นประมาณสองคืน หลังจากนั้นไปพักที่โรงงานเสื้อผ้าที่พังหลายไปบางส่วน เวลาที่เหลือก็ไปแช่น้ำร้อนในถังเหล็ก ตอนที่เข้าไปแช่ในถังมันก็ง่ายดีนะ แต่ตอนออกมันค่อนข้างลำบากพอสมควร

หลังจากนั้นได้ยินการประกาศยุติสงครามในวันที่ 15 สิงหาคมผ่านทางวิทยุ ประมาณ 2-3 วันก่อนหน้านั้น พวกนายทหารชั้นประทวนทำตัวน่าสงสัย และพวกเขาต่างก็ซุบซิบกันว่า “สงครามจะจบแล้ว” ดูเหมือนฝั่งกองทัพเรือจะรู้เรื่องการยุติสงครามมาตั้งแต่ก่อนหน้านี้อแล้ว แม้หลังสงครามสิ้นสุดลง ผมยังคงสะสมงานที่เหลืออยู่ และจัดเก็บอุปกรณ์ กองทหารถูกยุบในวันที่ 20 กันยายน

<sup>16</sup> ขนมปังก้อนแข็ง ๆ คล้ายขนมบิสกิต รับประทานเป็นอาหารยามยากแทนข้าว

<sup>17</sup> ลูกอมเม็ดเล็ก ผิวเป็นหนามฟูๆ สีสนิมใส รสหวานแหลม

อย่างไรก็ตาม เวลาผ่านไปกว่าหนึ่งเดือนนับตั้งแต่สิ้นสุดสงคราม ญาติและพี่สาวมารับผมที่อิโรชิมะ บ้านเกิดของผม เพราะกังวลความเป็นไปของผม ทั้งลูกพี่ลูกน้องและพี่สาวทั้งสามคนไม่สามารถซื้อตั๋วได้และการจราจรก็ไม่ดี หลังจากเดินทางอย่างยากลำบากผ่านทะเลเซโตะไอน ก็มาถึงอิโรชิมะในเย็นวันที่ 23 กันยายน แม้ว่าผมจะพยายามส่งจดหมาย แต่ไม่รู้ว่าจดหมายจะถึงหรือไม่ และไม่มีหนทางติดต่อใครได้เลย จากนั้นเราสี่คนเดินทางจากอุจินะไปโอโนะมิจิโดยเรือ แล้วกลับจากโอโนะมิจิโดยรถไฟ

ระเบิดปรมาณูและสงครามมันเป็นเหมือนกับฝัน เรารวมตัวกันกับเหล่าเพื่อนทหารในสงครามในโตเกียวปีละครั้งในวันที่ 6 สิงหาคม พวกเขามักคุยกันเกี่ยวกับเรื่อง "ราวกับฝัน" นั้น มีแต่เรื่องที่ไม่คิดว่าจะเกิดขึ้นได้ในปัจจุบันอยู่เต็มไปหมด ผมยังได้ไปอิโรชิมะกับเพื่อนร่วมรบในรอบ 33 ปี

โชคดีที่ร่างกายของผมไม่มีปัญหาอะไรตั้งแต่นั้นมา ปัจจุบันก็ยังมีสุขภาพแข็งแรงและได้ประกอบอาชีพฟาร์มโคนม มีลูกสามคนและหลานอีกสี่คน ซึ่งตรวจสอบสุขภาพรุ่นที่สองแล้วไม่พบสิ่งผิดปกติ ตอนนี้สามารถพูดเกี่ยวกับระเบิดปรมาณูได้แล้ว แต่ในตอนนั้นรู้สึกไม่สบายใจที่จะพูด แม้แต่ตอนที่แต่งงานในปีโชวะที่ 27 (ค.ศ. 1952) ก็ยังต้องซ่อนเรื่องนี้อาบริงสี่อยู่เลยนะ

ผมอ่านเกี่ยวกับบันทึกระเบิดปรมาณูในนิตยสารอิเอะโนะฮิคาริและสมัครกับจังหวัดไป แต่ถูกปฏิเสธ หลังจากนั้นขอให้คุณนาคะงะวะรับรองให้และในที่สุดหนอยางานก็ออกหนังสือให้ แต่ผมไม่เข้าข่ายผู้มีสิทธิ์ได้รับเบี้ยเลี้ยงช่วยเหลือในระยะสองกิโลเมตร จึงคิดที่จะสมัครในครั้งหน้า

ระเบิดปรมาณูใช้เป็นหนทางสุดท้ายในสงครามนั้นหรือ ช่างเป็นเรื่องที่โหดร้ายจริงๆ ไม่ควรมีสงครามเลย ไม่ว่าจะเป็นอย่างนั้น อย่างไรก็ตามเนื่องจากมันเกี่ยวข้องกับความรู้เรื่องและความเสื่อมถอยของชาติ คิดว่าจำเป็นต้องมีอาวุธยุทโธปกรณ์ แต่อาวุธยุทโธปกรณ์ควรใช้เพื่อการทูต ไม่ต้องใช้จริง ปีโชวะที่ 18 (ค.ศ.1943) ในตอนที่ผมไปเป็นครูทดแทน ในวันที่ 1 มกราคม ปีที่ 9 “หนังสือพิมพ์นิจิมิมบุง” กล่าวว่าอาวุธขนาดเท่ากล่องไม้ขีดสามารถทำลายกองเรือรบขนาดใหญ่ได้ พอมาคิดตอนนี้ก็จะนึกถึงเกี่ยวกับเรื่องระเบิดปรมาณู จำได้ว่ามีบทความแบบนั้น ญี่ปุ่นกำลังวิจัยระเบิดปรมาณูในเวลานั้น และดูเหมือนว่าจะมีการระเบิดในระหว่างกระบวนการการผลิต ไม่ว่าจะอย่างไรก็ตามในโลกปัจจุบันเงินคือทุกสิ่งทุกอย่างในชีวิต คิดว่าสงครามจะไม่สิ้นสุด เว้นแต่ความขัดแย้งระหว่างประเทศในเรื่องเงินจะถูกขจัดออกไป ถ้าไม่ทำให้คนคิดว่าการทำงานอย่างขยันขันแข็งเป็นเป้าหมายในชีวิตของพวกเขา ความขัดแย้งจะไม่หายไป

(บทสัมภาษณ์วันที่ 23 พฤษภาคม ค.ศ.1983)



出典：日本赤十字社HP 「被爆後の街並」(広島)

9. **คำบอกเล่าของคุณ B** (อายุในขณะนั้น 20 ปี เพศชาย อาศัยอยู่ที่เมืองโอคูมะ เขตฟุตาบะ)

**ขนย้ายศพขึ้นเปลหามด้วยมือเปล่า**

**นักวิชาการศึกษามีบทบาทสำคัญในการรักษาความสงบสุข**

ผมเกิดที่เขตฟุตาบะ เมื่อเดือนมีนาคมของปีโชวะที่ 15 (ค.ศ.1926) ผมอยากจะเล่าประสบการณ์ที่ได้เห็นการทำลายล้างของระเบิดปรมาณูที่ฮิโรชิมาในตอนที่ผมอายุ 20 ปี อย่างละเอียด

ช่วงปลายของสงคราม ตอนอายุ 19 ปี ผมถูกเลื่อนให้รับการตรวจร่างกายเพื่อเกณฑ์ทหารเร็วขึ้น ในเดือนมีนาคมของปีโชวะที่ 20 (ค.ศ.1945) ผมได้เข้าเป็นทหารประจำการในฐานะหน่วยวิศวกรเรือและประจำการที่เมืองมิฮาระ จังหวัดฮิโรชิมา ในฐานะทหารสื่อสารหน่วยฝึกอบรบพลทหาร เมืองมิฮาระอยู่ใกล้กับเมืองโอโนมิจิ โดยจังหวัดฮิโรชิมานั้นอยู่ห่างจากทางตะวันออก 20 ลี้ หรือ 80 กิโลเมตรโดยประมาณ ปลายเดือนมีนาคมผมเข้ารับการฝึกฝนจากการเข้าเป็นทหารประจำการเป็นเวลา 6 เดือน กิจวัตรประจำวันถูกจัดไว้อย่างหลากหลาย ไม่ได้มีแค่ฝึกฝนการสื่อสารด้วยรหัสสมอร์สแบบทั่วไปเท่านั้น แต่ยังมีให้ฝึกทหารรวมทั้งงานปลูกผักก็ถูกให้ทำด้วยเช่นกัน

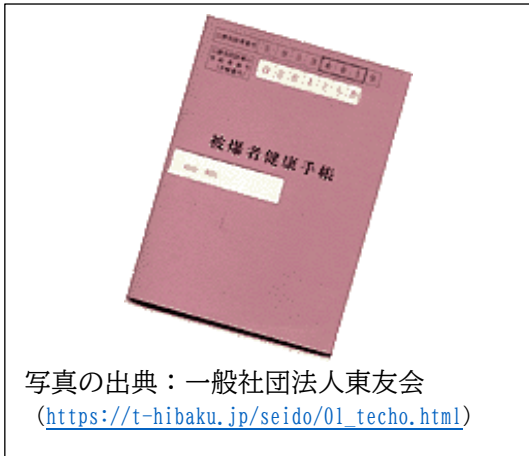
ระเบิดปรมาณูถูกทิ้งลงมาจากจังหวัดฮิโรชิมา เมื่อวันที่ 6 สิงหาคม ผมได้รับคำสั่งจากผู้บังคับบัญชาการว่ามีภารกิจให้ไปช่วยเหลือที่จังหวัดฮิโรชิมาในตอนกลางคืน แต่ว่าผมไม่ได้รับรู้เรื่องระเบิดหรือเรื่องรายละเอียดอื่นๆ เลย มันเป็นความรู้สึกที่ว่าถูกดึงให้ไปเข้าร่วม โดยที่ไม่รู้อะไรเลยว่าจะถูกให้ทำอะไรบ้าง ในช่วงกลางดึกประมาณเที่ยงคืน ผมเดินทางออกจากเมืองมิฮาระ เดินทางโดยรถไฟไอน้ำ ใช้เวลาเดินทางประมาณ 1 ชั่วโมงขึ้นไป จนกระทั่งรุ่งสางก็มาถึงจังหวัดฮิโรชิมา แต่ว่าถ้าผมจำไม่ผิดพวกเราลงจากรถไฟไอน้ำที่สถานีก่อนหน้า โดยที่ไม่สามารถไปถึงสถานีฮิโรชิมาได้ แต่ว่าผมลืมนชื่อสถานีนั้นไปแล้ว ช่างนอกยังคงมีอยู่ ผมเดินมุ่งหน้าไปยังสำนักงานใหญ่ของจังหวัดฮิโรชิมา โดยที่เดินกันไปเป็นขบวน สภาพรอบๆ ตัวนั้นมีมืดและผมก็ไม่รู้อะไรเลย แต่ที่เมืองนั้นเมืองนี้เกิดไฟไหม้เต็มไปหมด ผมไม่ได้รู้อะไรไปมากกว่านั้น แต่ผมได้กลิ่นเหม็นมากเหม็นจนผมไม่สามารถอธิบายเป็นคำพูดได้ พอวันถัดมาผมลองมาคิดดู ก็รู้ว่าเป็นกลิ่นศพที่ไหม้แล้ว ผมจึงกลับที่สำนักงานใหญ่ที่ตั้งอยู่ใจกลางเมืองฮิโรชิมาและเมื่อผมตื่นขึ้นมาในตอนเช้า ผมก็ตกใจเป็นอย่างมากที่ด้านหนึ่งของเมืองฮิโรชิมาได้กลายเป็นซากปรักหักพัง

ในทุกๆ วันนับจากวันที่ 7 สิงหาคม เฉลี่ยประมาณ 1 สัปดาห์ งานกำจัดศพก็ได้เริ่มต้นขึ้น ถึงแม้จะบอกว่าเป็น “การช่วยเหลือ” แต่ที่จริงแล้วคือการขนย้ายศพต่างหาก ก่อนที่จะออกเดินทางกัน ผมได้รับกระติกน้ำเก็บอุณหภูมิมา 1 กระบอก และผมได้ถูกเตือนว่าไม่ให้ตักน้ำจากที่ไหนเลยนอกเหนือจากน้ำในกระติกน้ำนั้น ทั้งๆ ที่เป็นการขนย้ายศพแต่กลับไม่มีเครื่องมืออะไรแจกจ่ายเลย เพราะงั้นพวกผมเลยได้หาแผ่นสังกะสีที่กระจัดกระจายอยู่แถวนั้นมาประกบติดกับท่อนเหล็ก 2 ท่อนทำเป็นเปลหาม 4 คนหามต่อ 1 เปลอย่างแรกเลยการขนย้ายศพนั้นเป็นงานใหญ่ เนื่องจากว่าไม่มีถังพลาสติก ไม่มีถังถุงมือผ้า ทุกคนเลยต้องขนย้ายศพด้วยมือเปล่า ศพเต็มไปด้วยแผลไฟไหม้และแผลพุพอง พอถึงปั๊มน้ำมันก็หลุดติดออกมา ผมขนศพไปถึงลานสนามกว้างๆ ที่อยู่ห่างออกไป 2-3 กิโลเมตร จัดเรียงศพไว้ที่นั่นและทำการยืนยันตัวตน หลังจากนั้นก็ทำการเผา แต่เนื่องจากศพใส่เสื้อผ้าบางๆ ทำให้มีหลายรายที่ไม่สามารถยืนยันตัวตนได้เพราะศพไหม้เกรียมจนกลายเป็นสีดำ

ในระหว่างที่ขนย้ายศพ เนื่องจากว่าแขนทั้งสองข้างของศพห้อยลงมาจากเปล ผมเลยต้องเอาแขน กลับมาไว้บนหน้าอกหลายครั้ง แต่แขนก็ห้อยลงมาอีก มีบางรายที่ขนย้ายต่างๆ ที่แขนหลุดอยู่อย่างนั้น นั่นนะ เป็นเรื่องที่โหดร้ายมาก ทั้งไม่มีแขน ทั้งเห็นลำไส้ อย่างที่ผมพูดไปก่อนหน้านี้ กลิ่นคือเหม็นมาก มี 4 คนที่ถือ เปลหาม แต่รายหลังๆ มีกลิ่นที่แรงขึ้นจึงได้ผลัดเปลี่ยนกันเป็นครั้งคราว ผมเอาผ้าขนหนูวางบนหน้าากและ กดจมูกแรงๆ แต่ก็ยังคงได้กลิ่นเหม็นอยู่ พอขนย้ายศพทีละเล็กทีละน้อย กลายเป็นว่าเปลหามก็ไม่สามารถใช้ งานได้อีกต่อไป ประมาณวันที่ 3 ผมได้ตามหารถม้าจากทั่วทั้งเมือง แน่ใจว่าไม่มีม้าอยู่เลย มีเพียงแค่ส่วนที่เป็น ตัวรถเท่านั้น ผมจึงใช้ตัวรถนั้นเป็นเปลหาม โดยใช้ 8 คนช่วยกันขนย้ายศพ เนื่องจากไม่มีแม้แต่เชือกผูกมัด ศพ ผมก็เลยใช้มือเปล่ากอดศพเอาไว้ ผมเดินไปทั่วเมืองอิโรซิมาทั้งแบบนั้น มีเฉพาะแค่วันสุดท้ายเท่านั้นที่ผมถูก สั่งให้ไปจัดระเบียบท้องถนน

พอลองมาคิดดูในช่วงเวลาที่สงบสุขเช่นนี้ การเคลื่อนย้ายศพมากมายขนาดนั้นกลับเคยเป็นเรื่องปกติ ยิ่งไปกว่านั้น ตอนช่วงผมหนุ่มๆ อายุสัก 20 ปี ผมคิดว่าสามารถทำเรื่องแบบนั้นได้เสียอีก แต่โดยปกติแล้ว เรา ไม่แม้แต่จะสามารถสัมผัสตัวศพได้เลยด้วยซ้ำ แต่เป็นเพราะช่วงเวลาวิบิโยคอย่างสงครามและการตระหนักรว่า ตนเองเป็นทหาร ก็เลยสามารถทำแบบนั้นได้สินะ

หลังจากวันที่ 7 สิงหาคมเป็นต้นไป ที่อิโรซิมาเองก็มีสัญญาณเตือนภัยทางอากาศดังอยู่บ่อยๆ ชนิด ที่ว่าต้องวิ่งเข้าไปหลบในหลุมหลบภัยจนนับครั้งไม่ถ้วน ในวันที่ 15 สิงหาคม ผมได้เดินทางกลับบ้านไปยังเมือง มิฮาระ หลังจากทีวิทยุกระจายเสียงสิ้นสุดการประกาศยอมรับปฏิญญาพอทสตัดัมและยุติสงคราม แต่เนื่องจาก การกระจายเสียงของวิทยุที่ไม่ชัดเจน ทำให้ไม่สามารถจับใจความได้ ถึงอย่างนั้นผมก็เข้าใจได้ว่า สงครามยุติลง แล้ว หลังจากที่คิดว่า “เฮ้อ กลับบ้านได้แล้วสินะ” ทหารทุกคนก็กลับไปประจำการยังกองกำลังของตน แต่ พวกผมต้องย้ายจากกองกำลังเดิมที่เมืองอิชิโนะมากิ จังหวัดมียาจิ ไปประจำการที่จังหวัดยามากูจิแทน โดยไป ประจำการที่สถานีรถไฟยานาอิเป็นระยะเวลาราว 1 เดือน หลังจากนั้นก็ได้รับเอกสารทางราชการเกี่ยวกับการ เลื่อนตำแหน่งเป็นการพิเศษ เลยคิดว่าตนจะได้เลื่อนขั้นเป็นสิบตรีแน่ๆ แต่ดูเหมือนว่าจะไม่ใช่เอกสารที่ออกมา อย่างเป็นทางการอะไร ตอนนั้นเองได้มีการแจ้งว่าผู้ที่มีความประสงค์จะกลับบ้านเกิดสามารถทยอยเดินทาง กลับได้เลย ส่วนคนอื่นๆ ที่อยู่สะสางงานที่ค้างค้างไว้ในกองทัพก็จะมีการมอบเสบียงให้ แต่วัยรุ่นแบบผมเนี่ย มัน เติบโตด้วยความรู้สึกอยากจะรีบกลับบ้านไวๆ แม้จะเร็วขึ้นแค่วันเดียวก็ดี ในที่สุด ในอีก 1 เดือนต่อมา วันที่ 14 กันยายน ก็ได้รับอนุญาตให้แยกพลกลับบ้านเกิดได้ ผมขึ้นรถไฟขบวนส่งสินค้าจากจังหวัดยามากูจิไปยังโอ ซาก้า และขึ้นรถไฟขบวนที่มุ่งหน้าไปยังจังหวัดอาโอโมริซึ่งล้อมรอบไปด้วยทะเลญี่ปุ่น จากนั้นลงที่เมืองนิฮิสึ จังหวัดนีงาตะ แล้วเดินทางต่อไปยังเมืองไอสึวากามัตสึ เมืองโคริยะมะ โดยเดินทางผ่านอิวานูมะ จนมาถึง สถานีฟุตาบะช่วง 2 ทุ่มของวันที่ 16 กันยายน และกลับถึงบ้านในเวลา 4 ทุ่ม



ในปีโชวะที่ 30 (ค.ศ.1955) ผมได้รับมอบสมุดบันทึกสุขภาพสำหรับผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณู ผมจึงไปตรวจร่างกายที่โรงพยาบาลขนาดใหญ่ประจำจังหวัดปีละ 2 ครั้ง และดูเหมือนว่าเซลล์เม็ดเลือดขาวของผมมีน้อย เพราะเคยได้ยินมาว่าปกติเซลล์เม็ดเลือดขาวของคนเราจะอยู่ที่ 7,000 เซลล์ แต่เซลล์เม็ดเลือดขาวของผมกลับมีแค่ครึ่งหนึ่งประมาณ 3,500 ถึง 4,000 เซลล์เท่านั้น ส่วนเรื่องสุขภาพก็มีแค่ระดับที่ไม่ค่อยจะดีเท่าไร กล่าวคือ อาการแพ้แอลกอฮอล์ของผมมันรุนแรงขึ้น ทำให้ไม่สามารถดื่มเหล้าได้

เพราะถ้าดื่มไปแล้วจะมีผื่นลมพิษขึ้นทั่วร่างกาย โดยเฉพาะอย่างยิ่งที่เท้า ตอนนั้นเอง กลับกลายเป็นว่าแม่จะไม่ได้ดื่มเหล้าแต่ผื่นลมพิษก็ยังขึ้นอยู่ ผมเลยไปตรวจที่สถาบันโรคผิวหนังแล้วก็เลิกดื่มเหล้า จนเวลาล่วงเลยไปประมาณ 2 ปี ก็รู้สึกเหมือนว่าจะหายเป็นปกติแล้ว และเนื่องจากทั้งพี่น้องและพ่อแม่ของผมไม่เคยป่วยเป็นโรคแบบนี้มาก่อน ผมจึงคิดว่าสาเหตุอาจมาจากเหตุระเบิดครั้งที่สองที่อิโรชิมะ และการถูกระเบิดอาจจะเป็นสาเหตุให้เซลล์เม็ดเลือดขาวน้อยลงและทำให้ตับของผมกลายเป็นแบบนี้ก็ได้ แต่ว่าลูกทั้ง 2 คนและหลานอีก 4 คนมีสุขภาพร่างกายแข็งแรงดี ก็เลยคิดว่าผื่นลมพิษไม่น่าจะมีความเกี่ยวข้องกับอะไรกับระเบิด การที่ไม่ว่าจะเรื่องอะไรก็โทษว่ามาจากระเบิดทั้งหมดนั้นจึงไม่ใช่เรื่องที่ดีเท่าไรนัก ยกเว้นในกรณีที่ไม่มีข้อพิสูจน์ทางการแพทย์อย่างชัดเจน ถึงแม้ว่าผมจะถูกเรียกได้ว่าเป็นผู้ประสบภัยจากระเบิด แต่การได้รับสมุดบันทึกสุขภาพสำหรับผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณู แล้วทำให้ผมสามารถเข้ารับการตรวจสุขภาพเป็นประจำได้นั้น ก็ยังถือว่าดีแล้ว สหายร่วมรบของผม คุณที เขาสังกัดอยู่กองกำลังเดียวกันกับผมและเผชิญกับระเบิดรอบสองที่อิโรชิมะ เช่นเดียวกัน เขาอาศัยอยู่ที่หมู่บ้านอุโคโตะ เมืองนามิเอะ และยังมีชีวิตอยู่มาจวบจนถึงปัจจุบันโดยที่ไม่ได้รับสมุดรับรองเลย จะบอกว่าสงสารเขาก็คงไม่ใช่ ผมกลับรู้สึกผิดมากกว่า

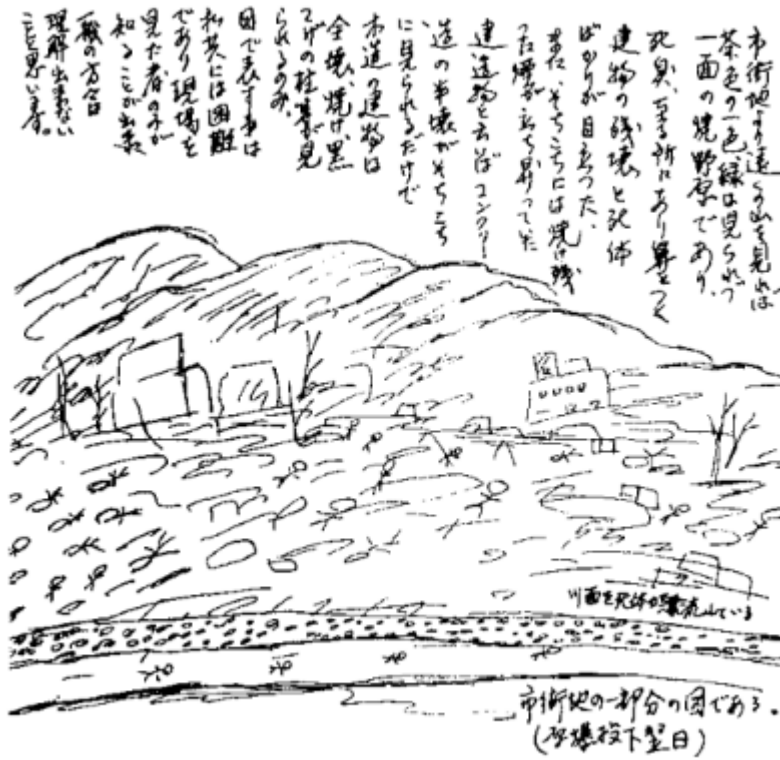
อย่างไรก็ตาม พวกเรื่องระเบิดปรมาณูหรือสงครามเหล่านั้น ตั้งแต่ต่อไปจะทำให้ประวัติศาสตร์มันซ้ำรอยไม่ได้ เพราะเพียงแค่ระเบิดลูกเดียวยังทำให้อิโรชิมะพังยับเยินเสียขนาดนั้น สมมติว่าสงครามนิวเคลียร์เกิดขึ้นมากระแทกกันหั่นละก็ ทั้งญี่ปุ่นคงจะถูกโจมตีได้ในคราวเดียวและมนุษยชาติก็ต้องล่มสลายเป็นแน่ ไม่รู้ว่าประสบการณ์ที่พวกเราได้พบเจอกันมาจะทำให้หนุ่มสาวสมัยนี้ตระหนักได้ถึงสักเพียงใด เพราะฉะนั้นบทบาทหลักๆ ของนักวิชาการศึกษาและคุณครูอย่างคุณคือเพื่อรักษาความสงบสุขให้คงอยู่ต่อไปและบอกต่อความโหดร้ายของสงครามให้แก่คนหนุ่มสาว

ผมไม่เคยดูหนังเรื่อง “เอาความเป็นมนุษย์คืนมา” หรอกครับ เพียงแต่เมื่อก่อนผมเคยดูหนังที่บันทึกเหตุระเบิดอยู่บ้าง อีกทั้งเคยเห็นผ่านทางทีวีมาบ้างด้วย แต่ในฐานะที่ตัวผมเคยเห็นของจริงมาก่อน มันไม่เหมือนกับที่เห็นในหนังเลยครับ เพราะความเป็นจริงมันโหดร้ายและน่ากลัวยิ่งกว่านั้นมาก อย่างที่ผมกล่าวไปก่อนหน้านี้ อย่าทำให้เรื่องราวเหล่านี้เกิดขึ้นอีกเป็นครั้งที่สองและอย่าทำให้ประวัติศาสตร์กลับมาซ้ำรอยเดิมครับ

(บทสัมภาษณ์วันที่ 14 ธันวาคม ค.ศ.1982)



ภาพวาดของคุณไปถึงเหตุการณ์วันต่อมาหลังการทิ้งระเบิดที่อิโรชิมะ



10. คำบอกเล่าของคุณ C (อายุในขณะนั้น 24 ปี เพศชาย อาศัยอยู่ที่เมืองโซมะ)

ใครบางคนพาผมที่หมดสติมาริมแม่น้ำ

ผมเข้าประจำการทหารในเดือนกรกฎาคม ปีโชวะที่ 17 (ค.ศ. 1942) อยู่สังกัดในกองร้อยที่ 1 ของกองกำลังที่ 86 กรมทหารที่ 1 จังหวัดชิบะ ปกติแล้วจะถูกเรียกว่ากองกำลังทางรถไฟ ที่นั่น ผมทำงานเป็นผู้ช่วยฝึกทหารชั้นผู้น้อยและซ่อมแซมรถไฟในเขตสถานีเรียวกาคู

ในเดือน กุมภาพันธ์ ปีโชวะที่ 20 (ค.ศ. 1945) ผมได้ย้ายไปประจำการที่กองกำลังในจังหวัดอิโรชิมะ ผมจำได้ดีว่านั่งรถไฟตอนกลางคืนไปจังหวัดอิโรชิมะ แต่ไม่แน่ใจชื่อสังกัดที่ย้ายไปประจำการ ไม่แน่ใจว่าลืมไปแล้วหรือไม่รู้ตั้งแต่แรก ทางกองกำลังใช้พื้นที่ของโรงเรียนในเมืองโยโคกาวา (จำไม่ได้ว่าชื่ออะไร) ที่อยู่ทางตอนเหนือของจังหวัดอิโรชิมะ งานที่นั่นส่วนใหญ่จะเป็นการฝึกทหารที่เกณฑ์มาแบบฉุกฉิน เมื่อสงครามรุนแรงขึ้นทางฝั่งคนขับรถไฟก็ขาดกำลังคน จึงต้องรวบรวมชาวบ้านธรรมดาามาฝึกขับรถไฟ

ผมคิดว่าวันที่ 6 เดือนสิงหาคมคือวันจันทร์ ผมจำได้ดีเพราะตอนนั้น ผมหยุดในวันอาทิตย์ไม่ได้เพราะการฝึกซ้อม วันจันทร์จึงกลายเป็นวันหยุดชดเชย ในวันนั้น ผมถูกเรียกตัวเพื่อให้ออกไปข้างนอก ในตอนนั้นเอง สัญญาณเตือนภัยทางอากาศก็ดังขึ้น ผมจึงรีบเข้าไปหลบในหลุมหลบภัยที่มีอยู่ในพื้นที่นั้น ผ่านไปสักพัก สัญญาณเตือนภัยก็หยุดลง ผมจึงออกมาข้างนอกและมุ่งหน้าไปยังค่ายทหาร

ตอนที่ระเบิดปรมาณูถูกทิ้งลงมา เป็นตอนที่ผมเพิ่งก้าวเท้าเข้าไปในค่ายทหาร ซะตาชีวิตคนเราช่างเป็นสิ่งที่ไม่สามารถรู้ได้เลย ที่ที่พวกผมอยู่ อยู่ห่างจากจุดศูนย์กลางที่โดนระเบิดประมาณ 1 กิโลเมตร ถ้าอยู่ข้างนอกก็คงไม่มีทางรอดและไม่ต้องพูดถึงว่าถ้าหากผมออกไปเร็วกว่านี้เพียงนิดเดียวก็จะเข้าไปใกล้จุดศูนย์กลางที่โดนระเบิดมากกว่านี้ และผมคงตายไปแล้วแน่นอน เพื่อนร่วมงานที่อยู่กับผมส่วนใหญ่เสียชีวิต ส่วนผมเป็นแผลที่หน้าผากแล้วหมดสติไป ตอนที่รู้สึกตัวก็นอนพักอยู่ตรงริมแม่น้ำ มีคนช่วยชีวิตผมไว้แต่ไม่รู้ว่าเป็นใคร อาคารที่พักอาศัยของทหารก็พังทลายลง หลังจากนั้นก็เกิดไฟไหม้ขึ้น ผมที่หมดสติไปในสถานการณ์นั้น ก็มีคนดึงตัวผมออกมาและพาผมไปถึงริมแม่น้ำ

ผมไม่สามารถลุกได้จึงถูกหิ้วที่ริมแม่น้ำทั้งวัน ระหว่างที่นอนอยู่ ผมเห็นสิ่งที่คิดว่าเป็นสะพานโยโกคาวา แต่พอไปถามที่หลังสะพานโยโกคาวาไม่มีต้นไม้อะไรๆ จึงคิดว่าอาจจะจะเป็นสะพานอื่น หลังจากนั้นผมก็เข้ารับการรักษาในโรงพยาบาลที่อยู่ลึกเข้าไปในหุบเขา 20 กิโลเมตร ประมาณ 40 วันถึงจะได้รับการรักษา หลังจากนั้นก็มีทหารเข้ามา คนที่สามารถเดินได้ก็ได้ออกจากโรงพยาบาลแล้วกลับบ้านไป แต่เนื่องจากเกิดน้ำท่วมหนักทำให้เดินรถไฟไม่ได้ จึงพักที่กระท่อมแล้วค่อยไปถึงโอซากา โอซากากลายเป็นสถานที่พักผ่อนของผู้ป่วยที่อยู่ในโรงพยาบาล ผมขึ้นรถไฟแต่ละทิศทางจากโอซาก้าและถึงสถานีไซมะวันที่ 1 ตุลาคม

ด้วยสถานการณ์แบบนี้ ความน่าเวทนาที่ผมได้พบเจอบนเกาะฮิโรชิมะมีเพียงไฟที่กำลังมอดไหม้และเสียงของผู้คนที่กำลังโอดครวญ ผมไม่อยากรู้ถึงและไม่อยากคุยกับผู้คนขนาดนั้น ตอนนั้นผมสุขภาพแข็งแรงและปลอดภัย

(บทสัมภาษณ์วันที่ 8 มกราคม ค.ศ.1983)

## 11. คำบอกเล่าของคุณ D

(อายุในขณะนั้น 30 ปี เพศชาย อาศัยที่เมืองไซมะ)

### สร้างสันติภาพทางการทูตกับสหภาพโซเวียตดีกว่าผันตัวเป็นศัตรู

ประสบการณ์ที่ฮิโรชิมะของผมไม่ค่อยมีสิ่งที่จะเอามาเล่าได้มากนัก ผมอยู่ห่างจากจุดศูนย์กลางระเบิด 3.5 กิโลเมตร ไม่มีแผลถลอกแม้แต่รอยเดียว ไม่ได้รับผลกระทบจากสารกัมมันตรังสี จริงๆ แล้ว ผมเป็นที่คนสุขภาพดีคนหนึ่ง ผมได้รับสมุดบันทึกสุขภาพสำหรับผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณูที่แจกจ่ายมาให้ ถึงจะไปตรวจสุขภาพสองครั้งต่อปีก็ไม่เคยพบความผิดปกติ ทั้งลูกและหลานก็สุขภาพแข็งแรง ผมเกิดเดือนตุลาคม ปีไทโชที่ 3 (ค.ศ. 1914) เมืองไซมะ วันที่ 1 เดือนกรกฎาคม ปีโชวะที่ 19 (ค.ศ.1944) มีการเรียกเกณฑ์ทหารและผมอยู่ในหน่วยสื่อสารไร้สายประจำอ่าวเซโตะไนของฮิโรชิมะ ต้นสังกัดเดิมคือทหารกองหนุนเรือเดินสมุทรของเมืองมินามิ ผมอยู่กองทัพได้เพียง 1 ปี 2 เดือน แต่สอบผ่านข้อสอบแบบเลือกตอบจนได้เป็นสิบตรีกองประจำการ

วันที่ 6 สิงหาคม เป็นวันที่ท้องฟ้าโปร่งและอากาศร้อน ทหารอย่างพวกเราใช้โรงเรียนประถมนิโอะของเมืองนิโอะเป็นที่พักสำหรับทหาร พอดึกในคืนนั้นผมมารอเพื่อเข้ารับการตรวจร่างกายอีกครั้งอยู่ที่ชั้น 2 ของที่พักทหาร (อาคารเรียนโรงเรียนประถมนิโอะ) ซึ่งเริ่มให้เข้าตรวจได้ตั้งแต่ 9 โมง อันที่จริงก่อนที่จะได้เข้าเป็นทหารประจำการ ผมได้เสียนิ้วมือซ้ายไป 1 นิ้ว ตอนกำลังใช้เครื่องจักรของธุรกิจครอบครัว ดังนั้น แม้จะถูก

เกณฑ์ทหารเพื่อเข้าประจำการก็มีกำหนดการให้กลับบ้านได้เลย ดูเหมือนว่าจะรวบรวมทหารกองหนุนมากไปเลยทำให้ทหารเหลือเยอะนะครับ

ทั้งแสงและเสียงตอนที่ระเบิดตกลงมา ตัวผมไม่รู้เรื่องเลย รู้แค่ว่าตึกสันเหมือนเกิดแผ่นดินไหวและลมระเบิดดังฟุ้งตรงมาทางนี้ พอมองออกไปจากชั้น 2 ต้นไม้ทุกต้นก็สั่นไหวโอนเอนไปมา อาจเป็นเพราะสัณฐานของสัตว์ที่เกิดขึ้นอย่างฉับพลัน พวกเราจึงรีบไปซ่อนตัวใต้โต๊ะและเอาผ้าห่มที่วางอยู่ข้างๆ ขึ้นมาคลุมหัว ตกอยู่ในสภาพที่กระเจกหน้าตาต่างแตกปลิวกระจัดกระจายเป็นชิ้นเล็กๆ หล่นทะเลลุพาดตกลงมาจากบนหัวเป็นชิ้นๆ ผมว่าแค่ซ่อนตัวอยู่ใต้โต๊ะก็พอแล้ว พอลองออกมาดูตรงหลังคาก็เห็นว่ามันโค้งงออย่างกับงูเลื้อย และที่โชคดีเต็มๆ เลยก็คือในกองกำลังของพวกเราที่มีคนอยู่ประมาณ 100 นาย แทบจะไม่มีใครที่ได้รับบาดเจ็บร้ายแรง แต่คนที่อยู่ข้างนอกแค่ฝั่งที่โดนแสงฝั่งเดียวที่เหมือนจะได้รับบาดเจ็บ ตอนนั้นก็รู้สึกว่าจะระเบิดลูกใหญ่ตกลงมา ภายหลัง 4 ถึง 5 วันต่อมาถึงได้ยินเรื่องระเบิดปรมาณู

หลังจากนั้น คนที่เป็นพลทหารประจำเมืองมินามิก็อพยพมา และคนที่ร่างกายกลายเป็นเหมือนฝักหนึ่เข้ามาทุกๆ เย็น พวกเขาได้ไปพักที่หอประชุมและได้รับการปฐมพยาบาลเบื้องต้น ผมพยายามไม่เข้าไปใกล้ เพราะมันน่ากลัวจึงทำได้แค่นำน้ำมันไปให้ผู้ที่สัมผัสไฟไหม้ ตัวผมที่ยังเป็นมือใหม่ไม่มีทางที่จะปฐมพยาบาลเป็นหรอกครับ แพทย์ทหารรับหน้าที่ในการรักษา มีรับสมัครคนที่จะไปเก็บกวาดศพภายในเมืองและก็มีคนจากกองกำลังของเราไปด้วย มีคนที่ปรารถนาให้เงินเดือนเพิ่ม 2 เท่าและหวังว่าจะได้กินข้าวสวย เพราะผมกลัวเลยไม่มีทางไปอย่างเด็ดขาด ผมได้ยินว่า มีคนที่ไม่แล้วสัมผัสสารกัมมันตรังสีเป็นจำนวนมาก ผมคิดว่าโชคดีมากจริงๆ ที่ไม่ได้ไป

วันที่ 12 กันยายนผมออกมาจากจังหวัดอิโรชิมะ และกลับมาเมืองโซมะในวันที่ 14 ผมไปถึงโอซาก้าด้วยรถไฟบรรทุกสินค้า สถานีรถไฟอุเอโนะแออัดมาก พัสตุ ผ้าห่ม ข้าวและยาสูบของกองทัพ แยกชั้นหลังมาเท่าที่จะทำได้ ทำให้เป็นเรื่องที่ลำบาก

พอถึงบ้านผมก็คิดว่าไม่มีอะไรดีกว่าบ้านอีกแล้ว เพราะว่าเป็นอิสระ มันก็จริงอยู่ที่ถ้าเป็นทหารก็จะสามารถรับประทานอาหาร 3 มื้อและมีคุณภาพชีวิตที่ดีแน่นอน แต่มันไม่มีอิสระ ตอนกลางคืนก็ไม่สามารถนอนได้อย่างสบายใจ หลังจากกลับบ้าน ถึงแม้กินอาหารวันละ 1 มื้อก็ดี ใช้ชีวิตอย่างจนๆ ก็ได้ แต่ก็คิดว่าการมีอิสระเป็นสิ่งที่ดีที่สุดแล้ว

ผมคิดว่าทหารไม่ค่อยมีเหตุผล และก็เป็นอย่างพวกเหลวไหล เพื่อที่จะเป็นทหารหน่วยสื่อสารระดับ 3 ปกติจำเป็นต้องศึกษาประมาณ 3 ปี แต่ว่าพวกผมศึกษาแค่ 3 เดือน ผมเรียนเกี่ยวกับการสื่อสาร แต่ไม่เข้าใจเลย สัณฐานก็ไม่ได้ ไม่มีทางจำเรื่องแบบนั้นได้แน่ ด้วยสภาพแบบนี้ ผมคิดว่ากองทัพญี่ปุ่นไม่มีทางชนะสงครามได้ ญี่ปุ่นไม่มีทางยิ่งใหญ่ได้ ข้าราชการระดับสูง ถึงแม้จะเป็นข้าราชการก็ต้องเข้ารับการศึกษาในระดับมัธยมเรื่องนั้นถือว่าเป็นสิ่งที่ดี เรื่องของการถูกตบตีก็ไม่ดี แต่ข้าราชการระดับสูงที่เรียนแค่ระดับประถม คนพวกนั้นเป็นคนไม่ดีและพวกที่ไม่น่ายุ่งเกี่ยวกับเลย ผมคิดว่าคนที่ได้รับศึกษากับคนที่ไม่ได้รับศึกษามีความแตกต่างกันมาก คิดว่ากองทัพเป็นสถานที่ที่ดี ทำให้ได้เห็นธาตุแท้ของมนุษย์

สงครามและกองทัพอะไรนั่นเป็นสิ่งที่ผมไม่ชอบเลย ยิ่งไงผมก็ต่อต้านเรื่องของสงคราม ถ้าสงครามอาวุธนิวเคลียร์เกิดขึ้น ประเทศญี่ปุ่นจะล่มสลายไปโดยระเบิดปรมาณูสัก 1 หรือ 2 ลูก เหมือนกับตอนที่

สงครามกับสหภาพโซเวียต เราก็ทำอะไรไม่ได้เลย มีความแตกต่างทางด้านอำนาจของทหารมากเกินไป เพราะอย่างนั้นแทนที่จะเพิ่มอาวุธยุทโธปกรณ์เพื่อต่อสู้กับสหภาพโซเวียต เอาเงินนั้นไปใช้เพื่อการรักษาสันติภาพกับสหภาพโซเวียตดีกว่า ผมคิดว่าการใช้งบประมาณเพื่อสร้างสัมพันธที่ดีถือว่าเป็นทางเลือกที่ฉลาด

(บทสัมภาษณ์วันที่ 12 มกราคม ค.ศ.1983)

## 12. คำบอกเล่าของคุณ E

(อายุในขณะนั้น 18 ปี เพศชาย อาศัยที่เมืองโซมา)

### ลูกสาวถูกถอนหมั้นด้วยเหตุผล “เป็นลูกของผู้อาบรังสี”

ผมเกิดในปีโซมาที่ 2 (ค.ศ.1927) ที่นิคตาติ ณ เมืองโซมา ในตอนที่ระเบิดปรมาณูถูกทิ้งที่ฮิโรชิมา ผมเป็นทหารสื่อสารวัย 18 ปี และคิดว่าตัวเองคงเด็กสุดในบรรดาทหารของเขตโซโซที่ประสบภัยระเบิดปรมาณูแล้วละ ผมแทบจะลืมเรื่องเกี่ยวกับเรื่องระเบิดปรมาณูไปแล้ว

ผมเข้ากองทัพเรือครั้งแรกในฐานะทหารอาสาสมัคร อยู่ในหน่วยควบคุมการสื่อสารพิเศษในเขตโยโกสุกะตั้งแต่อายุ 15 จนถึง 17 ปี เป็นเวลาประมาณ 2 ปีครึ่ง ซึ่งในระหว่างนั้นก็มีการไปต่างประเทศด้วย ทุกคนในกองทัพเรือคิดว่าญี่ปุ่นจะพ่ายแพ้ทันทีที่สงครามแปซิฟิกเริ่มต้นขึ้น ในวันที่ 4 มีนาคม ปีโซมาที่ 20 (ค.ศ.1945) ช่วงที่ญี่ปุ่นใกล้จะแพ้สงคราม พวกเราจำนวน 20 นายที่ไม่มีเรือถูกย้ายไปยังกองกำลัง 16710 กองกำลังเสริมของเรือสื่อสารฮิโรชิมา

กองกำลังของพวกเราในฮิโรชิมาอยู่ที่เชิงเขาฮิยามะ ที่จริงแล้ว ผมไม่จำเป็นต้องได้รับการอบรมในฐานะของกองทหารสื่อสาร แต่เป็นเพราะว่าชื่อเรียกอาวุธของกองทัพพบกับกองทัพเรือจะแตกต่างกัน เช่น กองทัพบกจะเรียกปืนกลว่า "คิงจู" แต่ในกองทัพเรือจะเรียกว่า "คิจู" ดังนั้นผมจึงเข้ารับการอบรม 3 เดือนเหมือนกับทหารทั่วไป แต่ยังไม่ทันจบการอบรมดีวันที่ 6 สิงหาคมก็มาถึง

ตอนที่ระเบิดปรมาณูถูกทิ้งในวันที่ 6 สิงหาคม ผมกำลังเดินไปตามถนนเพื่อซ่อมบำรุงสายสื่อสารในโรงพยาบาลสภาอากาศญี่ปุ่นที่เมืองฮิโรชิมา ผมอยู่กับทหารสื่อสารอีก 3 นาย มีแสงสว่างสีขาวซีดเหมือนแสงจากการเผาผงแมกนีเซียมตอนถ่ายภาพ โชคดีที่ตอนนั้นผมอยู่หลังตึก จึงไม่ได้อาบรังสีความร้อนโดยตรง แม้จะไม่รู้สึกลึกลับจากแรงระเบิด แต่ทันใดนั้นร่างของผมก็เอนไปด้านหลังและถูกพัดปลิวไปบนถนน ไหลทั้งสองข้าง โดนกระแทกอย่างแรง มีแผลจากเศษกระจกแตกเพียงเล็กน้อยแม้จะอยู่ไกลจากศูนย์กลางการระเบิด 1,500 เมตร แต่ก็มีหลายคนโดนไฟคลอกบาดเจ็บสาหัสแม้ว่าจะอยู่ไกลจากพวกเรามาก แต่ผมบาดเจ็บเพียงเล็กน้อย

ทันทีที่พวกเรา 3 คนกลับไปถึงกองกำลังก็มีการอพยพกองร้อยที่ฮิยามะ ผมออกจากกองกำลังพร้อมกับผู้บาดเจ็บคนอื่นๆ และเข้ารับการรักษาที่โรงพยาบาลเนื่องจาก "รอยฟกช้ำและแผลเหวอะหวะทั่วร่างกาย" ถึงจะบอกว่าเป็นโรงพยาบาลก็เถอะ แต่ก็ยังเป็นโรงพยาบาลสนามที่ปรับปรุงจากโรงเรียนประถมขึ้นเป็นกรณีพิเศษ ผู้บาดเจ็บถูกส่งตัวเข้ารับการรักษาอย่างลำบาก ผู้บาดเจ็บถูกส่งตัวมาเรื่อยๆ ทำให้สถานที่แห่งนี้เต็มไปด้วยผู้บาดเจ็บที่ล้มทะลักออกมาจากห้องพัก ทุกคนต่างบาดเจ็บหนัก ผมที่ยังยืนและเดินไหว่นั้นเป็นผู้ป่วยที่ได้รับบาดเจ็บน้อยที่สุดแล้ว แต่ถึงอย่างนั้นผมก็เข้ารับการรักษานั้นจนถึงวันที่ 25 พฤศจิกายน กรณีที่คนตาย

2-3 คนจะเผาที่โรงพยาบาล หรือก็คือที่สวนของโรงเรียน เหมือนว่าถ้ามีจำนวนมากก็จะนำไปเผาที่บริเวณเชิงเขาอิริยามะ ดังนั้น ผมไม่ได้ออกจากเมืองอิโรชิมะแม้แต่ก้าวเดียว ก็เลยไม่รู้ว่าคุณภาพบ้านเมืองเป็นอย่างไรบ้าง

ตอนที่ผมออกจากโรงพยาบาลในเดือนพฤศจิกายน ทั้งเจ้าหน้าที่สถานีและเจ้าหน้าที่ตำรวจที่เกี่ยวข้องกับหน่วยสื่อสารต่างก็ได้สิทธิ์ให้กลับบ้านเกิดก่อนแล้ว ในหน่วยของผมจะถูกยุบในวันที่ 10 ธันวาคม ยกเลิกการเกณฑ์ทหาร และกองรักษาการณ์ได้ปลดประจำการให้กลับบ้านเกิดได้ในระยะเวลาหนึ่ง ทหารกองรักษาการณ์ต่อให้กลับบ้านได้ก็ควรเตรียมตัวให้พร้อมสำหรับการออกปฏิบัติงานตลอดเวลา ดังนั้นผมที่เป็นกองรักษาการณ์ แม้แต่ตอนนี้ก็ไม่รู้ว่าสถานการณ์ที่ต้องเตรียมพร้อมตลอดเวลาคืออะไร ล้อเล่นนะ ในตอนนั้นก็คิดตลอดว่าจะมีคำสั่งให้ออกไปปฏิบัติงานอีก จนวันที่ได้กลับเมืองโซมะคือวันที่ 25 ธันวาคม

เรื่องก็เป็นแบบนี้ ผมคนที่อาบรังสี แต่ไม่มีเรื่องที่จะคุยกับทุกคนเป็นพิเศษ อยู่ๆ ก็มีการติดต่อโดยตรงจากจังหวัดฟุคุชิมะ ด้วยเรื่องสมุดบันทึกสุขภาพสำหรับผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณู จึงได้ลงทะเบียนรับสมุดมา แม้ว่าจะอยู่ใกล้จุดศูนย์กลางระเบิดแต่ร่างกายกลับไม่เป็นอะไรเลย เพียงแต่ลูกสาวของผม พอถึงวัยที่ต้องออกเรือน แม้ตอนนี้จะอยู่บ้าน แต่พอมมีคนมาทาบทามขอแต่งงาน เมื่อรู้เรื่องที่ผมเป็นผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณู ก็ขอถอนหมั้นไปเสียหมด ถึงสองครั้ง นั่นเป็นเหตุผลที่สายเลือดของผมซึ่งเป็นผู้ประสบภัยต้องได้รับผลกระทบแย่ ๆ อย่างนั้นเหอ ผมเองก็ไม่ได้ชอบที่ตัวเองเป็นผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณู และด้วยความคิดแคบๆ อย่างนั้นลูกสาวของผมจะถูกขอแต่งงานหรือไม่ก็ไม่เป็นไร ทั้งตัวลูกสาวและตัวผมมันต่างก็ไม่ได้มีปัญหาสุขภาพ ดังนั้นในหนังสือรวมประสบการณ์จะประกาศชื่อผมก็ไม่เป็นอะไร เพราะผมไม่ได้คิดว่าการเป็นผู้อาบรังสีจะไม่มีจุดยืนในสังคม

(บทสัมภาษณ์วันที่ 2 พฤษภาคม ค.ศ.1983)

13. **คำบอกเล่าของคุณ F** (อายุในขณะนั้น 23 ปี เพศชาย อาศัยอยู่ที่เมืองโซมะ)

**ใบปลิวโฆษณาของอเมริกา “อพยพไปเกียวโตกันเถอะ “**

ผมเกิดที่เมืองโซมะในปีไทโชที่ 9 (ค.ศ. 1920) เมื่อวัย 23 ปี ผมได้สัมผัสกับกัมมันตภาพรังสีในขณะที่อยู่ในกองทัพที่อิโรชิมะ

ในตอนแรก ผมเข้าร่วมกองกำลัง ที่ 23 ของกรมทหารราบที่ 16 ชิบาตะ ในจังหวัดนิงาตะ และถูกย้ายไปประจำอยู่กองทหารราบนาวิกโยธินที่ประเทศจีน 2 ครั้ง บริเวณตอนกลางของจีนแถวๆ เมืองชิงเต่าและเมืองสวีโจว

ผมย้ายไปอิโรชิมะ ในฤดูใบไม้ผลิ ปีโชวะที่ 18 (ค.ศ. 1943) กองกำลังของพวกเราตั้งอยู่บนเกาะเล็ก ๆ ที่ชื่อว่าเกาะเอโนจิมะในทะเลในเซโตะ และได้รับการฝึกฝนโดยตรงจากกัปตัน กองกำลังของพวกเราตั้งอยู่ในพื้นที่ที่ดูเหมือนเป็นบ้านพักตากอากาศหรือคฤหาสน์ของเศรษฐีที่ร่ำรวยเป็นอันดับ 2-3 ในอิโรชิมะ

ผมอยู่ที่นั่นประมาณครึ่งปี จากนั้นจึงย้ายไปยังสถานที่ที่เรียกว่าทันนะ อยู่ทางตะวันออกเฉียงใต้ของเมืองอิโรชิมะ ห่างจากจุดศูนย์กลางที่โดนระเบิดไปประมาณ 3,800 เมตร ผมคิดว่าที่ทันนะน่าจะมีทหารราว ๆ

1,200 ถึง 1,300 นาย ส่วนยศของผมคือสิบโท และเนื่องจากกองกำลังอยู่ใกล้ทะเล จึงมีเรือดำน้ำคอยเฝ้าระวังพื้นที่บริเวณผิวน้ำ

วันที่ 6 สิงหาคมเป็นวันจันทร์ มีการออกคำเตือนการโจมตีทางอากาศเมื่อเวลา 05.00 น. และถูกยกเลิกเมื่อเวลา 06.00 น. เปลี่ยนเป็นสัญญาณเตือนภัยพิบัติแทน แล้วมันก็น่าจะถูกยกเลิกไปตอนประมาณ 07.30 น.

ถ้าผมจำไม่ผิด ระเบิดปรมาณูถูกทิ้งในเวลา 08.15 น. ขณะนั้น พวกเรากำลังทำกายบริหารชั้นพื้นฐานตอนเช้าอยู่ที่ลาน วันนั้นเป็นวันที่แดดจ้า ไม่มีเมฆ และทุกคนก็เปลือยท่อนบน ในตอนที่ระเบิดปรมาณูระเบิดนั้น ผมกำลังวิดพื้น และทันใดนั้นก็มียังเสียงดังโครมครามและแสงสว่างวาบ แม้จะเป็นเวลากลางวันก็ส่องสว่างราวกับดอกไม้ไฟ เพราะเป็นตอนที่ผมกำลังวิดพื้นอยู่ ใบหน้าของผมจึงจ๋ว้าง และรู้สึกราวกับว่าที่พื้นนั้นส่องแสง ลมจากแรงระเบิดพัดเอาเสื้อผ้าที่ผมพับวางไว้ข้าง ๆ ปลิวกระจายไปหมด ที่น่าตกใจคือ แม้แต่ปืนหนัก ๆ ก็ยังถูกพัดปลิวไปด้วย

โชคดีที่ทั้งตัวผมและทหารคนอื่นรอบๆ ได้รับบาดเจ็บเพียงเล็กน้อย ดูเหมือนว่าคนที่เป็นเวรทำอาหารจะได้รับบาดเจ็บ หลังจากนั้น ผมก็คิดว่าดินะที่ทำท่าวิดพื้นอยู่ ว่ากันว่า ระเบิดปรมาณูถูกทิ้งโดยเครื่องบินทิ้งระเบิดบี 29 และถูกคุ้มกันโดยเครื่องบินล็อกฮีดอิลล่า แต่ผมกลับไม่ได้ยินแม้แต่เสียงเครื่องบิน สิ่งที่คิดว่าแปลกคือ ทหารที่มองจากหลังคาค่ายทหารเห็นเครื่องบินทิ้งระเบิดบี 29 และรายงานว่าเป็น "เครื่องบินพันธมิตรลำหนึ่ง" ผมคิดว่าพวกเขาเข้าใจผิดว่ามันเป็นเครื่องบินพันธมิตรเพราะไม่มีการส่งสัญญาณแจ้งเตือนการโจมตีทางอากาศ

หลังจากนั้นไม่นาน เราก็ก้าวเข้าไปในหลุมหลบภัยภายในกองทัพทันที หลุมหลบภัยที่ผมอยู่นั้น ใหญ่พอที่จะจุคนได้ประมาณ 50 คน ผมหลบอยู่ที่นั่นจนถึงประมาณบ่ายสองโมง ได้ยินเสียงดัง ปัง ปัง อยู่หลายครั้ง เสียงเหมือนถึงน้ำมันระเบิด ผมยังจำเมฆรูปเห็ดได้ชัดเจน มันเป็นเมฆสีขาวสะอาด ฟุ้งด้วยควันที่เหมือนจะสามารถดูดผมเข้าไปอยู่ในนั้น ราวกับฝูงผึ้งบินเป็นฝูงใหญ่ล้อมรอบนางพญาผึ้ง มันเป็นเมฆที่ให้ความรู้สึกอย่างนั้น ผมรู้สึกว่ามันเป็นสีชมพู แต่มันก็เป็นเมฆที่ดูสวยดี

ราวๆ บ่ายสองโมง ขนมหันปัง (ขนมหิสกิต) แบบกระป๋องที่เรียกว่า "คันมินโป" ก็ถูกส่งมาให้ และเราได้รับแจ้งว่าให้ทหารที่ไม่ได้รับบาดเจ็บออกมาช่วยเหลือ ในเวลานั้น ประชาชนอิโรชิมะทั่วไปจำนวนมากก็มาที่หน่วยของเราเพื่อขอความช่วยเหลือ อย่างไรก็ตาม สภาพของพวกเขานั้นแย่มาก มีทั้งผู้ที่ถูกไฟคลอก, ผู้ที่ร่างกายละลาย และผู้ที่ได้รับบาดเจ็บ เป็นสภาพที่น่าหดหู่มากจนไม่สามารถอธิบายออกมาเป็นคำพูดได้ สิ่งที่เป็นภาพติดตาผมมากที่สุด คือ เด็กผู้หญิงวัยมัธยมปลาย 5-6 คนสวมเสื้อเชิ้ตบาง ๆ กับกางเกงขาสั้นที่เหมือนจะเป็นกางเกงพละ และถูกไฟคลอกอย่างหนัก พวกเธอถามว่า "หนูจะรอดตายไหมคะ" แต่ผมก็ทำได้แค่พูดปลอบใจพวกเธอเท่านั้น

เพียงแค่สองวันหลังจากนั้น ผมออกไปเดินแทบจะทั่วเมืองอิโรชิมะเพื่อให้ความช่วยเหลือ สิ่งที่เกิดขึ้นอยู่ในใจ คือ หลายคนพูดว่า "อยากดื่มน้ำ" พวกเขาก็ต้องบวมตาย หลิงซุราก็เสียชีวิตเหลือแค่กระดูกกับหนึ่งรถไฟในเมืองก็เหลือแค่โครงเหล็ก แม้จะบอกว่าเป็นการช่วยเหลือ แต่ก็เหมือนกับเป็นการจัดการร่างของ

ผู้เสียชีวิต ผู้เสียชีวิตถูกห้ามไปที่ทำงานกันคลื่น เมืองอุจิ้นะ และในตอนกลางคืน เราจุดไฟเผาในตอนที่น่าสง  
ก่อนหน้านั้นก็ได้เขียนชื่อ-นามสกุลและที่อยู่เอาไว้ อัฐิถูกเก็บรักษาไว้ตรงตามชื่อเจ้าของ จึงมีบางคนมารับอัฐิไป  
แต่เพราะทั้งพ่อแม่และลูกส่วนใหญ่ต่างอยู่กระจัดกระจายและอาบสารกัมมันตรังสี ร่างที่มีคนมารับไปก็ถือว่าดี  
แล้ว ผมประหลาดใจที่เห็นจำนวนเงินมากถึง 600 เยนในกระเป๋าของพนักงานรถไฟอายุ 21 ปีที่เสียชีวิตในโอ  
ซากา ในสมัยนั้นเงิน 600 เยนก็ถือว่ามืบลค่ามาก ทำไมเขาถึงพกเงินขนาดนั้นไว้กันนะ

3 วันต่อมา ผมได้รับมอบหมายให้ดูแลผู้บาดเจ็บที่ค่ายพักทหารของผมถึงจะบอกว่าเป็นค่ายพักทหาร  
แต่ก็ใช้โรงเรียนทั้งสภาพแบบนั้นเลย ผมปูผ้าห่มรองรับผู้บาดเจ็บจำนวนมากที่อาคารเรียนไม้ใหญ่สองชั้น แต่ก็  
มีผู้เสียชีวิตประมาณ 800 คนในหนึ่งวัน ไม่ว่าจะแพทย์ทหาร พยาบาลต่างก็อยู่กันมาก แล้วก็เหมือนว่าจะมียา  
ด้วย

ผมยังคงจำเรื่องราวของวัยรุ่นวัย 19 ปี ที่อาศัยอยู่ใกล้กับค่ายพักทหารและทำงานอยู่ในที่ว่าการ  
อำเภอเมืองอิโรชิมะ ผมได้ยินมาว่าวัยรุ่นคนนั้นได้สัมผัสกับกัมมันตภาพรังสีตอนที่ทำงานอยู่ริมหน้าต่างของ  
ที่ว่าการอำเภอ วินาทีที่ได้รับรังสีความร้อนนั่นเอง “ร้อน” เขาได้เอามือทั้งสองข้างมากดศีรษะเอาไว้แต่ก็มี  
เพียงแค่ส่วนที่เอามือกดเอาไว้ที่ยังมีเส้นผมหลงเหลืออยู่ แล้วระหว่างที่กำลังเล่าเรื่องราวของกัมมันตภาพรังสี  
อยู่นั่นเอง จู่ ๆ ก็ลุกขึ้นพรวดแล้วพูด “ร้อนร้อนร้อน” แล้วก็ออกไปเสียแล้วผมได้ยินว่าหลังจากที่โดน  
กัมมันตภาพรังสีก็เหมือนสมอจะแปลกๆ ไปเหมือนอยู่ในสภาพคนเป็นโรคประสาทตลอดเวลา ผมไม่สามารถ  
ลืมเรื่องราวของคนแบบนั้นได้เช่นกัน

หลังจากนั้น เนื่องจากผมต้องอยู่จัดการงานที่ค้างอยู่ก่อน เลยได้กลับบ้านเกิดตอนปลายเดือนกันยายน  
โดยนั่งเรือจากอิโรชิมะไปยังโอซากา เรือลำนั้นเป็นของภาคเอกชนแต่เหมือนจะใช้น้ำมันจากการยึดหรือจากที่  
หน่วยทหารให้มา ผมกลับจากโอซากาด้วยรถไฟ คนที่เดินทางมาด้วยกันจากจังหวัดมิยาจิและจังหวัดนิงาตะก็  
ไปแยกกันที่เมืองโตเกียว รถไฟน่าจะตรงไหนก็เบียดกันแน่นไปหมด

ร่างกายของผมนั้น ตอนที่สัมผัสกับกัมมันตภาพรังสีก็มีความรู้สึกคลื่นไส้อาเจียน แล้วก็ท้องร่วงมา  
ตลอดหนึ่งสัปดาห์ แต่หลังจากนั้นก็ไม่มีอะไรผิดปกติ อาจจะเหนื่อยง่ายเล็กน้อย เป็นหวัดง่ายหรือเปล่าผมเองก็  
ไม่รู้ ผมได้รับสมุดบันทึกสุขภาพสำหรับผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณูจากการแนะนำของพระตระกูลโซมะมา  
ในการตรวจครั้งที่สองก็ไม่มีอะไรผิดปกติ ลูกทั้งสิ้นคนกับหลานก็ยังสุขภาพดีทุกคน

แล้วก็เรื่องนี้เป็นเรื่องที่ไม่ค่อยได้เล่าสักเท่าไร ช่วงประมาณ 15 วันก่อนระเบิดปรมาณูจะตกลงที่อิโรชิ  
มะ มีใบปลิวกระจัดกระจายออกมาจากเครื่องบินของอเมริกา คิดว่าเป็นช่วงประมาณเช้าตีสี่ มันทวีไวท์และ  
ส่องแสงอย่างสวยงามจนตกลงมาบนพื้นดิน ดูเหมือนว่ากองทัพตำรวจจะมาเก็บรวบรวมแต่ที่ผมก็ได้หยิบ  
ใบปลิวชิ้นขึ้นมาลองอ่านดู ใบปลิวถูก พิมพ์ด้วยตัวอักษรสีดำที่สวยงามและเขียนเอาไว้ว่า “ถ้าญี่ปุ่นยังคงทำ  
สงครามต่อไปทั้งแบบนี้อยู่ ชาวญี่ปุ่นจะต้องกลายเป็นทาส เพราะฉะนั้นเลิกทำสงครามเสีย เราจะทำการโจมตี  
ที่อิโรชิมะ ชาวเมืองอิโรชิมะจงอพยพไปที่เมืองเกียวโตเสีย” ทำไมถึงบอกว่า “จงอพยพไปเกียวโต” กันละ จะ  
บอกว่าที่เกียวโตปลอดภัยหรือ ไม่เข้าใจเลย ใบปลิวถูก พิมพ์ไว้แค่ที่ด้านหน้าและใหญ่ประมาณไปรษณียบัตร  
นั่นสินะ มันเหมือนกับกระดาษแข็งสีขาวที่ใช้เป็นการ์ดเชิญงานแต่งงานในปัจจุบันพอดีเลย

อีกทั้ง นักศึกษามหาวิทยาลัยที่อยู่หน่วยเดียวกันตอนนั้นก็เคยพูดไว้ตั้งแต่ก่อนหน้านี้นี้ว่า “สงครามนี้เราจะเป็นฝ่ายพ่ายแพ้” ผมได้ยินมาว่าทางทหารเรื่อก็รู้อยู่แล้วว่าแพ้ จึงมีคนทีขอลาหยุดกลับบ้านเกิด ในตอนที่สัญญาณเตือนภัยทางอากาศดังขึ้นเนื่องจากเครื่องบินของอเมริกามาถึงน่านฟ้าของฮิโรชิมาะนั้น เครื่องบินรบของญี่ปุ่นก็ไม่ออกปฏิบัติการ แม้การสู้รบก็ไม่ทำ ปกติก็บินตอนที่ไม่มีอะไร ชาวเมืองทั่วไปก็พูดทำนองว่า “อะไรกัน เครื่องบินญี่ปุ่น เผลอกับเครื่องบินอเมริกาไม่ได้หรือ” สำหรับพวกเราที่ใช้เต็มที่ได้แค่อาวุธอย่างปืนไรเฟิลก็คงทำอะไรต่อเครื่องบินอเมริกาที่ลำใหญ่ขนาดนั้นไม่ได้หรอก มันไม่ใช่คู่ต่อสู้ที่จะสู้ได้ด้วยคนที่แค่การลองฝึกใช้ทอกไม้ไฟหรอกนะ

หลังจากที่ผมปลดประจำการที่เมืองโซมา เพราะผมเป็นลูกชายคนที่สอง จึงช่วยงานที่บ้านเกิดและนาข้าวในบริเวณใกล้เคียงซึ่งพึ่งยับเยิน ในระหว่างนั้นผมก็สามารถหาที่ดินของตัวเองได้ภายใต้กฎหมายที่ดินเพื่อเกษตรกร ผมไม่มีเงินเลยแม้แต่แดงเดียว จึงไปกู้เงินและจ่ายคืนทีละน้อยงวดละ 2,000 เยนเป็นรายเดือน หลังจากนั้นผมได้สร้างกระท่อมหลังหนึ่งและมีภรรยา ในช่วงประมาณ ปีโซวะที่ 30 (ค.ศ.1955) มีการเคลื่อนไหวเพื่อออกกฎหมายการสงเคราะห์ผู้รอดชีวิตจากระเบิดปรมาณูเพื่อให้ผู้ที่สัมผัสสารกัมมันตภาพรังสีสามารถทำงานและรับการรักษาได้อย่างไร้กังวล มีตำรวจถึง 3 นายมาที่บ้านผมและสอบถามอะไรหลายๆอย่าง

ในปีโซวะที่ 28 (ค.ศ.1953) มีการก่อตั้งกลุ่มผู้สัมผัสกัมมันตภาพรังสีที่อาศัยอยู่ในจังหวัดฟูกูชิมะถึง 280 คนในเมืองโคริยามะ ผมได้รับเลือกให้เป็นรองประธานในตอนนั้น และประธานก็คือคุณผู้หญิงที่เป็นภรรยาของนายพลกองกำลังป้องกันตนเอง อย่างไรก็ตาม ด้วยแรงกดดันจากฝ่ายขวาสามีของประธานจึงถูกโยกย้ายไปทำงานที่ฮอกไกโด และภรรยาที่เป็นประธานเองก็ไปที่ฮอกไกโดด้วยเช่นกัน ทำให้ก็ไม่อาจดำเนินกิจกรรมได้เหมือนเดิม เป็นเรื่องที่ย่ำแย่จริงๆ อีกทั้งการเคลื่อนไหวของกลุ่มผู้สัมผัสกัมมันตภาพรังสีเองก็กลายเป็นเรื่องการเมืองขึ้นเรื่อยๆ แนวคิดที่ออกมาของแต่ละพรรคก็แตกต่างกัน กลายเป็นเรื่องที่ขัดแย้งกัน อย่างเช่นการสนับสนุนการทิ้งระเบิดปรมาณูของสหภาพโซเวียต ซึ่งตัวผมไม่ชอบเลย ผมเองก็ออกมาจากการเคลื่อนไหวแล้ว ก่อนหน้านี้นี้ผมเองในฐานะตัวแทนจังหวัดได้เข้าร่วมการประชุมโลกเพื่อต่อต้านระเบิดปรมาณูและระเบิดไฮโดรเจนสองครั้งในฮิโรชิมา ผมคิดว่าเราควรเรียกร้องถึงความสงบสุขทั้งที่อเมริกา สหภาพโซเวียต หรือทุกๆ ประเทศ ผมคิดว่าวัตถุประสงค์ที่ยิ่งใหญ่ที่สุดในการเคลื่อนไหวคือความพยายามไม่ให้เกิดสงครามที่น่าหดหู่เวทนา หรือไม่ควรมีการใช้ระเบิดปรมาณูแบบนี้ซ้ำอีกเป็นครั้งที่สอง

(บทสัมภาษณ์วันที่ 29 พฤษภาคม ค.ศ.1983)





#### 14. คำบอกเล่าของคุณ G

(อายุในขณะนั้น 13 ปี เพศชาย ปัจจุบันพำนักอยู่เมืองฮารามาจิ)

ระเบิดปรมาณูที่ปล่อยลงที่อิโรชิมะบ้านเกิดของผม

ราวกับการหว่านเมล็ดข้าวลงบนพื้นดิน มองดูเรื่องราวที่เกิดขึ้น ขุดได้เพียงกระดูกคน

ผมเกิดที่เมืองอิโรชิมะ แต่อาศัยอยู่ในเกาหลีตอนที่มีการทิ้งระเบิดปรมาณู ดังนั้นผมจึงไม่ได้มีประสบการณ์เรื่องการสัมผัสกับมันตภาพรังสีโดยตรง แต่ก็รู้ว่าเกิดอะไรขึ้นหลังจากเดือนมีนาคมของปีถัดไป หลังจากการทิ้งระเบิดดังนั้นผมเลยจะพูดถึงเรื่องนี้

บ้านของผมอยู่ในทางตะวันตกของเมืองอิโรชิมะ เป็นสถานที่ที่เรียกว่าฟูโรเอะ บ้านของผมติดอยู่กับทะเลตอนเด็ก ๆ ผมเคยจับปูจับแมลงปอ และก็ยังเคยไปซื้อของกับพ่อที่ห้างสรรพสินค้าฟูคยะ

ตอนที่ระเบิดปรมาณูถูกทิ้งลงในวันที่ 6 สิงหาคมคุณยายของผมอยู่คนเดียวในบ้าน โชคดีที่คุณยายอยู่บนภูเขาในเวลานั้น จึงรอดชีวิตมาได้ แต่มีลมร้อนที่พัดแรง จนสงสัยว่า “เกิดอะไรขึ้น” อย่างไรก็ตาม เมื่อกลับถึงบ้าน กำแพงพังลง กระจกทุกบานแตกหมด และกระเบื้องผนังหลังคาก็ยังได้รับความเสียหายอย่างมาก ตัวบ้านนั้นอยู่ในเงาของภูเขา ดังนั้นก็เลยไม่ถล่มลงมา เพื่อนบ้านก็ได้บอกอีกด้วยว่าจะมาช่วยซ่อมหลังคาให้เพื่อป้องกันน้ำรั่วในวันฝนตก

พ่อของผมเป็นครูในโรงเรียนที่เกาหลี ดังนั้นผมจึงได้ไปที่เกาหลีกับครอบครัวตอนที่อยู่ชั้นประถมศึกษาปีที่ 2 เมื่อสงครามสิ้นสุดลง ผมอายุสิบสามปี เรียนอยู่ชั้นมัธยมศึกษาตอนต้นปีแรก ผมสามารถกลับไปญี่ปุ่นได้ด้วยความช่วยเหลือของพวกลูกศิษย์ชาวเกาหลีของพ่อ

เจ็ดเดือนหลังจากทิ้งระเบิดผมกลับไปอิโรชิมะในเดือนมีนาคม โหวะที่ 21 (ค.ศ.1946) เพื่อนของผมหลายคนเสียชีวิต และญาติอีกสองคนก็เสียชีวิตในเหตุระเบิดครั้งนี้เช่นกัน ยิ่งไปกว่านั้นนักเรียนมัธยมต้นโรงเรียนเทศบาลที่อายุเท่ากันได้ถูกระเบิดปรมาณูในตอนที่กำลังระดมนักเรียนที่อยู่ใกล้กับสะพานซารุฮาชิที่ห่างจากศูนย์กลางประมาณ 1.8 กิโลเมตร และส่วนใหญ่เสียชีวิต เพื่อนร่วมชั้นและเพื่อนของผมเสียชีวิตในเหตุระเบิดปรมาณู แต่ที่ผมรอดชีวิตได้ก็เพราะว่าผมอาศัยอยู่ที่เกาหลี ดังนั้นผมจึงรู้สึกเศร้าอย่างบอกไม่ถูก การเดินผ่านบ้านเพื่อนที่เสียชีวิตในละแวกนั้น เป็นสิ่งทรมานมากที่สุด ถ้าได้เจอกับครอบครัวเพื่อนที่เสียชีวิตละก็พวกเขาอาจจะพูดว่า "ดีจังเลยนะ ที่เธอยังมีชีวิตอยู่ ลูกชายของป้า..." คงจะพูดอะไรแบบนั้นออกมาแน่ๆ เลย เพราะแบบนั้น ทั้งที่กลับบ้านตัวเองแท้ๆ แต่กลับต้องคอยกลับบ้านตึกๆ เพราะกลัวสายตาของผู้คนที่มองมา

แม้แต่ที่หน้าบ้านของผมก็มียุคนจำนวนมากที่หนีจากการทิ้งระเบิดมาจากใจกลางเมืองอิโรชิมะและล้มตายลงที่ข้างหน้ากัน ดูเหมือนคุณยายจะทนไม่ได้ที่จะเห็นมัน ดังนั้นเธอจึงตัดต้นไม้จากภูเขาและเผาพวกศพประมาณเจ็ดศพในทุ่ง เธอบอกว่ามันลำบากเพราะกระดูกเผาไม่ได้หมด

หลังจากกลับมาที่อิโรชิมะ ผมก็เข้าเรียนชั้นมัธยมศึกษาเข้าไป 1 ปี มันเป็นโรงเรียนมัธยมต้นที่มีชื่อว่าอิโรชิมะไดนิจึ อาคารเรียนยังอยู่ในสภาพทรุดโทรม ผมจึงต้องเรียนกลางแจ้ง มีการทำความสะอาดซากปรักหักพังของอาคารเรียน และเรื่องที่ไม่มีความหวังเลยคือการที่มิงานที่ต้องขุดซากศพจากสนามขึ้นมา นั่นเป็นอะไรที่เลวร้ายมาก ว่ากันว่าร่างกายของผู้เสียชีวิตถูกรวมไว้ด้วยกันที่สนามจากนั้นก็เผาและถูกฝังไว้ทั้งอย่างนั้น) อย่างไรก็ตาม ก็ไม่รู้เลยว่าศพเหล่านั้น ถูกฝังไว้บริเวณไหน เพราะอย่างนั้นก็เลยหว่านเมล็ดข้าวสาลี

ไปทั่วหน้าดิน และในที่สุดเมล็ดข้าวก็จะงอกงาม ซึ่งหมายความว่าจุดที่ผลผลิตมากจะมีกระดูกฝังอยู่ในนั้น ในฤดูใบไม้ผลิปีโชวะที่ 22 (ค.ศ.1947) นักเรียนสองห้องเรียนรวมจำนวน 80 คน ได้ช่วยกันขุดศพขึ้นมา เด็กๆ แต่ละคนได้รับถุงมือ ไม้ขุด และพลั่วขนาดเล็กของทางกองทหารอเมริกาแจกให้ โดยเริ่มจากเกี่ยวข้าวก่อน แล้วก็ขุดดินลึกลงไปประมาณ 70 เซนติเมตร จากนั้นก็ทำสัญลักษณ์ไว้ตรงต้นข้าวที่เพิ่งออกรวง เราได้พบจุดที่เคยมีการเผาศพ หรือก็คือสถานที่ที่รวมเถ้ากระดูกของผู้เสียชีวิตเอาไว้อยู่ 2 ที่ และมีกระดูกไหล่ออกมาจำนวนมาก ว่ากันว่ามึร่างที่ถูกเผาเป็นหมื่นคนเลยทีเดียว ช่างในนั้นมีทั้งกระดูกที่มีหนังติดอยู่ และเส้นผมอยู่จำนวนมาก มันแปลกมากที่ไม่มึกลิ่นอะไรเลย มีรถบรรทุกมาขนไป เหมือนว่าจะมีประมาณ 2 คัน

อย่างไรก็ตาม ระหว่างที่ทำงานนั้นมีเพื่อนร่วมชั้นเรียนที่ขุดกระดูกของผู้เสียชีวิตโดยไม่ใส่ถุงมือ และหลังจากนั้นเนื่องจากสารกัมมันตรังสีตกค้างนั้น ทำให้เพื่อนห้องเดียวกัน 2 คนจาก 40 คนต้องเสียชีวิตไปบนเพื่อนสองครั้ง อาบรังสีสองครั้งสินะ ตอนรวมตัวตอนเช้าก็ล้มลงเพราะเป็นโรคลอहितจาง แล้วก็เสียชีวิตในครึ่งปีหลัง เพื่อนห้องเดียวกันก็พูดๆ กันว่า “ต่อไปเป็นตาของแกแล้ว” และมันทำให้ผมรู้สึกไม่สบายใจมากๆ หลังจากการขุดเสร็จสิ้นก็ถูกทาง ABCC<sup>18</sup> บังคับให้เข้ารับการตรวจร่างกายมาเรื่อยๆ ปีละ 2 ครั้งจนเรียนจบมัธยมปลายเลย หลังจากนั้นทางโรงพยาบาลสภากาชาดก็คอยดูแลอย่างเอาใจใส่และคอยตรวจร่างกายให้มาตลอด แต่ว่าตัวผมเองก็รู้สึกเหมือนว่าเป็นหนูทดลองอยู่อย่างไรวางนั้น และความรู้สึกกังวลที่ว่าตนเองนั้นสัมผัสกับระเบิดปรมาณูมาเป็นเวลานานก็ไม่หายไป โชคดีที่จนถึงตอนนี้ผมไม่มีอาการผิดปกติใดๆ

ในช่วงมัธยมต้นก็มีเรื่องหนึ่งที่ทำให้ผมรู้สึกประทับใจอยู่ นั่นก็คือเรื่องที่มีการจัดงานนิทรรศการภาพถ่ายระเบิดปรมาณูที่ถ่ายโดยชาวเมืองในงานโรงเรียนนั่นเอง มีรูปของผู้อบสารกัมมันตรังสีอยู่ 20-30 รูปมันเป็นรูปที่ดูสดใหม่และน่าสลดใจกว่างานนิทรรศการภาพถ่ายในสมัยนี้กว่าเป็นไหนๆ กลุ่มคนที่กลับมาจากการฝึกนักบินนาวิกโยธินเป็นผู้จัดงาน และผมเองก็ได้รับฟิล์มที่ล้างแล้วจากชาวเมืองที่เป็นผู้ถ่ายรูปด้วย สถานที่จัดงานเป็นศูนย์วัฒนธรรมที่อยู่ใกล้ๆ โดมปรมาณู (ที่ตอนนี้เป็นตึกที่อยู่แถว ๆ สนามเบสบอลที่ฮิโรชิมา) คนทั่วไปก็มาชมงานเช่นเดียวกัน แต่พอมาวันที่สามก็ได้พบกับสารวัตรทหาร และพวกเขาที่มาอีกรูปที่อยู่ในงานนิทรรศการไป ได้ยินมาว่าพวกเขาเผารูปทั้งหมดทิ้งด้วย ทั้งฟิล์มรูปของผมนเองก็ถูกยึดไป ทั้งของครูใหญ่เอง ทำให้ผู้คนที่ไม่รู้ผมมาต้องลำบากไปด้วยเพราะรูปถูกเอาไปหมด ถึงสารวัตรทหารจะใส่ชุดธรรมดา แต่ก็น่ากลัวอยู่เหมือนกัน

เมืองฮิโรชิมาถูกทำลายจนไม่เหลือ ถึงขนาดที่ว่าผมมองทอดสายตาออกไปเห็นสถานีรถไฟฮิโรชิมาที่ห่างจากบ้านไปตั้ง 5 กิโลเมตรได้โดยไม่มีตึกมาขวางกั้นเลย ผมเลยรู้ว่ารถไฟไอน้ำเริ่มวิ่งออกจากฮิโรชิมาไปจนถึงสถานีโคอิ จำได้ว่าตึกที่เหลืออยู่ก็จะมีโดมปรมาณู ห้างสรรพสินค้าฟุคุยะ ธนาคารสุมิโตะโมะ ร้านนาฬิกาชิโมะมูระ แล้วก็โรงพยาบาลสภากาชาด รวมเป็น 5 ที่ สมัยก่อนผมเคยปีนโดมปรมาณูที่ตอนนั้นเป็นเพียงซากปรักหักพังเล่นไปจนถึงยอดบนสุดด้วย ก็มันเป็นแค่ตึกที่ผุพังแล้วนี่นะ

สำหรับผมแล้วคิดว่าการรณรงค์ต่อต้านระเบิดปรมาณูและห้ามใช้ระเบิดไฮโดรเจนในปัจจุบันนั้นเป็นเรื่องที่สำคัญแล้วก็เป็นการรณรงค์ที่จำเป็น แต่ว่าการจัดงานใหญ่ที่ฮิโรชิมาไม่ว่าอย่างไรก็ไม่อยากให้อัดเลย มันดู

<sup>18</sup> The Atomic Bomb Casualty Commission (ABCC) องค์กรของสหรัฐอเมริกาที่จัดตั้งขึ้นเพื่อสำรวจข้อมูลผู้รอดชีวิตจากระเบิดปรมาณูที่ฮิโรชิมาและนางาซากิ ในค.ศ.1945

ครึกครื้นเกินไปราวกับว่าเป็นงานเทศกาลอย่างนั้น ผมเองก็คิดว่างานที่จัดควรจะมีถึงจิตใจและความรู้สึกที่แท้จริงของผู้อบสารก็มันตรึงสี่ด้วย ผมคิดว่าอดีตนายกเทศมนตรีชื่อคุณฮามานอนั้น คำนึงถึงความรู้สึกของผู้อบสารก็มันตรึงสี่เป็นอย่างดี

(บทสัมภาษณ์วันที่ 19 กันยายน ค.ศ.1983)

## 15. คำบอกเล่าของคุณ H

(อายุในขณะนั้น 25 ปี เพศชาย อาศัยอยู่ที่เมืองโซมะ)

**ผมประสบเหตุการณ์การทิ้งระเบิดสองครั้งซ้อนทั้งที่อิโรชิมะและนางาซากิทำให้ใบหน้าของผมบิดเบี้ยวไป**

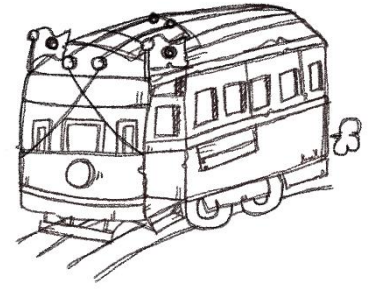
ผมเกิดที่เมืองโซมะในปีไทโชที่ 9 (ค.ศ.1920) ในกรณีของผม ผมได้สัมผัสประสบการณ์การทิ้งระเบิดทั้งสองที่คือที่อิโรชิมะและนางาซากิ พุดได้ว่าเป็นผู้ประสบเหตุการณ์การทิ้งระเบิดสองครั้งซ้อน

เมื่อตอนที่ยังหนุ่มผมทำงานในโรงงานอุตสาหกรรมเครื่องจักรที่โตเกียวร่างกายของผมมีร่างกายแข็งแรงไม่เหมือนกับตอนปัจจุบัน ผมถูกเรียกตัวไปเกณฑ์ทหารและถูกบรรจุเข้าเรือรบ “จุนโย” ของหน่วยกองบินนาวิกโยธินสี่กษะ จากนั้นในเดือนมกราคม ปีโชวะที่ 16 (ค.ศ.1941) ผมก็ได้เข้าร่วมหน่วยนาวิกโยธินของโยโกสุกะและได้เดินทางไปทีสิงคโปร์, มะนิลา, เกาะทรัค, หมู่เกาะอะลูเซียน ในตำแหน่งช่างซ่อมบำรุงเรือรบ ผมได้เข้าร่วมสงครามครั้งที่ 1 ครั้งที่ 2 และครั้งที่ 3 สงครามแปซิฟิกใต้ (รู้จักกันในนาม Operation A) หน้าที่ไหนล้วนแต่เป็นสงครามนองเลือด ช่างเป็นเรื่องที่น่าประหลาดมากที่ผมมีชีวิตรอดกลับมาโดย “ไม่หายไปเหมือนกับสาหร่ายในทะเล” (การตายในทะเลและไม่พบศพ) ในที่สุดผมก็หนีกลับไปยังท่าเรือที่อยู่ใกล้กับเมืองซาเซโบะในเกาะคิวชูไปพร้อมกับเรือบรรทุกเครื่องบินและใช้กิ่งไม้ซ่อนเรือแม่เพื่อที่จะอำพรางสายตาจากเครื่องบินข้าศึก

แต่ว่าพอใกล้จะแพ้สงคราม ในเดือนสิงหาคม ปีโชวะที่ 20 (ค.ศ.1945) (หลังจากที่ถูกย้ายไปประจำหน่วยรบพิเศษได้ไม่นาน) ผมได้รับคำสั่งจากกองทัพ หนึ่งในคำสั่งนั้นมาจากสังกัดโรงเรียนวิศวกรรมเครื่องกลเรือที่ผมประจำอยู่โดยมีคำสั่งว่า “ไปที่สำนักงานทหารเรือเพื่อรับชิ้นส่วนอาวุธลับ”

วันที่ 6 สิงหาคมพวกเราทั้งสี่คนเดินทางออกจากโยโกสุกะภายใต้คำสั่งของเจ้าหน้าที่ระดับสูงฝ่ายเทคนิคร้อยโท M จนถึงวันที่ 7 สิงหาคม รถไฟสายช้นโยที่พวกเรานั่งมาก็จอดใกล้ๆ อิโรชิมะ อิโรชิมะได้รับความเสียหายรุนแรงโดยการทิ้งระเบิดปรมาณูเมื่อวันก่อน พอถึงตอนนี้ถึงรู้ว่านี่แหละคือระเบิดปรมาณู ตอนนั้นผมคิดแค่ว่ามันเป็นแค่ระเบิดลูกใหญ่เท่านั้น ทั้งเมืองถูกเป็นไฟและพลังทำลายล้างของระเบิดนั้นรุนแรงมาก ถ้าเป็นระเบิดธรรมดาก็ไม่น่าทำให้เกิดเพลิงไหม้ได้มากขนาดนี้ อย่างไรก็ตามพวกเราที่ได้คำสั่งจากกองทัพให้มาประจำการซึ่งไม่สามารถหันหลังกลับไปได้ต้องลงจากรถไฟและเดินผ่านตัวเมืองอิโรชิมะ ทุกอย่างพังทลายแม้แต่ปราสาทอิโรชิมะก็เช่นกัน บนท้องถนนเต็มไปด้วยผู้คนที่อ่อนแออย่างทุรนทุราย ทั้งคนและม้ากลายเป็นซากศพ กองกระจายอยู่ทุกที่เต็มไปหมด ผมแหวะที่สถานีอิโรชิมะและผมจำได้ว่าตัวอักษรสีดำบนตารางเวลาถูกไฟไหม้จะเหลือส่วนที่เป็นสีขาวไว้ ผมเดินผ่านตัวเมืองอิโรชิมะในสภาพที่ปนเปื้อนไปด้วยสารกัมมันตภาพรังสีเช่นนั้น จนถึงวันรุ่งขึ้นและนั่นคือประสบการณ์สัมผัสระเบิดปรมาณูครั้งแรกของผม ณ ช่วงเวลานั้นถือว่าผมได้สัมผัสระเบิดปรมาณูแล้วสินะ

จากนั้นผมก็ได้นั่งรถไฟสายชานโยอีกครั้งจากสถานีทางทิศตะวันตกของฮีโรซิมะและก็ลงรถไฟระหว่างทางและเดินทางต่อโดยรถบรรทุกและก็ขึ้นรถไฟต่อจนถึงนางาซากิในเช้าวันที่ 9 ผมพักที่เรียวกัง (โรงแรมสไตล์บ้านพักแบบญี่ปุ่น) ที่ห่างจากสถานีนางาซากิไม่กี่ไมล์ พอมาถึงแม้แต่ชื่อเรียวกังผมก็จำไม่ได้ ชื่อเมืองชื่ออะไรผมก็ยังไม่รู้ สิ่งที่ผมจำได้คือหอสังเกตการณ์การดับเพลิงและถังแก๊สที่ผมมองเห็นได้จากหน้าต่างของเรียวกัง เรื่องที่ไม่สามารถระบุพื้นที่ที่ถูกทิ้งระเบิดได้อย่างชัดเจนนั้นทำให้การยื่นคำร้องขอค่าชดเชยความเสียหายหลังสงคราม ถูกตีกลับเนื่องจากเอกสารไม่ครบ แต่สิ่งที่ผมไม่รู้ก็คือ



จากนี้จะเป็นเรื่องราวเกี่ยวกับการทิ้งระเบิดปรมาณูที่นางาซากิเมื่อวันที่ 9 พวกเราที่ถึงนางาซากิเมื่อเช้าวันที่ 9 พอเข้าไปในเรียวกังอย่างแรกคือผมสั่งอาหารเนื่องจากผมไม่ได้กินอะไรเลยจนถึงตอนนั้นและในระหว่างที่กำลังรออาหารระเบิดปรมาณูก็ถูกทิ้งลงมา สิบเอ็ดนาฬิกาสองนาทิละไข่ไหม ข้าวพริบตานั่นผมได้รู้สึกถึงแสงที่เหมือนราวกับพระอาทิตย์ตกดินแต่เป็นแสงที่ไม่ใช่ทั้งสีทองหรือสีแดง ทันใดนั้นก็ได้ยินเสียงที่ดังมาก ๆ แล้วจากนั้นผมก็หมดสติไป ต่อมาระเบิดนี้มักถูกเรียกว่า “Pikadon (pika คือแสงวาบ don คือเสียงของระเบิด)” มันก็ให้ความรู้สึกเช่นนั้นจริงๆ

เมื่อผมรู้สึกตัวอีกทีก็นอนอยู่ในโรงพยาบาลทหารเรือซาเซโบะสาขาอิชายายะ มีเศษแก้วติดอยู่ที่แก้มขวาและต้องผ่าตัดเอาออก แผลนั้นยังหลงเหลือรอยแผลเป็นขนาดใหญ่ไว้แบบนี้ ตัวผมเป็นทหารจึงสามารถเข้ารับการรักษาในโรงพยาบาลทหารได้แต่ผู้คนมากมายที่บาดเจ็บและถูกไฟไหม้มากกว่าผมกลับถูกทิ้งไว้อยู่ตามริมถนน

จากโรงพยาบาลสาขาอิชายายะผมถูกนำส่งโดยรถยนต์ไปยังโรงพยาบาลทหารเรือซาเซโบะโดยมีพยาบาลคอยดูแลตลอดซึ่งผมพักอยู่ที่นั่นประมาณหนึ่งเดือนและสามารถกลับไปโซมะได้ในช่วงกลางเดือนกันยายน

ผมไม่คิดว่าจะมีโรคที่เรียกว่าโรคระเบิดปรมาณู พูดภาษาบ้าน ๆ ได้ว่ากัมมันตภาพรังสีจะทำลายเซลล์เม็ดเลือดขาวภายในร่างกาย ทำให้ระบบภูมิคุ้มกันอ่อนแอลงและทำให้อ่อนแอต่อโรคอื่น ๆ ในกรณีของผมตั้งแต่ปีโชวะที่ 21 (ค.ศ.1946) ร่างกายก็เริ่มเฉื่อยชาลงเรื่อย ๆ ไม่ว่าจะนั่งหรือนอนก็รู้สึกเฉื่อยชาและไม่อยากทำอะไร ผู้รอดชีวิตจากระเบิดปรมาณูมักถูกเรียกว่าโรค Bura Bura และถูกคนอื่นดูถูกเหยียดหยามด้วยสายตา ซึ่งมันก็เป็นเช่นนั้นจริงๆ อีกทั้งกระเพาะลำไส้ของผมก็เกิดการเปลี่ยนแปลงทำให้ทั้งมีอาการปวดและความอยากอาหารลดลง ผมต้องเข้ารับการรักษาในโรงพยาบาลเอกชนของเมืองโซมะเป็นระยะเวลาประมาณครึ่งปี ตั้งแต่ตอนนั้นผมก็เริ่มเป็นหวัดบ่อยๆ ที่ก่อนหน้านี้แทบจะไม่มี

อย่างที่ได้อธิบายไปก่อนหน้านี้ ตอนที่โดนระเบิด ใบหน้าสีขาวของผมมีรอยแผลเป็นที่เหมือนรอยเศษแก้วบาดหลงเหลืออยู่ แต่คิดว่าเป็นเพราะผลข้างเคียงจากการผ่าตัด ส่วนหูข้างขวามีอาการหูอื้อหนักขึ้นเรื่อยๆ ความสามารถในการมองเห็นของดวงตาข้างขวาก็เสื่อมถอยลง น้ำตาไหลตลอดเวลาและน้ำลายก็ไหลออกมาจากปากที่ปิดสนิทอย่างต่อเนื่อง ซึ่งกลายเป็นใบหน้าที่ต่างกับตอนก่อนโดนระเบิดอย่างสิ้นเชิงไปเสียแล้ว ด้วยเหตุนี้ ผมจึงพยายามไม่ออกไปข้างนอกในตอนกลางวันเท่าที่จะทำได้และผมคิดว่าพฤติกรรมแบบนี้ ได้เปลี่ยนผมทำให้ไม่ชอบผู้คนและลักษณะนิสัยเองก็เปลี่ยนไปโดยไม่ได้ตั้งใจด้วยเช่นกัน

ในช่วงตั้งแต่ปีโชวะที่ 23 (ค.ศ.1948) เนื่องจากอาการดีขึ้นแล้วผมจึงเริ่มทำงานทำ แต่การกลับไปทำงานเดิมที่โรงงานอุตสาหกรรมเครื่องจักรนั้นเป็นไปได้เพราะผมไม่ได้ทำงานมานานกว่า 7 ปีและร่างกายของผมยังอ่อนแออีก ผมจึงเลี้ยงชีพจากการทำประมงด้วยเรือประมงขนาดเล็กและเร่ขายพลาสติก ถึงแม้จะบอกว่าอาการดีขึ้นแล้วแต่ก็ไม่ได้กลับเป็นเหมือนเดิม กลายเป็นว่าทุกครั้งพอทำงานได้ 2 วันก็ต้องพัก 1 วัน และเพราะต้องเลี้ยงดูลูกถึง 4 คน จึงมีเรื่องราวความยากลำบากมากมายที่ผมเล่าเท่าไรก็ไม่หมด

การใช้ชีวิตแบบนี้ดำเนินมาเรื่อยๆ จนถึงปัจจุบัน นอกจากด้านการเงินแล้ว มันเป็นความลำบากที่คนทั่วไปไม่สามารถจินตนาการได้เลย ในขณะที่แ่ตัวขึ้นเรื่อยๆ รอยย่นก็เพิ่มมากขึ้นแต่ที่ใบหน้าซีขาวไม่มีรอยย่นเลยเนื่องจากเส้นประสาทเป็นอัมพาตไปแล้ว เพราะแบบนี้ใบหน้าซีขาวจึงเรียบเนียน ทำให้ใบหน้าทั้งซ้ายและขวาต่างกันอย่างเห็นได้ชัด เพื่อปกปิดความผิดปกตินี้ผมจึงเอาหน้ากาก หมวกกันหนาวหรือเอาผ้าคลุมศีรษะมาปิดบังใบหน้าไว้ตอนที่ออกไปข้างนอกตลอดทั้งปี แต่ช่วงที่มีพิธีสำคัญของญาติหรือคนรู้จักจะลำบากมาก ผมไม่สามารถเข้าร่วมงานแต่งงานขณะที่ใช้ผ้าคลุมหน้าเอาไว้ได้ ถ้าเป็นไปได้ผมจะให้ภรรยาเข้าร่วมแทน แต่ก็มีบางครั้งที่ผมไม่มีทางเลือกและต้องปฏิเสธไป ด้วยเหตุนี้ผมจึงกลายเป็นคนที่หลีกเลี่ยงการอยู่ต่อหน้าคนอื่นและไม่ชอบผู้คนที่ขึ้นมา

ในเดือนมกราคมปีที่แล้วหรือปีโชวะที่ 57 (ค.ศ.1982) ผมเข้ารับการผ่าตัดโรคไขสันหลังเสื่อมครั้งใหญ่ มือขวามีอาการชาและเจ็บปวดมากทำให้แม้จะเป็นตอนกลางคืนก็นอนไม่หลับ ตอนระเบิดถูกทิ้งลงมาที่นางาซากิเหมือนมีอาการบาดเจ็บวิพลช (Whiplash Injury หรือ การบาดเจ็บบริเวณคอที่เกิดจากแรงสะบัดอย่างรวดเร็ว) เกิดขึ้นกับผม ซึ่งผมไม่รู้สึกรู้สึเกี่ยวกับสิ่งนั้นเลย การผ่าตัดเริ่มด้วยการเอากระดูกอ่อนตรงท้องน้อยข้างขวาออกแล้วนำไปปลูกถ่ายที่กระดูกสันหลังส่วนคอ โครันนี้ถูกค้นพบเมื่อปีโชวะที่ 52 (ค.ศ.1977) และผมได้เข้ารับการผ่าตัดในเดือนมกราคมและออกจากโรงพยาบาลในเดือนเมษายนของปีที่แล้ว แต่หลังจากที่ผมออกจากโรงพยาบาลสะโพกก็เจ็บ ขาทั้งสองข้างเริ่มบวมและมีอาการชาอย่างหนัก ทำให้ต้องเข้าออกโรงพยาบาลตลอดตั้งแต่ปีที่แล้ว ผมลำบากมากเพราะไม่สามารถไปทำงานได้ แม้แต่ตอนนี้ก็ยังต้องไปเข้ารับการรักษาที่โรงพยาบาลเป็นระยะตามที่หมอนัด และใช้เวลาตลอดช่วงเช้าเพื่อรับการรักษา และวันนี้ก็เพิ่งไปมา

ผ่านมาแล้ว 37 ปีหลังจากสงครามได้จบลง รอยแผลจากสงครามไม่ได้หายไป มันทำให้ผมกังวลมากที่จากนี้ต้องใช้ชีวิตโดยแบกรับรอยแผลนี้ไว้ทั้งด้านการใช้ชีวิตและด้านการรักษา ผมคิดว่าประสบการณ์ที่น่าสังเวชนี้เกิดขึ้นกับผมแค่คนเดียวก็เกินพอแล้ว และสงครามแบบนี้ไม่ควรที่จะเกิดขึ้นอีกเป็นครั้งที่สอง ว่ากันตามจริงแล้วสิ่งที่เรียกว่าระเบิดปรมาณูเป็นสิ่งที่ทารุณและโหดร้ายมาก ที่โรงพยาบาลอิซายาฮายะ คนที่เคยอยู่เตียงข้างๆ เป็นคนที่พูดคุยได้อย่างร่าเริงและสนุกสนาน จู่ๆ ก็เสียชีวิตไปอย่างกะทันหัน เป็นเรื่องที่น่าตกใจมากจริงๆ ไม่ว่าจะเหตุการณ์แบบนี้จะเกิดขึ้นตรงหน้าก็ครั้งก็ต้องทนแบกรับความเจ็บปวดนี้ไว้ พอกันที่กับสงคราม

ผมรู้สึกไม่พอใจอย่างมากกับเงินช่วยเหลือที่ได้รับในฐานะผู้อาบรังสีของระเบิดปรมาณู แม้ว่าผมจะเป็นผู้อาบรังสีของระเบิดปรมาณู 2 ครั้งซ้อนจากทั้งอิโรชิมะและนางาซากิแต่ท้ายที่สุดแล้วก็ถูกพิจารณาว่าเป็นแค่ผู้อาบรังสีของระเบิดปรมาณูจากนางาซากิเท่านั้น และกว่าจะได้รับการใส่ชื่อเข้าไปในรายชื่อของผู้อาบรังสีจากระเบิดปรมาณูต้องเขียนใบคำร้องไปกว่า 20-30 หน้า ซึ่งเป็นอะไรที่ลำบากมากจริง ๆ ผมไม่สามารถเขียนได้ละเอียดขนาดนี้ ถ้าไม่ได้รับการช่วยเหลือจากหลายๆ คน ประเภทของความช่วยเหลือที่ผมได้รับคือ เบี้ยค่ารักษาพยาบาลเป็นจำนวน 24,000 เยนต่อเดือน ซึ่งเป็นค่ารักษาแค่ช่วงที่ป่วยในระยะเวลา 3 ปีเท่านั้น งานก็

ไม่สามารถทำได้และถึงแม้จะได้รับเงินช่วยเหลือ 24,000 เยนต่อเดือนแต่ทุกวันนี้ก็ไม่สามารถเอาไปซื้ออะไรได้เลย ผมรู้สึกโกรธแค้นที่ดูเหมือนไอ้โง่ที่ต้องใช้ชีวิตอย่างลำบากลำบากแค่เพราะคำสั่งของกองกำลังทหารที่ทำให้ต้องอาบรังสี เนื่องจากการเป็นทหารเรือจะได้รับบำนาญก็ต่อเมื่ออยู่บนเรือรบเท่านั้นซึ่งมันก็เป็นเพียงแค่เศษเงินจำนวนน้อย ต้องขออภัยที่พูดเรื่องการเงินอย่างเดียวแต่พูดตามตรงถ้าไม่ได้รับการดูแลมากกว่านี้ผมก็ไม่รู้ว่าจะต้องทำอะไรแล้วเหมือนกัน ส่วนของเงินช่วยเหลือในปัจจุบันนั้นเมื่อไม่นานมานี้ได้รับการปรับปรุงแล้วแต่ผมคิดว่ามันควรจะปรับปรุงให้เร็วกว่านี้หน่อยนะ ผมเข้ารับการตรวจสุขภาพ 2 ครั้งต่อปีและถ้ามีอะไรอยากปรึกษาจะไปคุยกับเจ้าหน้าที่ Y ที่ศูนย์สุขภาพของเมืองฮารามาจิ ผมรู้สึกขอบคุณเจ้าหน้าที่ Y จากใจจริงที่อธิบายด้วยความอ่อนโยนและช่วยดำเนินการให้

อย่างไรก็ตาม ถึงแม้ว่าจะพูดไปอย่างนั้นแต่ลูกสาวทั้ง 3 คนและลูกชายอีก 1 คนของผมก็แต่งงานกันไปหมดแล้วและมีหลานอยู่ถึง 4 คน ตอนนี้ผมคิดว่าต้องตั้งใจใช้ชีวิตอยู่ด้วยกันกับภรรยาแค่ 2 คนต่อไป ก่อนหน้านี้ก็เคยคิดอยู่บ้างว่า ไร่ร่างกายแบบนี้ ถ้าตายไปตั้งแต่ตอนนั้นก็คงดี... อาจารย์เองก็พยายามเข้านะครับ

(บทสัมภาษณ์วันที่ 6 มกราคม ค.ศ.1983)

## 16. คำบอกเล่าของคุณยามากิ มาเซคัตสึ

(อายุในขณะนั้น 15 ปี เพศชาย อาศัยอยู่ที่เขตอาซาอิ เมืองฮารามาจิ)

“อ๊ะ มองไม่เห็นอะไรเลย” “จะมีอะไรตกลงมารึเปล่า”

เรื่องเล่าตอนกินข้าวปั้นอยู่ที่โบสถ์อุระคามิ

ตอนที่ผมประสบเหตุการณ์ระเบิดปรมาณูที่จังหวัดนางาซากิ ผมอายุ 15 ปี ขณะนั้นกำลังศึกษาอยู่ชั้นมัธยมศึกษา 3 ในหลักสูตรการศึกษาเดิม ก่อนหน้านั้นผมไปอยู่ที่ที่ทำงานของพ่อที่ไต้หวัน แต่ดูเหมือนว่าอากาศที่ไต้หวันจะไม่เหมาะกับเด็กที่ป่วยเป็นโรคหอบหืดแต่กำเนิดอย่างผมเลย เพราะอย่างนั้นแล้วผมที่แยกจากครอบครัวมาเพียงลำพังจึงไปยังจังหวัดนางาซากิที่ซึ่งเป็นบ้านเกิดของพ่อและในปีโชวะที่ 17 (ค.ศ.1942) ผมจึงเริ่มเข้าเรียนม.1 ใหม่อีกครั้งในโรงเรียนมัธยมประจำจังหวัดนางาซากิ ในตอนแรกที่เข้าไปอยู่ในหอพักนักเรียนของโรงเรียนพวกเราที่เป็นรุ่นน้องก็ถูกกลั่นแกล้งอย่างรุนแรงจากพวกรุ่นพี่ ทั้งการด่าทอด้วยถ้อยคำหยาบคาย รวมไปถึงการใช้ความรุนแรงทางร่างกายอย่างการชก ต่อย ด้วย โดยเฉพาะในคืนวันเสาร์ การกลั่นแกล้งก็จะยิ่งเลวร้ายขึ้นไปอีก นี่เป็นการเลียนแบบด้านชั่วร้ายของกองทัพมาทั้งอย่างนั้นเลยสินะ หลังจากนั้น พ่ออยู่ที่หอพักนักเรียนไปจนถึงม.2 คนรู้จักของพ่อที่ส่งสารชีวิตภายในหอพักนักเรียนของผมก็ได้พาผมย้ายออกจากหอพักไป ผมจึงได้ย้ายไปอยู่ที่เมืองนาคาทากะที่อยู่ทางตอนใต้ของจังหวัดนางาซากิ

โรงเรียนมัธยมต้นนางาซากิเริ่มไม่มีการเรียนตามหลักสูตรปกติ แต่กลับให้เหล่านักเรียนทำงานทุกวันเพื่อเป็นกองกำลังสนับสนุนให้กับกองทัพ อาคารเรียนธรรมดาได้เปลี่ยนเป็นโรงงาน จากนั้นก็มีการขนเครื่องจักรจากโรงต่อเรือมิทซูบิชิเข้ามา โรงงานแห่งนี้ถูกเรียกว่า “โรงงานมารุนะ” ทั้งเครื่องกลึง เครื่องสไลด์เหล็ก เครื่องเจาะเหล็กถูกนำเข้ามา จนทำให้ห้องเรียนในความทรงจำนั้นอบอวนไปด้วยกลิ่นน้ำมัน และ เศษเหล็ก ในบรรดาอุปกรณ์เหล่านั้น ผมได้รับหน้าที่ควบคุมเครื่องกลึงพิเศษที่มีหัวจับมีดตัดหลายแบบ และ คอยสอนรุ่นน้องที่เข้ามาทำงานใหม่ ผมสร้าง “หมุด” แต่ไม่มีใครบอกว่าเป็นชิ้นส่วนของส่วนไหน ทว่าเมื่อนานักก็ๆ

แล้ว สิ่งนั้นเหมือนว่าจะเป็นหมุดของเรือรบพิเศษ<sup>19</sup> จนถึงตอนนี้เมื่อมองไปยังเครื่องกลิ้งก็ยังคงทำให้นึกถึงช่วงเวลา ณ ตอนนั้น

วันที่ 9 เดือนสิงหาคม ในปีโซวะที่ 20 (ค.ศ.1945) ในวันนั้นผมเข้าทำงานในกะที่ 3 ซึ่งเป็นกะดึกจึงขึ้นไปนอนกลางวันในห้องชั้น 2 ของไปรษณีย์นาคาบาระ ก่อนจะถึงตอนเที่ยง วิทยุที่เปิดอยู่ที่ชั้นล่างของที่ทำการไปรษณีย์ประกาศเข้าไปข้ามว่า “ประกาศเตือน เครื่องบินทิ้งระเบิดอเมริกา B29 ลำหนึ่งได้เคลื่อนที่ผ่านทิศตะวันตกเฉียงเหนือมายังคาบสมุทรชิมาบาระ” ผมคิดว่า “อีกแล้วหรือ คงไม่ใช่เรื่องสำคัญอะไรหรอก” แต่ว่าทันใดนั้นผมก็ได้ยินเสียงร้อง “หวอ หวอ” ที่คุ้นเคยของเครื่องบินทิ้งระเบิดอเมริกา B29 ดังกระหึ่ม ผมยืนขึ้นและเดินไปที่หน้าต่างจากนั้นมองไปยังท้องฟ้า ตอนนั้นเองก็มีแสงสว่างวาบเข้ามาในสายตา ในตอนที่ผมคิดว่า “อ๊ะ แสบตาจังเลย” “จะมีอะไรตกลงมารึเปล่า” ก็เป็นช่วงเวลาเดียวกันกับที่มีเสียงระเบิดดังตูม พร้อมกับร่างกายของผมที่ปลิวออกไป ผมใช้นิ้วโป้งปิดหูทันทีโดยสัญชาตญาณ ส่วนนิ้วที่เหลือก็ใช้ปิดตาและก้มลงกับพื้น นี่คือการหาวิธีการเอาตัวรอดที่เรียนรู้จากการฝึกซ้อมเพื่อป้องกันความเสียหายจากการโจมตีทางอากาศ บ้านเรือนสันตะท่อนกระเบื้องบนหลังคาและก้อนดินถล่มลงมาบนหลัง ฝ้าเพดานที่เปิดอยู่ทำให้สถานการณ์ยิ่งเลวร้ายมากขึ้น

ณ ช่วงเวลานั้น ถึงแม้จะเป็นเพียงชั่วครู่ แต่ก็ราวกับเป็นเวลาที่ยาวนาน ในที่สุดทุกอย่างก็สงบลง ผมได้ยินเสียงร้องโหยหวนของบุรุษไปรษณีย์และลูกค้าที่อยู่ชั้นล่างของที่ทำการไปรษณีย์ เมื่อผมค่อย ๆ ลองลุกขึ้นยืนอย่างหวาดหวั่น ก็พบเศษแก้วจำนวนมากไม่ถ้วนติดอยู่ตามลิ้นชักไม้ที่อยู่ข้าง ๆ โชคดีที่ผมไม่ได้รับบาดเจ็บตรงไหนเลย ผมจึงรีบลงไปชั้นล่างทันที ผู้คนที่ได้รับบาดเจ็บจากเศษแก้วภายในที่ทำการไปรษณีย์ต่างก็ทำอะไรไม่ถูก ผมยังจำภาพเงินและธนบัตรที่ปลิวว่อนอยู่กลางอากาศได้ดี

ในตอนที่ไม่มีความรู้ใครพูดอะไร ผมจึงพูดขึ้นมาว่า “เราต้องหนีไปที่หลุมหลบภัย” แล้วกระโจนออกไปด้านหน้า เมืองทั้งเมืองถูกปกคลุมไปด้วย “ฝุ่นควัน” จากระเบิด ผมวิ่งฝ่าฝุ่นควันเหล่านั้นจนมาถึงหลุมหลบภัยที่อยู่ในศาลเจ้าอย่างยากลำบาก คนละแวกนั้นต่างก็พากันอพยพมาอยู่ที่นี่ คนเหล่านั้นบอกว่า “มีระเบิดตกลงมา ที่หลังบ้านของพวกเรา” ตัวผมเองก็ยังคงคิดว่ามีระเบิดตกลงมาที่ด้านหลังของที่ทำการไปรษณีย์เช่นเดียวกัน เพราะผลกระทบจากการระเบิดนั้นรุนแรงมาก แต่ที่ผมก็ได้มารู้ภายหลังว่า มีระเบิดเพียงลูกเดียวเท่านั้นที่ถูกทิ้งลงมาด้วยร่มชูชีพที่อุระคามิที่ห่างออกไป 4 กิโลเมตร เพื่อนบอกว่ามีพยานที่เห็นกระแทงร่มชูชีพของระเบิดที่ถูกทิ้ง

อย่างไรก็ตาม ในที่สุดเมื่อผมใจเย็นลงและมองขึ้นไปชั้นที่ท้องฟ้า กลุ่มควันทำให้เห็นเส้นขอบแสงดวงอาทิตย์ราง ๆ เมฆรูปเห็ดก่อตัวขึ้นอย่างน่าหวาดกลัว และก็มีแสงประกายนับไปถ้วนหล่นลงมาจากก้อนเมฆก้อนนั้น ผมคิดว่ามันคงจะเป็นระเบิดแน่ ๆ แต่ว่าพวกนั้นคือ ใบประกาศ สารวัตรทหารรีบเก็บกระดาศพวกนั้นขึ้นมา แต่ว่ามีชาวเมืองนางาซากิจำนวนไม่น้อยที่ได้อ่านมันเข้า ผมเองก็อ่านมันเหมือนกัน ถ้าจำไม่ผิดในนั้นเขียนเอาไว้ว่า “ระเบิดที่ปล่องลงมาในวันนี้เป็นระเบิดรูปแบบใหม่ที่คิดค้นโดยนักวิทยาศาสตร์ชาวอเมริกาที่แสนปราดเปรื่อง ใน 1 ลูกนั้นจะเทียบเท่ากับระเบิดที่ถูกปล่อยจากเครื่องบินรบ B29 จำนวน 200 เท่า (ประมาณ 2,000 ลูก) จงยอมจำนนต่อรัฐบาลอเมริกาที่เมตตาเสีย” กระดาศที่ใช้เป็นกระดาศคุณภาพดี ส่วนด้านหน้ามีตราประทับธงชาติญี่ปุ่น ใบประกาศนั้นมีเพียงรูปแบบเดียว และในความทรงจำของผมพวกมันจะถูก

<sup>19</sup> 特殊潜航艇(とくしゆせんこうてい) เรือรบขนาดเล็ก ออกแบบมาเพื่อเป็นเรือสำหรับให้ทหารขับพุ่งประจันบานกับข้าศึกหรือหมายถึงเรือพลีชีพ

ปล่อยลงมาในช่วงประมาณบ่ายสอง บ่ายสามโมงของวัน หรือบางทีผมอาจจะจำผิดก็ได้ วันนั้นอาจจะไม่ใช่วันที่ 9 ก็ได้

และแล้วก็ถึงเวลาพลบค่ำ ไฟจากพื้นที่ถูกระเบิดนั้นลามไปทั่ว ท้องฟ้ายามค่ำคืนปกคลุมด้วยควันไฟ แสงสีแดงเรืองรองเป็นหย่อมๆ ได้ยินเสียงระเบิดของถังเหล็กหรือเสียงถล่มของสิ่งก่อสร้างทั้งคืน ผมอยู่ในหลุมหลบภัยทำอะไรไม่ได้แม้แต่จะงีบหลับจนเช้า

วันต่อมา วันที่ 10 พอไปโรงเรียนก็มีการจัดตั้งหน่วยพยาบาล ผมก็ถูกเรียกมารวมที่กองบังคับการและกลายเป็นผู้รับผิดชอบการติดต่อ ก่อนจะถูกส่งไปในพื้นที่ที่ระเบิด สิ่งก่อสร้างขนาดใหญ่ในจังหวัดนางาซากิ หายไปแบบไร้ร่องรอย กลางทางระหว่างเดินก็เจอกับคนเจ็บที่ถูกหามเปล ได้เห็นภูเขาของศพมนุษย์ที่นอนเรียงรายกันและมีสัตว์อย่างเช่นม้าตาย มีอยู่เป็นเบือ ทำให้ความรู้สึกของผมเต็มไปด้วยความหวาดกลัวในชั่วพริบตาแบบที่ไม่เคยเป็นมาก่อน และภายในภาพที่ปรากฏเหล่านั้นก็มีภาพหนึ่งที่ติดตามไม่สามารถลืมได้เลย นั่นคือหนุ่มน้อย 2 คนที่มีแผลไฟไหม้จนท้อง ออก และหน้าและจนไม่สามารถเรียกว่าหน้าได้ เหมือนว่าทั้งคู่จะเป็นพี่น้องกันคนหนึ่งอยู่ป.3 อีกคนอยู่ป.4 ร้องตะโกนว่า “ร้อนจังเลย ร้อนจังเลย” ซึ่งก็มีผู้หญิงที่คาดว่าแม่ของเด็กทั้งสอง พยายามใช้พัดพัดให้ ที่แผลนั้นก็ยังมีแมลงวันตอม ทำให้กลิ่นเน่าที่ถูกระดมกระตุก เลยรู้สึกประหลาดใจและคิดไปชั่วขณะว่ามีแค่แมลงวันที่ไม่ตายจากระเบิดเมื่อวานนี้หรือ และในภายหลังพี่น้องคู่นั้นก็น่าจะเสียชีวิต นอกจากนั้นก็เจอทั้งศพผู้ชายที่เหลือเพียงท่อนล่าง เจอทั้งร่างที่เสียชีวิตทั้งๆ ที่ยังนั่งล้อมวงอยู่ ทั้งศพที่เครื่องในทะลักออกมาบ้าง หรือศพที่ดำจนกลายเป็นเถาเถา มีผู้บาดเจ็บที่ถูกเปลหามผ่านไป ผมก็คิดว่ามันเป็นเสื้อผ้าที่หลุดล่อนลงมา แต่จริงๆ แล้วมันคือส่วนหนึ่งของผิวหนังที่ลอกออกมา มันโหดร้ายมากจริงๆ ไม่มีแผลแต่ตายแบบท้องบวมก็มีเหมือนกัน

วันต่อๆ มา H ก็ตาย N ก็ตายเหมือนกันทำให้เริ่มรู้ชื่อของผู้ที่เสียสละซึ่งเป็นเพื่อนที่เรียนด้วยกัน และก็ได้มีข้อมูลเข้ามาว่า K ที่เป็นลูกของพระสงฆ์ซึ่งเป็นเพื่อนชั้นปีเดียวกันติดอยู่ในซากปรักหักพัง เราจึงเดินทางไปยังเนินเขาบริเวณใกล้เคียง สถานที่นางาซากิที่ K ติดอยู่ มีคนประมาณ 20 คนนำโดยอาจารย์ ใช้พลั่วขุดเกลี่ยทางเพื่อเข้าไปยังซากเหล่านั้นจนเกือบเหยียบศพอยู่หลายครั้ง ทุกครั้งที่เปลือยเหยียบก็จะตกใจร้องออกมาจนโดนอาจารย์ดู และในที่สุดก็ถึงจุดหมาย โชคดีที่ K อยู่ในศาลเจ้าก็เลยช่วยออกมาได้

ในช่วง 1 เดือนหลังจากนั้น ก็ได้ไปปฏิบัติภารกิจหลายครั้งในพื้นที่ที่ถูกระเบิด ข้ามาจากเขาจากวัดคนปิระไปจนถึงเมืองอุระกามิ จากนั้นได้นั่งพักชั่วคราวในซากโบสถ์อุระกามิ<sup>20</sup> และกินข้าวปั้นที่นั่น โบสถ์อุระกามินั้นเต็มไปด้วยกลิ่นเหม็นที่แรงมากๆ และมีบรรยากาศที่เปลี่ยนไปจากเดิม จนเกิดเป็นความกลัวว่า ข้าวปั้นที่กินแล้วรู้สึกเหมือนกินเชื้อแบคทีเรียเข้าไปจนตัวเองก็อาจจะตายเหมือนกันหรือเปล่า คลองเล็กๆ ที่เคยไปครั้งก่อนจากศพที่เกลื่อนกลาด รอบนี้ที่ไปศพพวกนั้นก็กลายเป็นกระดูกไปหมดแล้ว ในช่วงเย็นก็มีเผาศพไปทั่วทุกที่ พอไม่มีป้ายชื่อก็ได้แต่เผาศพทั้งที่ไม่รู้ว่าเป็นใคร เพื่อนก็มาเอาถ้ากระดูกเก็บเข้าไปในกล่องรองเท้า แล้วพูดว่าน่าจะเป็นกระดูกของแม่ ส่วนเพื่อนที่ยังหลงเหลือความกล้าก็เข้าไปในโรงงานอาหารกระป๋องที่ไฟยังคงลุกอยู่เพื่อเอาอาหารกระป๋องมาแบ่งกัน ผมได้ประสบพบเจอกับเหตุการณ์ต่างๆ มากมายจริงๆ

วันเช่นนี้ก็ผ่านไปหลายวัน และทุกคนในหอพักต้องอพยพไปยังสถานที่ที่เรียกว่าเฮกิ ก็เลยไม่สามารถไปที่ทำการไปรษณีย์ได้ จึงเดินไปหาเพื่อนที่อยู่อย่างามิเพื่อขอความช่วยเหลือ พอถึงบ้านของเพื่อน การปราศรัย

<sup>20</sup> Urakami Tenshudou ชื่อเรียกเดิมของ Immaculate Conception Cathedral, Nagasaki โบสถ์ทางคริสตศาสนา แหล่งท่องเที่ยวที่มีชื่อเสียงของจังหวัดนางาซากิ ถูกทำลายจากระเบิดปรมาณูเมื่อค.ศ.1945 สร้างใหม่ด้วยรูปแบบเดิมในค.ศ.1959



ด้วยพระสุรเสียงจริงของสมเด็จพระจักรพรรดิที่ออกอากาศทางวิทยุ<sup>21</sup> ก็เริ่มขึ้น ผมจึงรีบเดินกลับไปนั่งนางาซากิอีกครั้ง และเมื่อกลับมาถึงเมืองนางาซากิ หญิงชราที่อยู่ฝั่งตรงข้ามถนนก็ถามผมว่า “ที่ญี่ปุ่นแพ้สงครามมันจริงหรือ” และบ่นต่อว่า “ถ้าเป็นแบบนี้จริงๆ ค็นนี่น่าจะได้นอนหลับได้อย่างสบายนะ” ตอนนั้นผมเลยคิดว่าเป็นผู้ใหญ่ทำไมถึงพูดจาไม่รักชาติแบบนี้ ในตอนเย็น รถโฆษณาชวนเชื่อของทหารแล่นไปรอบเมืองด้วยความเร็ว โดยกล่าวว่า “นี่คือกองทัพภาคตะวันตก การประกาศศัวัันนี้เป็นการประกาศแผนการรบ และพวกเราเตรียมใจพร้อมที่จะต่อสู้จนถึงนาทีสุดท้าย” ผมในตอนนั้นเมื่อได้ยิน เสียงประกาศก็มักจะตะโกนว่า “ไชโย!” แต่วันต่อมา ครูก็บอกว่ามันเป็นเรื่องโกหก สงครามได้ยุติลงแล้วจริงๆ ดีใจมากที่จะได้เจอพ่อแม่และครอบครัวในที่สุด อย่างไรก็ตาม ในกรณีของผม กว่าที่จะกลับไปหาพ่อแม่และครอบครัวได้ก็ผ่านไปแล้วหนึ่งปีครึ่ง

เอาล่ะ ตัวผมเอง จริงๆ แล้วก็น่าจะได้รับผลกระทบของกัมมันตภาพรังสีเพราะเดินอยู่ใกล้จุดศูนย์กลางของระเบิดที่ถูกทิ้งลงมา แต่โชคดีที่ไม่มีอาการหลงเหลือใดๆ ตอนนี้มีพกสมุดบันทึกสุขภาพสำหรับผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณู และยังคงไปตรวจร่างกายปีละ 2 ครั้ง แต่ก็ไม่มีอะไรผิดปกติเลย มีเพียงท้องเสียหนักหลังจากระเบิดลง 1 อาทิตย์ และมีจุดที่โตนยุบก็ตกกลายเป็นแผลเหวอะหะและไม่สามารถหายเองได้ง่ายๆ แต่นั่นก็อาจจะเป็นเพราะภาวะทางโภชนาการไม่ค่อยดีเลยๆ ก็ได้ ไม่ต้องพึ่งยาก็หายเป็นปกตินะ

สิ่งที่เรียกว่าระเบิดปรมาณูเป็นสิ่งที่ขัดแย้งกับกฎของธรรมชาติซึ่งผลิตพลังงานมหาศาลได้ และคิดว่าเป็นสิ่งที่เป็นตัวแทนของวิถีของมนุษย์ซึ่งเป็นที่อันตรายและน่ากลัวมากๆ การทดลองใช้นิวเคลียร์ฟิชชันและการตัดต่อพันธุกรรม ที่กำลังเป็นประเด็นอยู่ในขณะนี้ก็เหมือนกัน และคิดว่าสิ่งเหล่านี้เป็นการทำลายของมนุษย์ต่อจักรวาล ธรรมชาติ และกฎของพระเจ้า หรือก็คือมนุษยชาติสร้างหายนะด้วยตัวเอง อาจจะทำให้เกิดความผิดพลาดซ้ำจากการใช้ระเบิดปรมาณูอีกครั้งก็เป็นได้ สงครามนั้นเกิดขึ้นมาจากใจคน ดังนั้นควรเริ่มจากการหยิบเอาปัญหาทางใจของแต่ละคนเป็นประเด็นหลัก สร้างความสัมพันธ์อันดีเหมือนดังเพื่อนบ้าน เพราะฉะนั้นผมคิดว่าเราควรมุ่งเป้าไปที่การศึกษาเพื่อพัฒนาทรัพยากรมนุษย์ให้มากขึ้น และคิดว่าการศึกษาในโรงเรียนปัจจุบันไม่ใช่แค่พัฒนา ความสามารถทางวิชาการด้วยการเรียนเท่านั้น แต่ต้องเริ่มให้การศึกษาที่มั่นคงในเรื่อง “วิถีชีวิตและความเป็นอยู่ของมนุษย์” ผมคิดว่าการศึกษาซึ่งมุ่งพัฒนาทรัพยากรมนุษย์เป็นสิ่งที่แบกรับความรับผิดชอบอันยิ่งใหญ่เอาไว้ และหากเราพัฒนาทรัพยากรมนุษย์ที่มุ่งเน้นการเห็นคุณค่าของคนได้ โลกนี้คงไม่มีสงครามอีกต่อไป

(บทสัมภาษณ์วันที่ 14 พฤศจิกายน ค.ศ.1982)



<sup>21</sup> Gyokuon Housou "broadcast in the emperor's voice" คือการประกาศยอมแพ้สงครามโดยจักรพรรดิอิโรฮิโตะพระองค์เอง ออกอากาศทางวิทยุทั่วประเทศ ในวันที่ 15 สิงหาคม ค.ศ.1945 ถือเป็นสิ้นสุดสงครามโลกครั้งที่สอง

## 17. คำบอกเล่าของคุณวาทานาเบะ ยูทาเกะ

(อายุในขณะนั้น 27 ปี เพศชาย อาศัยอยู่ที่โอราฮามะ เขตฟุตาบะ เมืองโทมิโอกะ)

### เปลวเพลิงสีแดงดำที่โหมกระหน่ำเต็มท้องฟ้า

ผมเกิดในเดือนธันวาคม ปีไทโชที่ 6 (ค.ศ.1917) ที่เมืองโทมิโอกะ และจบการศึกษาจากโรงเรียนมัธยมต้นโอะกะ เมื่ออายุ 18 ปี ผมได้เข้าทำงานที่บริษัทเดินเรือ ‘นิปปอน ยูเซน’ ในโยโกฮามะ แต่ในเดือนเมษายน ปีโชวะที่ 13 (ค.ศ. 1938) ผมถูกเรียกกระดมพลเฉพาะกิจในฐานะทหารกองหนุนที่ 1 และได้เข้าเป็นทหารประจำการกองร้อยที่ 4 หน่วยกองหนุน กรมทหารที่ 1 ทหารปืนใหญ่อิสระ ระหว่างทำสงครามจีน-ญี่ปุ่น ครั้งที่ 2) เรือได้ขึ้นฝั่งที่เซียงไฮ้ และเข้าร่วมรบในจินนانبังครั้งไม่ถ้วน โดยเริ่มจากเข้าร่วมกลยุทธ์ ยึดเมืองฮั่นไค่ว์ เพราะแบบนี้ร่างกายของผมจึงเต็มไปด้วยบาดแผล หลังจากนั้น 4 ปี ในที่สุดก็ครบกำหนดปลดประจำการกลับมาที่ประเทศญี่ปุ่นในเดือนกรกฎาคม ปีโชวะที่ 16 (ค.ศ. 1941) และกลับมาทำงานที่ ‘นิปปอน ยูเซน’ ตามเดิม แต่ครั้งนี้ ผมถูกจัดให้ไปทำหน้าที่ในกองกำลังที่ 304 ที่เขตอุจิมะ จังหวัดอิโรชิมะ ตามคำสั่งระดมพลลูกเรือ และนั่งเรือสึรุกะมารุไปลงที่หมู่เกาะปาเลา ได้เข้าร่วมแผนการยกพลขึ้นบกที่ตาลากันในบอร์เนียว และเรือสึรุกะมารุก็ได้จมลงที่เกาะบาลิกปาปัน อย่างไรก็ตาม ผมคิดว่าตัวเองสามารถต่อสู้และเอาชีวิตรอดได้ดี

เพราะเรือจม ทำให้ผมต้องถอยทัพกลับมาที่ญี่ปุ่นและมุ่งหน้าไปยังสึรุกะ เพื่อกลับไปทำงานใหญ่ของนิปปอน ยูเซน ในโยโกฮามะ หลังจากนั้นผมก็ถูกเรียกกระดมพลไปเคลื่อนย้ายพลทหาร เรือที่ผมนั่งลำแล้วลำเล่าได้จมลงระหว่างการทำสงคราม โดยรวมแล้วผมได้เปลี่ยนเรือทั้งหมด 6 ครั้ง

ในเดือนสิงหาคม ปีโชวะที่ 20 (ค.ศ. 1945) ที่ผมได้สัมผัสกับรังสีที่นางาซากิก็เป็นเพราะผมเดินทางมาเพื่อขึ้นเรือลำใหม่ พอมาลองคิดดู มันเหมือนกับผมออกสู่เส้นทางไปที่นางาซากิเพื่อรับรังสีนั้นเลย

ผมขึ้นรถไฟจากโยโกฮามะ นั่งผ่านอิโรชิมะไปที่นางาซากิ หลังจากที่อิโรชิมะถูกทำลายด้วยระเบิดปรมาณู ผมก็มองออกไปที่เมืองนั้นผ่านทางหน้าต่างพลางพูดว่า “ถูกทำลายเสียแย่ขนาดนี้” แน่ใจว่าตัวผมในตอนนั้นไม่รู้ว่ามีระเบิดปรมาณู ผมจำได้ว่าใช้เวลาประมาณสองวันกว่าจะเดินทางผ่านอิโรชิมะได้ แต่ก็จำวันที่และเวลาที่แน่นอนไม่ได้ อย่างไรก็ตาม ผมจำได้ว่าตอนที่นั่งรถไฟผ่านอิโรชิมะนั้น ไม่มีการแจกอาหารอากาศร้อน แคมสถานีอิโรชิมะก็ถูกทำลายจนไม่เหลือซาก ทางรถไฟได้รับการซ่อมแซมอย่างรวดเร็วหรือไม่นั้นจนถึงตอนนี้ก็ยังเป็นที่สงสัยกันอยู่ ผมไม่ได้ลงไปเดินที่อิโรชิมะเลย

ผมจำได้ว่าเดินทางมาถึงนางาซากิในช่วงเย็นของวันที่ 7 สิงหาคม แต่จำเวลาที่ชัดเจนไม่ได้ ไม่มีทางที่ผมจะไปถึงเร็วขนาดนั้น แต่ผมรู้สึกเหมือนจะพักอยู่ที่นางาซากิเป็นเวลาสองคืนในวันที่ 7 และ 8 พวกเราที่มาจากนิปปอน ยูเซน ได้พักที่ “นานิวะเรียวกัง” ในยาซากะโจที่อยู่ห่างจากสถานีนางาซากิโดยใช้เวลาเดินทางประมาณ 20-30 นาที ที่นั่นเป็นเรียวกังสองชั้นที่มีขนาดค่อนข้างใหญ่

วันที่ 9 สิงหาคม เป็นวันที่อากาศดีตั้งแต่เช้า เหลือพวกเราที่พักอยู่ที่นี้ โดยที่ยังไม่ได้ขึ้นเรือลำใหม่ที่วางแผนไว้ว่าจะขึ้น ตอนที่ผมขณสัมภาระเตรียมจะไปขึ้นเรือลำใหม่ เครื่องบินกรั๊มแมนของอเมริกาก็บินเข้ามาโจมตี ทำให้ผมไม่สามารถเข้าไปใกล้ได้ เพื่อนของผมบางคนไปที่นางาซากิเพื่อดูหนัง ที่นางาซากิมีผู้หญิงสวมชุดกระโปรงอะไรพวกนี้อยู่ด้วย ซึ่งจะแตกต่างจากโตเกียวเล็กน้อยเพราะมีบรรยากาศที่เป็นอิสระมากกว่า ผม

ไม่รู้ว่าหลังจากนั้นเกิดอะไรขึ้นกับคนที่ไปดูหนังบ้าง พวกเราที่เหลือก็เล่นไพ่ดอกไม้<sup>22</sup> เพื่อฆ่าเวลากัน วันนั้นเป็นวันที่อากาศร้อนและพวกเราก็ไม่มีอะไรจะใส่ พวกเราจึงใส่ผ้าเตี่ยวตัวเดียวและนอนเล่นอยู่ในห้องพัก

เวลาประมาณ 11 โมง ตอนที่ผมนอนอยู่บนห้องที่ชั้นสอง เครื่องบินทิ้งระเบิดปี 29 ก็บินมาพร้อมกับเสียงสัญญาณเตือนการโจมตีทางอากาศที่ตั้งขึ้น ในตอนนั้นผมคิดว่า “ก็แค่เครื่องบินลำเดียวเอง” แล้วผมก็เห็นอะไรบางอย่างสีขาวกับร่มชูชีพบนท้องฟ้าที่มุม 45 องศา ผมจำได้ว่าหลังจากที่เครื่องบินทิ้งระเบิดปี 29 บินออกไป แม่บ้านที่เรียวกังก็พูดขึ้นว่า “สัญญาณเตือนภัยถูกยกเลิกแล้ว” ที่จริงแล้วของสีขาวที่หล่นมากับร่มชูชีพก็คือระเบิดปรมาณูสินะ ในตอนนั้นผมคิดว่ามันอาจจะระเบิดด้วย “ไฟระเบิดเพลิง” ก็ได้

ตอนนั้นก็มีเสียงดังขึ้นพร้อมกับมีเปลวไฟสีแดงดำพุ่งพล่านขึ้นเต็มท้องฟ้า และมีบางส่วนที่ลอยเข้ามาทางหน้าต่างของเราด้วย ผมที่อยู่ตรงริมหน้าต่างนั้นราวกับถูกอาบไปด้วยเศษกระจกที่แตก แต่ยังไม่กว่านั้นเพื่อนที่อยู่ตรงหน้าของผมถูกพัดขึ้นไปในอากาศพร้อมกับเสื่อทาทามิและปลิวหายไป ลมหมุนสีแดงดำกระจายไปทั่วท้องฟ้า ผมได้ยินเสียงกรีดร้องของผู้คน อย่างไรก็ตาม มันเหมือนกับระเบิดลูกใหญ่ และผมก็จำไม่ได้เลยว่าอะไรเกิดขึ้นหลังจากนั้นบ้าง

ตอนที่ผมรู้สึกตัวขึ้นมา พื้นที่รอบ ๆ ก็เต็มไปด้วยฝุ่นจนผมมองไม่เห็นอะไรเลย ผมคิดว่าดวงตาของผมก็คงได้รับความเสียหาย ไปด้วยเหมือนกัน ผมหยิบห่อผ้าที่ใช้เป็นหมอนมาโดยไม่รู้ตัวและเดินเข้าไปท่ามกลางฝุ่นนั้นด้วยความมึนงง ผมใส่แค่ผ้าเตี่ยวตัวเดียว เดินหนีไปทางภูเขาด้วยเท้าเปล่าและใช้มือคลำหาเส้นทางร่างกายของผมเต็มไปด้วยบาดแผล เส้นผมที่อยู่ด้านหน้าของศีรษะก็ถูกเผาจนไหม้ ส่วนเส้นผมที่ด้านหลังยังเหลืออยู่ ผมคิดว่าตอนนั้นเป็นเวลาประมาณบ่ายสองโมง ผมล้างศีรษะและใบหน้าด้วยน้ำล้างมือของศาลเจ้ายาซากะ แล้วก็นั่งลงเพื่อเอาเศษแก้วที่ติดอยู่ตามร่างกายออก

ผู้อาวุโสดังกล่าวในเมืองมารวมตัวกันเรื่อย ๆ คนที่หิ้วตัวดำลึบบ้าง ตามตัวมีแต่แผลพุพองบ้าง หรือก็คือ เหล่าผู้คนที่มิใช่พลเรือนมารวมตัวกันอย่างไม่ขาดสาย อย่างผมนั้นก็ถือว่ายังบาดเจ็บเล็กน้อย

วันรุ่งขึ้นคือวันที่ 10 ในเมืองมีการแจกจ่ายบิสกิตแก่ผู้คน แต่คนต่างถิ่นอย่างพวกเรานั้นไม่ได้รับมัน เราจึงได้แต่ดื่มน้ำอย่างช่วยไม่ได้ ตอนนั้นเอง ในตอนที่ท้องกำลังว่างอยู่บริเวณนอกศาลเจ้ายาซากะ ก็มีคุณปู่ที่ดูมีอายุกับคุณย่าถือแผ่นไม้ที่มีข้าวปั้นจำนวนมากวางอยู่เดินมาทางผมที่กำลังนอนเอกเขนกอยู่แล้วพูดว่า “ทานเยอะๆ เลยนะ ตอบแทนที่ช่วยดูแล” ดูเหมือนจะเป็นข้าวปั้นที่ญาติของพวกเขาคุณปู่ทำให้ ผมกินมันไปประมาณ 5 ก้อนพลางรู้สึกประหลาดใจและดีใจ อย่างไรก็ตาม ผมไม่สามารถลืมความอร่อยและรสชาติในตอนนั้นได้เลย ผมแบ่งกับเพื่อนที่อยู่ด้วยกัน หรือก็คือเหล่าบุรุษเรือไปรษณีย์ หลังจากนั้นไม่นาน มีเด็กประมาณ 4-5 ที่คงจะเห็นพวกผมกินข้าวปั้น เขาถือบุหรี คิดว่าคงเป็นยี่ห้อ “ฮิคาริ” แล้วพูดว่าช่วยแลกมันกับข้าวปั้นที่ผมก็อยากจะทำอยู่หรอก แต่ตอนนั้นมันไม่เหลือแล้ว หลังจากนั้นเด็กคนนี้จะทำอะไร จะตายเอาரிเปล่า ผมคิดแบบนั้น บางที เด็กคนนี้อาจจะโดนระเบิดในระหว่างที่โดนใช้ให้ไปซื้อบุหรีก็ได้ ผมคิดว่าเขาน่าสงสัยจริง ๆ

หลังจากระเบิดประมาณวันที่ 4 ในที่สุดก็มองเห็นเมืองได้ชัดที ก่อนหน้านั้นเมืองถูกห่อหุ้มไปด้วยฝุ่นราวกับมีหมอกปกคลุมเมืองและเปลวไฟก็ยังคงไหม้อยู่ ในตอนนั้น คนลือกันว่า “พวกผู้หญิงถูกพวกทหารอเมริกันพาตัวไปแล้ว” บ้างละ “พวกผู้ชายถูกเผื่อนลูกอันตะไปด้วย” บ้างละ เลยมีคนของหน่วยโฆษณาเดินทางมาเดินประกาศว่ามันเป็นข่าวโคมลอย

<sup>22</sup> Hanafuda ไพ่แบบดั้งเดิมของญี่ปุ่น พิมพ์เป็นลายดอกไม้ไม้ไผ่ข้างบนกระดาษแข็งขนาดประมาณ 5.4x3.2 ซม. รวม 48 ใบ แบ่งเป็น 12 เดือน แต่ละใบมีคะแนนอยู่

วันที่ 15 สิงหาคม ผมลงจากภูเขาเพื่อมาฟังประกาศทางวิทยุของจักรพรรดิ แต่เพราะไม่มีไฟฟ้าทำให้ไม่สามารถฟังประกาศได้ ผมมารู้เรื่องที่สงครามจบลงโดยที่เราเป็นฝ่ายพ่ายแพ้ในภายหลัง ผมผิดหวังจริงๆ หลังจากนั้นพวกเราได้รับการปฐมพยาบาลเบื้องต้นในเมือง มีจุดปฐมพยาบาลตั้งอยู่บริเวณสี่แยกในตัวเมือง ทุกคนต่างเอายาสีขาวหนืดๆ ที่บรรจุอยู่ในกระป๋องมาทาแผลพุพอง ไม่ว่าจะตรงไหนก็มีแต่แฉวยาวเต็มไปหมด คนที่ตายระหว่างต่อแถวอยู่ก็มีเหมือนกัน ผมเองพอได้ทายาแล้วก็รู้สึกดีขึ้น และพวกเรา ก็ไปที่เทศบาลเมืองนางาซากิ แล้วได้รับบัตรประจำตัวผู้ประสบภัยมา หลังจากนั้นพวกเขาก็บอกให้ทุกคนกลับบ้านของตนเอง ผมจึงขอเสบียงอะไรซักอย่างพวกเขา แต่ก็ถูกปฏิเสธเพราะพวกเขาก็แจกจ่ายในเมืองไปจนหมดแล้ว หลังจากนั้นตลอดหนึ่งเดือนที่เดินทางกลับโยโกฮามะจึงไม่ได้ทานอะไรเลยนอกจากน้ำ มันเป็นอย่างนั้นจริงๆ เสื้อก็ไม่มีใส่ จนต้องเดินทางไปยังเมืองโมจิทั้ง ๆ ที่เปลือยอยู่ ที่จริงแล้วในห่อผ้าก็มีเสื้อผ้าอยู่แท้ๆ ตัวผมในตอนนั้นก็คงจะเป็นบ้าไปแล้วล่ะ เพราะเท้าบวมจนใส่รองเท้าไม่ได้เลยต้องเดินด้วยเท้าเปล่าไปทั้งแบบนั้น

ในที่สุด พวกเราก็ก็นั่งรถไฟนางาซากิเพื่อออกจากนางาซากิ ถึงจะมีขบวนรถไฟอยู่ แต่จะออกเดินทางเมื่อไหร่ก็ไม่อาจรู้ได้ ภายในตู้รถไฟนั้นคนเต็มจนล้นออกมาแล้วก็ยังมีคนอื่น พวกเราจึงปีนขึ้นไปบนหลังคา และต้องเอาลวดมัดตัวเอาไว้ไม่ให้หล่น มันคือลวดจากรั้วกันทางรถไฟที่ต้องใช้มือแกะออกมาอย่างยากลำบาก ประมาณ 4 วันได้ละมั้ง ที่ต้องอยู่บนหลังคาแบบนั้นตลอด ถึงจะเป็นบนหลังคาแต่ก็อาจจะโดนแฉะที่เอาได้ จึงลงไปแค่ตอนที่ต้องดื่มน้ำ แล้วก็ต้องรีบกลับมารอเวลาที่รถไฟจะออก ในที่สุดก็เริ่มมีควันออกมาจากหัวรถจักร “มันวิ่งแล้ว มันวิ่งแล้ว!” ทุกคนพูดขึ้นมาพร้อมกัน อย่างไรก็ตาม ขบวนรถทั้งสองฝั่งเต็มไปด้วยผู้คน มีคนจำนวนมากเกาะอยู่แทบทุกส่วนของรถไฟ ซึ่งรถไฟจะไม่หยุดวิ่งจนกว่าจะถึงโมจิในเมืองคิตะคิวชู ทำให้คนที่เกาะรถไฟอยู่ทยอยตกจากรถไป คงเพราะเริ่มปวดมือปวดแขนจนทนไม่ไหวเลยปล่อยปล่อยมือ ผมคิดว่าคนที่ตายไปก็คงจะมีอยู่พอควรเลย

ที่สถานีโมจิเองก็แออัดมากเหมือนกัน อย่างที่ซานซาลา แม้แต่จะขยับตัวยังไม่ได้ มีคนที่โดนผลักจากซานซาลาจนกลิ้งตกลงไปที่รางรถไฟ จากนั้นก็มีขบวนรถที่วิ่งมาจากนางาซากิก็วิ่งเข้ามา ถึงสารวัตรทหารอะไรซักอย่างจะตะโกนเสียงดังแค่ไหนก็ไม่สามารถช่วยอะไรได้ พวกเราอยู่ที่โมจิวุ่นๆ สามสี่วัน ก็ไปเจอเชือกสำหรับสิ้นกระดิงของศาลเจ้าแห่งหนึ่งเข้า พวกเรานำเชือกสีแดงนั้นมาทำเป็นผ้าเตี่ยวไม่กี่ถุงนอน ในระหว่างนี้ก็นอนเอกเขนกที่สถานีโมจิจนกว่ารถขบวนถัดไปจะมา ใช้เวลาประมาณหนึ่งสัปดาห์ในการข้ามมาซิโมโนเซกิ รู้สึกว่าจะถึงโยโกฮามะในช่วงวันที่ 10 กันยายน ผมได้แยกกับเพื่อนจากนิปปอน ยูเซนที่อยู่ด้วยกันมาตั้งแต่ตอนที่โดนระเบิด ผมไม่รู้ทั้งชื่อและที่อยู่ของพวกเขาทั้งสามคน

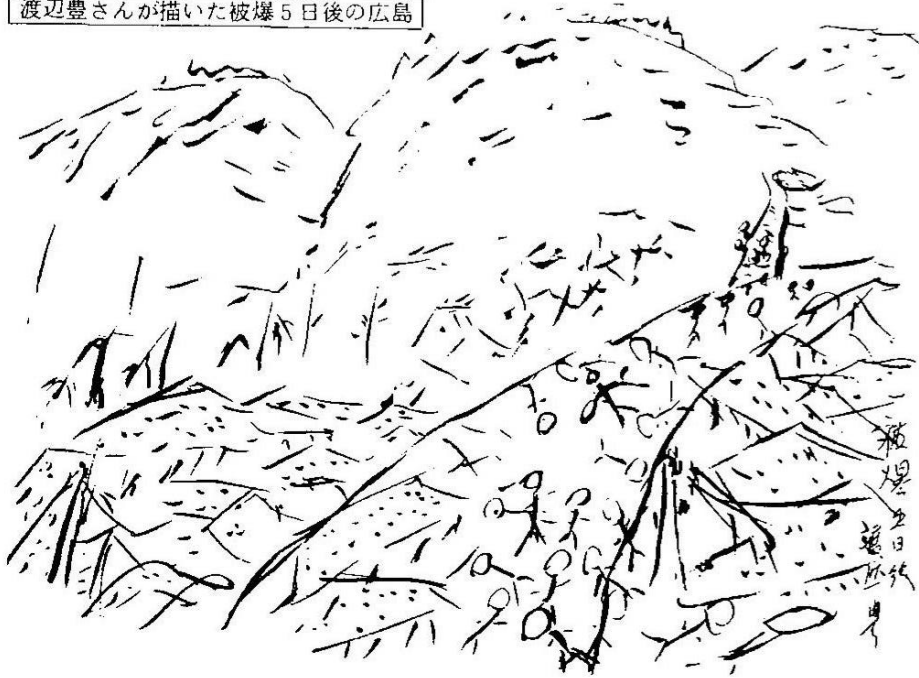
ผมมาถึงโยโกฮามะ แล้วลองไปย่านอาเคโบโนะโจเขตสี่ที่เคยเช่าอยู่เมื่อก่อน โชคดีที่มีมุมหนึ่งที่ยังไม่ถูกเผา “ดีที่รอดตายมาได้นะ” พวกคุณป่าที่อยู่ห้องเช่านั้นพากันต้อนรับผมเป็นอย่างดี

หลังจากนั้นในที่สุดก็ได้มีอาหารใส่ท้องในรอบหนึ่งเดือน ในตอนแรกให้เริ่มกินจากข้าวต้ม ได้รับการดูแลอย่างดีเพื่อให้ร่างกายดีขึ้น ช่วยใส่ยาแดงให้ตามร่างกาย ผมรู้สึกขอบคุณจริงๆ รู้สึกว่าพักได้ซักสองคืน

หลังจากนั้นก็กลับมาที่โทมิโอกะ คงเป็นเพราะกัมมันตภาพรังสี ทำให้ร่างกายอ่อนแอลง มีบางครั้งที่มีเม็ดเลือดขาวต่ำ ทำให้ผมเป็นกังวลอยู่พักนึง ตอนนี้อยู่ที่ลูกหลานแข็งแรงดี ร่างกายผมเองก็ยังคงดี แต่ก็เป็นคนที่ติดหวัดง่ายที่สุดในบ้าน

(บทสัมภาษณ์วันที่ 1 เมษายน ค.ศ.1983)

渡辺豊さんが描いた被爆5日後の広島



渡辺豊さんが描いた被爆5日後の広島

ภาพเมืองฮิโรชิมะหลังจากระเบิดลง 5 วัน ที่คunyuthaka วาดานาเบะวาด

## 18. คำบอกเล่าของคุณ I

(อายุในขณะนั้น 12 ปี เรียนอยู่ประถมศึกษาปีที่ 6 เพศชาย อาศัยอยู่ที่เมืองฮารามาจิ)

ระเบิดปรมาณูที่ส่องแสงแวววาวตกลงมาอย่างเชื่องช้าเหมือนกับร่มชูชีพ  
ผมมีข้อต่อหัวเข่าบิดเบี้ยวจนไม่สามารถทำงานได้

ผมพยายามลืมนึกเรื่องการระเบิดปรมาณูเท่าที่ผมจะลืมนได้ พยายามที่จะไม่สนใจมัน แม้อยากจะเล่าอย่างละเอียดแก่ลูกทั้งสอง แต่ถึงจะลองเล่าตามจริงก็ไม่อาจรู้เลยว่าจะเข้าใจมากน้อยเพียงใด เด็กๆ รู้เรื่องที่ผมเป็นผู้อับรังสีดี แต่เหมือนว่าพวกเขาไม่ค่อยอยากจะถามเท่าไร

ผมเกิดที่จังหวัดนางาซากิ เมืองนากาโกะชิมะ ในปีโชวะที่ 8 (ค.ศ.1933) ในบรรดาพี่น้องชาย 2 หญิง 6 ผมเป็นลูกชายคนรอง ส่วนพี่น้องคนหนึ่งหายสาบสูญ เมืองนากาโกะชิมะนั้น ตั้งอยู่ทางทิศใต้ของสถานีนางาซากิ ซึ่งห่างจากจุดศูนย์กลางการระเบิดมากกว่า 4 กิโลเมตร

9 สิงหาคม วันที่ระเบิดปรมาณูถูกปล่อยลงมาที่นางาซากิ ผมยังคงจำเครื่องบินทิ้งระเบิด B29 ที่บินลงมาได้ ตอนที่ทุกคนปลอดภัยนั้น ไม่นานก็มีไซเรนเตือนภัยทางอากาศแปลก ๆ ตามด้วยประกาศสัญญาณเตือนภัย ผมในวัยประถมปีที่ 6 ตอนนั้นเพราะร้อนจึงใส่เพียงกางเกงตัวเดียวอ่านการ์ตูนมังงะที่บ้านอยู่ เมื่อได้ยินเสียงระเบิดจึงออกไปดูที่สวนหลังบ้าน เครื่องบินทิ้งระเบิดหนัก B29 บินผ่านไปจากที่สูง เห็นขนาดประมาณ 15 เซนติเมตรได้ ทันใดนั้นมีบางสิ่งเหมือนกับใบโอบะโรสั๊กอย่างปลิวตกลงมาจากเครื่องบินลำนั้น จะระยิบระยับก็ไม่เชิง พรึ้วๆ ก็ไม่เชิง ที่แน่ๆ มันเปล่งประกาย และค่อยๆ ตรงลงมา ความจริงแล้วมันคือระเบิดปรมาณูที่ติดร่มชูชีพ เพราะที่ผ่านมาเครื่องบินอเมริกาก็ไปรบไปปลิวไม่รู้กี่ครั้ง เลยคิดว่าเป็นใบปลิวที่พิมพ์ไว้ว่า “ประเทศญี่ปุ่นพ่ายแพ้” หรือ “อพยพเสยลี” หลังจากนั้น 10-15 นาทีผ่านไป ขณะที่ผมกำลังก้มหน้าอยู่ที่สวน อยู่ดีๆ ก็สัมผัสได้ถึงแสงที่จ้ามาก ระเบิดเพลิงตกลงสินะ เหมือนตกบริเวณใกล้ๆ ผมคิดไปประมาณว่า “จะเป็นอะไร

ไทมเมอร์” และคิดว่าหลังจากนั้น 2-3 นาที รอบนี้คงเป็นลมจากแรงระเบิดที่รุนแรง ไม่ว่าจะไปไม้ เศษรั้ว หรือ กระเบื้องหลังคาเป็นต้น พัดปลิวหายไป แต่ผมโชคดีที่ได้รั้วล้อมไว้ จึงไม่ได้รับบาดเจ็บ ผมคิดว่าภายในบ้านมัน อันตราย เพราะของบนตู้ทั้งหมดตกลงมา ระเบิดปรมาณูมักถูกเรียกว่า “พิกาดง”<sup>23</sup> ซึ่งมันก็เป็นอย่างนั้นจริง ๆ

หลังจากนั้น ผมหนีทั้งเท้าเปล่าไปหาคุณยายของผมที่อยู่หลังบ้าน พี่สาวน้องสาว พวกเราทั้งหมด 5 คน อพยพไปอยู่ที่สุสานบนเนินเขาหลังบ้าน ทางฝั่งของสถานีนางาซากิ ท้องฟ้าทางตอนเหนือมีเมฆหนาเกือบตัว ขึ้น เหมือนว่ามีกระแบริบเปิดใหญ่ของควันทินป็น หรือไม่กี่การระเบิดใหญ่ของสารเคมีในโรงงาน เพราะอยู่บนเขา ทำให้เห็นเปลวไฟที่ขึ้นเกิดไม่ว่าจะมุมไหนของเมืองก็ชัดเจน ผมตกใจกับเมฆรูปเห็ดที่ค่อย ๆ ใหญ่ขึ้น และไม่มีทีท่าจะหายไป ตั้งแต่เย็นจนค่ำ พวกเราทั้ง 3 นอนแถวสุสาน หน่วยเฝ้าระวังก็มาและกล่าวว่า “ทหารอเมริกัน อาจจะขึ้นฝั่งตอนกลางคืนก็เป็นได้” น่าจะประมาณ 5 ทุ่ม พวกเราจึงต้องหวังพึ่งญาติที่โอซาฮายะ เดินเท้าทั้งคืนไปที่เมืองโอซาฮายะซึ่งห่างราว 30 กิโลเมตร ระหว่างทางก็ได้รับข้าวปั้นที่มีคนหุงแจกผู้ประสบภัย

บ้านของผมค้าขายของ ยามสงครามจึงกลายเป็นศูนย์กระจายเสบียงอาหารและเสื้อผ้า ทั่วบริเวณนา กาโกะชิมะ และ นิชิโคจิมาะ วันนั้นพ่อไปทำงานเป็นวิศวกรที่อุตู่ต่อเรือมิตสึบิชิ ส่วนพี่ชายวัย 17-18 ปี เป็นนักเรียนทหาร หรือก็คือถูกเกณฑ์มาใช้แรงงานอยู่ที่อุตู่ต่อเรือคาวะนามิของนางาซากิ ดังนั้นพวกเราห้าคนจึงไม่มีทางเลือกอื่นนอกจากอพยพ

ในสัปดาห์ถัดมาก็ถึงโอซาฮายะ คนที่ทำงานอยู่บริษัทโทรศัพท์ พาผมกลับไปบ้านที่นางาซากิ เพื่อติดต่อ พ่อและพี่ชาย โชคดีที่พ่อและพี่กลับบ้านอย่างปลอดภัย ผมรู้สึกโล่งใจ เหมือนว่าทหารอเมริกันคงจะไม่มากัน แล้ว ผมเลยได้ใช้ชีวิตที่บ้านอยู่กับครอบครัว

มีญาติและคนแถวบ้านที่หายตัวไปบริเวณจุดศูนย์กลางการระเบิด ทำให้ประมาณ 1 สัปดาห์หลังจากนั้น ผมลากรถพ่วงออกไปตรงบริเวณใกล้กับจุดศูนย์กลางการระเบิด ไปกับพ่อ พี่ และเพื่อนบ้าน ตอนช่วง นั้นบ้านที่มีรถพ่วง มีแค่บ้านของผมที่เหมือนเป็นศูนย์กลางการแจกจ่ายข้าวของ เลยทำให้โดนขอร้องให้ทำเรื่องอย่างนั้น แล้วผมก็เดินหาเหล่าคนที่โดนแผลไฟคลอก และเหล่าผู้เสียชีวิตที่เมืองยามาซาโตะซึ่งเป็นจุด ศูนย์กลางที่เกิดระเบิด ผมได้เดินหา ทั้งคนที่ล้มตายบนพื้น ทั้งในหลุมหลบภัย ทั้งสถานที่ทำงาน ทั้งที่อพยพ ก่อนหน้านี้ แม้กระทั่งร่างไร้วิญญาณในน้ำ ในที่สุดก็ได้เจอกับคนที่ตามหา นำร่างขึ้นรถพ่วง ทั้งหมดราวๆ 20 ร่างที่นำไปเผา ถ้าผมจำไม่ผิดผมเรียงก่อน และค่อยเผา เรียงร่างไร้วิญญาณไว้บนแผ่นสังกะสี และรวบรวมไม้ จากบ้านที่พังมาจุดไฟ เผาจนเป็นเถ้ากระดูก คิดว่าใช้เวลาไปประมาณ 15 ชั่วโมง เด็กประถมปีที่ 6 ที่ช่วยกัน ทำเรื่องแบบนั้น ผมกลับไม่คิดว่ามันน่ากลัวเลย ปกติพ่อกับพี่มักจะไม่อยู่บ้าน ที่บ้านจึงมีแค่ผมที่เป็นแรงงาน ผู้ชายทำให้ถูกคาดหวัง ซึ่งทำให้ผมรู้สึกถึงความรับผิดชอบต่าง ๆ อาจจะไม่สนใจอย่างอื่นเลยก็ได้

แต่ก็มีเรื่องที่ไม่สามารถลืมได้เลยอยู่ นั่นก็คือการที่เหล่าผู้คนที่โดนไฟคลอกหรือบาดเจ็บล้มนอนอยู่ ตรงนั้นตรงนี้ กอดขาของผมไม่ปล่อยแล้วพูดว่า “ขอติ่มน้ำที่ ขอน้ำด้วยเถอะ” พวกเขาร้องขอน้ำทั้งที่เกาะขา อยู่อย่างนั้น แต่คุณพ่อกำชับไว้อย่างหนักแน่นว่าอย่าให้เด็ดขาด ถ้าติ่มน้ำแล้วจะตาย ผมก็เลยไม่ได้ให้ แต่ผม คิดว่าไหนๆ เขาอาจจะเสียชีวิตอยู่แล้ว ทั้งๆ ที่หิวน้ำขนาดนั้นแท้ๆ ผมเลยเอาน้ำในกระติกให้คนๆ หนึ่งได้ติ่ม ทันใดนั้นคนๆ นั้นก็เสียชีวิตลงตรงนั้น เรื่องนี้เป็นเรื่องที่ติดอยู่ในใจ ไม่สามารถลืมได้จนถึงทุกวันนี้ แต่ใน ขณะเดียวกันก็รู้สึกว่าได้ทำเรื่องอะไรดีๆ ด้วย เรื่องนี้เป็นเรื่องที่ไม่เคยเล่าให้ใครฟังมาก่อน

หลังจากนั้นผมก็จบการศึกษามัธยมปลายที่นางาซากิ และเริ่มทำงานที่โตเกียว เพราะเหตุผลภายใน ครอบครัว เพราะยังหนุ่มอยู่เลยทำงานอย่างบ้าคลั่งจนไม่ทันได้คำนึงถึงผลกระทบของระเบิดปรมาณูหรือ กัมมันตภาพรังสี และสุขภาพยังแข็งแรงอยู่ด้วย แต่ว่าตั้งแต่ช่วงปีโชวะที่ 40 (ค.ศ.1965) ร่างกายของผมมันเริ่ม

<sup>23</sup> ชื่อเรียกระเบิดปรมาณู ที่สะท้อนความรู้สึกของผู้ที่ได้เห็น Pika หมายถึงแสงสว่างวาบ Don หมายถึงระเบิดเสียงดังตุ้ม

แปลกๆ ไป ป่วยง่ายหายยาก โดยเฉพาะเป็นไข้หวัดจนนอนชมบ่อยครั้ง ตอนแรกก็คิดว่ามันแปลกจัง เพราะทำงานหนักเกินไปหรือเปล่านะ แต่เพราะคำแนะนำจากพี่น้องที่นางาซากิ เลยรีบสมุดบันทึกสุขภาพสำหรับผู้อาบริงสี่เป็นครั้งแรกในเดือนธันวาคมปีโชวะที่ 45 (ค.ศ.1970) ในปี 47-8 ตรงช่วงข้อต่อกระดูกก็เริ่มแปลก ๆ ขึ้นมา ทำงานออกแรงอะไรเล็กน้อยก็แขนขาชา จนแม้แต่ถ้วยชาข้าวก็ไม่สามารถถือไว้ได้ โดยเฉพาะขา ช่วงข้อต่อกระดูกเข้าแย่งลง จนตอนนี้ก็ไม่สามารถนั่งทับได้อย่างที่เห็น ก่อนหน้านี้เคยบาดเจ็บวิพลซ (การบาดเจ็บกล้ามเนื้อ เส้นประสาทบริเวณคอ) เลยอาจมีส่วนอยู่บ้าง แต่ในกรณีของผมนี่คงเป็นเพราะเดินอยู่ในเมืองนางาซากิหลังระเบิดลงแทบทันที ในทุกวันจึงไปสัมผัสสารกัมมันตรังสีเข้า

ในปีโชวะที่ 50 (ค.ศ.1975) ได้มายังฮาระมาจิ และจนตอนนี้ก็ยังมีอาการตรวจสุขภาพในฐานะผู้อาบริงสี่ที่โรงพยาบาลปีละสองครั้ง และได้รับคำรักษาตามโรค ทั้งโรคความดันเลือดสูง โรคเบาหวานแต่กำเนิด และโรคข้อเข่าเสื่อม ซึ่งขาข้างขวาก็บิดเบี้ยวจนใช้งานไม่ได้แล้ว ร่างกายก็อ่อนล้าเหน้อย่างง่าย ช่วงที่หนักที่สุด เดือนหนึ่งก็เคยนอนไปแล้วราว ๆ 20 วันก็เคยมี ตอนนั้นแค่ทำงานก็ยังทำไม่ได้ จนเคยคิดที่จะฆ่าตัวตายด้วยซ้ำจริงๆ นะ ผมไปทำงานที่กรมแรงงานและสวัสดิการสังคมจนนับครั้งไม่ถ้วน ทางเจ้าหน้าที่ที่กรมเองก็เห็นใจ แต่สุดท้าย ผมก็ไม่สามารถหางานทำได้จนยอมแพ้ และเลิกไปที่กรมแรงงาน แม้จะไม่ค่อยอยากไปเท่าไรแต่เห็นทางโรงไฟฟ้าปรมาณูที่เมืองโอคุมะมีงานง่ายๆ อยู่ผมก็เลยไปทำงานที่นั่น รู้สึกว่าจะเป็น 4-5 ปีที่แล้ว ผมสมัครไปโดยปิดบังเรื่องที่เป็นผู้สัมผัสสารกัมมันตรังสีและป่วยง่ายไป แต่ตอนตรวจสุขภาพโดนบอกว่าความดันเลือดสูงจึงถูกปฏิเสธ

ผมกลายเป็นคนว่างงาน ตอนนี้งานเป็นการทำงาน ส่วนผมก็มาทำงานบ้านแทน ทั้งซักผ้า ทั้งทำอาหาร โดยทำไปอย่างระมัดระวังร่างกายไปด้วย ยิ่งการขึ้นลงบันไดของอะพาร์ตเมนต์นี่ยิ่งลำบาก หลังจากนั้น ในการตรวจสุขภาพสองครั้งประจำปีก็พบว่าเม็ดเลือดขาวมีความผิดปกติ จนต้องตรวจอย่างละเอียดถึงสองครั้ง และผมเองก็กังวลเรื่องของลูกด้วย ลูกสองคนที่เรียนอยู่ชั้น.5 และ ม.3 ช่วงประถมทั้งสองคนเลือดกำเดาไหลบ่อยจนน่ากังวล ร่างกายเองก็อ่อนแอมาก พาไปโรงพยาบาลก็ไม่ทราบถึงสาเหตุ มันลำบากจริงๆ พอขึ้นชั้นมัธยมต้นก็แข็งแรงปกติเหมือนเด็กทั่วไป ซึ่งทำให้ผมรู้สึกโล่งใจจริงๆ

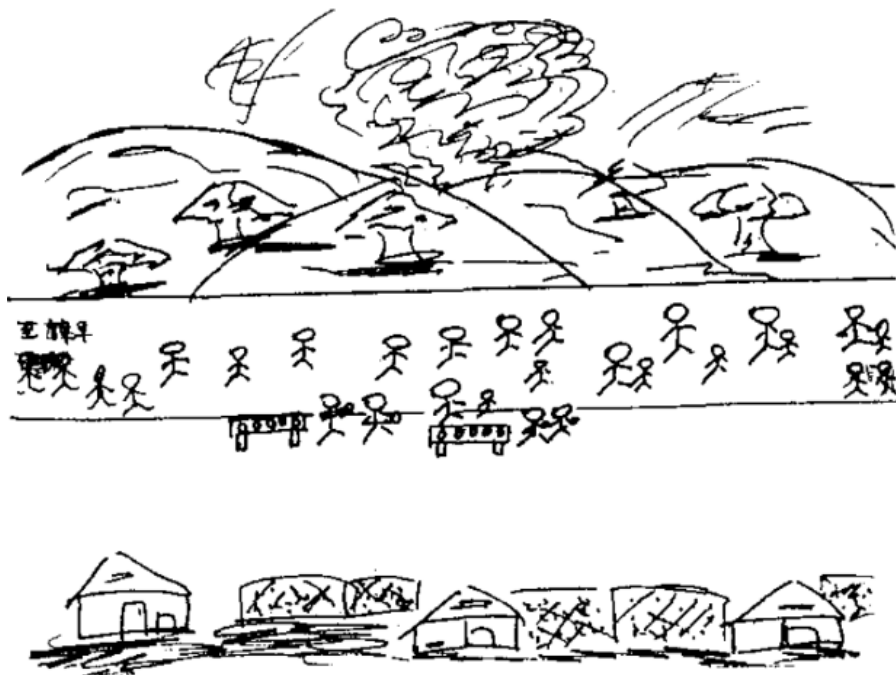
ไม่อยากจะนึกถึงเรื่องระเบิดปรมาณูที่เล่าไป หรือเรื่องสงครามเท่าไร มีบางครั้งที่พอดึกถึงเรื่องของตัวเองเรื่องร่างกายที่กลายมาเป็นแบบนี้แล้วก็น่าจะตายๆ ไปเลยตั้งแต่ตอนนั้น ระเบิดปรมาณูนี้อันตรายจริงๆ ไม่เข้าใจเลยว่าทำไมถึงต้องเป็นนางาซากิด้วย อาจจะเป็นเพราะที่มีสี่ปีชิมิพวกโรงงานอาวุธก็ได้ ถ้าเกิดมีสงครามขึ้นมาอีกครั้งละก็ไม่สามารถมีชีวิตอยู่ได้ จบเห่แน่ๆ ดิฉันจริงๆ ที่ตอนนี้สงบสุขอยู่ ผมไม่อยากจะให้ลูกของผมต้องไปออกรบโดยเด็ดขาด ผมกำชับลูกๆ ไว้อย่างนั้นด้วย ว่า “อย่าไปเข้าร่วมกองกำลังป้องกันตัวเองเด็ดขาด” และผมเองก็ไม่ให้ไปด้วย กำลังทหารและอาวุธก็แทบจะไม่มีอยู่หรอก แต่ผมก็ไม่เห็นด้วยที่จะเพิ่มมันไปมากกว่านี้ น่ากลัวจริงๆ

ขอบคุณที่ฟังเรื่องของผมในฐานะที่ผมเป็นผู้สัมผัสกัมมันตภาพรังสี ถ้าช่วยเหลืออะไรได้ก็อยากจะช่วยโดยปกติแล้วผมจะเก็บตัวอยู่แต่ในบ้านแบบนี้ ถ้ามีอะไรก็มาหาอีกได้นะ ผมอยากไปงานฉายภาพยนตร์เรื่อง ‘เอาความเป็นมนุษย์คืนมา’ ที่จัดขึ้นที่ศูนย์วัฒนธรรมประจำเมืองในเดือนพฤศจิกายนด้วย แต่ก็ไปไม่ได้...ขอบคุณจริงๆ

(บทสัมภาษณ์วันที่ 31 ตุลาคม ค.ศ.1982)

Ⅰ さんが描いた長崎の被爆の状況

長崎浦上地帯一面火の海、その火の明りで遠方からも長崎の惨状が分かるほどだった。



嶋原、諫早方面への国道を、親戚や知人を頼って避難する老人女子供達。沿道には農家の方達が、おにぎりを出して元気 けてくれた。

ภาพเมืองนางาซากิหลังระเบิดลง ที่คุณ I วาด

19. คำบอกเล่าของคุณ J

(อายุในขณะนั้น 18 ปี เพศชาย อาศัยอยู่เมืองฮารามาจิ)

เรื่องราวของเพื่อนที่จากไปในขณะที่ผมยังกุมมือเขาอยู่

ผมเกิดที่จังหวัดฟุคุชิมะ ปีโชวะที่ 2 (ค.ศ.1927) ปีที่ผมได้ประสบกับเหตุการณ์ระเบิดปรมาณูที่จังหวัดนางาซากิ ผมเรียนอยู่ที่โรงเรียนฝึกรักษาชีพ “นางาซากิชินกะโค” โรงเรียนนี้เป็นโรงเรียนหลักสูตร 2 ปี มีนักเรียนประมาณ 100 คน ทุกคนต่างเข้ามาเรียนที่นี่เพราะว่าต้องการหนีทหาร นักเรียนส่วนใหญ่มาจากจังหวัดใกล้เคียง ในขณะที่ผมเป็นเพียงคนเดียวที่มาจากจังหวัดฟุคุชิมะ และคิดว่ามีอีกคนที่มาจากจังหวัดมิยาจิ

ช่วงที่สถานการณ์สงครามเริ่มรุนแรงขึ้น ผมและเพื่อน ๆ เป็นคนงานกระจัดกระจายไปตามโรงงานในสถานที่ต่าง ๆ ของจังหวัดนางาซากิครับ วันที่เกิดเหตุการณ์ทิ้งระเบิด ผมกำลังทำงานอยู่ที่โรงงานทางใต้ซึ่งห่างจากเมืองมินามิยามาเตะซึ่งเป็นจุดที่โดนทิ้งระเบิดราว 4-5 กิโลเมตร ผมจึงได้รับผลของแรงระเบิดในขณะที่ทำงานอยู่ในโรงงานครับ ตอนนั้นผมเหมือนได้ยินเสียงระเบิดที่ดังมากๆ ราวกับว่ามีคนมาตบหน้าผมเลยครับ กระเบื้องหลังคาตกลงมาและเศษกระจกแตกออกจกกันกระเด็นมาบาดที่ไหล่ของผม ผมจึงมี



บาดแผลประมาณ 3-4 เซนติเมตร จนกระทั่งตอนนี้ยังคงมีแผลเป็นที่ยังอยู่บนไหล่ของผมอยู่เลยครับ แต่อย่างไรก็ดีผมได้รับแผลเพียงกระจกบาดเท่านั้นครับ ไม่ได้รับผลกระทบจากกัมมันตภาพรังสีแต่อย่างใด

ผมยังคงจดจำเหตุการณ์ในวันนั้นได้ดี หลังจากที่ทิ้งระเบิด กลุ่มควันจากระเบิดก่อตัวขึ้นมาเป็นเมฆ และเมืองทั้งเมืองถูกปกคลุมไปด้วยความมืดมิดอย่างรวดเร็ว ในขณะที่ผมกำลังดูความเรียบร้อยอยู่ภายในโรงงาน หลังจากนั้นเพียงไม่กี่นาที เพื่อนของผมที่ทำงานอยู่โรงงานของมิทซูบิชิกลับเข้ามาที่โรงเรียนในสภาพบาดเจ็บสาหัส ใบหน้าเต็มไปด้วยแผลไฟไหม้ทั้งผิวหนังยังลอกออกมาด้วย ผมจึงใช้กรรไกรตัดผิวหนังพวกนั้นและใช้ยาทา แต่อย่างไรก็ตาม ยาที่มีในขณะนั้นคือยาจำพวกยาแดง หรือยาทาแผลไฟไหม้ และยายังมีจำนวนน้อยเกินกว่าจะให้ทุกคนได้ นั่นจึงทำให้มีคนเสียชีวิตตามมาอีก 4-5 คน สภาพของแผลไฟไหม้ เช่น บนใบหน้าจะเป็นแผลพุพอง ส่วนแผลผิวหนังลอกไม่ใช่แค่ผิวหนังเปิด แต่เป็นแผลเหวอะหะซึ่งเต็มไปด้วยเลือด หอพักนักเรียนกลายเป็นโรงพยาบาลสนามชั่วคราว ผมและคนอื่นที่ยังแข็งแรงดีจึงตั้งทีมพยาบาลและเข้าช่วยเหลือนักเรียนในโรงเรียนทั้งหมดที่ถูกไฟไหม้และคนที่บาดเจ็บโดยไม่คำนึงว่าใครเป็นใคร ถึงแม้ว่าจะช่วยทำแผลหรือปฐมพยาบาลเบื้องต้นอย่างสุดความสามารถแล้ว แต่ก็ไม่มีทั้งยาและอาหาร และยังมีผู้ที่เสียชีวิตบนเปลหามในขณะที่กำลังถูกส่งตัวมาด้วย ท้ายที่สุดแล้วจำนวนผู้บาดเจ็บที่มาจากพื้นที่ใกล้เคียงจังหวัดนางาซากิก็ค่อย ๆ ลดลง เนื่องจากครอบครัวหรือผู้ปกครองต่างมารับตัวพวกเขาไป

เพื่อนคนหนึ่งจากไปในขณะที่ผมยังกุมมือเขาอยู่ มือของเขานั้นเย็นเฉียบ เขาชื่อว่าอิชิบาชิ เขาบอกกับผมเป็นครั้งสุดท้ายว่า “ขอบคุณนะ” และจากไป พ่อของเขารับวิงมาหาเขาแต่ก็ไม่ทันเสียแล้ว จนถึงตอนนี้ยังคงเป็นเหตุการณ์ที่ผมไม่สามารถลืมได้เลย

ตอนที่ผมปฐมพยาบาลให้เพื่อนที่บาดเจ็บนั้น มันมีทั้งกลิ่นเลือดและสภาพบาดแผลที่น่ากลัว แต่ผมตั้งใจทำแผลอย่างเดียวจนตัดเรื่องพวกนั้นทิ้งจากหัวไปหมดเลย

ประมาณ 1 อาทิตย์หลังจากเกิดเหตุการณ์ระเบิด ผมได้ไปบริเวณใกล้เคียงกับจุดที่ทิ้งระเบิด ทุกอย่างโดนแรงระเบิดเผาราบเป็นหน้ากลอง ผมไม่รู้ด้วยซ้ำว่าทางไหนคือทางที่เดินได้จนกระทั่งผมเดินลงไปในหลุมที่ไว้สำหรับขับถ่าย และดูเหมือนว่ามีศพที่ไหม้เกรียมนอนเกลื่อนกราด หลังจากนั้นก็ค่อย ๆ ได้กลิ่นเหม็นเน่าและกลิ่นไหม้ของคนที่ถูกเผา ซึ่งกลิ่นพวกนั้นมันแยเกินกว่าจะบรรยายได้ทั้งหมด

ผมอาศัยอยู่ที่จังหวัดนางาซากิจนถึงปีโชวะที่ 21 (ค.ศ.1946)

สงครามคืออาชญากรรมร้ายแรง ผมไม่ต้องการให้ประเทศกลับมาถูกปกครองด้วยทหารอีกครั้ง ทุกคนต่างคาดหวังถึงโลกที่ไร้สงครามที่จะเกิดจากแรงขับเคลื่อนของประชาชนและกลุ่มต่อต้านอาวุธนิวเคลียร์ ผมและภรรยาได้ไปดูหนังเรื่อง “เอาความเป็นมนุษย์คืนมา” ซึ่งฉายอยู่ที่ศูนย์วัฒนธรรมของเมืองนางาซากิ ช่วงเวลาในเดือนพฤษภาคมเป็นช่วงเวลาที่เกิดเรื่องราวมากมาย อย่างไรก็ตามเราก็คงต้องพยายามกันต่อไปครับ

(บทสัมภาษณ์วันที่ 31 ตุลาคม ค.ศ.1982)

## 20. คำบอกเล่าของคุณ K

(อายุในขณะนั้น 16 ปี เพศชาย อาศัยอยู่เมืองโซมะ)

### เครื่องบินทิ้งระเบิด B29 โปรมยเสียบอาหารมาให้หรือ

ผมเกิดที่เมืองโซมะในเดือนพฤศจิกายนปีโชวะที่ 3 (ค.ศ.1928) ทำงานผลิตดินปืนอยู่ที่บริษัทเภสัชภัณฑ์ยามากาวะ (Yamakawa Pharmaceutical) ในโตเกียวตั้งแต่เดือนเมษายน ปีโชวะที่ 18 (ค.ศ.1943) จนถึงมกราคม ปีโชวะที่ 19 (ค.ศ.1944) ต่อมาได้อาสาเข้าร่วมกองทัพเรือเพราะค่อนข้างคล้ายกับการระดม

แรงงาน ทุกคนจัดงานเลี้ยงส่งให้ในวันที่ผมกลับถึงเมืองโซมะในวันที่ 3 กุมภาพันธ์ แม้กระทั่งโรงงานที่โตเกียวเองก็จัดให้อีกครั้งในวันที่ 5 กุมภาพันธ์ ผมเข้าร่วมหน่วยนาวิกโยธินทาเคยามะในฐานะทัพโยโกสุกะเมื่อวันที่ 5 กุมภาพันธ์ ปีโชวะที่ 19 (ค.ศ.1944) วันเดียวกับที่เกิดไฟไหม้ครั้งใหญ่ที่แถบฮารากะในเมืองโซมะ

หลังจากที่ผมเข้ากองทัพเรือ การฝึกนั้นหนักมากแถมตัวผมก็เล็กทำให้การแขวนเปลญวนลำบากมาก ในวันที่ 5 เดือนพฤษภาคม ปีโชวะที่ 19 (ค.ศ.1944) ผมได้เลื่อนตำแหน่งเป็นพลทุนระเบิดรุ่นที่ 26 โดยย้ายจากโยโกสุกะไปที่โอมิโนโตะในจังหวัดอาโอโมริ ผมคิดว่าคงจะเป็นพลทุนระเบิดรุ่นสุดท้ายแล้ว ต่อมาในวันที่ 25 ตุลาคม ผมก็ได้เป็นลูกเรือของเรือดำน้ำพิเศษหมายเลข 72 และกลายเป็นพลทหารระดับล่างในเดือนพฤศจิกายน และค่อยๆ ได้รับการเลื่อนตำแหน่งเพิ่มขึ้นเรื่อยๆ และผมได้ไปเยือนหมู่เกาะต่างๆ เช่น หมู่เกาะอะลูเทียน หมู่เกาะคาราฟูโตะ และเกาะฮอกไกโดในแปซิฟิกเหนืออีกด้วย ในสงครามจริง แคตอร์ปีโด 1 ลูกมันไม่ได้รุนแรงขนาดนั้น ตามที่เขียนไว้ในสมุดบันทึกทหารเล่มนี้ ในตอนนั้นผมได้รับ “เครื่องราชอิสริยาภรณ์” ที่จะได้รับเมื่อมีผลงานดี หรือเมื่อทำผลงานได้ยอดเยี่ยมในสงครามจริง และผมได้รับเครื่องราชอิสริยาภรณ์เหยี่ยวทองคำถึงสามครั้ง ซึ่งเหรียญนี้มีทั้งหมด 4 ชั้น ไล่ลำดับไปตั้งแต่ลำดับ 1 ลำดับ 2 ลำดับ 3 และลำดับ 4

ต่อมา ผมได้ไปเข้าหน่วยพิทักษ์เรือของ โยโกฮามะเคยมีบางกรณีที่มีคนหลบหนี 3 คนบนเรือส่งสินค้า พวกเขาพยายามไปที่เอเชียตะวันออกเฉียงใต้ แต่สุดท้ายก็ถูกสังหารในสนามรบ โชคดีที่ผมอยู่ภายในประเทศตัวเอง ไม่ใช่ดินแดนอาณานิคมนั้น วันที่ 29 มีนาคม โชวะที่ 20 (ค.ศ.1945) ผมได้รับมอบหมายให้ประจำการที่ค่ายคาโงชิมะจังหวัดโยโกฮามะ ที่ค่ายคาโงชิมะ สนามบินคาโนยะอยู่ใกล้ ดังนั้นผมจึงเห็นหน่วยคามิกาเซอออกไปแต่เช้าตรู่อยู่บ่อยครั้ง เห็นเครื่องบิน 10-20 ลำบินออกไปจากโอกินาวะ และกลับมาเพียงแค่วันเดียว และผมก็คิดว่า "โอ้ คงโดนโจมตีมาสินะ" นอกจากนี้ บนท้องฟ้าเหนือซากุระจิมะก็มีการต่อสู้ทางอากาศระหว่างกองทัพญี่ปุ่นและเครื่องบินกรีมแมนของอเมริกา

พอผมสังเกตเห็นควันสีขาวบางอย่างที่เครื่องบินญี่ปุ่นปล่อยออกมา เครื่องบินลำนั้นก็ระเบิดทันที แต่ทหารญี่ปุ่นนั้นดูเหมือนว่าจะกระโดดร่มหนีไปได้ทัน หลังจากนั้นที่เกาะคาโงชิมะ ผมหยิบใบปลิวที่กระจัดกระจายมาจากเครื่องบินอเมริกา แผ่นพับนั้นถูกพิมพ์เป็น ไว้ว่า “ก่อนเวลาห้านาทีก่อน” การโจมตีแผ่นดินใหญ่ของญี่ปุ่นมีเพียงปัญหาเรื่องเวลาเท่านั้น และเนื้อหาในแผ่นพับนั้นเกี่ยวกับการให้ญี่ปุ่นริบยอมจำนวน ผมหยิบขึ้นมา 5-6 ใบ และผมก็ไม่รู้ว่าจะไปไหนแล้ว

ในวันที่ 9 มิถุนายน คราวนี้ผมติดอยู่ที่นางาซากิและเกิดระเบิดขึ้นที่นั่น ที่นางาซากิผมรับผิดชอบการรักษาความปลอดภัยรอบเกาะเดจิมะทางตอนใต้ ที่นางาซากินั้นไม่มีการจู่โจมทางอากาศ แต่ดูเหมือนว่าที่ซาเซโบะและสถานที่อื่นๆ มักจะมีการจู่โจมทางอากาศ อยู่บ่อยๆ เครื่องบินทิ้งระเบิด B29 ประมาณ 50 ลำกำลังมุ่งหน้าไปยังซาเซโบะมันช่างน่ากลัวจริงๆ รวกับว่าท้องฟ้าจะเปลี่ยนเป็นสีดำและพุงหน้ามาหาเรา เป็นเรื่องที่เหลือเชื่อจริงๆ ผมเคยซ่อนอยู่ในเงามืดของกล่อง ใดๆ ที่ไม่มีทางรอดได้ด้วยเงาของถังขยะเลยด้วยซ้ำ

วันที่ 9 สิงหาคม ซึ่งเป็นวันที่ระเบิดปรมาณูที่นางาซากิ แต่เป็นวันที่ท้องฟ้าแจ่มใสและร้อนระอุตั้งแต่เช้า ถึงแม้จะอยู่ในหน่วยตรวจตราแต่ผมก็ไม่ได้ทำงานแบบนั้น ผมทำงานถือพลั่วรื้อกับเป็นกรรมกรก่อสร้างเพื่อผสมดินปืนหรืออะไรพวกนั้น ในสถานที่ที่เรียกว่า โออุระโซหมายเลขสอง อยู่ห่างจากจุดที่ระเบิดไปทางใต้ประมาณ 4 กิโลเมตร ผมจำได้ว่ามีเครื่องบิน B29 ลำหนึ่งวนเวียนอยู่บนท้องฟ้าตอนประมาณเก้าโมงครึ่ง แล้ว

ยังมีเครื่องบินอเมริกาสีขาว ที่บนลำตัวเขียนว่า Lockheed P38 บินมา มีสัญญาณดังเตือนภัยสงครามตั้งแต่ 9 โมงเช้า

เวลาประมาณ 11 นาฬิกากระเบิดปรมาณูก็ถูกทิ้งลงมา ผมเห็นบางอย่างตกลงมาจากเครื่องบินทิ้งระเบิด B29 บนท้องฟ้าสูงประมาณ 1000 เมตรในครั้งแรกก็เห็นว่ามันดูเล็กเท่าขนตาเส้นหนึ่งเท่านั้น ตอนนั้นเองผมคิดว่าอเมริกาเป็นประเทศที่ใจดีคงจะหย่อนอาหารมาให้กับคนญี่ปุ่นที่ขาดแคลนหรือเปล่านะ ตอนนั้นผมมองมันด้วยความรู้สึกแบบนั้นจริง ๆ ผมมองไม่เห็นมันอีกจนกระทั่งตอนที่มันระเบิดซึ่งกว่ามันจะระเบิดก็ใช้เวลากว่า 1 นาที ต้องมีผู้เห็นเหตุการณ์นั้นจำนวนมากแน่นอนการระเบิดครั้งนั้นมีแสงวาบสุด ๆ รู้สึกว่าแสงนั้นเป็นแสงวาบสีส้มที่เหมือนกับมีสายฟ้าผ่าลงมาหลายเส้นพร้อมๆ กัน แต่ไม่ใช่แค่แสงเท่านั้นยังมีรังสีความร้อนที่ร้อนมากๆ รวบรวมว่าถูกคนที่ศึบถ่านร้อนๆ มาแนบติดกับร่างกายอีกด้วย ทันใดนั้นก็มีการระเบิดเกิดขึ้นพร้อมกับเสียงที่ดังกว่าฟ้าร้อง 10 เท่า ผมรู้สึกเหมือนถูกลมกระโชกแรงกระแทกเข้าที่อกและกระเด็นไปไกลเกือบ 2 เมตร แต่ด้วยนิสัยที่เคยชินเวลาเกิดเหตุการณ์ฉุกเฉินผมก็จะเอามือทั้งสองข้างปิดตา หู จมูกกั้น และท้ายที่สุดก็รู้สึกเหมือนมีระเบิดตกลงมาที่ใกล้ๆ ผมด้วยความโชคดีตัวผมไม่ได้ถูกไฟไหม้หรือได้รับบาดเจ็บสาหัสสมากนัก ผมแหงนหน้ามองฟ้าต่างๆ ที่ไม่รู้ทิศทางและได้เห็นเมฆประหลาดสีดำทะมึนน่าขนลุก มันเป็นเมฆที่รูปร่างเหมือนเห็ด

พอผมลองกลับไปที่กองบัญชาการก็มีแต่เศษกระเบื้องและหลังคาแตกกระจายละอะเต็มไปหมด จากนั้นผมจึงไปที่จังหวัดนางาซากิตามคำแนะนำสำหรับประชาชนทั่วไป ซึ่งผมก็ขึ้นเหนือจากเมืองโออูระไปจนถึงสถานีนางาซากิ ที่ทางเหนือของสถานีน่าจะเป็นศูนย์กลางของการระเบิดผมจึงรู้สึกดีใจที่ไม่ได้เข้าไปใกล้ที่นั่นมากนัก แต่ยังมีสิ่งตามๆ ที่ผมอยู่ก็มีทั้งประตูเหล็กที่สภาพบิดเบี้ยว และไฟที่ลุกโชนไปในทุกๆ ที่ยิ่งไปกว่านั้นถึงของบริษัทยูทิลิตี้ก็ระเบิดเสียงดังสนั่นและทำให้ไฟปะทุลามไปทั่วทั้งอากาศ ดูเหมือนว่าทั้งเมืองจะลุกเป็นไฟนานกว่า 2 ชั่วโมงเลยทีเดียว ในตอนนั้นมีการประมูลวัวล่องหน้า<sup>24</sup> เกิดขึ้นพอดีทำให้มีลูกวัวหลายสิบตัวหนีออกไปคนละทิศคนละทาง พวกเราจับมันได้ตัวสองตัวจากนั้นก็ฆ่าและกินมันในภายหลัง มันอร่อยมากจริงๆ แต่เรื่องนั้นเอาไว้ทีหลัง ผมเห็นคนที่สวมชุดกิโมโนสีขาวดูเหมือนยังปลอดภัยดี แต่ก็เห็นคนที่ใส่สีดำกับคนที่ใส่เสื้อสีอื่นๆ มีแผลไฟไหม้ที่รุนแรงมาก มีผู้หญิงคนหนึ่งที่ถูกทั้งไฟไหม้จนกางเกงมอเนเปะผ้ามัดย้อมแบบคาสูริ<sup>25</sup> ไหม้กลายเป็นสีดำ ผมไหม้จนซีฟู และใบหน้าครึ่งหนึ่งของเธอยังถูกเผาไหม้เป็นแผลพุพองอีก นอกจากนี้ก็มีคนที่ซิกหนึ่งถูกเผาโดยรังสีความร้อนแต่อีกซิกหนึ่งยังปกติดีเช่นกัน ผมช่วยหญิงสาวคนหนึ่งที่ได้เดินไม่ได้ที่อยู่ข้างๆ ผม ถึงแม้ว่าผมจะคอยดูแลและปฐมพยาบาลเบื้องต้นให้ แต่ก็ไม่มียาที่เพียงพอทำได้แค่ทายาทาแผลอะคลิโนล<sup>26</sup> สีเหลืองให้เท่านั้น มันทำให้สบายใจขึ้นได้เล็กน้อยก็จริง แต่ก็เหมือนกับการใช้ยาสีฟันเป็นยารักษาบาดแผลนั้นแหละ

สงครามถูกประกาศว่าสิ้นสุดลงเมื่อวันที่ 15 สิงหาคมตอนเที่ยงคืน ผมได้ยืนมันตอนที่อยู่ที่บ้านในสวน จากนั้นวันที่ 25 สิงหาคมผมก็ถูกปลดประจำการที่โซมะ และรับช่วงต่อกิจการของครอบครัว ผมได้รับสมุดบันทึกสุขภาพสำหรับผู้ประสบภัยจากระเบิดปรมาณู<sup>27</sup> แต่ก็ยังสุขภาพดีและอยู่มาได้จนถึงขนาดนี้ ผมตรวจสุขภาพปีละ 2 ครั้งที่คุณยาสาธารณสุขชั่วคราวฮารามาจิ และถูกสั่งให้หยุดทำงานเพราะร่างกายอยู่ใน

<sup>24</sup> เป็นการเปิดให้ประมูลลูกวัวล่องหน้า และนำมาส่งให้เมื่อลูกวัวเหล่านั้นโตแล้ว

<sup>25</sup> Monpe กางเกงแบบดั้งเดิมของญี่ปุ่นที่ผู้หญิงมักจะใส่ทำงานเกษตร สมัยสงครามนิยมนำกิโมโนมาตัดเย็บเป็นกางเกงเพื่อความคล่องตัว Kasuri เป็นกรรมวิธีทอผ้าแบบดั้งเดิม มัดย้อมสีด้ายก่อนทอ ทำให้ลายดูมีเอกลักษณ์

<sup>26</sup> ยีห้อยาทาแผลสำหรับปฐมพยาบาลเบื้องต้น

<sup>27</sup> เป็นสมุดที่ใช้บันทึกสุขภาพของผู้ที่รอดชีวิตจากระเบิดปรมาณู

สภาพที่อันตราย แต่ผมก็ไม่สนใจและใช้ชีวิตแบบปกติต่อไปจนตอนนี้ก็มีลูก 2 คนแล้ว และพวกเขาที่มีสุขภาพ แข็งแรงดี

ผมคิดว่าผมเป็นคนโชคดี ไม่ว่าจะเป็ตอนที่มีการทิ้งระเบิดที่โยโกฮามะ ผมก็พึ่งออกจากโยโกฮามะ มาได้แค่ 2 วันเท่านั้น หรือจะเป็นตอนที่มีการทิ้งระเบิดที่นางาซากิผมก็ไม่ได้ถูกระเบิดโดยตรง สงครามนะ ใใครๆ ก็คงไม่อยากจะให้เกิดขึ้นอีกเป็นครั้งที่ 2 หรือ เพื่อลูกหลานของพวกเราเองก็ด้วย พวกเด็กๆ น่าสงสาร มาก

(บทสัมภาษณ์วันที่ 22 พฤษภาคม 1983)

## 21. คำบอกเล่าของคุณคิโยโนะ คาเนะโร

(ปัจจุบันอาศัยอยู่ที่ฮิโนมะจิ เมืองฮารามาจิ)

### การทำข่าวเรือประมงโดโกะฟุคุเรียวมารุในฐานะนักหนังสือพิมพ์

ตอนที่เกิดเหตุการณ์เรือประมงโดโกะฟุคุเรียวมารุ ผมอายุได้ 31 ปี ในตอนนั้นผมเป็นนักหนังสือพิมพ์ ของหนังสือพิมพ์อาซาฮิอยู่ที่สถานีสื่อสารของเมืองชิมะตะในจังหวัดชิซุโอะกะ

ตอนที่ผมได้รับรายงานเกี่ยวกับเรือประมงโดโกะฟุคุเรียวมารุคดีแห่งศตวรรษน่าจะเป็นวันที่ 16 มีนาคม เวลาประมาณตี 3 รายงานจากสำนักงานใหญ่กล่าวว่า “ได้รับรายงานผ่านทางโทรเลขรอยเตอร์ส ว่า เรือประมงจากยาอิซุเห็นแสงวาบขึ้นมาและโดนไฟไหม้ ขอให้ตรวจสอบทันที” ในช่วงเวลานั้นเองผมก็ยุ่งๆ อยู่ กับการทำข่าวคดีฆาตกรรมเด็กผู้หญิงที่เมืองชิมะตะอยู่ แต่เนื่องจากพนักงานฝ่ายหนังสือพิมพ์อาซาฮิของ สถานีสื่อสารในเมืองชิมะตะมีแค่ผมคนเดียว เลยจำเป็นต้องนั่งแท็กซี่ไปที่เมืองยาอิซุโดยด่วน ถนนโทโกโดทาง หลวงหมายเลขหนึ่งในตอนนั้นไม่รู้ว่ายังไม่ได้ลาดยางถนนหรือลาดยางไว้แบบง่าย ๆ ไปถึงได้มีต้นสนเรียงราย ตามสองข้างทางเต็มไปด้วยหมอก

ผมเดินทางไปถึงยาอิซุเวลาประมาณ 6-7 โมงเช้าและก็รีบตรงดิ่งไปเก็บข้อมูลเรือประมงโดโกะฟุคุ รียาวมารุเพื่อนำไปทำข่าว ผมเริ่มสอบถามสิ่งที่เกิดขึ้นจากคนงานบนเรือและก็ถ่ายรูปรอบ ๆ เรือไว้ จากคำ กล่าวของคนงานบนเรือบอกว่า “อยู่ดีๆ ก็เห็นแสงวาบขึ้นมา” “เหมือนมีอะไรคล้ายๆ ชี้อัดตกลงมา” แต่จาก ที่ผมสังเกตดูสภาพของคนงานเหล่านั้นก็ดูแข็งแรงดีไม่เห็นว่าจะมีแผลไฟไหม้อะไรเลย แหตกลาต่าง ๆ ก็ถูก เก็บไปแล้ว

ผมลองขึ้นไปสำรวจบนเรือดูทั้งดาดฟ้าเรือในห้องต่าง ๆ ผมก็เจอกับสิ่งที่คล้ายกับชี้อัดและก็ลองเอา นิ้วสัมผัสมันดู ตอนนั้นผมเพิ่งมารู้ว่า สิ่งนั้นมันคือ “ชี้อัดแห่งความตาย” และรู้ว่าสารกัมมันตรังสีนั้นน่ากลัวแค่ ไหน ตอนนั้นผมไม่น่าไปสัมผัสมันเลย แต่ก็คงช่วยไม่ได้เพราะ ณ เวลานั้นไม่มีใครรู้จักว่าสารกัมมันตรังสีคือ อะไร ความไม่รู้ของคนช่างน่ากลัวจริง ๆ ตอนที่ผมบิบ “ชี้อัดแห่งความตาย” นั้นด้วยมือของผม มันมีขนาด ประมาณครึ่งหนึ่งของเมล็ดข้าว รูปร่างคล้ายก้อนเกลือและมีลักษณะเป็นเม็ด สีขาวฟูๆ ตอนนั้นผมยังใช้ไม้ กวาด กวาดมากองรวมกันแล้วเอาไปทิ้งอยู่เลย พอมาคิดดูตอนนี้มันทำให้ผมสะท้อนใจมาก

พอถึงช่วงเที่ยง นักข่าวจากสำนักงานใหญ่ของหนังสือพิมพ์แต่ละแห่งก็แห่กันเข้ามาทำข่าวนี้ นักข่าว ที่มาจากฝ่ายข่าวท้องถิ่นของหนังสือพิมพ์อาซาฮิก็เข้ามาช่วยให้กำลังใจในช่วงเย็นด้วย หลังจากนั้นตลอด 1

อาทิตย์ผมใช้เวลากับการเก็บข้อมูลข่าวนั้นตลอด จนไม่มีเวลาได้หลับได้นอน ผมเป็นนักข่าวชั้นผู้น้อยและมีความรู้เรื่องภูมิศาสตร์ ทำให้ถูกเรียกไปใช้งานในส่วนของสหกรณ์ประมงและแนะนำสถานที่ต่างๆ พร้อมกับทำข่าวเรื่อนั้นไปด้วย งานที่ท่าโสมเข้ามาทุกวันแบบนี้ดำเนินไปเรื่อยๆ จนทำให้ร่างกายผมทรุดลงในที่สุด

สำนักข่าวโยะมิอูริได้ฉวยโอกาสตีพิมพ์ข่าวหนังสือพิมพ์รอบเช้าฉบับพิเศษเกี่ยวกับเรือโดโกะฟุคุเรียวมารุก่อนสำนักข่าวอื่นๆ ในวันที่ 6 มีนาคม ผู้ตีพิมพ์ข่าวคติใหญ่ที่สุดในศตวรรษนี้ก่อนใคร เป็นนักข่าวจากสถานีสื่อสารโยะมิอูริมีนามว่า อาเบะ เขาเพิ่งจะเรียนจบได้ไม่นาน แต่เพราะเขาเข้าพักอาศัยอยู่ที่บ้านของญาติที่เป็นเจ้าของเรือโดโกะฟุคุเรียวมารุก่อน ได้ยินว่าเรือฟุคุเรียวมารุกลับเข้าท่าโดยที่ไม่รู้ว่าเรื่อนั้นมีสารกัมมันตรังสีอยู่ในวันที่ 14 มีนาคม จากนั้นลูกชายวัยมัธยมปลายของเจ้าของหอพัก ก็พูดกับคุณอาเบะว่า “เรื่อนั้นดูท่ามันจะแปลกๆ นะ” ทำให้คุณอาเบะเริ่มสืบค้น โชคดีที่ตอนหนังสือพิมพ์โยะมิอูริได้มีแผนตีพิมพ์เรื่องการระเบิดปรมาณูเป็นตอนๆ อย่างต่อเนื่อง ในชื่อของ “ในที่สุดก็ว่าพระอาทิตย์ได้แล้ว” ผมได้อ่านหัวข้อนี้ทำให้ผมรู้สึกได้ว่ามัน “แปลก” อาเบะเขียนบทความซึ่งมีเพียงแค่ประมาณ 20 บรรทัด และส่งต่อให้สำนักงานใหญ่ บรรณาธิการดูใจว่าเรื่องนี้เป็นเรื่องเกี่ยวกับระเบิดปรมาณู แล้วก็เขาเสนอข่าวในฉบับสุดท้ายในวันที่ 16 และกลายเป็นสื่ूपข่าว ผมคิดว่าถ้าไม่มีแผนตีพิมพ์เรื่องการระเบิดปรมาณูนั้น บรรณาธิการอาจปฏิเสธบทความนี้ ผมคิดว่าบรรณาธิการของสำนักงานใหญ่มีบทบาทสำคัญ พวกเขามีความเชี่ยวชาญและความมั่นใจก็เลยเสนอให้ข่าวนี้เป็นข่าวหน้าหนึ่ง

อาเบะเป็นลูกชายของพระที่เมืองอิโต จังหวัดชิซุโอะกะและสนิทกันกับผมเพราะว่าเขาก็เป็นนักข่าว เขาเป็นคนนิสัยดี ไปกินข้าวด้วยกันบ่อย เคยให้ยืมเงิน และเขามาเที่ยวบ้านของผมบ่อยด้วย เพราะว่าเขาทำให้ข่าวนี้เป็นสื่ूपใหญ่ เขาจึงได้รับรางวัล “คิคุชิ คัง” แล้วก็เริ่มทำงานที่สำนักงานใหญ่ หลังจากนั้นเขาก็ลาออกจากการงาน และตอนนี้ก็ยังคงอยู่ที่เมืองอิโต

หลังจากเหตุการณ์นี้ การปนเปื้อนรังสีของปลาทูนากลายเป็นประเด็นร้อน ปลาทูนากที่ปนเปื้อนรังสีถูกรวบรวมและกำจัดโดยการฝังในปริมาณมาก ทำให้ไม่มีใครในญี่ปุ่นกินทูนากและราคาก็ต่ำมากมีคนกินปลาทูนากที่ไม่ปนเปื้อนรังสีเพราะกังวลและมีบางคนบอกว่าถ้าคุณกินเข้าไป คุณจะได้รับรังสี มีคนญี่ปุ่นบางคนเข้าใจผิดว่ารังสีเป็นโรค สหรัฐอเมริกาไม่ได้ให้คำแนะนำใดๆ และรัฐบาลญี่ปุ่นก็ไม่รู้ว่าควรทำอะไรและทำได้เพียงใช้มาตรการที่ไม่เกี่ยวข้องเท่านั้น ในเวลานั้น ประชาชนทั่วไปและชาวประมงไม่มีความรู้ว่าจะระเบิดปรมาณูคืออะไร กัมมันตภาพรังสีหรือครึ่งชีวิต<sup>28</sup> คืออะไร ดังนั้นจึงเกิดเหตุการณ์ลูกเรือของเรือโดโกะฟุคุเรียวมารุได้รับรังสีในตอนแรก ทุกคนคิดว่ามันเป็นเพียงแผลไหม้ และไม่มีใครรู้ว่ามันเป็นอาการของการได้รับรังสีเฉียบพลัน แม้แต่แพทย์ที่ศูนย์สาธารณสุขในเมืองฟุจิเอดะก็ยังไม่รู้ว่าเขาเป็นโรคอะไร ถึงแม้จะตรวจที่สถาบันสาธารณสุขประจำจังหวัดชิซุโอะกะแล้ว พวกเขาก็ยังหาสาเหตุไม่ได้ จากนั้นพวกเขาก็ไปที่โรงพยาบาลของมหาวิทยาลัยโตเกียว ในที่สุดพวกเขาก็ได้รับแจ้งผลว่าอาจเป็นเพราะได้รับรังสี หลังจากนั้นพวกเขาก็เข้ารับการรักษาในโรงพยาบาลและผู้คนในสมัยนั้นยังไม่รู้จักรังสีมากนัก

<sup>28</sup> ครึ่งชีวิต (half life) ของสารกัมมันตรังสี หมายถึง ระยะเวลาที่นิวเคลียสของธาตุกัมมันตรังสีสลายตัวจนเหลือเพียงครึ่งหนึ่งของปริมาณเดิม โดยครึ่งชีวิตเป็นสมบัติเฉพาะตัวของแต่ละไอโซโทปและสามารถใช้เปรียบเทียบอัตราการสลายตัวของธาตุกัมมันตรังสีแต่ละชนิดได้ เช่น Cesium-137, Cs-137, ซีเซียม-137 คือ ไอโซโทปของซีเซียมซึ่งเป็นสารกัมมันตภาพรังสี มีครึ่งชีวิต 30 ปี

ผมสัมผัส "ซีเถ้าแห่งความตาย" โดยตรง ดังนั้นผมจึงอาจได้รับรังสีเล็กน้อย แต่ผมไม่ได้ไปโรงพยาบาล เพราะผมรู้สึกว่าย่างแข็งแรงอยู่ อย่างไรก็ตาม สองหรือสามวันหลังจากสัมผัสกับรังสี เจ้าหน้าที่มาวัดความเข้มข้นของรังสีที่ศีรษะด้วยเครื่องมือวัดกัมมันตภาพรังสีจากนั้นก็ตัดผมของผมออกทั้งหมด นักข่าวคนอื่นก็ถูกตัดผมเช่นกัน ส่วนเรือโดโกะฟุคุเรียวมารุก็ถูกห้ามเข้าใกล้เนื่องจากปนเปื้อนกัมมันตภาพรังสี

หัวหน้าสถานีวิทยุสื่อสาร อาอิกิจิ คูโบายามะ ซึ่งเสียชีวิตในเดือนกันยายน กล่าวกันว่าเขาเสียชีวิตเพราะได้รับรังสี แต่ผมเชื่อว่าเขาเสียชีวิตด้วยโรคติดเชื้อ เมื่อก่อน ชูสุ ภรรยาของนายคูโบายามะ ใช้ชีวิตอย่างยากจนในครอบครัวชาวประมงธรรมดา แต่ปัจจุบันหลังจากเหตุการณ์นั้น เธอได้บรรยายและพูดในที่สาธารณะเกี่ยวกับเหตุการณ์ดังกล่าว มีการมาสัมภาษณ์จากสื่อมวลชนมากมาย และเธอได้ไปเยี่ยมนักข่าวในยาอิชิเพื่อสอบถามถึงวิธีการตอบคำถาม ผมก็สอนวิธีการตอบคำถามให้กับเธอ แรกๆ เธอก็ประหม่า แต่นานเข้าเธอก็ชินไปเอง ตอนนั้นผมตระหนักว่าประสบการณ์เป็นสิ่งสำคัญสำหรับมนุษย์

อย่างไรก็ตาม เหตุการณ์นี้เป็นเหตุการณ์เกี่ยวกับการปนเปื้อนสารกัมมันตรังสีครั้งที่ 3 รองจากอิโรชิมะและนางาซากิ และเป็นเหตุการณ์สำคัญที่เกิดขึ้นในช่วงเวลาสงบสุข ไม่ใช่ในช่วงสงคราม และมีเพียงชาวญี่ปุ่นเท่านั้นที่ได้รับผลกระทบ ผมเองส่วนตัวแล้วไม่อยากจะเกี่ยวข้องด้วยเลย แต่สำหรับนักข่าวแล้วถือเป็นข่าวใหญ่ที่มีความสำคัญ

### คดีเรือประมงโดโกะฟุคุเรียวมารุ

วันที่ 1 มีนาคม ปีโชวะที่ 29 (ค.ศ. 1954) เก้าปีหลังจากการทิ้งระเบิดปรมาณูที่อิโรชิมะและนางาซากิ สหรัฐอเมริกาได้ทำการทดสอบระเบิดไฮโดรเจน (ปฏิบัติการแคสเซล)<sup>29</sup> ที่เกาะปะการังบิกินีของหมู่เกาะมาร์แชลล์ในมหาสมุทรแปซิฟิกตอนกลาง การทดลองนี้เป็นการระเบิดบนพื้นดินที่มีพลังระเบิดขึ้นไปด้านบนเหนือเกาะปะการัง มันทำให้ฝนหินปูนจำนวนมากลอยขึ้นไปบนฟ้า ผงสีขาวจำนวนมากตกลงมาเป็น "ซีเถ้าแห่งความตาย" ซึ่งมีสารกัมมันตรังสีรุนแรง ไม่เพียงแต่ตกลงบนเกาะและทะเลใกล้เคียงเท่านั้น แต่ยังคงไปถึงเรือประมงญี่ปุ่นที่กำลังเดินเรืออยู่ห่างออกไปอีกด้วย

ในวันนั้น เรือประมงทูน่าโดโกะฟุคุเรียวมารุ (156 ตัน) ที่สังกัดอยู่กับท่าเรือยาอิชิ ในจังหวัดชิซุโอะกะ กำลังดำเนินการนอกเขตอันตราย 160 กิโลเมตรอยู่ทางทิศตะวันออกของเกาะปะการังบิกินี ช่วงขณะหนึ่ง มีแสงวาบมาจาก "ดวงอาทิตย์ที่ขึ้นจากทิศตะวันตก" ที่ขอบฟ้าทางทิศตะวันตกเฉียงใต้ หลังจากนั้น 7 ถึง 8 นาทีก็ได้ยินเสียงระเบิดดังขึ้น พอผ่านไปประมาณสามชั่วโมง "ซีเถ้าแห่งความตาย" สีขาวก็ตกลงบนเรือทั้งลำ ระเบิดไฮโดรเจน "บราโว" มีกำลัง 15 เมกะตัน ประมาณ 1,150 เท่าของระเบิดปรมาณูที่อิโรชิมะและในเวลา นั้นเป็นระเบิดที่มีอำนาจรุนแรงที่สุดในประวัติศาสตร์

เรือโดโกะฟุคุเรียวมารุ กลับมาที่ยาอิชิ เมื่อวันที่ 14 มีนาคม โดยที่ปลา ตัวเรือ และลูกเรือ 23 คนโดนอาบรังสีแล้ว และในวันที่ 16 โยมิอูริชิมบุนก็สื่อบอกว่า "ระเบิดไฮโดรเจนหรือเปล่า" หลังจากนั้นมาก็ไม่ได้

<sup>29</sup> แคสเซลบราโว (Castle Bravo) เป็นชื่อรหัสที่กำหนดให้สำหรับการทดสอบระเบิดไฮโดรเจนเทอร์โมนิวเคลียร์นิวเคลียร์ ที่ใช้เชื้อเพลิงแห่งเป็นครั้งแรก การทดสอบได้ดำเนินการในวันที่ 1 มีนาคม 1954 ที่เกาะปะการังบิกินี หมู่เกาะมาร์แชลล์ เมื่ออาวุธถูกจุดระเบิดและการระเบิดเกิดขึ้น ทำให้เกิดเป็นปากปล่องภูเขาไฟ เส้นผ่าศูนย์กลาง 6,500 ฟุต (2,000 เมตร) ลึก 250 ฟุต (75 เมตร)

เป็นปัญหาแค่ภายในประเทศแต่รุนแรงขึ้นมาเป็นปัญหาระหว่างประเทศเลย ลูกเรือทั้งหมด มีอาการป่วยเฉียบพลันจากสารกัมมันตรังสี และในวันที่ 23 กันยายน ไอคิจิ โคบายามะ หัวหน้าสถานีวิทยุก็เสียชีวิตลง เรือไดโกะฟุคุริยามารุได้กลายเป็นสัญลักษณ์ของการตกเป็นเหยื่อผู้เคราะห์ร้ายจากระเบิดปรมาณูและไฮโดรเจน โดยนับว่าเป็นเหตุการณ์การถูกระเบิดปรมาณูครั้งที่ 3 ต่อจากฮิโรชิมาและนางาซากิ

## บทส่งท้ายหลังจากฟังเรื่องเล่าของผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณู

ยามาซากิ เคนอิจิ

สิ่งที่เกิดขึ้นจนนำไปสู่การตีแผ่เรื่องราวของผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูคือเรื่องราวต่อไปนี้

เมื่อปี ค.ศ.1982 ในฐานะที่เป็นหนึ่งในองค์กรต่อต้านสงครามปรมาณู พวกเราได้จัดการฉายภาพยนตร์สารคดีบันทึกเหตุการณ์จากขบวนการ 10 ฟุต<sup>30</sup> ที่เมืองฮารามาจิแห่งนี้ ในระหว่างที่การจัดการฉายภาพยนตร์สารคดีนั้น พวกเราได้จัดงานเสวนาเรื่องอาวุธนิวเคลียร์ด้วย โดยมีประชาชนในเมืองฮารามาจิและคุณครูโรงเรียนมัธยมมาเข้าร่วม มีทั้งประชาชนและเด็กจำนวนมากมาเข้าชมภาพยนตร์เรื่อง “เอาความเป็นมนุษย์กลับมา” ที่ศาลาประชาคม ณ เมืองฮารามาจิ และต่อมาในเดือนมิถุนายนได้มีการเผยแพร่บทความรวบรวมความรู้สึกที่มีต่อนิทรรศการภาพยนตร์ในครั้งนั้น อีกทั้งในเดือนสิงหาคม อดีตนายกเทศมนตรีได้เข้าร่วมและเปิดงานฉายภาพยนตร์เรื่อง “คำทำนาย” ภายใต้การสนับสนุนจากเมืองฮารามาจิ รวมถึงมีแผนที่จะตีพิมพ์บทความรวบรวมความรู้สึกให้เป็นหนังสือรวมบทสัมภาษณ์ทำมืออีกครั้ง

แต่ในช่วงเวลานั้น ก็มารู้ว่าเหล่าผู้คนที่ถูกระเบิดปรมาณูที่จังหวัดฮิโรชิมาและนางาซากิไม่ว่าจะเป็นทหารหรือคนที่อาศัยอยู่ที่นั่น ก็ได้ย้ายมาใช้ชีวิตอยู่ที่เมืองฮารามาจิด้วยเช่นกัน และเมื่อ 7 ปีก่อน ในฤดูร้อน ปี ค.ศ.1977 เหล่าคุณครูภาควิชาสังคมศึกษาของโรงเรียนมัธยมศึกษาตอนปลายฮารามาจิในสมัยนั้น (อาจารย์มัตสึทานิ อากิโอะ, โออูจิ ฮิเดโอะ, นิชิชิมะ ซินิจิ, โอทาเกะ อัตสึชิ และโมริยะ ซานาเอะ) ได้ทำการสำรวจเกี่ยวกับเหยื่อทั้ง 7 คนที่สัมผัสกับกัมมันตรังสีในเขตโซโซตามข้อเรียกร้องของ NGO (Non-Governmental Organization) คณะกรรมการของฟูกูชิมะส่งเสริมการประชุมแก้ไขปัญหาผู้สัมผัสสารกัมมันตรังสีระหว่างประเทศ ทำให้ในงานเทศกาลวัฒนธรรมโรงเรียนมัธยมศึกษาตอนปลายฮารามาจิในฤดูใบไม้ร่วง ค.ศ.1977 ได้มีการจัดงานเล่าประสบการณ์โดยผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูจากทั้ง 5 ท่าน

ดังนั้นจึงตั้งใจที่จะนำประสบการณ์อันมีค่าเหล่านั้นมารวบรวมในบทความรวบรวมความรู้สึกของนิทรรศการภาพยนตร์ เพื่อการตีพิมพ์นี้ไม่ใช่แค่การคัดลอกแล้วนำมาเผยแพร่ แต่จะเป็นเรื่องเล่าที่ได้รับการยินยอมจากการพูดคุยต่อหน้ากันอีกครั้งหนึ่ง ตั้งแต่เดือนกันยายน ผมเริ่มไปเยี่ยมผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูทีละคนทันที นอกจากเหยื่อทั้ง 5 คนแรกแล้ว เราถึงได้รู้ว่ายังมีผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูอาศัยอยู่อีกถึงประมาณ 20 คน แน่แน่นอนว่าเราไม่ได้รู้จักพวกเขาแค่จากสถานีอนามัยในเขตพื้นที่

<sup>30</sup> ขบวนการ 10 ฟุต เป็นการเคลื่อนไหวที่ประชาชนชาวญี่ปุ่นช่วยกันซื้อบันทึกเหตุการณ์ระเบิดจากสหรัฐอเมริกา ซึ่งมีราคา 3000 เยน ต่อ 10 ฟุต

รับผิดชอบเพียงอย่างเดียว แต่ยังทราบผ่านการระบุที่ละคนจากผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณู นอกจากนี้ได้ยินมาว่านักข่าวในสมัยนั้นที่ข่าวเหตุการณ์เรือไดโกะฟุคุเรียวมารุ หรือที่ผู้คนรู้จักในชื่อระเบิดปรมาณูครั้งที่ 3 ซึ่งเป็นเหตุการณ์ต่อเนื่องจากเหตุการณ์การทิ้งระเบิดปรมาณูในฮิโรชิมาและนางาซากิ ก็ได้มาอยู่ที่เมืองฮารามาจิเช่นกัน ในระหว่างที่ไปสอบถามผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูเพื่อรวบรวมและบันทึกเหตุการณ์ของสภาพบ้านเมืองที่ถูกระเบิดปรมาณู ปรากฏว่าเนื้อหามีเยอะเกินกว่าที่จะทำเป็นหนังสือทำมือได้ อีกทั้งเนื้อหาก็คือเป็นเรื่องเล่าอันมีคุณค่า ดังนั้นแล้วพวกเราจึงตัดสินใจว่าตีพิมพ์คงจะดีเสียกว่า

แต่ไม่ว่าอย่างไรก็ตาม การที่ผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูมาอาศัยอยู่ในต่างจังหวัดแถบภูมิภาคโทโฮคุที่ห่างไกลจากจังหวัดฮิโรชิมา กับนางาซากิ อย่างเขตโซโซในจังหวัดฟุกุชิมะ ที่ไม่ได้มีความเกี่ยวข้องกับระเบิดปรมาณูเลยนั้นเป็นเรื่องที่น่าตกใจอย่างยิ่ง ผลเป็นที่ได้จากสงครามและระเบิดปรมาณู ยังคงกว้างและฝังรากลึก อีกทั้งมันยังเป็นปัญหาสังคมร้ายแรงที่ยังคงดำเนินอยู่ ดังนั้น การตีพิมพ์มีความหมายสำคัญอย่างยิ่งเพื่อให้ผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูเปิดใจและกล้าที่จะเล่าประสบการณ์อันน่าหดหู่ และเพื่อให้ประชาชนและเด็กๆ ได้รับรู้ถึงความจริงว่าการทิ้งระเบิดปรมาณูหรือสงครามนั้นไม่ได้เกิดประโยชน์

ตอนที่ได้ไปพบผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูและฟังเรื่องราวของพวกเขา ผมรู้สึกประหลาดมาก ในตอนแรกผมกังวลว่าผู้คนจำนวนไม่น้อยอาจจะลังเลที่จะพูดถึงประสบการณ์ของพวกเขาหรือจะถูกปฏิเสธ และคิดว่าคงจะมีคนที่ไม่อยากให้ครอบครัวรับรู้ว่าเป็นผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูอีกด้วย เพราะอย่างนั้น หลังจากที่พบพวกเขาด้วยตัวเอง ผมจึงพยายามที่จะให้พวกเขาเข้าใจถึงเป้าหมายและวัตถุประสงค์ของพวกเรา จะมีแค่กรณีที่เป็นคนที่อาศัยอยู่ในพื้นที่ห่างไกลเท่านั้นที่พวกเราจะติดต่อผ่านทางโทรศัพท์ แต่ถึงแม้จะเป็นกรณีเหล่านั้นพวกเราก็คงพยายามอธิบายถึงวัตถุประสงค์อย่างสั้นๆ เพื่อขอพบกันต่อหน้า และขอให้นักเวลาที่เราจะสามารถมาเจอกันได้ รวมถึงตอนที่ไปพบเขาพวกเราต้องระมัดระวังที่จะไปเจอพวกเขาอย่างลับๆ เท่าที่จะทำได้ ซึ่งไปที่ละแค่สองถึงสามคน หรือคนเดียว

โชคดีที่ผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูที่พวกเรารู้จักทั้ง 20 ท่านเข้าใจพวกเรา เมื่อได้เจอและถามถึงเรื่องราวประสบการณ์ดังกล่าว พวกเขายังอนุญาตให้เข้าไปตีพิมพ์และเผยแพร่ต่อสาธารณชน ถ้าการเล่าเรื่องเกี่ยวกับระเบิดปรมาณูมันเป็นเรื่องต้องห้ามก็จะมีใครที่สามารถจดจำเรื่องราวของผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูได้ ดังนั้นความกล้าหาญของคนที่ยอมให้นำชื่อไปเผยแพร่ต่อสาธารณชนท่ามกลางสังคมชุมชนพื้นที่เล็ก ๆ แห่งนี้ เป็นเรื่องที่น่าชื่นชมและซาบซึ้งใจเป็นอย่างยิ่ง และผู้ที่เราไปสัมภาษณ์ต่างให้กำลังใจพวกเรา เช่น “เป็นงานที่ดีนะ” “ฉันก็อยากแบ่งปันเรื่องเล่าที่เคยมีประสบการณ์สัมผัสสารกัมมันตรังสีเหมือนกัน” “ทำให้เต็มทีนะ” นอกจากนี้ พวกเราคำนึงถึงคนที่ไม่ต้องการเปิดเผยชื่อต่อสาธารณชนเนื่องจากข้อมูลหลายๆ อย่างโดยการใช้นามแฝงปกปิดตัวตนเพื่อไม่ให้เกิดความเดือนร้อนขึ้น

พอได้ลองถามเรื่องราวของแต่ละคนแล้ว มันน่าหวาดกลัวกว่าภาพในภาพยนตร์เรื่อง “เอาความเป็นมนุษย์กลับมา” หรือ “คำทำนาย” เหตุการณ์ที่ไม่มีทางที่จะจินตนาการถึงได้ถ้าไม่ใช่ผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูหรือไม่ได้ประสบด้วยตนเอง แต่เราสามารถรับรู้ได้ผ่านการเล่าเรื่องของผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณู เช่น เกิดภาพหลอนที่ตัวเองกำลังตายอยู่ท่ามกลางศพจำนวนมาก (คุณฮิโตะชิ รุกิจิ) , เด็กนักเรียนหญิงที่ขอแลกน้ำดื่มกับนาฬิกาข้อมือของตน (คุณคุวาบาระ คาโอรุ) , ความรู้สึกที่ต้องเผชิญกับการที่ศพมนุษย์ค่อย ๆ ไหม้ไปด้วยน้ำมันจากร่างกายตัวเอง (คุณโยชิฮิสะ นาคากาวะ) , สภาพของรถไฟพาทัวร์ที่พังยับเยิน (คุณโทโกเมะ ยูทาเกะ) เรื่องราวเหล่านั้นทำให้เหมือนเราได้เข้าไปอยู่ในสถานการณ์จริง พวกเราที่นั่งฟังต่างรู้สึกถึงความหดหู่ไปตามเรื่องราว ทำให้แม้แต่จะขยับมือเพื่อจดตามยังทำไม่ได้ แต่ในบางครั้งผมก็ถาม



ตัวเองว่า เรากำลังสัมผัสเพราะความอยากรู้อยากเห็น หรือทำไปเพราะเป็นงานอดิเรกของตัวเอง นอกจากนี้ในระหว่างที่ผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูกำลังเล่าเรื่องอยู่ พวกเขาคอยนึกภาพความทรงจำในตอนนั้นจนบางทีน้ำตาก็ไหลออกมา ทำให้ในบางครั้งผมก็คิดว่างานนี้จะกลายเป็นสิ่งที่สร้างความทุกข์ทรมานแก่ผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูหรือเปล่า นอกจากนี้ นาย H ที่ประสบกับเหตุระเบิดปรมาณู 2 ครั้งทั้งในฮิโรชิมาและนางาซากิ ยังคงทนทุกข์ทรมานจากอาการหวาดกลัวสงครามอย่างหนักที่สุดในบรรดาทุกคนที่พวกเราไปเจอ จนต้องเข้าและออกโรงพยาบาลอยู่ซ้ำแล้วซ้ำเล่า ตอนที่ผมไปเยี่ยมไม่ว่าจะใช้คำพูดใดเพื่อปลอบใจหรือให้กำลังใจ แต่มันทำให้เรารู้ว่าคำพูดพวกนี้ไร้ความหมาย

ผมยังจำถึงภาพเหตุการณ์นั้นได้ดี ทันทีที่เกิดระเบิดขึ้นนั้นคือช่วงเวลาแค่ไม่กี่วินาทีเท่านั้น ผมรู้สึกทั้งกับความจริงที่ว่าผู้คนสามารถนึกถึงสิ่งที่เกิดขึ้นมากมายภายในหัวของพวกเขาได้ ผมจึงคิดว่าในช่วงคาบเกี่ยวระหว่างความเป็นและความตายทำให้เวลาหยุดลงได้เลยหรือเปล่า และหลังจากนั้นก็มีคนจำนวนมากที่รอดชีวิตอย่างหวุดหวิดจากระเบิดปรมาณูด้วยความบังเอิญ และมีทั้งคนจำนวนไม่น้อยเหมือนกันที่หลังได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูจนทำให้ใช้ชีวิตเหมือนแขวนอยู่บนเส้นด้าย แต่สุดท้ายคนเหล่านั้นก็เอาชีวิตรอดมาได้ อาจเป็นไปได้ที่จะรู้สึกได้ว่า ณ ที่แห่งนั้นมันเหมือนกับมีอะไรชักจูงอย่างที่กำหนดโชคชะตาของมนุษย์เอาไว้ อย่างเช่น การที่ คุณ A รอดชีวิตมาได้เพราะที่กันทางรถไฟทำให้รถบรรทุกจอด, คุณ C รอดชีวิตมาได้เพราะมีใครบางคนแบกเขาไปในสถานที่ปลอดภัยขณะที่เขาหมดสติอยู่, คุณควาฮาระ คุณ E ที่หลบอยู่ด้านหลังของอาคารจึงทำให้หนีออกไปได้ง่าย, หลังจากเกิดการระเบิด คุณนาคากาวะนึกว่าตัวเองตายไปแล้ว เนื่องจากอุปกรณ์ทางการแพทย์ไม่เพียงพอเขาจึงไม่ได้รับยาชาขณะเข้ารับการผ่าตัดไส้ติ่ง เป็นต้น

นอกจากนี้ ขณะที่ไปพบเจอผู้ที่ได้รับบาดเจ็บหลายคน แทบจะพูดได้เลยว่าผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูที่เป็นเด็กและนักเรียนหญิงไม่มีวันที่จะลืมภาพเหตุการณ์นั้นได้ลง แม้จะอยู่ท่ามกลางสถานการณ์ที่เลวร้าย มนุษย์ก็ยังมีความรู้สึกห่วงใยและสงสารเด็กกับคนอ่อนแอเป็นอย่างมาก ผมรู้สึกดีใจที่สามารถรู้สึกถึงความอ่อนโยนของมนุษย์จากจุดนั้นได้ หลังสงครามจบลง เหล่าทหารได้เล่าถึงสถานการณ์ในระหว่างที่จะได้ปลดประจำการเพื่อที่จะกลับบ้านเกิดอันแสนไกลที่เหล่าญาติพี่น้องกำลังรออยู่ แม้จะเป็นท่ามกลางสถานการณ์การถอนกำลังพลจากฮิโรชิมาและนางาซากิ ไว้อย่างละเอียดเช่นกัน ถึงแม้ว่าจะถอนกำลังพลออกมาแล้ว แต่ก็ต้องตกอยู่ในความโกลาหลหลังสงครามที่จะถูกใครไล่ล่าเอาชีวิตไปก็ได้ ต้องประสบกับความทุกข์ทรมานอันคาดไม่ถึงที่เรียกว่าผลจากการอาบกำมันตภาพรังสี ต้องทนกับความทุกข์ทรมานซ้ำแล้วซ้ำเล่าโดยที่ไม่มีใครรู้ตลอด 38 ปี ผมเลยรู้สึกซาบซึ้งกับความแข็งแกร่งของผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูที่ใช้ชีวิตอย่างสุดความสามารถ ในกลางดึกขณะที่กำลังเรียบเรียงต้นฉบับอยู่ มีบางครั้งที่ผมรู้สึกสงสารเหล่าผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูจนน้ำตาไหลออกมาเอง และมีบางครั้งที่รู้สึกโกรธขึ้นมาอีกครั้งกับใครก็ตามที่ก่อเรื่องแบบนี้ขึ้นมา ทั้งก่อสงคราม ผลิตระเบิดปรมาณูและปล่อยมันลงมา และผมรู้สึกดีใจมากที่ได้เห็นความจริงของกองทัพว่าเป็นอย่างไร ทำให้เราสามารถฟังเสียงวิจารณ์อย่างรุนแรงที่มีต่อระเบิดปรมาณู สงครามและกองทัพ นอกจากนี้หน้าที่ที่สำคัญของครูผู้สอนและคุณครูในโรงเรียนคือการสอนตรงไปตรงมาว่าอันไหนสองอันไหนสาม เพื่อจะปกป้องความสุขเอาไว้ ถึงแม้มันจะเป็นเรื่องแสนจะธรรมดาสำหรับผู้ที่ให้การศึกษาแก่นักเรียนอย่างพวกเรา แต่มันคือการตอกย้ำความรับผิดชอบอันใหญ่หลวงและถือว่ามันคือกำลังใจในการ “ทำสิ่งที่สามารถทำได้ตามหน้าที่ของเรา”

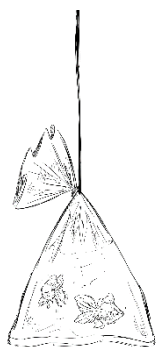
พวกเราจดบันทึกตามคำบอกเล่าของผู้ที่ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูเท่านั้น ไม่ได้บันทึกเสียงของพวกเขาแต่อย่างใด ถ้าอัดเสียงไปด้วยจะทำให้พวกเราจดจำความทรงจำเหล่านี้ได้ไม่ชัดเจน เพราะฉะนั้นจึง

บันทึกลงสมุดจดบันทึกเพียงอย่างเดียว นอกจากนี้ถ้าเตรียมทั้งเทปและกล่องไป ผู้ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูอาจไม่สบายใจกับสิ่งของที่พวกเราเตรียมมา พวกเราอยากให้พวกเขาพูดจากสิ่งที่ตัวเองคิดออกมา อิสระและไม่ต้องเกรงกลัว ดังนั้นจึงไม่มีการถ่ายรูปแม่แต่ใบเดียว หลังจากแก้ไขบทความแล้ว จะให้ผู้ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูได้ลองอ่านและพยายามที่จะไม่ใส่อารมณ์ของผู้ฟังเข้าไปเพื่อให้ข้อมูลที่พูดออกมา มีความถูกต้อง ครบถ้วน นอกจากนี้ยังได้ขอร้องให้ผู้ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูวาดภาพประสบการณ์ที่ลืมไม่ลง และจะนำไปตีพิมพ์พร้อมกับหนังสือเล่มนี้ แม้ว่าจะเป็นรูปภาพจากคนที่วาดไม่เก่งแต่มันก็สื่อออกมาด้วยพลังอันมหาศาลอย่างเต็มเปี่ยม

และคิดว่ามันเป็นเรื่องที่ดีที่ผู้ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูได้มาเล่าประสบการณ์ ณ ที่แห่งนี้ เพราะยังคงมีผู้คนจำนวนมากที่อาศัยอยู่ในเขตโซโซได้เสียชีวิตจากเหตุการณ์การทิ้งระเบิดปรมาณูที่ฮิโรชิมา-นางาซากิจนต้องฝังศพโดยที่ไม่รู้ด้วยซ้ำว่าเขาชื่ออะไร แม้ว่าจะปลดประจำการจากทหารแล้วแต่ก็มีการบาดเจ็บจากการอบสารกัมมันตรังสีอยู่ มีกรณีที่ไม่รู้สาเหตุของโรครังสีสันนิษฐานว่าเป็นแคโรซินีเกียจ และมีผู้คนจำนวนมากที่เสียชีวิตโดยถูกเข้าใจผิดไปว่าเป็นพวกไข้ล่าออย หรือเรียกว่าเป็นโรคบุระบुरะ<sup>31</sup> ทำให้รู้สึกเสียใจมากที่เป็นแบบนี้ เมื่อสองปีที่แล้ว ผู้ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูในเขตโซโซมองเห็นถึงอนาคตอันทุกข์ทรมานจากผลของการอบกัมมันตภาพรังสี จึงมีคนเลือกที่จะจบชีวิตของตัวเองลง นี่คือนสิ่งที่บ่งบอกถึงความเป็นจริงว่าสงครามและระเบิดปรมาณูยังคงเป็นปัญหาเรื้อรังและไม่เคยเลือนหายไปในปัจจุบัน ผู้ได้รับผลกระทบจากระเบิดปรมาณูจำนวนมากในเขตโซโซ หลังจากเข้าสู่วัยชราแล้ว เสียชีวิตลงในช่วง 5-6 ปีมานี้ และช่างเป็นเรื่องน่าเศร้าเมื่อบอกว่าสาเหตุการตายที่พบเป็นจำนวนมากนั้นมาจากโรคมะเร็ง มีผู้คนที่ถูกทอดทิ้งและไม่ได้รับแม้แต่การออกหนังสือรับรองว่าเป็นผู้อาบรังสี แม้ว่าจะทราบชัดเจนว่าเป็นผู้อาบรังสีจริงๆ ก็ตาม และต่อให้ได้รับหนังสือรับรองหรือได้รับเงินเยียวยาในเบื้องต้นแล้วก็ตาม แต่นั่นก็ยังไม่เพียงพอ สถานการณ์ในปัจจุบันจึงมีจำนวนคนมากมายที่เรียกร้องให้มีการรับผิดชอบค่าใช้จ่าย เช่น โรคต่างๆ ที่ได้รับผลกระทบจากสงคราม คิดว่าอย่างไรเสีย รัฐบาลควรบัญญัติกฎหมายช่วยเหลือผู้สัมผัสสารกัมมันตรังสีที่เป็นปัญหาค้างคาให้ได้โดยเร็ว

สุดท้ายนี้ ขอขอบคุณผู้ที่กล้ามาเล่าเรื่องเกี่ยวกับระเบิดปรมาณูทั้ง 21 ท่าน และขอให้ทุกท่านมีแต่ความโชคดีและสุขภาพแข็งแรง นอกจากนี้ขอไว้อาลัยให้วิญญาณของผู้เสียชีวิตจากระเบิดปรมาณูในฮิโรชิมาและนางาซากิ รวมทั้งผู้เสียชีวิตในสงครามไปสู่สุคติ

(วันที่ 10 เดือนมิถุนายน ค.ศ.1983)



<sup>31</sup> Genbaku burabura หมายถึงอาการที่รู้สึกเมื่อยล้า ไม่สบาย ป่วยง่าย ไม่รู้สาเหตุที่ชัดเจน ภายหลังสันนิษฐานว่ามีสาเหตุจากการสัมผัสสารกัมมันตรังสี

## プロジェクトメンバー一覧

### คณะผู้จัดทำ

「翻訳能力向上プロジェクト」 “โครงการพัฒนาศักยภาพด้านการแปลภาษาตะวันออก”

#### ● 編集者 บรรณาธิการ

ภัทร์อร พิพัฒน์กุล Pat-on Phipatanakul  
松井育美 Ikumi Matsui

#### ● 編集チーム กองบรรณาธิการ

ภูกานต์ ชูเดชา Phukan Chudecha  
ตาณ นวะมะรัตน์ Tarn Navamarat  
東館環 Tamaki Higashidate

#### ● 表紙・挿絵 ออกแบบปกและฝ่ายศิลปกรรม

ฐิติมา บุญงาม Thitima Boongam (IG: kp\_kuro / Line:aka-kuro55)  
บุกามาศ กิตระคาม Bukamas Kitrakam (mintxgothy@gmail.com)

#### ● 翻訳者 ผู้แปล

安田 彩夏 Ayaka Yasuda  
宮地 優菜 Yuna Miyaji  
岡部 大地 Daichi Okabe  
加藤 瑞希 Mizuki Kato  
川田 美澄 Misumi Kawata  
กชกร บุญยิ่ง Kotchakorn Boonying  
คณิศร ศรีรักษา Kanisorn Sriraksa  
จิรวดี สมานธิ Jirawadee Samathi  
เฉลิมพงศ์ สูงติวงศ์ Chalermpong Sungtiwong  
ชนาธิป ศรีธนู Chanathip Srithanoo  
ชยพล จำนงค์วิทย์ Chayaphl Jamnongvit  
ชวัลญา วัฒนภิญโญ Chawanya Wattanapinyo  
ฐานิดา กุณนา Thanida Kunna  
ฐิติมา บุญงาม Thitima Boongam  
ณัฐฤดี เอกรัตนณัฐ Natruedee Akeratananat  
ณัฐวัฒน์ วิถีเทพ Nattawat Vitethap  
ณัฐสุรางค์ ศิริรักษ์วัฒนา Nutsurang Kelelukwattana  
ตาณ นวะมะรัตน์ Tarn Navamarat



ธนภูมิ ชโลปกรณ์	Thanapoom Chalopakorn
นาราภัทธ อูปถัมภ์	Naraphat Oupartham
บุกามาศ กิตระคาม	Bukamas Kitrakam
รัฐยุทธ เลหาชนะกูร	Ratayuth Laohachanakoor
ศุภกานต์ เรื่องจันทร์	Supakarn Ruangjan
สรอาทร ต.วัฒนผล	Sarathorn Tor.Wattanaphol
สหัสวรรษ พรหมเผ่า	Sahatsawat Promphao
สุชานันท์ กิจไพฑูรย์	Suchanan Kijpaitoon
กิตติพันธ์ เจิง	Kittiphan Tseng
จิตาภา วิมุตติสุนทร	Jidapa Wimutisuntorn
จิรววัฒน์ แก้วเขียว	Jirawat Kaewkhiaw
ตรีตาภรณ์ แซ่จึ้ง	Tritapohn Saejueng
นัญญลักษณ์ ใจกุย	Nunyalak Jaikui
นิตี บุญหนุน	Nithi Boonnoon
ประวีณรัฐ วิวรรธน์ภาสกร	Praweenrat Wiwatpassakorn
ปาไลตา เสน่หา	Palita Saneha
ปุนิกา ประเวศชโยดม	Puniga Prawetchayodom
พราราวี วัฒนศิริ	Prawrawee Wattanasiri
พิมพ์ศิริ วงษ์สมบัติ	Pimsiri Wongsombat
พิมพ์พิศา แสงสิริคุปต์	Pimpisa Sangsirakoup
ภรภัทร ภิสิทธิ์เพ็ญ	Pornpat Pisuchpen
ภูกานต์ ชูเดชา	Phukan Chudecha
ศศธร อินทสระ	Sasathorn Inthasara
อรพร พัฒนกิจวิวัฒน์	Onporn Pattanakijvivat
ปัทมพร กรใจวัง	Pattamaporn Kreejaiwang



หวนคืนสู่ความทรงจำอันแสนเศร้า  
 เรื่องเล่าของผู้รอดชีวิตจากระเบิดปรมาณู  
 悲しみの記憶  
 —被爆者の証言—

Kanashimi no kioku, Hibakusha no shougen  
 編者・発行者 シーナカリンウィロート大学人文学部東洋言語学科  
 Faculty of Humanities, Srinakharinwirot University  
 114 Sukhumvit 23, Wattana District, Bangkok 10110, THAILAND  
 Tel : (662) 649-5000 Website : <http://ird.oop.swu.ac.th>  
 Email : [paton@g.swu.ac.th](mailto:paton@g.swu.ac.th)

ผู้จัดพิมพ์ “โครงการพัฒนาศักยภาพด้านการแปลภาษาตะวันออก” ของหลักสูตรศิลปศาสตรบัณฑิต  
สาขาวิชาภาษาตะวันออก คณะมนุษยศาสตร์  
มหาวิทยาลัยศรีนครินทรวิโรฒ ประสานมิตร  
114 ซอยสุขุมวิท 23 เขตวัฒนา กรุงเทพมหานคร 10110  
โทรศัพท์ 0-2649-5000  
ติดต่อสอบถามเกี่ยวกับหนังสือเล่มนี้ที่ [paton@gs.wu.ac.th](mailto:paton@gs.wu.ac.th)

พิมพ์ครั้งแรก 10 มิถุนายน 2566



もう「広島の惨事」はたくさんだ！

No more Hiroshima !

もう「長崎の惨事」はたくさんだ！

No more Nagasaki !



これ以上「被爆者」をつくらないで！

No more Hibakusha !

これ以上「戦争」はゴメンだ！

No more War !